

陸前高田市文化財調査報告書第23集

陸前高田市内遺跡発掘調査報告書 3

中沢浜貝塚発掘調査報告書

—平成9年度発掘 骨角器・自然遺物編—

瀬沢貝塚発掘調査報告書

—平成10年度発掘調査分—

2001. 3月

岩手県陸前高田市教育委員会

発刊にあたり

陸前高田市教育委員会
教育長 熊谷 睦 男

陸前高田市は、岩手県の東南端に位置する温暖な地であります。リアス式海岸特有の入り組んだ海岸線は、男性的な景観を形作り、暖流と寒流のぶつかり合う三陸沖は世界に誇る大漁場を形成し、我々に豊かな恵みを与えてくれます。このような豊かな自然環境の中で先人たちは、生活を営み、素晴らしい文化を育んでまいりました。中でも、史跡中沢浜貝塚、瀬沢貝塚をはじめとする多くの貝塚は、全国的にも著名なものが多く、「水産日本のルーツ」を知る上で、貴重な存在である貝塚群を形成しております。

中沢浜貝塚は、明治末期頃から人骨の出土する貝塚として県内、県外に広く知られた重要な遺跡で、考古学・人類学において果たしてきた役割は大きく、昭和9年に史跡として国指定を受けました。しかし、近年全国的にみられる経済・社会情勢の大きな変化は、開発事業等の増加を招くとともに、緊急発掘調査の数も急増させました。本市においても例外にもれず、年々発掘調査の件数は増加する傾向にあります。中沢浜貝塚についても、その発掘調査の多くが宅地造成や擁壁工事といった緊急発掘調査であり、同貝塚における輝かしい発見の数々は、そのほとんどが緊急発掘調査の成果に依るものといっても過言ではありません。このような状況の中で、中沢浜貝塚については、度重なる現状変更に伴う緊急発掘調査と遺跡保護との調整を図る施策の確立が長らく求められてきました。今回の調査もそうした中での緊急発掘調査となりました。

平成11年2月、「史跡中沢浜貝塚保存管理計画」が刊行されました。この計画の策定によって、新たな保護施策の第一歩が踏み出されることになり、今後は史跡中沢浜貝塚の適正な保護と管理が、体系的・総合的に図ることができるものと期待されます。

また、瀬沢貝塚は、これまでの調査成果からも十分うかがえるように、まだまだ貴重な遺物・遺構が埋蔵されているものと考えられます。今回の調査でも、当時の加工技術に目を見張るような優れた釣針や、人々の交流域を知る上で重要な資料となる琥珀玉などが発見されています。これら先人たちが残した生活の痕跡は、縄文時代の生活を解き明かし、今後の考古学発展に貢献する遺産であることは言うまでもありません。

21世紀は「環境の世紀」と言われておりますが、私たちは考古学によって解明されてきた自然と共にあった縄文時代の生活や彼らの考え方に学び、素晴らしい自然環境を未来に伝えていかなくてはなりません。本報告書の中沢浜、瀬沢両貝塚の保護管理に生かし、後世に残していきたいと考えております。

本報告書が文化財愛護精神の普及と考古学の更なる発展に一助となるようご活用いただければ幸いです。

おわりに、本調査を実施するにあたり、常にご指導、ご協力を賜りました関係各位、並びに作業に従事された多くの方々、また、学問的見地からご教示をくださいました諸先生方に対し、心から感謝申し上げます。

平成13年3月

例 言

1. 本報告書は、国庫及び県費補助を受けて、平成9年に実施した岩手県陸前高田市広田町字中沢地内に所在する国指定史跡中沢浜貝塚の発掘調査の骨角器・自然遺物編、及び平成10年に実施した岩手県陸前高田市小友町字瀬沢地内に所在する瀬沢貝塚の発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 中沢浜貝塚の発掘調査は、宅地造成に伴う緊急発掘調査、瀬沢貝塚は造成工事に伴うものである。
3. 調査面積は中沢浜貝塚が53.3㎡で、野外調査は平成9年7月15日から9月25日まで、瀬沢貝塚は325㎡で、調査期間は平成10年7月16日から9月10日までである。

4. 調査体制は、次のとおりである。

団 長	熊谷睦男
総 括	上部修一
事 務 局	菊池政雄
調 査 員	佐藤正彦 熊谷 賢 高橋和弥

平成9年度

調査補助員	近江サキヨ 黄川田はや子 佐藤多恵子 佐藤とも子 菅原とみ子 鈴木キミ子 藤井キヨ子 村上キミヨ 村上典子 吉田 厚 吉田オリ 吉田チヨ子
整理作業員	青山道子 菅野美代 黄川田澄子 坂本優子 佐々木奈穂子 佐藤紀代子 佐藤とも子 鈴木キミ子 鈴木貞子 村上典子

平成10年度

調査補助員	佐藤紀美 佐藤紀代子 佐藤多恵子 佐藤とも子 鈴木キミ子 鈴木初子 戸羽由美 村上典子 村上よし子 村上洋寿 吉田チヨ子
整理作業員	佐々木奈穂子 佐藤紀代子 鈴木キミ子 鈴木貞子 村上典子

5. 調査及び整理に際しては、次の方々のご指導、ご協力をいただいた。記して感謝を申し上げる次第である。

平成9年

金野良一氏	大船渡市教育委員会生涯学習課
小菅貞男氏	軟体動物学研究所所長
戸羽親雄氏	陸前高田市海と貝のミュージアム名誉館長
新井嵩臣氏	東京大学海洋研究所大槌海洋研究センター
	陸前高田市海と貝のミュージアム

平成10年

熊谷常正氏	盛岡大学
-------	------

6. 掲載した土層の色調は、『新版標準土色帖』第4版（小山正忠・竹原秀雄編著 1973）による。
7. 執筆・編集は中沢浜貝塚を熊谷が、瀬沢貝塚を佐藤が担当した。
8. 本遺跡から出土した遺物と調査記録は、陸前高田市立博物館に保管している。

目次

発刊にあたり	
例言	
目次	

中沢浜貝塚

I 調査に至る経過・周辺環境	1
1 調査に至る経過	1
2 周辺の環境	1
II 層の堆積と出土遺物	4
1 グリットの設定と層の堆積	4
(1) Z-3-2・Z-2-3トレンチ	5
(2) A-3-2・A-2-5・A-2-4トレンチ	5
(3) B-3-2・B-2-2トレンチ	6
(4) C-3-1・C-2-2トレンチ	6
(5) Z-4-1・A-4-1・B-4-1・C-4-1トレンチ	7
2 層別別出土遺物	19
III 出土遺物	25
1 骨角器	25
2 動物遺存体	37
(1) 分析資料	37
(2) 分析方法	37
(3) 出土動物遺存体の概要	37
A 軟体動物	37
1 多板綱	40
2 腹足綱	41
3 腹足綱・陸産巻貝	47
4 二枚貝綱	49
B 環形動物	55
1 多毛綱	55
C 節足動物	55
1 甲殻類	56
D 触手動物	56
1 腕足綱	57
E 棘皮動物	57
1 ウニ綱	57
F 節足動物	57
1 軟骨魚綱	57
2 硬骨魚綱	59
3 両生類	73
4 爬虫類	73

5 鳥綱	73
6 哺乳類	74
(4) 出土動物遺存体から見た生業活動	79
A 採貝活動について	79
i 出土貝類の生息域	82
ii 採集方法と道具	82
iii ムラサキインコの処理	84
iv ムラサキインコ主体の要因	85
B 漁撈活動について	85
i 出土魚類の組成	85
ii 出土魚類の生態	86
iii 漁撈の季節性	88

挿 図 目 次

第1図 中沢浜貝塚位置図	2
第2図 発掘区	3
第3図 グリット設定図	4
第4図 Z-3-2・Z-2-3西壁、東壁、A-3-2・A-2-5 A-2-4東壁	8
第5図 A-3-2・A-2-5・A-2-4西壁、B-3-2・B-2-2・西壁、東壁	9
第6図 C-3-1・C-2-2西壁、Z-4-1・A-4-1・B-4-1 北壁、C-4-1北壁、東壁	10
第7図 C-4-1南壁、Z-4-1・A-4-1・B-4-1南壁、 A-2-1西壁、北壁、東壁、A-2-2西壁、 北壁	11
第8図 A-2-2南壁、A-3深掘部南壁、西壁、 A-2-3西壁、東壁、A-3-1北壁、東壁、 南壁、A-2-6東壁、南壁、西壁	12
第9図 B-2-1東壁、南壁、西壁、北壁、C-2-1 北壁、東壁、南壁	13
第10図 層位概念図	14
第11~16図 層別別出土遺物	19~24
第17~26図 出土骨角器	27~36
第27図 フサカサゴ科部位別出土量	59
第28図 フサカサゴ科腹椎骨計測値	60
第29図 フサカサゴ科尾椎骨計測値	60
第30図 アイナメ属部位別出土量	61
第31図 アイナメ属腹椎骨計測値	61
第32図 アイナメ属尾椎骨計測値	62

第33図	ブリ属部位別出土量	63
第34図	ブリ属歯骨高計測値	63
第35図	マダイ部位別出土量	64
第36図	ウミタナゴ科部位別出土量	65
第37図	ウミタナゴ科腹椎骨計測値	65
第38図	ウミタナゴ科尾椎骨計測値	65
第39図	サバ属部位別出土量	66
第40図	サバ属腹椎骨計測値	66
第41図	サバ属尾椎骨計測値	66
第42図	層位別食用具組成	79
第43図	中沢浜貝塚出土貝類の生息環境と貝類群集の基礎区分	80~81
第44図	層位別魚類組成	86

表目次

第1表	土層観察表	15~18
第2表	出土骨角器分析表	26
第3表	腹足綱層位別出土数表	48
第4表	二枚貝綱層位別出土数表	53
第5表	多板綱・多毛綱・甲殻綱・腕足綱・ウニ綱層位別出土数表	54
第6~10表	魚骨層位別出土数表	68~72
第11表	両性綱・爬虫綱・鳥綱層位別出土数表	72
第12~13表	哺乳綱層位別出土数表	77~78
第14表	中沢浜貝塚出土食用具類の採集方法	83
第15表	中沢浜貝塚出土魚類の生態	87

写真目次

写真1~3	出土骨角器	91~93
写真4~7	出土動物遺存体	94~97

瀬沢貝塚

I	調査に至る経過及び調査過程	1
II	遺跡の立地と環境・研究史	1
1	遺跡の位置と周辺の環境	1
2	層の堆積	5
3	周辺の遺跡	7
4	瀬沢貝塚の研究史	9

III	調査と整理の方法	10
1	調査方法	10
2	室内整理	11
IV	発見された遺構	13
V	遺構外出土遺物	14
1	土器	14~25
2	土製品	25
3	石器・石製品	55~59
V	まとめ	59~60

挿図目次

第1図	瀬沢貝塚位置図	2
第2図	瀬沢貝塚地形図	3
第3図	地形分類概念図	4
第4図	層の堆積状況	6
第5図	周辺の遺跡	8
第6図	グリット設定図	12
第7図	埋設土器	13
第8~36図	遺構外出土土器	26~53
第36図	遺構外出土土器・土製品	54
第37~41図	遺構外出土石器	61~65

表目次

第1表	遺構外出土土器・土製品	53~55
第2表	遺構外出土石器	66~68

写真目次

写真1	発掘区近景・発掘状況・層の堆積状況	69
写真2	発掘状況・土器出土状況・土器埋設状況及び埋設土器	70
写真3~17	遺構外出土土器	71~85
写真18	遺構外出土土器及び土製品	86
写真19~22	遺構外出土石器	87~90

中沢浜貝塚発掘調査報告書

—平成9年度発掘 骨角器・自然遺物編—

I 調査に至る経過・周辺環境

1 調査に至る経過（第1図）

本調査は、史跡中沢浜貝塚に係る現状変更（住宅改築）許可申請に伴う緊急発掘調査である。

平成8年6月3日付けで陸前高田市広田町字中沢182-4吉田眞一氏より住宅の一部を建て替えたいとして、現状変更許可申請がなされた。同地に隣接した箇所からは、過去の発掘調査の際に縄文時代晩期の深鉢に埋納された乳児骨が検出されており、貝層等の地下遺構の存在も明らかであることから、現状変更前の発掘調査が必要との当教育委員会の意見書を付し、同日付け陸高教社第38号で進達した。

平成9年2月28日付け委保第4の1288号で、文化庁次長より事前の発掘調査を実施し、その結果を待って対処すべきとの通知があった。しかし、発掘調査の経費負担は個人では困難であるとして、吉田氏より平成9年度の文化財国庫補助事業として欲しいとの依頼があった。その後、県教委からの指導を受けながら関係事務を取り進め、国庫補助を導入し、平成9年7月15日から屋外調査を開始した。

調査当初は、改築部分の床面積約90㎡全てを発掘する予定であったが、調査開始後すぐに調査区の2/3程より保存状況の良好な貝層を検出した。そのため、当教育委員会では貝層を保存することが最重要との判断を下し、県文化課と協議を行い、建築物の基礎が入る部分のみ（発掘の深さは60cm）の調査とすることに変更した。これによって、実際の発掘面積は53.3㎡となった。

調査は、対象が貝層であるため、発掘担当者が層ごとに掘り下げ、1層ごとに範囲、レベルを記録した後、断面に水糸で層を示す作業を行った。各層の土は土のう袋やビニール袋に入れてすべて持ち帰った。一部は現地において重量並びに体積を計量後5mm、1mmの篩いにかけて、残った遺物を持ち帰った。

9月には成人骨1体、新生児骨1体を検出し、東北大学医学部解剖学第1講座の奈良貴史氏の指導協力のもと、9月16日に成人女性骨（1号人骨）、同18日に新生児骨（2号人骨）の取り上げ作業を実施した。

屋外調査は基礎の入る部分を掘り下げ、平成9年9月25日に終了した。なお、8月26日、27日には広田小学校、広田中学校の生徒を現場に招き、遺跡見学会を開催した。

整理作業は、同年9月26日より開始し、図面整理、各遺物の水洗、接合、注記、登録、実測、写真撮影等を行った。

現状変更については、調査の結果を平成10年2月2日付け陸高教社第248号で文化庁文化財保護部長宛てに報告し、平成10年3月24日付け委保第4の1288号で許可を受け実施された。その後、平成10年6月5日付け陸高教社第82号で終了届を進達し、現状変更を終了している。

2 周辺の環境（第2図）

国指定史跡「中沢浜貝塚」は、岩手県陸前高田市広田町字中沢地内に所在し、市の中心部から南東方向に直線距離にして約9km、JR大船渡線小友駅から南へ約4kmの地点に位置する。

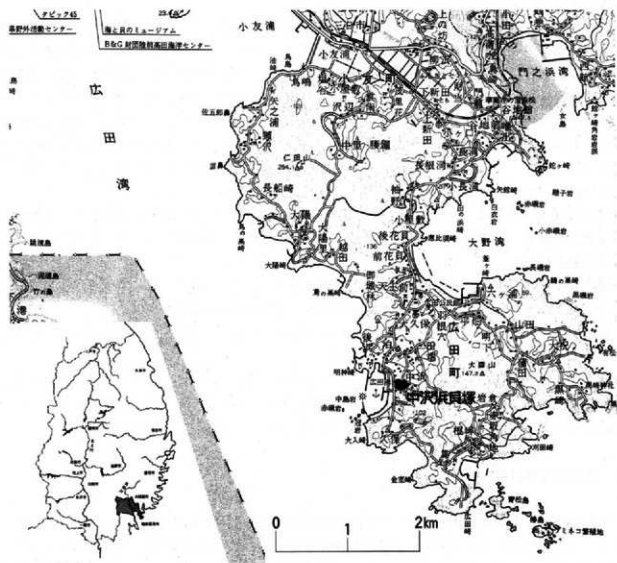
陸前高田市は岩手県の東南端に位置し、宮城県に隣接している。市境は、東は大船渡市、西は東磐井郡大東町、南は宮城県唐桑町及び気仙沼市、北は気仙郡住田町と隣接し、東南方向は太平洋と

面している。

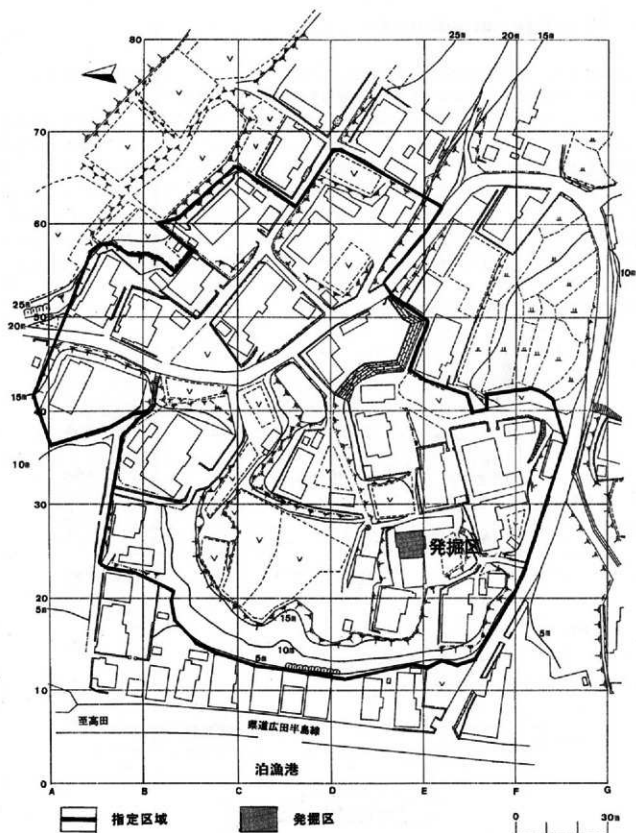
中沢浜貝塚が所在する広田町は、岩手県における宮古市から本市まで続くリアス式海岸特有の突出した岬と湾入が交互に連続する複雑な海岸線の最南端で、南東方向に大きく突き出た広田半島に位置する。東方には湾口部約1.5km、湾奥まで約2kmのC字状の大野湾が開口し、西方には湾口部約3.5km、湾奥まで約7kmの逆U字状の広田湾が開口する。広田半島は、北で小友町と隣接するが周囲は太平洋に面し、大野湾の湾入によって「ひょうたん」のような形を成している。半島は付け根に西方から小友浦が入り込み、縄文海進期には島になっていたと考えられる。半島先端のほぼ中央には大森山（標高147.2m）が、北の小友町よりの中央やや西に仁田山（標高254m）がそれぞれ見える。

遺跡は、広田湾を眼下に望む半島先端部の大森山山麓の西側に広がる緩斜面上に位置し、南と北は沢によって開析される。遺跡の中心は、現在の海岸線より250mほど東の地点にあり、海拔5～20m、面積は約17,000㎡である。かつては、遺跡の前面まで海が湾入し、白砂の砂浜を形成していたが、埋め立てにより消滅し丘陵の一部南側に広がる砂丘にその面影を残すのみである。

現在は住宅が立ち並び、保存管理計画による遺跡の保護活用と開発行為との調整を図っている。



第1図 中沢浜貝塚位置図



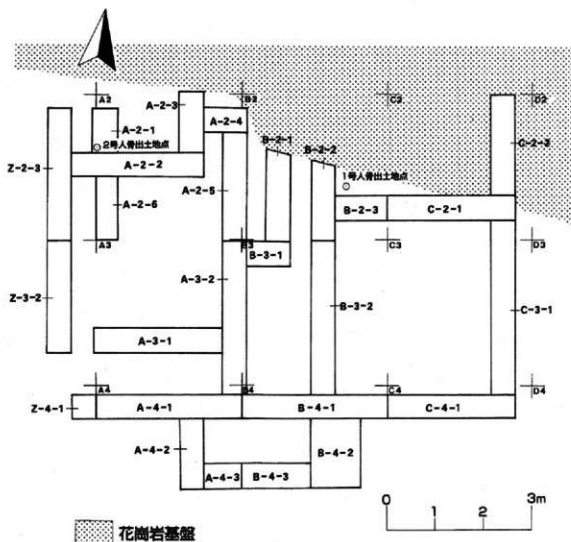
第2図 発掘区

II 層の堆積と出土遺物

1 グリッドの設定と層の堆積 (第3図～)

発掘調査区及び層の堆積についての詳細は、すでに刊行している「中沢浜貝塚1997-遺構・土器・土製品・石器編一(陸前高田市文化財調査報告書第20集)」を参照されたい。

ここでは、その概要について簡単に触れる。発掘調査区は、当初3m四方のグリッドを南北に3区画、東西に3区画の計9区画を設定したが、表土下約30cmほどで縄文時代中期末の保存状況の良好な純貝層が検出されたため、県文化課と協議し、建物の基礎が入る部分のみのトレンチ発掘に変更した。そのため、発掘区は迷路状に走るトレンチが同一グリッド内に複数設定されることとなった。ここでは、調査区内を南北方向に設定した西からZ-3-2・Z-2-3トレンチ、A-3-2・A-2-5・A-2-4トレンチ、B-3-2・B-2-2トレンチ、C-3-1・C-2-2トレンチとこれら4本のトレンチと直交する形で接し、調査区南側で東西方向に設定したZ-4-1・A-4-1・B-4-1・C-4-1トレンチの5本のトレンチについて、それぞれの層の堆積状況について触れる。



第3図 グリッド設定図

(1) Z-3-2・Z-2-3トレンチ (第4図)

各堆積層は、北東から南西方向に20~30°傾斜している。層厚5~8cmほどの表土を除くと次のように大別することができる。

第I層

表土下に厚く堆積した砂層。最大層厚60cmを測る。2・3・175~178層の層厚8~30cmの暗褐色及び黒褐色砂層が6枚、下部の貝層を覆うように堆積している。ごく微量の破砕貝片を含むが、貝の混入率は極めて低く、調査時の混貝状況の観察から混貝砂層とは認め難く砂層として捉えた。

第II層

第I層下に堆積する層厚5~15cmの179~186層を一括したものである。上部にブロック状の暗褐色混貝土層(179層)があるが、堆積状況としては混貝土層(180・181層)、砂層(182・183層)、混貝土層(184・185層)、砂層(186層)の互層である。

第III層

187~199層の層厚2~10cmの混貝土層、混貝砂層、混貝土層を一括したものである。上部では、褐色及び暗褐色の混貝土層である189・191・192層が連続して堆積し、下部には混貝砂層、混貝土層の堆積層中に194・196・198層の混貝土層がブロック状に堆積する。

第IV層

211・222・225~229層の暗褐色及び黒褐色の混貝土層を一括したものである。上部には、212・215層の黒色土層がブロック状に堆積するが、連続して混貝土層の堆積層である。層厚は、最大層厚20cmの229層を除くと5~10cmの層である。堆積層中には直径5~20cmの花崗岩礫が見られる。傾斜は第III層とほぼ同じ傾斜で、第I層、第II層よりやや角度をもって堆積する。

第V層

248~264層を一括したもので、暗褐色及び黒褐色の混貝土層と土層の互層である。層厚は3~10cmで、上部の土層と下部の土層に挟まれた混貝土層はブロック状に堆積したものが多い。

(2) A-3-2・A-2-5・A-2-4トレンチ (第4図・第5図)

各堆積層は、北東から南西方向に傾斜している。トレンチ中央の攪乱部付近から南側の上位の層は層厚5cmほどで、10~20°と比較的緩やかに傾斜している。トレンチ中央付近から北側にかけての中位及び下位の層は層厚10~20cmほどで、20~30°傾斜している。

第I層

表土下に堆積した100・105・112・120・121・125・126層の黒褐色及び暗褐色の混貝土層、114・128層の混貝土層、122~124層の純貝層の上位の貝層を一括したものである。

上部には層厚5cmほどの混貝土層(100・105・112・120・121層)が堆積し、中部には、122・123・124層のムラサキインコを主体とする層厚5cmほどの純貝層が堆積する。

純貝層の下部には、125・126・127層の層厚5~10cmの混貝土層が堆積し、126・127層下には、トレンチ中央付近から南端までの最大幅210cm、最大層厚10cmの混砂貝層(128層)が純貝層同様北東から南西方向に広がる。

第II層

130~132・142・148~153層の黒褐色及び暗褐色の混貝砂層、砂層、土層を一括したものであ

る。連続して堆積する混貝砂層であるが、149層（砂層）、152層（土層）が間層として堆積する。

各層の層厚は10～20cmほどで第Ⅰ層より厚さを増し、北東から南西方向に傾斜して堆積する。

第Ⅲ層

154～174層を一括したものである。黒褐色及び暗褐色の混貝土層、土層の互層である。層の堆積は均等ではなく4～5枚連続した土層に混貝土層が間層、ブロック状に堆積する。第Ⅲ層下は花崗岩の基盤である。

(3) B-3-2・B-2-2トレンチ (第5図)

各堆積層は、北東から南西方向に傾斜している。上位から中位の層は層厚5～10cmほどで、20～30°で傾斜し、下位の層は層厚10～20cmほどで、10～20°傾斜している。

第Ⅰ層

表土下に堆積した9・12～16・18～20・24層の黒褐色及び暗褐色の混貝土層、混土貝層、純貝層を一括したものである。混貝土層は、連続して堆積するが、層厚5cmほどの比較的規模の小さい混土貝層（12、18層）が間層として堆積している。12層下にはムラサキインコなどの岩礫性二枚貝を主体とする層厚5cmほどの純貝層が認められる。

第Ⅱ層

24・26・40～58層を一括したものである。混貝土層、混土貝層、純貝層等の互層である。各貝層を構成する貝種はイガイ・ムラサキインコなどの岩礫性二枚貝が主体であり、クボガイ・レイシガイなどの岩礫性巻貝の比較的多く混入する。各層の堆積は均一ではなく層厚5～10cm、幅1.5mを越す規模の大きな層や、ブロック状に堆積する層などが認められた。

第Ⅲ層

59～63・65～67・81～83層の黒褐色及び暗褐色の土層、混貝土層、混貝砂層を一括したものである。各層の層厚は、59～63層の上位の層は層厚5cmほどであるが、下位の層になると10～20cmと層厚を増す。傾斜は第Ⅰ、Ⅱ層の20～30°に対し10～20°とやや緩やかに堆積する。

第Ⅳ層

85～90層の黒褐色及び暗褐色の土層、混貝土層を一括したものである。上部はやや攪乱を受けている。花崗岩の基盤上に形成された層で、基盤に沿って南西方向へ10～20°の傾斜で堆積する。層厚は10～20cmほどである。

(4) C-3-1・C-2-2トレンチ (第6図)

各堆積層は、北東から南西方向に傾斜している。トレンチの上位は住宅の礎石の埋め込みによりかなりの攪乱を受けている。攪乱は、トレンチ北側半分と東壁側が著しい。そのため、西壁セクションのみ実測を行った。確認できた層を見ると、上位の層は層厚5～10cmほどで、20～30°で傾斜し、下位の層は層厚10～20cmほどで、10～20°傾斜している。

第Ⅰ層

70～76層の暗褐色及び黒褐色の土層、混貝土層を一括したものである。層厚は5～10cm程で、70、71層下に72～76層の混貝土層が堆積する。貝層はムラサキインコ、イガイなどの破砕貝を多く含むが、73層は貝が少ない。

第Ⅱ層

77～80層の純貝層、暗褐色及び黒褐色の混土貝層、混貝土層を一括したものである。層厚は5～cm程である。貝層の堆積は均一ではなく、ムラサキインコ、イガイの破砕貝を主体とする純貝層である77層のように、幅140cmを越える規模の大きな層の下に、幅60～70cm程ムラサキインコ、イガイを主体とする混土貝層、混貝土層が堆積している。

第Ⅲ層

81、83～84、86、92層の暗褐色及び黒褐色の混貝土層を一括したものである。層厚は5～15cmほどである。貝層は、ムラサキインコ、イガイなどの破砕貝を含むが、貝の混入は他の層と比べ少ない。また、小型、中型の花崗岩風化礫が含まれる。

(5) Z-4-1・A-4-1・B-4-1・C-4-1トレンチ (第6図・第7図)

トレンチの上位は攪乱が著しい。各堆積層は、北東から南西方向に傾斜している。トレンチ中央部付近から西側では、層厚10～30cmほどの砂層が厚く堆積し、5～15°に傾斜している。トレンチ中央部付近から東側では、層厚5～10cmほどの純貝層、混土貝層、混貝土層の互層が10°程の傾斜で堆積している。

第Ⅰ層

2～4層の暗褐色及び黒褐色の砂層、土層を一括した。2、3層は、層厚10～30cmほどの砂層で、現在では、埋め立てによって見る事ができなくなったが、中沢浜貝塚前面に広がっていた砂浜からの吹き上げによって堆積したものと思われる。この砂層は西側では、傾斜が強く堆積しており、層厚は増す。砂層下には、層厚10～30cmの土層が堆積している。

第Ⅱ層

5～10層の黒褐色混貝土層を一括した。上部は攪乱が著しい。層厚10～15cm程で、幅は50～200cmと均一ではない。ムラサキインコ、イガイなどの破砕貝をわずかに含むが、8層は破砕貝の混入率がやや高い。また、10層は縄文時代中期末葉の土器片を多く含む。

第Ⅲ層

12、13層の混土貝層、純貝層を一括した。12層は暗褐色混土貝層で、層厚5～10cm程で、幅約250cmである。北東から南西に6～8°に傾斜する。13層の純貝層は、層厚5～8cm程である。ムラサキインコ、イガイなどの破砕貝が主体である。

第Ⅳ層

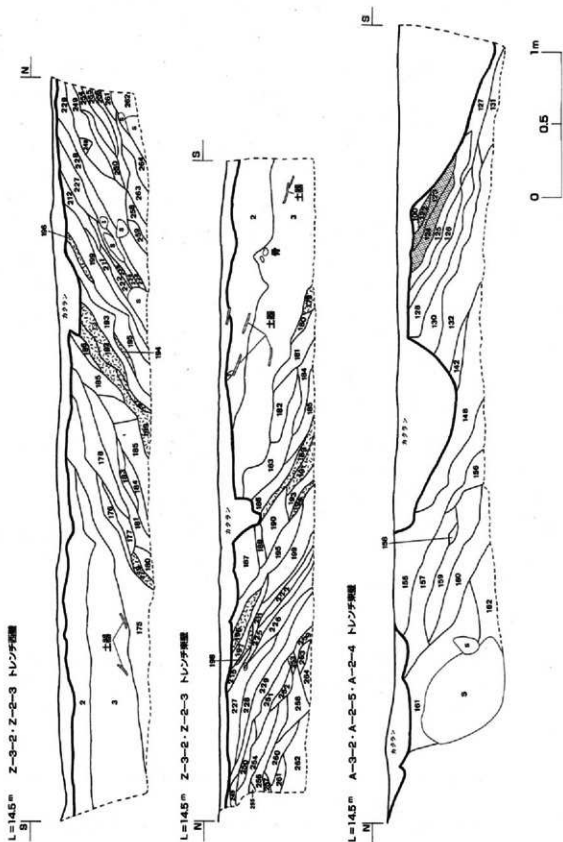
11、14～17、21、23～24層の暗褐色及び黒褐色の混貝土層、純貝層を一括した。層厚5～10cm程で、幅200cmを越す規模の大きな層が堆積する。15、22、23層の上面には、層厚3cm、幅10～50cmの純貝層(11,17,21層)がブロック状に堆積する。貝層はムラサキインコ、イガイなどの破砕貝が主体であるが、マガキ、アサリなどを多く含む層も見られた。また、比較的大型の土器片も見られる。

第Ⅴ層

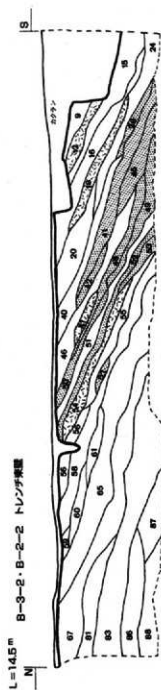
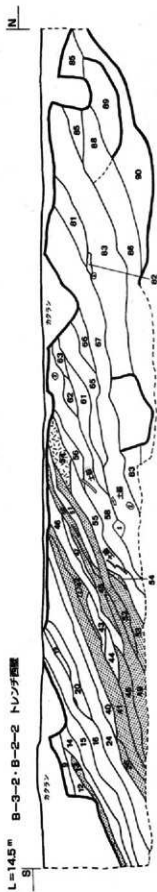
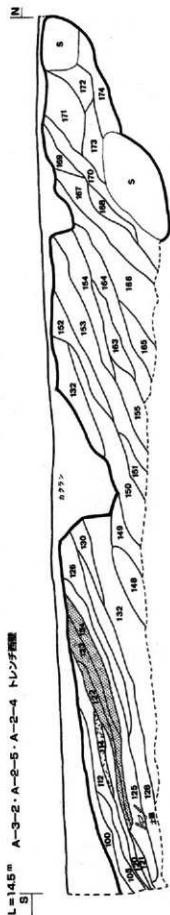
25～36層の純貝層及び混土貝層を一括した。各貝層の層厚は5～10cm程で、26層下に暗褐色混貝土層が堆積するが、連続した純貝層の堆積が見られた。貝層は他の貝層同様ムラサキインコ、イガイなどの破砕貝が主体であるが、ブロック状に堆積し比較的小さい28、29層では、レイシガイやチヂミボラなどの岩礫性巻貝が多く見られた。

第VI層

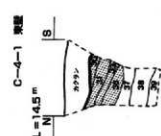
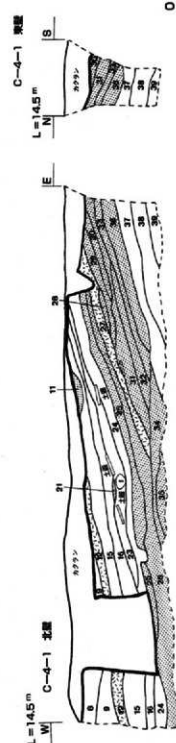
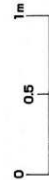
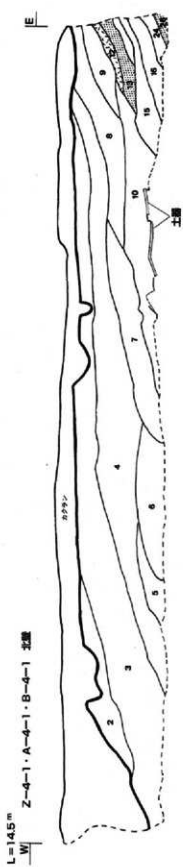
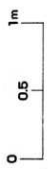
37~39層の暗褐色及び黒褐色の混貝土層を一括した。層厚は10cmほどである。ムラサキインコ、イガイなどの破砕貝の小破片を含むが、全体的な貝の混入は少ない。



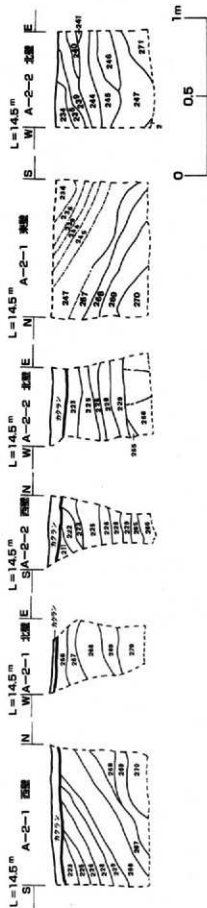
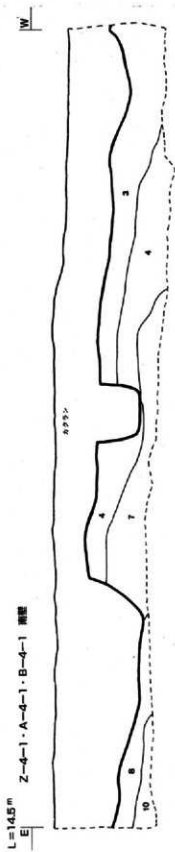
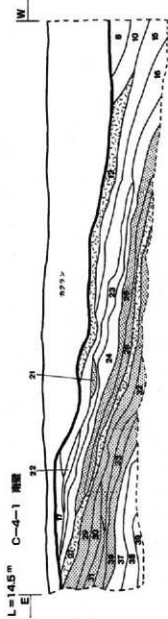
第4図



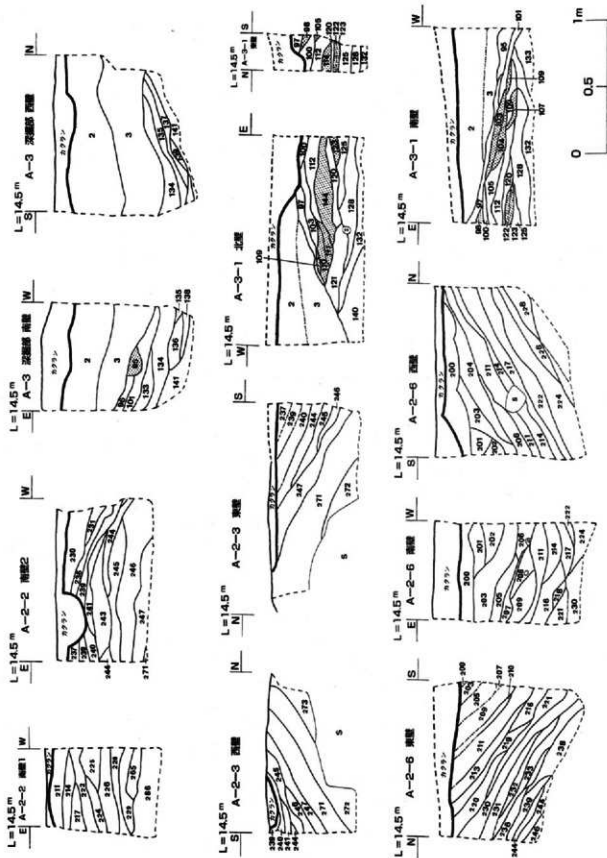
第 5 図



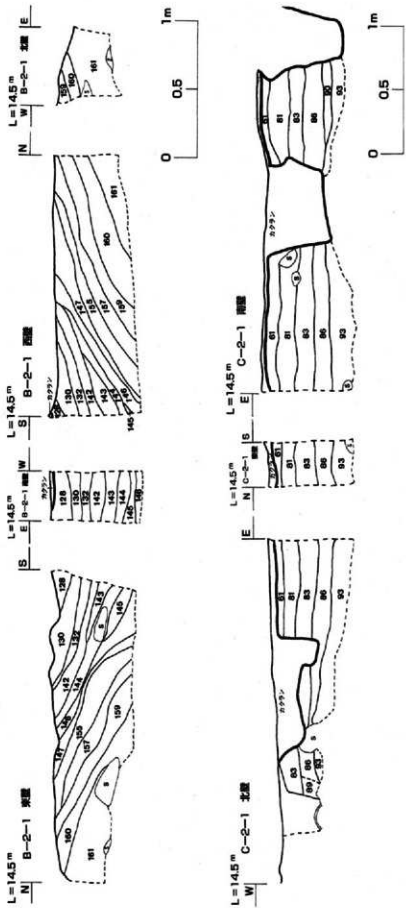
第 6 図



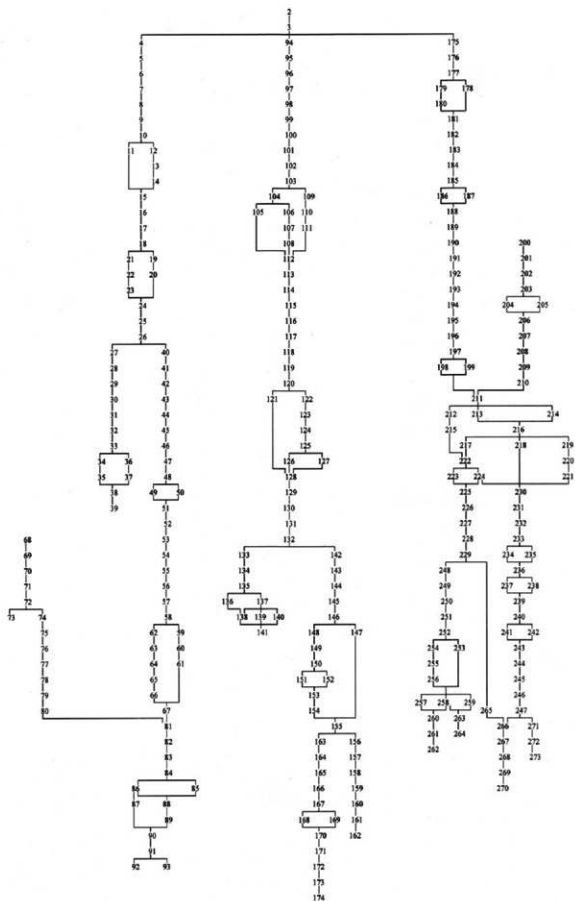
第7図



第 8 図



第 9 図



第10图 层位概念图

第1表 土層観察表

層	層名	グリッド名	土色	体積(cc)	重量(g)	粘性	炭化物	備考
2	砂層	A-3深部部・A-3-1・A-4-1 ・Z-2-3-Z-2-2	10YR2/3黒褐色			なし	なし	土層片含む
3	砂層	A-3深部部・A-3-1・A-4-1 ・B-4-1・Z-2-2-Z-2-2	10YR3/3暗褐色			なし	なし	炭化織物、大木8b出土
4	土層	A-4-1・B-4-1	10YR2/2黒褐色			有り	なし	炭化織物
5	混貝土層	A-4-1	10YR2/2黒褐色	9,000	9,640	有り	なし	貝少ない
6	混貝土層	A-4-1	10YR2/3暗褐色	34,200	37,450	有り	なし	貝少ない
7	混貝土層	A-4-1・B-4-1	10YR2/2 黒褐色	41,000	45,700	有り	なし	土層片含む、貝少ない、後期初層土層片出土
8	混貝土層	B-4-1	10YR3/2 暗褐色	25,000	28,800	なし	なし	イガイ科殻貝多い、大木9、10出土
9	混貝土層	B-3-2・B-4-1・C-4-1	10YR2/3黒褐色	77,200	85,750	有り	なし	縄文陶文、大木1、2b、7b、8b、8b、10出土
10	混貝土層	A-4-1・B-4-1	10YR2/2黒褐色	14,000	16,050	なし	なし	土層片多い
11	混貝土層	C-4-1		25,100	26,540			微量 イガイ科殻貝主体
12	混貝土層	B-3-2・B-4-1・C-4-1	10YR3/3暗褐色	72,700	80,210	有り		微量 ウニ類殻含む、大木1、10出土
13	混貝土層	B-3-2・B-4-1		70,650	76,150			なし イガイ科殻貝主体、クボガイ・チヂミボラ・レイシガイ・マガキ・アサリが多い、大木10出土
14	混貝土層	B-3-2・B-4-1	10YR3/2黒褐色	34,500	36,720	なし		微量 イガイ科殻貝多い
15	混貝土層	B-3-2・B-4-1・C-4-1	10YR2/3暗褐色	105,400	115,720	有り		なし イガイ科殻貝、クボガイ・マガキ・アサリが多い
16	混貝土層	B-3-2・B-4-1・C-4-1	10YR3/2 黒褐色	114,100	126,270	有り		微量 イガイ科殻貝多い、大木10出土
17	混貝土層	C-4-1		24,000	27,060			微量 イガイ科殻貝主体
18	混貝土層	B-3-2	10YR3/3暗褐色	20,400	22,260	有り		微量 イガイ科殻貝多い
19	混貝土層	B-3-2	10YR2/2黒褐色	9,600	10,470	なし		岩礫性骨貝をやや多く含む
20	土層	B-3-2	10YR2/2黒褐色					なし 土層片含む
21	混貝土層	C-4-1		34,700	38,640			微量 イガイ科殻貝主体
22	混貝土層	C-4-1	10YR3/3暗褐色	3,600	3,890	なし		微量 イガイ科殻貝多い
23	混貝土層	C-4-1	10YR3/4暗褐色	50,300	54,090	有り		微量 イガイ科殻貝多い、花崗岩炭化織物
24	混貝土層	B-3-2・B-4-1・C-4-1	10YR2/2黒褐色	171,400	187,920	有り		微量 アサリを多く含む
25	混貝土層	B-4-1・C-4-1		38,200	41,440			微量 イガイ科殻貝主体
26	混貝土層	B-3-2・B-4-1・C-4-1		23,400	25,015			微量 イガイ科殻貝主体、大木8b、10出土
27	混貝土層	C-4-1	10YR3/4暗褐色	25,000	27,080	有り		微量 イガイ科殻貝主体
28	混貝土層	C-4-1		11,600	12,380			微量 イガイ科殻貝主体、岩礫性骨貝をやや多く含む
29	混貝土層	C-4-1		42,400	46,280			微量 イガイ科殻貝主体、岩礫性骨貝をやや多く含む
30	混貝土層	C-4-1		20,000	20,120			微量 イガイ科殻貝主体
31	混貝土層	C-4-1		20,000	20,830			微量 イガイ科殻貝主体、縄文陶文出土
32	混貝土層	C-4-1		28,000	28,100			微量 イガイ科殻貝主体
33	混貝土層	C-4-1		15,000	16,100			微量 イガイ科殻貝主体
34	混貝土層	C-4-1		20,000	21,550			微量 イガイ科殻貝主体
35	混貝土層	C-4-1		7,200	7,340			微量 イガイ科殻貝主体
36	混貝土層	C-4-1		23,700	26,430			微量 イガイ科殻貝主体
37	混貝土層	C-4-1	10YR3/2暗褐色	39,600	42,530	有り		少量 貝少ない、大木10出土
38	混貝土層	C-4-1	10YR2/3暗褐色	16,500	19,140	有り		少量 貝少ない
39	混貝土層	C-4-1	10YR3/3暗褐色	1,400	1,820	有り		少量 貝少ない
40	混貝土層	B-3-2	10YR5/2灰黄褐色	32,800	34,510	なし		なし イガイ科殻貝多い、大木8b出土
41	混貝土層	B-3-2		6,800	7,180			なし イガイ科殻貝主体、大木10出土
42	混貝土層	B-3-2		9,200	10,010			なし アサリを多く含む、大木2a出土
43	土層	B-3-2	10YR3/3暗褐色					微量
44	土層	B-3-2	10YR3/4暗褐色					微量
45	混貝土層	B-3-2		7,400	7,170			少量 イガイ科殻貝主体
46	混貝土層	B-3-2	10YR4/2黒褐色	31,600	33,380	なし		少量 イガイ科殻貝多い
47	混貝土層	B-3-2	10YR4/2灰黄褐色	9,600	9,440	なし		骨を多く含む
48	混貝土層	B-3-2		10,300	10,100			少量 イガイ科殻貝主体
49	混貝土層	B-3-2		14,900	15,250			少量 岩礫性骨貝をやや多く含む
50	混貝土層	B-3-2		10,100	9,820			なし 魚骨を多く含む、土層片含む
51	混貝土層	B-3-2	10YR3/4暗褐色	39,700	40,530	なし		なし クボガイ・レイシガイを多く含む
52	混貝土層	B-3-2		20,400	21,140			微量 イガイ科殻貝主体
53	混貝土層	B-3-2		4,600	4,890			微量 イガイ科殻貝主体
54	混貝土層	B-3-2	10YR4/2黒褐色	26,800	27,810	なし		多い イガイ科殻貝多い
55	混貝土層	B-3-2	10YR3/2黒褐色	17,200	17,710	なし		なし イガイ科殻貝多い
56	混貝土層	B-3-2	10YR3/2黒褐色	24,800	26,920	なし		微量 イガイ科殻貝多い、大木7a出土
57	混貝土層	B-3-2		1,400	1,900			なし 焼けたイガイを多く含む
58	混貝土層	B-3-2	10YR2/3暗褐色	73,600	73,820	なし		少量 軟骨多量、マゴロ属を多く含む、大木9出土
59	土層	B-3-2	10YR3/2黒褐色					なし 少量
60	土層	B-3-2	10YR2/3暗褐色					なし 少量
61	混貝土層	B-3-2-C-2-1	10YR3/4暗褐色	30,600	31,970	なし		少量 イガイ科殻貝多い、土層片含む
62	土層	B-3-2	10YR2/2黒褐色					多い
63	土層	B-3-2	10YR2/3暗褐色					微量
64	混貝土層	B-3-2		25,800	28,200			なし 魚骨多い、大木9出土
65	混貝土層	B-3-2	10YR2/3暗褐色	40,600	42,350	なし		なし イガイ科殻貝多い、大型花崗岩炭化織物
66	混貝土層	B-3-2		8,800	9,460			多い
67	混貝砂層	B-2-2・B-3-2	10YR4/3(ぶい)黄褐色	195,700	219,270	なし		なし 魚骨多い、岩礫性骨貝多い、花崗岩炭化織物多い
68	混貝土層	B-3-2	10YR3/4暗褐色	4,800	5,180	なし		なし イガイ科殻貝多い

層名	グリッド名	土色	体積(cc)	重量(g)	粘性	炭化物	備考
69	畑貝土層 B-3-2	10YR3/3暗褐色	4,000	4,680	なし	なし	イガイ科硬体貝多い
70	土層 C-3-1	10YR3/3暗褐色			有り	微量	
71	土層 C-3-1	10YR2/2黒褐色			有り	微量	
72	畑貝土層 C-3-1	10YR2/3黒褐色	4,200	4,360	有り	微量	イガイ科硬体貝多い
73	畑貝土層 C-3-1	10YR2/3黒褐色	11,000	12,390	有り	微量	貝少ない
74	畑貝土層 C-3-1	10YR4/4褐色	13,800	14,500	有り	微量	イガイ科硬体貝多い
75	畑貝土層 C-3-1	10YR2/3黒褐色	2,300	2,590	有り	微量	イガイ科硬体貝多い
76	畑貝土層 C-3-1	10YR3/3暗褐色	12,400	14,200	有り	微量	イガイ科硬体貝多い、土層片含む
77	畑貝土層 C-3-1		26,600	28,260	有り	微量	イガイ科硬体貝主体、土層片含む
78	畑貝土層 C-3-1	10YR2/3黒褐色	13,400	13,730	有り	微量	イガイ科硬体貝多い
79	畑貝土層 C-3-1	10YR3/3暗褐色	16,600	17,740	なし	微量	イガイ科硬体貝多い
80	畑貝土層 C-3-1	10YR2/2黒褐色	23,800	24,940	有り	微量	イガイ科硬体貝多い
81	畑貝土層 B-2-2-B-3-2-C-2-1-C-3-1	10YR2/3黒褐色	83,700	91,340	有り	微量	貝少ない、大木8a、8b出土
82	畑貝土層 B-2-2	10YR3/3暗褐色	8,300	9,140	なし	なし	貝非常に少ない、魚骨(マゴロ属)を含む
83	畑貝土層 B-2-2-B-3-2-C-2-1-C-2-2-C-3-1	10YR3/3暗褐色	409,000	444,410	なし	微量	貝少ない、魚骨(マゴロ属)、縄文縄文、大木1、2b、8a、8b出土
84	畑貝土層 C-2-2	10YR2/2黒褐色	12,000	13,480	有り	なし	貝少ない
85	土層 B-2-2	10YR2/2黒褐色			なし	多い	花崗岩風化層を含む、大木1出土
86	畑貝土層 B-2-2-B-3-2-C-2-1-C-2-2-C-3-1	10YR2/3黒褐色	193,400	208,150	有り	微量	貝少ない
87	土層 B-3-2	10YR3/4暗褐色			有り		土層片、小形花崗岩風化層を含む
88	畑貝土層 B-2-2-B-3-2-C-2-1	10YR2/3黒褐色	88,800	102,380	なし	なし	イガイ科硬体貝ブロック状に入る、土層片含む
89	畑貝土層 B-2-2	10YR2/3黒褐色	165,800	175,590	なし	なし	1号人骨出土、縄文縄文、前期新石器土層片出土
90	畑貝土層 B-2-2-C-2-1	10YR3/3暗褐色	35,700	41,170	有り	なし	イガイ科硬体貝多い
91	土層 C-2-1	10YR3/4暗褐色			有り		花崗岩風化層多い
92	畑貝土層 C-2-1	10YR2/2黒褐色	7,000	8,180	有り	なし	貝少ない、小形花崗岩風化層を含む
93	畑貝土層 C-2-1	10YR3/3暗褐色	111,700	124,570	有り	なし	貝少ない、花崗岩風化層を含む、大木1出土
94	畑貝土層 A-3深部部	10YR3/3暗褐色	10,700	11,700	なし	なし	魚骨多い、貝片含む
95	畑貝土層 A-3深部部-A-3-1		7,400	8,990	なし	なし	イガイ科硬体貝主体、土層片含む
96	畑貝土層 A-3深部部	10YR2/3黒褐色	5,300	6,900	なし	微量	貝、骨少ない
97	畑貝土層 A-3-1	10YR3/3暗褐色	27,500	31,990	なし	なし	イガイ科硬体貝多い、炭が混じる、大木10出土
98	畑貝土層 A-3-1		8,800	8,790	なし	なし	イガイ科硬体貝主体
99	畑貝土層 A-3-1	10YR3/3暗褐色	18,500	20,650	なし	なし	貝少ない
100	畑貝土層 A-3-1-A-3-2	10YR2/3黒褐色	66,800	76,350	なし	微量	イガイ科硬体貝多、大木10、後期新石器土層片出土
101	畑貝土層 A-3深部部-A-3-1	10YR2/3黒褐色	17,000	21,980	なし	少量	貝少ない、大木9出土
102	畑貝土層 A-3-1	10YR4/4褐色	13,600	15,510	なし	少量	貝少ない、小形花崗岩風化層含む
103	畑貝土層 A-3-1	10YR2/2黒褐色	6,000	7,980	なし	少量	貝少ない
104	畑貝土層 A-3-1	10YR2/3黒褐色	19,700	20,990	なし	少量	貝少ない、大木10出土
105	畑貝土層 A-3-1-A-3-2	10YR3/3暗褐色	1,000	1,230	なし	少量	貝少ない
106	畑貝土層 A-3-1	10YR2/2黒褐色	7,600	7,850	なし	なし	イガイ科硬体貝多い
107	畑貝土層 A-3-1		2,300	2,170	なし	なし	イガイ科硬体貝主体
108	畑貝土層 A-3-1	10YR3/3暗褐色	12,100	13,660	なし	なし	土層片多い、大型のナメガイ含む
109	畑貝土層 A-3-1		31,700	36,190	なし	なし	イガイ科硬体貝主体
110	畑貝土層 A-3-1		3,800	3,960	なし	なし	イガイ科硬体貝主体
111	畑貝土層 A-3-1		12,500	14,990	なし	なし	イガイ科硬体貝主体、魚骨多い
112	畑貝土層 A-3-1-A-3-2	10YR2/3黒褐色	243,320	233,160	なし	なし	イガイ科硬体貝多い、クボガイ・チヂミボラ・レシガイ・アサリ多い、大木8a出土
113	畑貝土層 A-3-1		21,600	23,820	なし	なし	ムラサキニンコ、イガイのみ、大木7b出土
114	畑貝土層 A-3-1-A-3-2	10YR3/3暗褐色	60,500	63,650	なし	少量	イガイ科硬体貝多い、骨を多く含む
115	畑貝土層 A-3-2		108,200	116,580	なし	少量	イガイ主体、アサリ含む、大木8a出土
116	畑貝土層 A-3-2		13,800	14,470	なし	少量	ムラサキニンコ主体、骨を多く含む
117	魚骨層 A-3-2	10YR4/3にぶい黄褐色	4,400	4,600	なし	多い	
118	畑貝土層 A-3-2	10YR3/3暗褐色	22,900	30,360	なし	少量	
119	畑貝土層 A-3-2		48,100	52,440	なし	少量	イガイ科硬体貝主体、骨を多く含む、大木10出土
120	畑貝土層 A-3-1-A-3-2	10YR2/3黒褐色	63,600	67,720	なし	少量	イガイ科硬体貝多い、大木10出土
121	畑貝土層 A-3-1-A-3-2	10YR2/3黒褐色	13,400	14,470	なし	なし	イガイ科硬体貝多い
122	畑貝土層 A-3-1-A-3-2		25,900	26,800	なし	なし	イガイ科硬体貝主体
123	畑貝土層 A-3-1-A-3-2		7,000	7,330	なし	なし	イガイ科硬体貝主体、マガキを多く含む
124	畑貝土層 A-3-2		23,000	25,150	微量	なし	イガイ科硬体貝主体
125	畑貝土層 A-3-1-A-3-2	10YR3/4暗褐色	53,100	54,680	なし	なし	イガイ科硬体貝多い、クボガイ・アサリを多く含む、土層片多い
126	畑貝土層 A-3-2	10YR3/4暗褐色	11,400	11,790	なし	微量	イガイ科硬体貝多い
127	畑貝土層 A-3-2		10,000	10,870	なし	微量	イガイ科硬体貝多い
128	畑貝土層 A-3-1-A-3-2-B-2-1	10YR3/3暗褐色	165,200	187,900	なし	微量	貝少ない、大木5、10出土
129	砂層 A-3-1	10YR2/3黒褐色			なし		
130	畑貝砂層 A-3-2-B-2-1	10YR2/3黒褐色	94,100	100,610	なし	微量	貝少ない、大木7a、8b、9出土
131	畑貝砂層 A-3-2	10YR3/2黒褐色	9,600	10,520	なし	微量	貝少ない
132	畑貝砂層 A-3-1-A-3-2-B-2-1	10YR2/3黒褐色	151,390	170,960	なし	微量	貝少ない、大木5、8a、8b出土
133	土層 A-3深部部-A-3-1	10YR3/3暗褐色			なし		
134	畑貝土層 A-3深部部	10YR2/3黒褐色	135,000	144,100	なし	なし	魚骨(マゴロ属)多い、大木10出土
135	土層 A-3深部部	10YR2/3黒褐色			なし		大木5出土

層 名	トレンチ名	土 色	体積(cc)	重量(g)	粘性	炭化物	備 考
136	土層 A-3深部	10YR2/3黒褐色			なし	なし	
137	炭貝土層 A-3深部	10YR3/3暗褐色	10,400	10,400	なし	なし	魚骨多い
138	炭貝土層 A-3深部	10YR2/3黒褐色	4,300	4,380	なし	なし	貝少ない、魚骨多い
139	炭貝土層 A-3深部	10YR3/4にぶい黄褐色	34,900	35,790	なし	なし	魚骨、灰多い
140	土層 A-3-1	10YR2/3黒褐色			なし	なし	
141	炭貝土層 A-3深部	10YR3/3暗褐色	20,200	19,740	なし	なし	貝少ない
142	炭貝土層 A-3-2-B-2-1	10YR3/4暗褐色	33,900	36,730	なし	微量	貝少ない、大木1、8a、8b出土
143	炭貝土層 B-2-1	10YR3/3暗褐色	27,400	30,520	なし	微量	貝少ない、大木7b出土
144	炭貝土層 B-2-1	10YR3/4暗褐色	38,400	43,700	なし	微量	貝少ない
145	炭貝土層 B-2-1	10YR2/3黒褐色	55,600	62,360	なし	なし	貝少ない
146	炭貝土層 B-2-1	10YR3/2黒褐色	51,600	57,130	なし	微量	貝少ない
147	炭貝土層 B-2-1	10YR3/3暗褐色	47,900	52,600	なし	微量	貝少ない、花崗岩風化層含む、大木1出土
148	炭貝砂層 A-2-5-A-3-2	10YR2/2黒褐色	80,100	79,230	なし	なし	貝少ない
149	砂層 A-3-2	10YR3/2黒褐色			なし	微量	
150	炭貝砂層 A-2-5-A-3-2	10YR2/3黒褐色	6,200	6,630	なし	微量	貝少ない、大木2b出土
151	炭貝砂層 A-3-2	10YR3/2黒褐色	8,000	8,490	なし	微量	貝少ない
152	土層 A-2-5-A-3-2	10YR2/3黒褐色			なし	なし	小顆粒岩質風化層含む
153	炭貝土層 A-2-5-A-3-2	10YR2/2 黒褐色	65,200	72,700	なし	なし	貝少ない
154	土層 A-2-5	10YR3/2黒褐色			なし	なし	
155	炭貝土層 A-2-5-A-3-2-B-2-1	10YR2/3黒褐色	126,100	142,680	なし	微量	貝少ない、大木1出土
156	土層 A-2-5-A-3-2	10YR3/4暗褐色			なし	微量	
157	炭貝土層 A-2-5-B-2-1	10YR3/3暗褐色	61,500	67,110	なし	微量	貝少ない
158	土層 A-2-5	10YR3/2黒褐色			なし	なし	
159	土層 A-2-5-B-2-1	10YR3/3暗褐色			なし	なし	
160	炭貝土層 A-2-5-B-2-1	10YR2/3黒褐色	74,000	81,460	なし	微量	貝少ない、土層片、花崗岩風化層含む
161	炭貝土層 A-2-5-B-2-1	10YR2/2黒褐色	83,200	95,680	なし	なし	貝少ない、風化層含む
162	土層 A-2-5	10YR3/2黒褐色			なし	なし	
163	土層 A-2-5	10YR3/3 暗褐色			なし	なし	
164	土層 A-2-5	10YR3/4暗褐色			なし	微量	
165	土層 A-2-5	10YR3/3暗褐色			なし	なし	
166	炭貝土層 A-2-5	10YR3/2黒褐色	248,800	285,480	なし	微量	貝少ない、大木1出土
167	土層 A-2-5	10YR3/3暗褐色			なし	微量	
168	土層 A-2-5	10YR3/4暗褐色			なし	なし	花崗岩風化層含む
169	炭貝土層 A-2-5	10YR3/3暗褐色	199,300	225,070	なし	微量	貝少ない、花崗岩風化層含む、縄文磚又出土
170	土層 A-2-5	10YR3/2黒褐色			なし	なし	縄文磚又出土
171	土層 A-2-5	10YR2/3黒褐色			なし	なし	
172	炭貝土層 A-2-5	7.5YR3/3暗褐色	39,200	43,090	なし	なし	貝少ない、大型花崗岩風化層含む
173	土層 A-2-5	7.5YR3/2暗褐色			なし	なし	
174	土層 A-2-5	7.5YR3/3暗褐色			なし	なし	大型花崗岩風化層含む
175	砂層 Z-2-3-Z-3-2	10YR3/4暗褐色			なし	なし	
176	砂層 Z-2-3-Z-3-2	10YR3/2黒褐色			なし	微量	
177	砂層 Z-3-2	10YR2/3黒褐色			なし	微量	
178	砂層 Z-2-3-Z-3-2	10YR2/3黒褐色			なし	微量	
179	炭土貝層 Z-3-2	10YR3/4暗褐色	11,000	12,010	なし	微量	イガイ科破砕貝多い、レイシガイ・イボニシ多い、ウニ類多く含む
180	炭貝土層 Z-3-2	10YR3/2黒褐色	5,400	5,470	なし	微量	ウニ類多く含む
181	炭貝土層 Z-2-3-Z-3-2	10YR3/2黒褐色	59,700	62,780	なし	微量	貝少ない
182	土層 Z-2-3-Z-3-2	10YR3/4暗褐色			なし	微量	
183	砂層 Z-2-3-Z-3-2	10YR4/4褐色			なし	なし	
184	炭貝土層 Z-2-3-Z-3-2	10YR3/4暗褐色	18,600	19,380	なし	なし	貝少ない、ウニ類多く含む
185	炭貝土層 Z-2-3-Z-3-2	10YR4/4褐色	17,000	16,490	なし	なし	イガイ科破砕貝多い
186	砂層 Z-2-3	10YR5/4にぶい黄褐色			なし	微量	
187	土層 Z-2-3	10YR4/3にぶい褐色			なし	少量	
188	土層 Z-2-3	10YR4/4褐色			なし	少量	
189	炭土貝層 Z-2-3	10YR4/4褐色	1,600	1,700	なし	微量	イガイ科破砕貝多い
190	土層 Z-2-3	10YR4/4褐色			なし	微量	
191	炭土貝層 Z-2-3	10YR3/4暗褐色	16,800	16,370	なし	少量	イガイ科破砕貝多い、ブロック状に骨を含む
192	炭土貝層 Z-2-3	10YR5/4にぶい黄褐色	77,200	78,530	なし	微量	イガイ科破砕貝多い、骨を多く含む
193	炭貝砂層 Z-2-3	10YR4/4褐色	12,000	12,160	なし	少量	イガイ科破砕貝多い
194	炭土貝層 Z-2-3	10YR3/4暗褐色	9,000	8,850	なし	微量	イガイ科破砕貝多い、骨を多く含む
195	炭貝土層 Z-2-3	10YR4/4褐色	35,800	36,480	なし	微量	イガイ科破砕貝多い
196	炭土貝層 Z-2-3	10YR4/4褐色	19,800	23,290	なし	少量	イガイ科破砕貝多い
197	炭貝土層 Z-2-3	10YR3/4暗褐色	4,600	4,670	なし	微量	貝少ない
198	炭土貝層 Z-2-3	10YR2/3黒褐色	1,800	1,800	なし	微量	イガイ科破砕貝多い
199	炭貝土層 Z-2-3	10YR3/3暗褐色	36,900	38,520	なし	微量	貝少ない
200	炭貝土層 A-2-6	10YR3/3暗褐色	5,300	5,460	なし	微量	貝少ない、花崗岩風化層含む
201	土層 A-2-6	10YR3/3暗褐色			なし	なし	
202	土層 A-2-6	10YR4/6褐色			なし	微量	
203	土層 A-2-6	10YR4/3にぶい黄褐色			なし	微量	
204	炭土貝層 A-2-6	10YR5/3にぶい黄褐色	46,900	46,820	なし	微量	イガイ科破砕貝多い
205	土層 A-2-6	10YR4/4褐色			なし	微量	

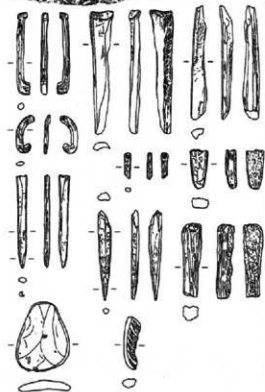
層名	トレンチ名	土色	体積(cc)	重量(g)	粘性	炭化物	備考
206	土層 A-2-6	10YR4/4褐色			なし	微量	
207	土層 A-2-6	10YR3/4暗褐色			なし	微量	
208	土層 A-2-6	10YR4/3にぶい黄褐色			なし	なし	
209	土層 A-2-6	10YR3/3暗褐色			なし	なし	土層片含む
210	土層 A-2-6	10YR3/4暗褐色			なし	少量	
211	埋貝土層 A-2-2-A-2-6-Z-2-3	10YR3/3暗褐色	80,400	87,490	なし	なし	イガイ科殻砂貝多い、土層片、マグロ属、大型花崗岩風化礫含む
212	土層 Z-2-3	10YR2/3黒褐色			なし	なし	
213	土層 A-2-6	10YR3/3暗褐色			なし	微量	
214	埋貝土層 A-2-2-A-2-6	10YR4/2黄褐色	100,300	111,060	なし	なし	イガイ科殻砂貝多、大木1、6、7a、7b出土
215	土層 Z-2-3	10YR2/2黒褐色			なし	微量	
216	土層 A-2-6	10YR2/3黒褐色			なし	微量	
217	埋貝土層 A-2-2-A-2-6	7.5YR2/2黒褐色	74,800	80,290	なし	なし	イガイ科殻砂貝多い、大木1出土
218	土層 A-2-6	10YR2/3黒褐色			なし	なし	
219	土層 A-2-6	10YR4/4褐色			なし	なし	花崗岩風化礫含む
220	埋貝土層 A-2-6	10YR2/3黒褐色	800	790	なし	なし	イガイ科殻砂貝多い、花崗岩風化礫含む
221	土層 A-2-6	10YR3/4暗褐色			なし	なし	
222	埋貝土層 A-2-2-A-2-6-Z-2-3	10YR3/4暗褐色	226,600	243,180	なし	微量	イガイ科殻砂貝多い、縄文縄文、上川名2出土
223	埋貝土層 A-2-1-A-2-2	10YR2/2黒褐色	60,600	69,600	なし	なし	イガイ科殻砂貝多い、大木1出土
224	埋貝土層 A-2-2-A-2-6	10YR3/3暗褐色	86,970	94,170	なし	微量	貝少ない
225	埋貝土層 A-2-1-A-2-2-Z-2-3	10YR3/4暗褐色	41,600	46,980	なし	微量	貝少ない
226	埋貝土層 A-2-1-A-2-2-A-2-6-Z-2-3	10YR3/3暗褐色	35,600	37,810	なし	微量	貝少ない、大木1出土
227	埋貝土層 Z-2-3	10YR2/3黒褐色	66,300	70,430	なし	なし	イガイ科殻砂貝多い、骨、土層小片、小型花崗岩風化礫含む
228	埋貝土層 A-2-1-A-2-2-A-2-6-Z-2-3	10YR3/4暗褐色	187,500	219,150	なし	なし	イガイ科殻砂貝多い、骨を多く含む、大木1出土
229	埋貝土層 A-2-1-A-2-2-Z-2-3	10YR3/3暗褐色	124,700	141,930	なし	微量	イガイ科殻砂貝多い
230	埋貝土層 A-2-2-A-2-6	10YR3/2黒褐色	16,000	16,440	なし	微量	貝少ない
231	埋貝土層 A-2-2-A-2-6	10YR3/3暗褐色	18,600	20,550	なし	なし	イガイ科殻砂貝多い、土層片含む
232	土層 A-2-6	10YR2/3黒褐色			なし	なし	
233	土層 A-2-6	10YR3/3暗褐色			なし	なし	
234	土層 A-2-1-A-2-2	10YR3/4暗褐色			なし	微量	
235	埋貝土層 A-2-6	10YR3/4暗褐色	21,000	22,470	なし	なし	イガイ科殻砂貝多い
236	埋貝土層 A-2-1-A-2-2-A-2-6	10YR3/3暗褐色	13,300	14,380	なし	なし	イガイ科殻砂貝多い
237	土層 A-2-2-A-2-3	10YR3/4暗褐色			なし	なし	
238	土層 A-2-6	10YR3/3暗褐色			なし	なし	
239	埋貝土層 A-2-1-A-2-2-A-2-3 A-2-6	10YR4/4暗褐色	40,600	46,520	なし	なし	貝少ない
240	埋貝土層 A-2-2-A-2-3	10YR4/4暗褐色	13,800	15,750	なし	なし	貝少ない
241	埋貝土層 A-2-2-A-2-3	10YR4/6褐色	13,600	13,160	なし	なし	貝少ない
242	土層 A-2-6	10YR4/4褐色			なし	なし	
243	埋貝土層 A-2-2	10YR4/4褐色	32,300	34,650	なし	なし	貝少ない
244	埋貝土層 A-2-1-A-2-2-A-2-3 A-2-6	10YR3/4暗褐色	36,200	40,710	なし	微量	貝少ない
245	埋貝土層 A-2-1-A-2-2-A-2-3	10YR3/4暗褐色	38,800	41,280	なし	少量	貝少ない
246	埋貝土層 A-2-2-A-2-3-A-2-6	10YR4/4褐色	37,200	40,140	なし	微量	貝少ない、魚骨(マグロ属)を含む
247	埋貝土層 A-2-1-A-2-2-A-2-3	10YR3/3暗褐色	78,600	93,660	なし	微量	貝少ない、大木1出土
248	埋貝土層 Z-2-3	10YR3/3暗褐色	3,800	4,270	なし	なし	イガイ科殻砂貝多い
249	埋貝土層 Z-2-3	10YR3/4暗褐色	17,700	20,400	なし	微量	貝少ない
250	土層 Z-2-3	10YR3/2黒褐色			なし	微量	
251	埋貝土層 Z-2-3	10YR3/2黒褐色	5,000	5,500	なし	微量	貝少ない
252	埋貝土層 Z-2-3	10YR3/3暗褐色	5,500	6,020	なし	微量	貝少ない
253	土層 Z-2-3	10YR3/3暗褐色			なし	微量	
254	土層 Z-2-3	10YR2/2黒褐色			なし	微量	
255	土層 Z-2-3	10YR3/3暗褐色			なし	微量	
256	埋貝土層 Z-2-3	10YR3/4暗褐色	31,900	34,130	なし	微量	貝少ない
257	土層 Z-2-3	10YR3/3暗褐色			なし	微量	
258	埋貝土層 Z-2-3	10YR3/4暗褐色	10,800	11,930	なし	なし	イガイ科殻砂貝多い、花崗岩風化礫含む
259	埋貝土層 Z-2-3	10YR3/4暗褐色	13,800	15,640	なし	微量	貝少ない
260	土層 Z-2-3	10YR3/4暗褐色			なし	微量	
261	土層 Z-2-3	10YR2/3黒褐色			なし	微量	
262	土層 Z-2-3	10YR2/2黒褐色			なし	微量	花崗岩風化礫含む
263	埋貝土層 Z-2-3	10YR3/4暗褐色	7,600	7,870	なし	微量	貝少ない
264	埋貝土層 Z-2-3	10YR3/3暗褐色	6,300	8,300	なし	微量	貝少ない
265	土層 A-2-2	10YR3/4暗褐色			なし	なし	
266	埋貝土層 A-2-1-A-2-2	10YR4/4褐色	88,700	94,450	なし	なし	2号人骨(新生児骨)出土、貝、縄文縄文出土
267	埋貝土層 A-2-1	10YR3/3暗褐色	29,800	31,700	なし	なし	イガイ科殻砂貝多い、魚骨を多く、大木1出土
268	埋貝土層 A-2-1	10YR3/4暗褐色	12,600	14,370	なし	なし	貝少ない
269	埋貝土層 A-2-1	10YR3/3暗褐色	26,000	28,600	なし	微量	貝少ない
270	埋貝土層 A-2-1	10YR2/3黒褐色	27,400	30,490	なし	微量	貝少ない
271	埋貝土層 A-2-2	10YR2/3黒褐色	96,700	106,600	なし	微量	貝少ない、花崗岩風化礫含む
272	土層 A-2-3	10YR2/2黒褐色			なし	微量	花崗岩風化礫含む
273	土層 A-2-3	10YR3/4暗褐色			なし	なし	花崗岩風化礫含む

*備考に関しては、発掘時の所見である。

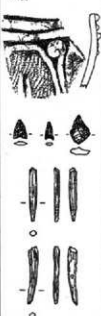
表土



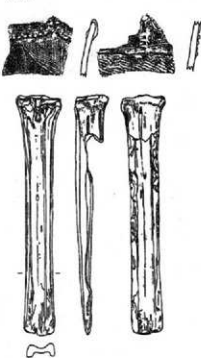
攪乱層



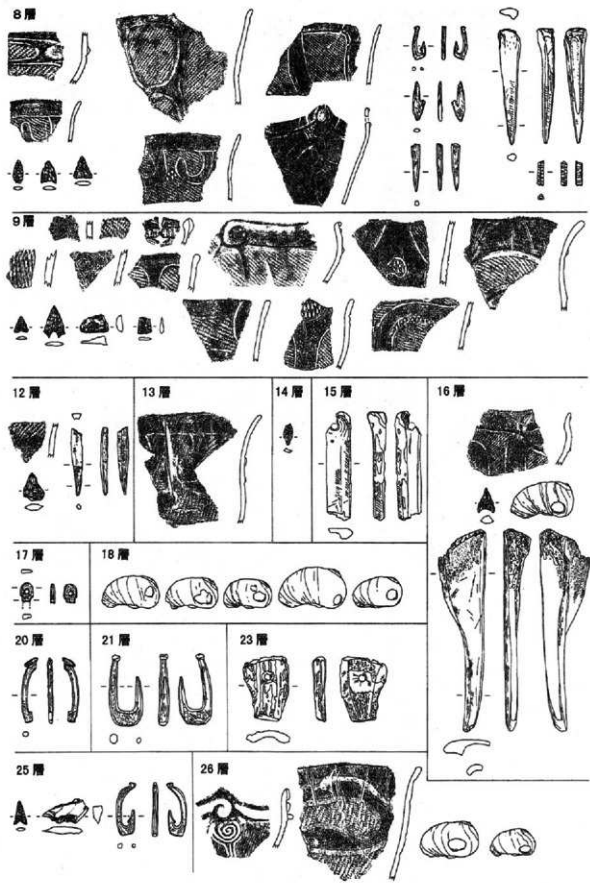
3層



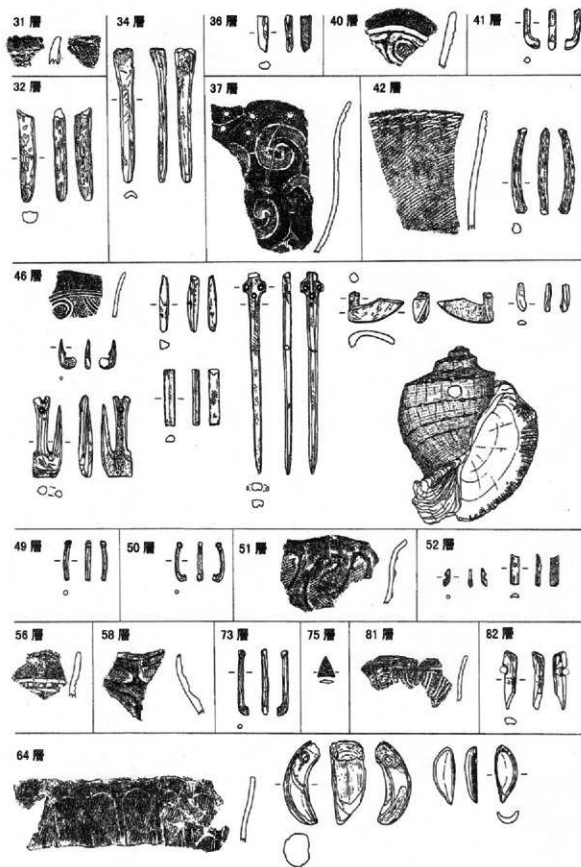
7層



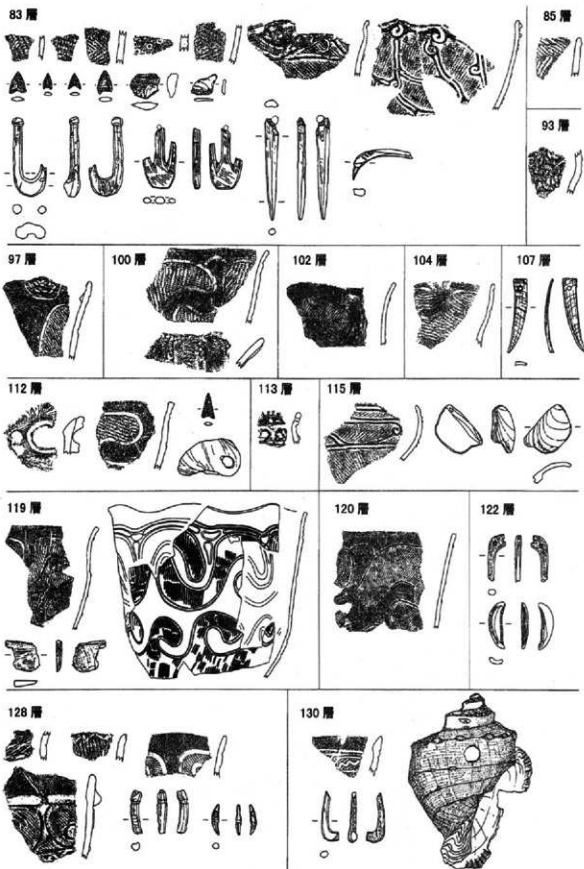
第 11 图



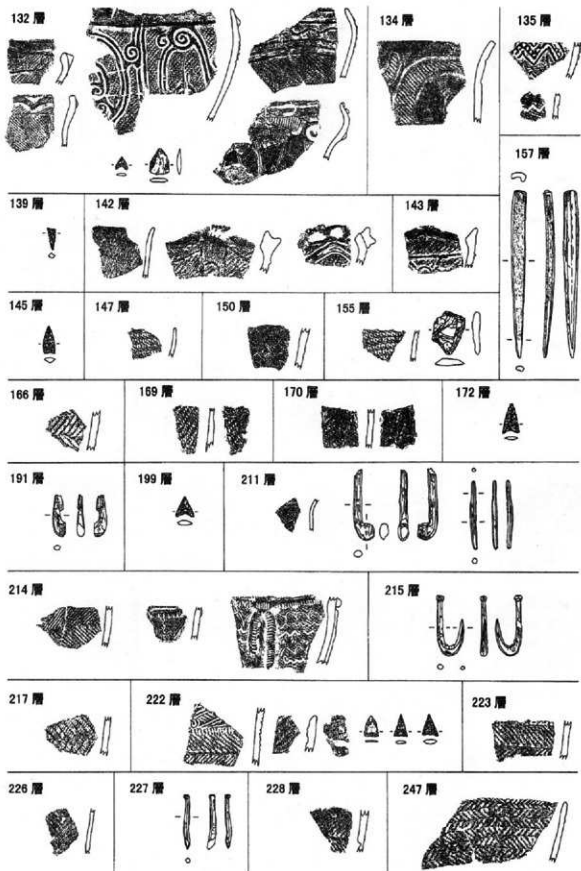
第 12 図



第 13 図



第 14 図



第 15 図

266 層



267 層



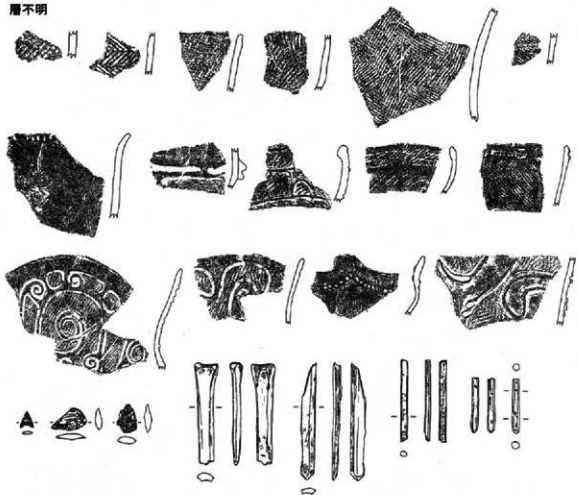
268 層



大木 10 攪乱層



層不明



第 16 図

Ⅲ 出土遺物

出土遺物には、土器・土製品・石器・骨角器・動物遺存体がある。土器・土製品・石器については、「中沢浜貝塚1997」において報告済みであるので、ここでは、骨角器・動物遺存体について触れる。

1 骨角器（第17～26図・第2表）

骨角器は、釣針28点（未製品含む）骨筥8点、骨針9点、刺突具6点、装身具8点、棒状角器4点、貝製品11点、器種不明8点の計87点が出土している。以下その概要について触れる。

i. 釣針（第17～19図28）

出土した釣針はすべて鹿角製の単式釣針である。軸頂部・針先部を欠損するものが20点と多い。形状の判別できたものは、無鐵釣針4点（第17図1～4）・内鐵釣針6点（第17図5～10）・鏑形釣針2点（第19図27～28）である。また、軸頂部の形状が鳥の口形を呈するいわゆる「鳥口形」のもの（第18図19～20）が、2点出土している。鏑形釣針は長さ57.2mmを測る大型のものが出土している。

ii. 骨筥（第19図29～第21図38）

8点が出土している。材質はシカの中手足骨2点、中足骨4点、中手・中足骨であるが判別不能なもの1点、脛骨1点である。原材である中手・中足骨の分割方法が判別できるものは5点で、縦割4点、横割1点である。4分割は出土していない。

iii. 骨針（第21図39～45）

9点出土している。先端部のみ残存するもの（第21図39～42）、基部に穿孔を有するもの（第21図43、44）がある。材質はシカの四肢骨と思われるもの、鹿角製のものがある。

iv. 刺突具（第21図46～第22図51）

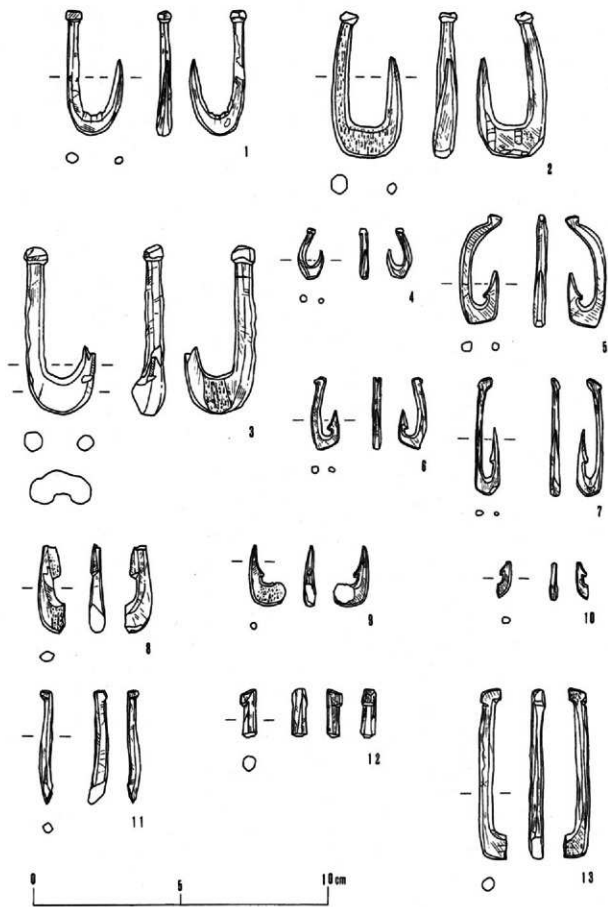
6点出土している。シカの中手・中足骨製5点、鹿角製1点である。先端部は鋭利な状態のものが多く、49は基部が欠損するが穿孔の痕跡が見られる。51は鹿角製で横位の擦痕が目立ち、受熱により黒色を呈する。

v. 装身具（第22図52～第23図58、第24図71）

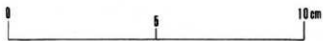
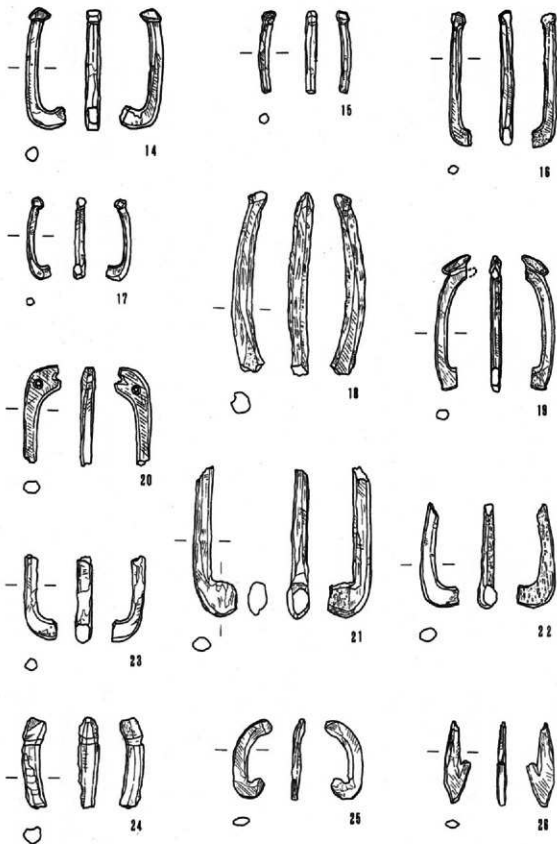
垂飾品8点、ヘアピン1点が出土している。52はイノシシ（オス）の右上顎犬歯の基部に穿孔を有するものである。53はイノシシ（オス）右下顎犬歯の舌側エナメル質を板状に加工し、基部に穿孔を有する。54はイヌの左上顎犬歯の歯根部に穿孔を施したものである。55はシカの四肢骨を板状に加工し穿孔を施したものである。56は鹿角を板状に加工し穿孔を施したものである。57はヘアピンである。基部が一部欠損するもののほぼ完形である。基部には3つの穿孔を有する。58は、鳥骨を長さ17.5mmに切断し、全体に線刻を施した管状垂飾品である。第24図71はベンケイガイ製の貝輪である。

第2表 出土骨角器分析表

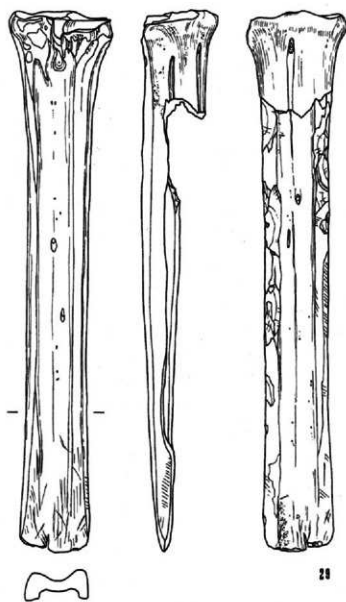
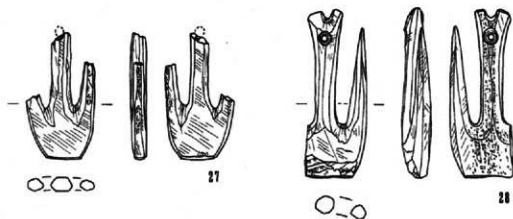
No.	器種	材質	層位	長さ(mm)	幅(mm)	重量(g)	備考	図版	写真	登録番号
1	釣針(無銘)	鹿角	215	42.2	19.4	1.2	完存	第17層1	写真1-1	861
2	釣針(無銘)	鹿角	21	48.2	23.5	5.9	完存	第17層2	写真1-2	837
3	釣針(無銘)	鹿角	83	56.1	23.7	3.7	針先部欠損	第17層3	写真1-3	839
4	釣針(無銘)	鹿角	妙妙	16.3	8.1	0.1	完存	第17層4	写真1-4	820
5	釣針(内蔵)	鹿角	25	36.8	13.5	0.9	完存	第17層5	写真1-5	900
6	釣針(内蔵)	鹿角	8	22.9	8.9	0.3	完存	第17層6	写真1-6	822
7	釣針(内蔵)	鹿角	妙妙	38.7	8.3	0.4	完存	第17層7	写真1-7	838
8	釣針(内蔵)	鹿角	191	28.4	9.2	0.7	針先部のみ	第17層8	写真1-8	843
9	釣針(内蔵)	鹿角	46	20.1	10.9	0.4	針先部のみ	第17層9	写真1-9	829
10	釣針(内蔵)	鹿角	52	12.8	4.1	0.1	針先部のみ	第17層10	写真1-10	819
11	釣針	鹿角	227	36.4	4.8	0.7	針先部～軸部のみ	第17層11	写真1-11	842
12	釣針	鹿角	1	1.51	5.2	0.4	軸部のみ	第17層12	写真1-12	819
13	釣針	鹿角	73	57.2	8.9	1.5	軸部～軸部のみ	第17層13	写真1-13	883
14	釣針	鹿角	妙妙	41.4	12.0	1.0	針先部欠損	第18層14	写真1-14	821
15	釣針	鹿角	49	27.7	4.9	0.3	軸部～軸部のみ	第18層15	写真1-15	913
16	釣針	鹿角	妙妙	45.2	0.7	0.7	針先部欠損	第18層16	写真1-16	896
17	釣針	鹿角	50	27.5	8.3	0.3	針先部欠損	第18層17	写真1-17	830
18	釣針	鹿角	42	51.0	11.6	2.2	軸部部～軸部のみ	第18層18	写真1-18	835
19	釣針	鹿角	20～52	45.8	8.8	0.9	軸部部(鳥口部)～軸部	第18層19	写真1-19	833
20	釣針	鹿角	122	32.4	11.9	0.6	軸部部(鳥口部)、穿孔	第18層20	写真1-20	867
21	釣針	鹿角	211	50.4	14.0	2.1	軸部～両曲部のみ	第18層21	写真1-21	816
22	釣針	鹿角	130	34.4	12.1	0.8	軸部～両曲部のみ	第18層22	写真1-22	824
23	釣針	鹿角	41	28.5	11.0	0.9	軸部～両曲部のみ	第18層23	写真1-23	826
24	釣針	鹿角	128	30.1	0.8	1.0	軸部のみ	第18層24	写真1-24	828
25	釣針未製品	鹿角	328	26.3	12.4	0.5		第18層25	写真1-25	853
26	釣針未製品	鹿角	8	27.3	8.1	0.5		第18層26	写真1-26	823
27	鋸形釣針	鹿角	83	42.8	23.1	3.0	軸部部・針先部一部欠損	第19層27	写真1-27	840
28	鋸形釣針	鹿角	46～55	57.2	20.9	6.0	右針先部欠損	第19層28	写真1-28	852
29	骨匙	猪古巾手骨	7	181.4	34.1	44.0	近位端残、後面利用	第20層29	写真1-29	860
30	骨匙	猪古巾手骨	不明	88.8	21.1	12.5	近位端残、内側面利用	第20層30	写真1-30	886
31	骨匙	猪古巾手骨	妙妙	109.6	20.4	12.2	近位端残、内側面利用	第20層31	写真1-31	899
32	骨匙	猪古巾手骨	妙妙	100.7	14.8	11.9	内側面利用	第20層32	写真1-32	884
33	骨匙	猪古巾手骨	不明	104.7	13.3	8.6		第20層33	写真1-33	885
34	骨匙	猪古巾手骨	15	94.3	22.4	19.2	近位端残、内側面利用	第20層34	写真1-34	861
35	骨匙	猪古巾・中足	46	39.4	6.2	1.0		第20層35	写真1-35	847
36	骨匙	猪古巾	16	180.9	4.3	35.1	近位端残、若歌	第21層36	写真1-36	849
37	骨針	不明	57.4	4.7	1.2			第21層37	写真1-37	856
38	骨針	猪?四肢骨	46	39.2	7.0	1.4		第21層38	写真1-38	881
39	骨針	猪?四肢骨	妙妙	64.5	6.8	1.3		第21層39	写真1-39	882
40	骨針	猪?四肢骨	8	34.3	5.5	0.6		第21層40	写真1-40	818
41	骨針	猪?四肢骨	3	37.3	4.8	0.4		第21層41	写真1-41	817
42	骨針	猪?四肢骨	3	38.8	6.7	0.4		第21層42	写真1-42	858
43	骨針	猪?四肢骨	妙妙	18.2	4.2	0.2	基部に穿孔	第21層43	写真1-43	898
44	骨針?	猪?四肢骨	17	13.5	8.7	0.2	基部に穿孔	第21層44	写真1-44	899
45	骨針?	猪?四肢骨	52	21.3	6.4	0.3	穿孔あり	第21層45	写真1-45	917
46	刺突具	猪?手足骨	34	140.0	15.1	6.5	完存、後面利用、若歌	第22層46	写真1-46	855
47	刺突具	猪?手足骨	62	15.2	6.7	0.5	完存、外側面利用	第22層47	写真1-47	848
48	刺突具	猪?手足骨?	157	118.2	10.9	7.3	基部欠損	第22層48	写真1-48	844
49	刺突具	猪?中手・中足	83	72.4	9.8	2.7	穿孔あり	第22層49	写真1-49	888
50	刺突具	猪?中手・中足	妙妙	62.3	9.6	2.0	基部欠損	第22層50	写真1-50	887
51	刺突具	不明	12	47.1	7.6	1.3	受熱により黒色化	第22層51	写真1-51	857
52	垂飾品	イルゴ生漆球	64	58.1	25.8	17.7	完存	第23層52	写真1-52	863
53	垂飾品	イルゴ生漆球	107	51.8	15.2	1.3	完存	第23層53	写真1-53	826
54	垂飾品	伏毛上敷大歯	128	21.2	5.3	0.3	完存	第23層54	写真1-54	827
55	垂飾品	猪?四肢骨	82	40.3	10.8	1.5		第23層55	写真1-55	845
56	垂飾品	鹿角	23	44.5	32.2	6.4		第23層56	写真1-56	860
57	ヘアピン	鹿角	46	142.0	16.4	5.6	穿孔3あり	第23層57	写真1-57	862
58	骨状垂飾品	鳥骨	8	17.5	4.4	0.2	全体に線刻あり	第23層58	写真1-58	825
59	骨状垂飾品	鹿角	不明	38.0	5.5	1.0		第23層59	写真1-59	854
60	骨状角器	鹿角	211	48.3	4.2	0.6		第23層60	写真1-60	894
61	骨状角器	鹿角	32	65.8	11.8	5.4		第23層61	写真1-61	841
62	骨状角器	鹿角	36	25.7	7.8	0.7		第23層62	写真1-62	916
63	骨種不明	鹿角	妙妙	27.8	12.6	1.9		第24層63	写真1-63	891
64	骨種不明	鹿角	46	21.7	39.2	3.2		第24層64	写真1-64	836
65	骨種不明	鹿角	妙妙	50.6	14.1	5.4		第24層65	写真1-65	860
66	骨種不明	鹿角	268	52.6	28.5	7.5		第24層66	写真1-66	889
67	骨種不明	鹿角	妙妙	16.4	15.5	1.6		第24層67	写真1-67	852
68	骨種不明	鹿角	妙妙	48.2	22.1	5.4		第24層68	写真1-68	848
69	骨種不明	鹿角	46	19.2	6.8	0.2		第24層69	写真1-69	890
70	骨種不明	イルゴ生漆球	119	21.8	23.9	1.3		第24層70	写真1-70	846
71	貝製品	ベニシガイ	83	42.8	8.0	0.9		第25層71	写真1-71	865
72	貝製品	タカラガイ科	64	33.1	11.1	1.4	中背に44?の、外背部	第25層72	写真1-72	867
73	貝製品	タカラガイ科	122	39.5	15.5	4.4	内背部	第25層73	写真1-73	915
74	貝製品	ワズリガイ科	117	35.0	34.6	6.9	ウツムラサキ?、若歌	第25層74	写真1-74	866
75	貝製品	マガキ?	妙妙	48.8	38.1	17.3		第25層75	写真1-75	866
76	貝製品	種不明	妙妙	36.8	10.9	3.4		第25層76	写真1-76	864
77	貝製品	ベニシ	180	166.6	118.2	390.0	穿孔あり	第25層77	写真1-77	877
78	貝製品	ベニシ	46～55	168.2	131.5	550.0	穿孔あり	第25層78	写真1-78	877
79	貝製品	ツメタガイ	16	41.4	37.8	23.2	ホヤツメタ、穿孔あり	第25層79	写真1-79	869
80	貝製品	ツメタガイ	18	34.7	34.8	15.2	ホヤツメタ、穿孔あり	第25層80	写真1-80	872
81	貝製品	ツメタガイ	18	32.8	35.2	15.2	ホヤツメタ、穿孔あり	第25層81	写真1-81	873
82	貝製品	ツメタガイ	18	29.7	30.8	12.2	ホヤツメタ、穿孔あり	第25層82	写真1-82	874
83	貝製品	ツメタガイ	11	43.9	41.0	22.8	ホヤツメタ、穿孔あり	第25層83	写真1-83	875
84	貝製品	ツメタガイ	18	31.6	32.0	11.8	ホヤツメタ、穿孔あり	第25層84	写真1-84	876
85	貝製品	ツメタガイ	26	36.4	37.2	17.5	ホヤツメタ、穿孔あり	第25層85	写真1-85	888
86	貝製品	ツメタガイ	26	25.8	28.5	10.5	ホヤツメタ、穿孔あり	第25層86	写真1-86	870
87	貝製品	ツメタガイ	112	41.7	40.3	25.9	ホヤツメタ、穿孔あり	第25層87	写真1-87	871



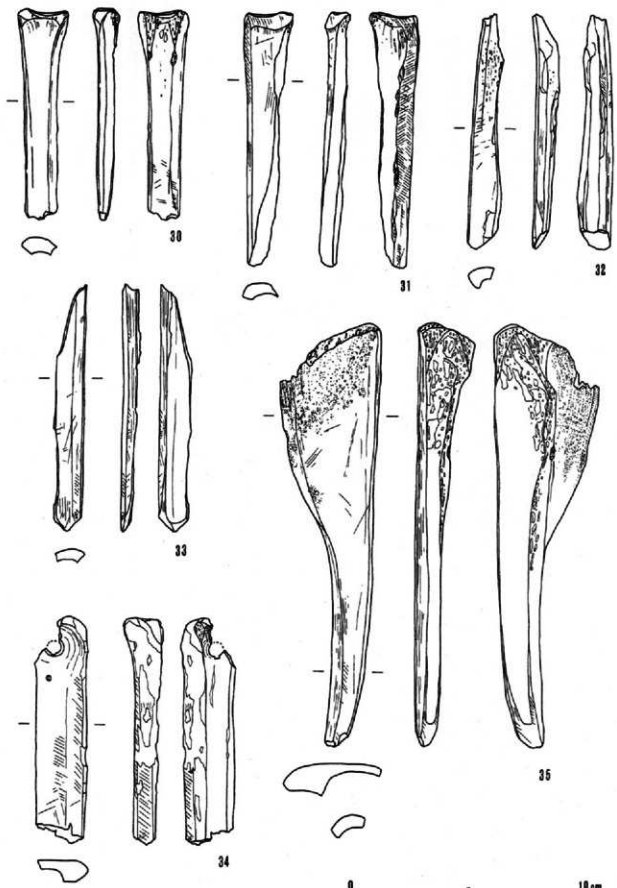
第 17 图



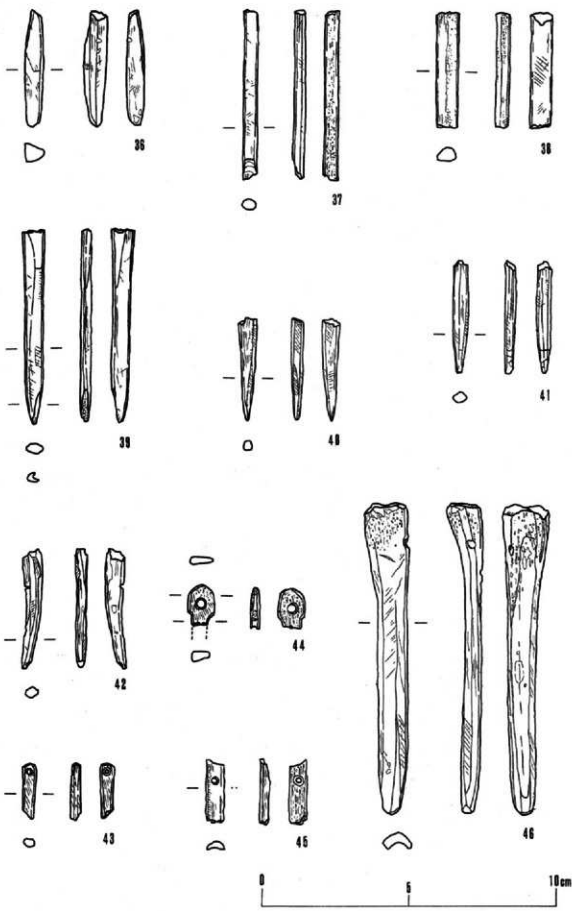
第 18 图



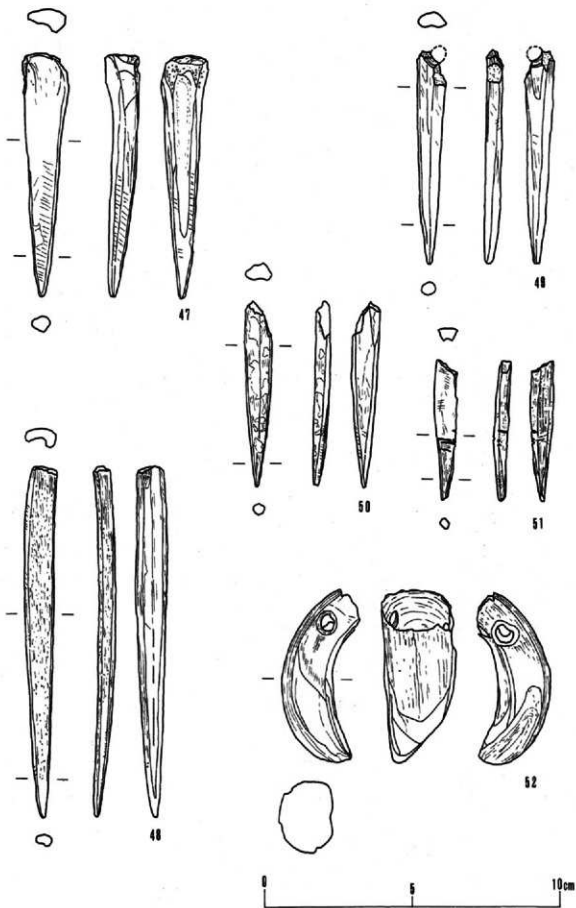
第 19 图



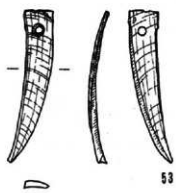
第 20 图



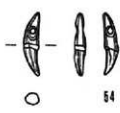
第 21 图



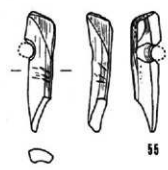
第 22 图



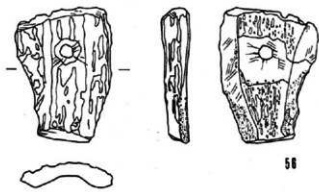
53



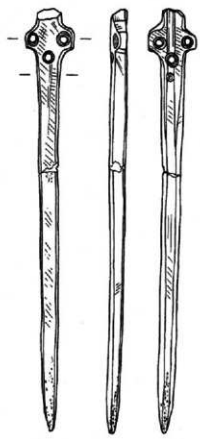
54



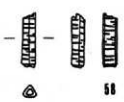
55



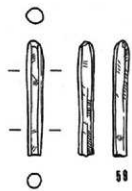
56



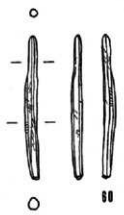
57



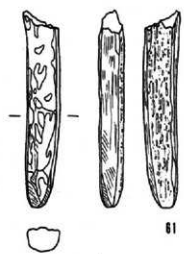
58



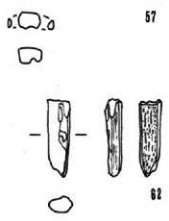
59



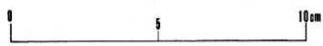
60



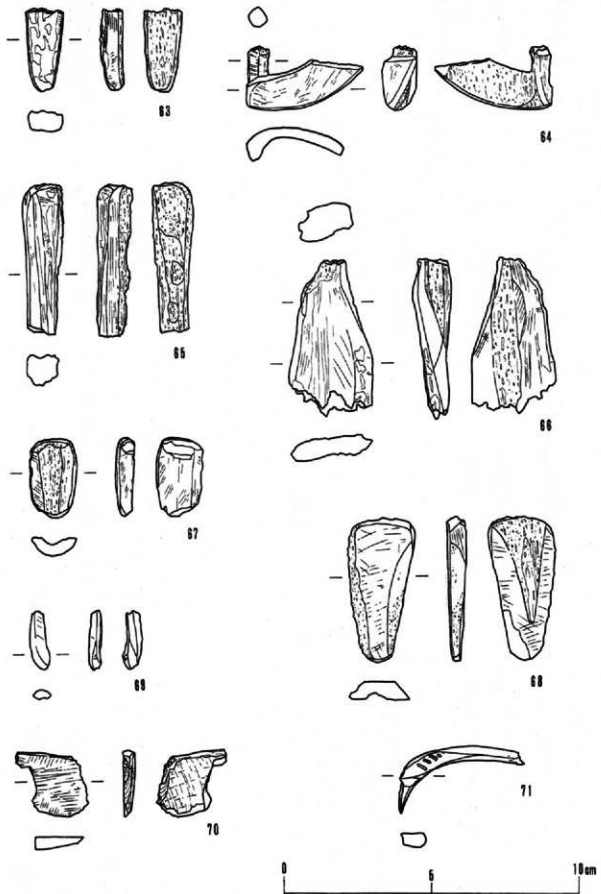
61



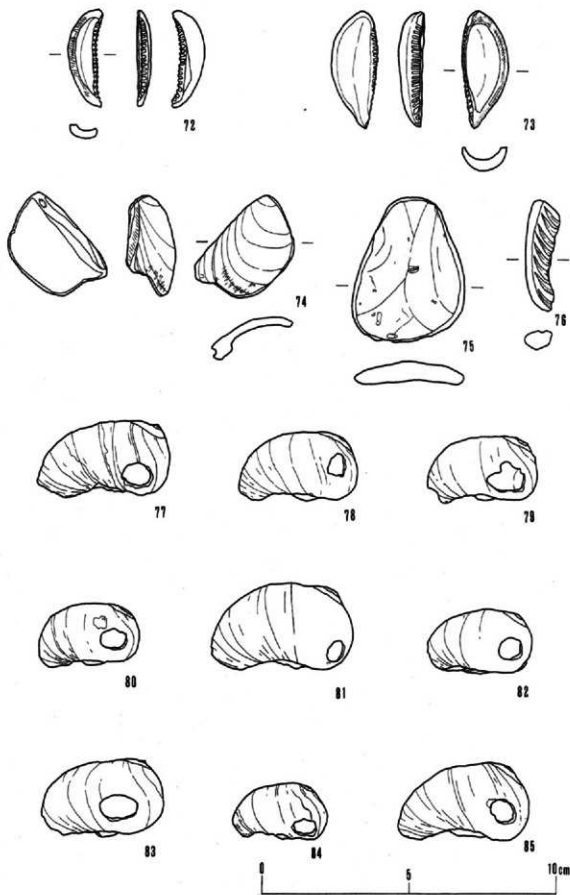
62



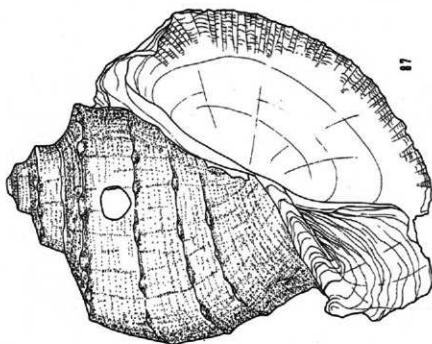
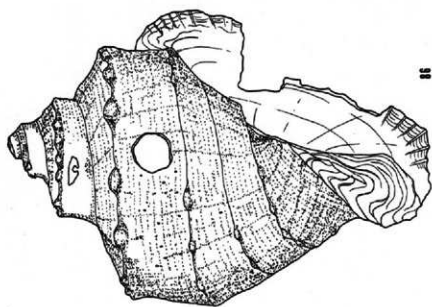
第 23 图



第 24 图



第 25 图



第 26 图

vi. 棒状角器 (第23図59~62)

4点出土している。鹿角の自然面及び海綿質が残るもの(61、62)、全体を研磨しているもの(59、60)がある。

vii. 貝製品 (第25図72~第26図87)

貝輪を除く貝製品を一括した。71、72はタカラガイ科(ハナマルユキダカラ?)4分割したものである。77~85はツメタガイ(ホソヤツメタ)に穿孔したものである。すべて同様の位置に穿孔が見られる。

viii. 器種不明 (第24図63~70)

器種不明を一括した。70がイノシシ右下顎犬歯製で、63~69はすべて鹿角製である。

2 動物遺存体

(1) 分析資料

1997年の中沢浜貝塚で検出された堆積層は、縄文時代中期末の純貝層などを含め273層に分層された。これらの内、混貝土層・混土貝層・純貝層などは、層毎に土嚢袋に入れすべて持ち帰り、重量、体積を計量し、5mm・1mmのメッシュを使用し水洗選別を行った。

ここで扱った資料は、貝層の主体である縄文時代中期末の純貝層23層(25層・26層・28層・29層・30層・31層・32層・33層・34層・35層・36層・41層・42層・45層・48層・49層・50層・52層・53層・107層・109層・113層・115層)から抽出した動物遺存体である。

(2) 分析方法

各純貝層から抽出された動物遺存体は、貝類・魚類・哺乳類など動物ごとに選別を行い、それぞれの動物の同定基準を満たす資料について同定を行った。各動物の同定基準は軟体動物多板綱は、頭板・中間板・尾板のそれぞれ1/2以上が残存するもの。腹足綱は原則として殻頂部が残存するもの。種によっては殻口部が残存するもの。二枚貝綱は原則として殻頂部が残存するもの。魚類・鳥類・哺乳類については東北歴史資料館「里浜貝塚V・VI」(1986・1987)を参考にした。このほか両生類・爬虫類もこれに準じた同定基準とした。種同定については、陸前高田市立博物館所蔵現生骨格標本及び現生貝類標本を用い、一部の貝類については、海と貝のミュージアム収蔵現生貝類標本を用いた。また、一部の貝類の種同定に際しては、軟体動物学研究所小菅貞男氏、海と貝のミュージアム名誉館長戸羽親雄氏両名のご指導を得た。最小個体数の算定には多板綱については、各層毎の最も出土数の多い部位をもって最小個体数としたが、魚類の腹椎・尾椎などについては、出土数を平均数で除した数を最小個体数とした。また、同一骨が割れたものと判断される資料については、重複しないように留意した。さらに、同一部位で左右のある資料において、明らかに大きさの異なるものについては、別個体として捉え最小個体数に加えた。

(3) 出土動物遺存体の概要

今回の発掘調査で出土した動物遺存体で種同定されたのは、多板綱4科4種・腹足綱26科53種・二枚貝綱20科34種・多毛綱2科2種・甲殻綱5科6種・腕足綱1科1種・ウニ綱1科3種・軟骨魚綱6科7種・硬骨魚綱16科23種・両生綱1科1種・爬虫綱2科3種・鳥綱4科4種・哺乳綱8科10種の合計96科151種である。以下その概要について触れる。

中沢浜貝塚出土動物遺存体種名一覧

軟体動物門 MOLLUSCA
 多巻貝綱 POLYPLACOPHORA
 新ヒザラガイ目 NEULORIGATA
 ウスヒザラガイ科 *Ichinochitonidae*
 ウスヒザラガイ科の一種 *Ichinochitonidae* gen. et sp. indet.
 ヒタヒザラガイ科 *Mopaliidae*
 ヒタヒザラガイ科の一種 *Mopaliidae* gen. et sp. indet.
 ケダヒザラガイ科 *Chitonidae*
 ケダヒザラガイ科の一種 *Chitonidae* gen. et sp. indet.
 ケハダヒザラガイ科 *Acanthochitonidae*
 ケハダヒザラガイ科の一種 *Acanthochitonidae* gen. et sp. indet.

腹足綱 GASTROPODA
 カサガイ目 PATELLOGASTROPODA
 ヨメノカサガイ科 *Nacellidae*
 ヨメノカサガイ *Nacella grata* (Gould)
 ベノカサガイ科 *Lottidae*
 ヨメノカサガイ科の一種 *Lottidae* gen. et sp. indet.
 ヨメノカサガイ *Nivoseuctus pallida* (Gould)
 ヒメユコサガイ(ツボミガイ型) *Patelloida pygmaea* form *conulus* (Dunker)
 カモガイ *Lottia dorsuosa* (Gould)

古腹足目 VELIGASTROPODA
 ミミガイ科 *Haliotidae*
 エノアワビ *Haliotis (Nodolites) discus hanae* Ito
 スカシガイ科 *Flourellidae*
 ササアワビ *Tasipinna (Saxidomina) gigas* (v. Martens)
 ニシキウズガイ科 *Trochidae*
 ニシキウズガイ科の一種 *Trochidae* gen. et sp. indet.
 カガシガイ *Chlorostoma hutchini* Tapparo-Cantefi
 コガシガイ科 *Cogasteridae*
 コガシガイ *Cogaster rubicus* (Gmelin)
 イシダマ *Mouzostoma labio* form *confus* Tapparo-Cantefi
 クロツクガイ *Monodonta neritoides* (Philippi)
 エムシダマ *Catharidus jessoensis* (Schrenck)
 エムシダマ *Calliostoma unicus* (Dunker)
 ニシキエビス *Calliostoma multiformis* (Sowerby II)
 キヤゴ *Limonax costatum* (Valenciennes)
 リュウケテン科 *Turbinidae*
 ツルギ *Turbo (Lacazei) cornatus cornensis* (Recluz)
 サンショウガイ *Homalopus oceanarum* (Gould)
 ヤマザンショウ *Homalopus sangarene* (Schrenck)
 ペニガイ科 *Tricolidae*
 ユルノカサガイ *Etruria trisis* (Pilsbry)

アマオホネガイ目 NERITIMORPHA
 アマオホネガイ科 *Neritidae*
 ニシキアマオホネ *Nerita (Littorina) polita* Linnaeus

笠貝目 BRISGOPODA
 ウミナナ科 *Batillariidae*
 ウミナナ *Batillaria multiformis* (Lischke)
 タウウミナナ *Batillaria cumingi* (Crosse)
 タウミナナ *Littorinidae*
 モロハマキビ *Lacuna (Lacuna) carolinæ* (A. Adams)
 ナイロハマキビ *Lacuna (Epheria) turris* (A. Adams)
 コダガカネエ *Lacuna (Epheria) decorata* (A. Adams)
 アシラケタマキ *Littorina radiata* (Sowerby in Eydoux & Sowerby)
 タマキ *Littorina (Littorina) brevicula* (Philippi)
 コダガカネ *Littorina (Neritina) shikana* (Philippi)
 ムカゲガイ科 *Vermetidae*
 オサヘビガイ *Serpulorbis imbricatus* (Dunker)
 タマガイ科 *Naticidae*
 ツメタガイ *Glossaulax didyma* (Roding)
 エノタマガイ *Cryptostoma andoi* (Nomura)
 フジガイ科 *Ranellidae*
 アキボラ *Fusitriton oryomenis* (Redfield)

異舌目 PLENIOGLOSSA
 ミツクサキリオレ科 *Triphoridae*
 ミツクサキリオレ *Bouchetripoda cf. otomensis* (Yokoyama)
 イトカケガイ科 *Epitonidae*
 ヒメシシガイ *Epitonium (Nididicula) japonicum* (Sowerby)

新腹足目 NEOGASTROPODA
 ヒレガイ科 *Cerastostoma burnetti* (Adams & Reeve in Reeve)
 オウウウルク *Cerastostoma inornatum* (Recluz)
 ナギミボラ *Nacella lima* (Gmelin)
 レンシガイ *Thais (Retusa) bromi* (Dunker)
 イボシ *Thais (reitha) clavigera* (Kuster)
 アカニシ *Purpura persica* (Linnaeus)
 フトコロガイ科 *Columbellidae*
 フトコロガイ科の一種 *Columbellidae* gen. et sp. indet.
 コウダカマツムシ *Mitrella burghardi* (Dunker)
 ムシロガイ科 *Nassariidae*
 ヒメムシロ *Retinussa multigranosa* (Dunker)
 クロムシロ *Retinussa foveolata* (Dunker)
 エノバイ科 *Buccinidae*
 ヒメエノボラ *Neptunea (Barbicina) arthetica* (Bernard)
 ミガキボラ *Kellia brevifera* Kuroda
 エノボラ *Scutis modesta* (Gould)

異足目 HETEROSTROPHA
 トウガタガイ科 *Pyramidellidae*
 トウガタガイ科の一種 *Pyramidellidae* gen. et sp. indet.

【陸産貝類】
 柄貝目 STYLOMATOPHORA
 ヤマボタル科 *Coelocypidae*
 ヤマボタル *Coelocypa fabrica* (Müller)
 キセルガイ科 *Clausiliidae*
 キセルガイ科の一種 *Clausiliidae* gen. et sp. indet.
 オカクサキレガイ科 *Subulinidae*
 キノオカクサキレガイ *Altopa gracile* (Hutton)

オカクサキレガイ *Altopa brevicipia* (Pilsbry & Hirase)
 パウワマイマイ科 *Dicidae*
 パウワマイマイ *Diculus pauper* (Gould)
 コハガイ科 *Zenaididae*
 オオコハガイ *Zenaidella yessoensis* (Reinhardt)
 ベッコウマイマイ科 *Helicostomatidae*
 ベッコウマイマイ科の一種 *Helicostomatidae* gen. et sp. indet.

二枚貝綱 BIVALVIA
 フネガイ目 ARGOIDA
 フネガイ科 *Argoidea*
 アズマフネガイ *Arca boucardi* Jousseaume
 シロコエガイ科 *Paralidodontidae*
 シロコエガイ *Pterisus dani* (Smith)
 タマガイ科 *Glycymerididae*
 タマガイ *Glycymeris (Veleterca) vertis* (Dunker)
 イガイ目 MYTILOIDA
 イガイ科 *Mytilidae*
 イガイ科の一種 *Mytilidae* gen. et sp. indet.
 イガイ *Mytilus cornutus* Gould
 ムラサキイソコ *Septifer vigatus* (Wiegmann)

カキ目 OSTREOIDA
 イタガイ科 *Pectinidae*
 アズマニシキ *Chlamys (Arumapeperon) ferrei nipponensis* (Kuroda)
 ニタチガイ *Patinocypes yessoensis* (Jay)
 イタガイ科 *Ostreidae*
 カサキ *Crasostrea gigas* (Thunberg)

イシガイ目 UNIONOIDA
 カワシシユガイ科 *Margaritiferidae*
 カワシシユガイ *Margaritifera (Daburina) laevis* (Hass)
 マルノガイ目 VENEROIDA
 ツギガイ科 *Lucidae*
 ヴェノハナガイ *Pillucina pisidiana* (Dunker)
 イセシロガイ *Anodonta steersiana* Oyama
 チリハナガイ科 *Lausidae*
 チリハナガイ *Lausa undulata* (Gould)
 キクザルガイ科 *Chamidae*
 キクザル *Chama japonica* Lamarck

ザルガイ科 *Cardidae*
 エノシシカゲガイ *Clinocardium californiense* (Deshays)
 ヨウガイ科 *Macridae*
 フトガイ *Pseudocardium sachalinense* (Schrenck)
 ミズカキ *Tresus laevis* Kuroda & Habe in Habe & Ito
 テトリマスオ科 *Mesodematidae*
 クチバガイ *Cocclis chinensis* Deshayes

ニッコウガイ科 *Tellinidae*
 ニッコウガイ科の一種 *Tellinidae* gen. et sp. indet.
 ヒメシラトリ *Macoma incongrua* (Martens)
 シラトリモドキ *Heterocomma* Ito (Hanley)
 シヤサザナミ科 *Psammobidae*
 シヤサザナミ *Natalia japonica* (Reeve)
 シジミ科 *Corbiculidae*
 ヤマトシジミ *Corbicula japonica* Prime
 マリスダシジミ科 *Veneridae*
 マリスダシジミ *Callistaca adamsi* (Reeve)
 オノササリ *Protothaca jessoensis* (Lischke)
 ニノササリ *Protothaca sugiyata* (Sowerby)
 アサリ *Ruditapes philippinarum* (Adams & Reeve)
 コタマガイ *Gamphusia melanocephala* Römer
 マツカセガイ *Irus satia* (Deshays)
 ウムラサキ *Saxidomus purpurata* (Sowerby)
 ハバグ *Meretrix laevis* (Roding)

オオノガイ目 VIOIDA
 オオノガイ科 *Myidae*
 オオノガイ *Afa (Aranyoa) arenaria oonagai* Makiyama
 クチバニガイ科 *Corbulidae*
 クチバニガイ *Anticorbula senensis* (Gould)
 キヌマトイガイ科 *Hiatellidae*
 キヌマトイガイ *Hiatella orientalis* (Yokoyama)

環形動物門 ANELIDA
 多巻貝綱 POLYCHAETA
 定足目 SEDENTARIA
 カンザシゴカイ科 *Serpulidae*
 カンザシゴカイ科の一種 *Serpulidae* gen. et sp. indet.
 ウズマキゴカイ科 *Syllariidae*
 ウズマキゴカイ *Desiopira formosina* (Bosh)

甲殻動物門 ARTHROPODA
 甲殻綱 CRUSTACEA
 壳綱目 THORACICA
 ミヨウガイ科 *Scalpellidae*
 カサミヨウガイ *Capulus milida* (Linnaeus)
 クロフジボ科 *Trochilidae*
 クロフジツボ *Tetractis japonica* Pilsbry
 ムカシフジツボ科 *Archaeobalanidae*
 ムカシフジツボ *Semibalanus cariosus* (Pallas)
 フジツボ科 *Balanidae*
 アカフジツボ *Megabalanus rosii* (Pilsbry)
 オオアカフジツボ *Balanus (Megabalanus) rocamo* Pilsbry

十脚目 DECAPODA
 イワガニ科 *Grapsidae*
 イワガニ科の一種 *Grapsidae* gen. et sp. indet.
 陸産動物門 TENTACULATA
 腕足綱 BRACHIOPODA
 腕足目 TELEBRETILOIDA
 グリナ科 *Dalmanidae*
 タケスシボオズキイ *Cyrtolites grayi* (Davidson)

棘皮動物門 ECHINODERMATA

ウニ綱 ECHINOIDEA

ホンウニ目 ECHINOIDA

- オオバワンウニ科 Strongylocentrotidae
- オオバワンウニ科の一種 Strongylocentrotidae gen.et.sp.indet.
- エノバワンウニ科 Strongylocentrotus intermedius (A.Agasiz)
- キタムツサキウニ科 Strongylocentrotus madseni (A.Adams)

脊椎動物門 VERTEBRATA

軟骨魚綱 CHONDRICHTHYES

板鰐綱 鱧 ASPIROBRANCHII

- ネズミザメ目 LAMNIFORMES
- ネズミザメ科 Lamnidae
- ネズミザメ *Lamna ditropis* Hubbs et Follett
- アザサメ *Isurus paucus* Rafinesque

メジロザメ目 CARHARINIFORMES

- ドクザメ科 Triakidae
- メジロザメ属の一種 *Megachasma* sp.indet.
- メジロザメ科 Carcharidae
- ヨシキリザメ属の一種 *Pronotaxus* sp.indet

ツノザメ目 SQUALIFORMES

- ツノザメ科 Squalidae
- ツノザメ科の一種 Squalidae gen.et.sp.indet.
- カサザメ目 SQUATINIFORMES
- カサザメ科 Squatinidae

エイ目 RAJIFORMES

- エイ目 Rajiformes fam.indet.

硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

ウナギ目 ANGUILLIFORMES

- アナゴ科 Congridae
- アナゴ科の一種 Congridae gen.et.sp.indet.
- アサナゴ *Conger myriaster* (Brevoort)

ニシン目 CLUPEIFORMES

- ニシン科 Clupeidae
- マイワシ *Sardinops melanostictus* (Temminck et Schlegel)

コイ目 CYPRINIFORMES

- コイ科 Cyprinidae
- ウグイ属の一種 *Trilogodon* sp.indet.

サケ目 SALMONIFORMES

- サケ科 Salmonidae
- サケ科の一種 *Goriscynchus* sp.indet.
- カサゴ目 SCORPAENIFORMES
- フサカサゴ科 Scorpaenidae
- フサカサゴ科の一種 Scorpaenidae gen.et.sp.indet.
- アサメ科 Hexagrammidae
- アサメ属の一種 *Hexagrammos* sp.indet.

スズキ目 PERCIFORMES

- スズキ科 Percichthyidae
- スズキ属の一種 *Lateolabrax* sp.indet.
- アジ科 Carangidae
- アジ属の一種 *Seriola* sp.indet.
- マサジ *Trachurus japonicus* (Temminck et Schlegel)
- タイ科 Sparidae
- タイ科の一種 Sparidae gen.et.sp.indet.
- マダイ *Pagrus major* (Temminck et Schlegel)
- ウミタナゴ科 Embiotocidae
- ウミタナゴ科の一種 Embiotocidae gen.et.sp.indet.
- ベラ科 Labridae
- ベラ科の一種 Labridae gen.et.sp.indet.
- ニシキギンギ科 Pholididae
- ニシキギンギ科の一種 Pholididae gen.et.sp.indet.

サハコ目 SCOMBRIFORMES

- サハコ科 Scombridae
- サハコ属の一種 *Scomber* sp.indet.
- ソウダガツオ属の一種 *Axaxis* sp.indet.
- カワオ *Katsuwonus pelamis* (Linnaeus)
- マグロ属の一種 *Thunnus* sp.indet.

カレイ目 PLEURONECTIFORMES

- ヒラメ科 Parichthyidae
- ヒラメ *Parichthys obtusus* (Temminck et Schlegel)
- カレイ科 Pleuronectidae
- カレイ科の一種 Pleuronectidae gen.et.sp.indet.
- フグ目 TETRAODONIFORMES
- カワハギ科 Monacanthidae
- カワハギ科の一種 Monacanthidae gen.et.sp.indet.
- ウマヅラハギ *Thamnaconus modestus* (Günther)

両生綱 AMPHIBIA

カエル目 SALIENTIA

- ヒキガエル科 Bufonidae
- ヒキガエル *Bufo bufo japonicus* Schlegel

爬虫綱 REPTILIA

カメ目 TESTUDINATA

- カメ目の一種 Testudinata fam.indet.
- トカゲ目 SQUAMATA
- ヘビ科 Colubridae
- ヘビ科の一種 Colubridae gen.et.sp.indet.
- ユウダモ科の一種 Natricinae gen.et.sp.indet.

鳥綱 AVES

スズメ目 PASSERIFORMES

- カラス科 Corvidae
- カラス科の一種 Corvidae gen.et.sp.indet.
- ガンカモ目 ANSERIFORMES
- ガンカモ科 Anasidae
- ガンカモ科の一種 Anasidae gen.et.sp.indet.
- ミズナギドリ目 PROCELLARIIFORMES

ミズナギドリ科 Procellariidae

ミズナギドリ科の一種 Procellariidae gen.et.sp.indet.

キジ目 GALLIFORMES

- キジ科 Phasianidae
- キジ科の一種 Phasianidae gen.et.sp.indet.

哺乳綱 MAMMALIA

食虫目 INSECTIVORA

- モグラ科 Talpidae
- モグラ科の一種 Talpidae gen.et.sp.indet.

兎目 LAGOMORPHA

- ウサギ科 Leporidae
- ノウサギ *Lepus brachyurus* Temminck

齧歯目 RODENTIA

- ネズミ科 Muridae
- ネズミ科の一種 Muridae gen.et.sp.indet.
- ネズミ亜科 Murinae
- ネズミ亜科の一種 Murinae gen.et.sp.indet.
- ハタネズミ亜科 Arvicolinae
- ハタネズミ亜科の一種 Arvicolinae gen.et.sp.indet.

食肉目 CARNIVORA

- イヌ科 Canidae
- クヌギ? *Aycteres procyonoides* (Gray)
- イタチ科 Mustelidae
- カワウソ? *Lutra lutra* (Linnaeus)
- アシカ亜目 PINNIPEDIA
- アシカ亜目の一種 Pinnipedia fam.indet.

偶蹄目 ARTIODACTYLA

- イノシシ科 Suidae
- イノシシ *Sus scrofa* Linnaeus
- シカ科 Cervidae
- ニホンジカ *Cervus nippon* Temminck

*種名の記載、配列にあたっては、以下の図説を参考とした。
 岡田 暲 (1965) 新日本動物図鑑上巻、北海道
 岡田 暲 (1965) 新日本動物図鑑中巻、北海道
 岡田 暲 (1965) 新日本動物図鑑下巻、北海道
 東 正雄 (1982) 原色日本陸産鳥類図説、保育社
 肥後・佐藤 (1993) 日本及び周辺地域産軟体動物総目録、エル貝類出版局
 中村龍次 (1993) 日本産魚類図説—全巻の訂定—、東海大学出版会
 中村・上野 (1963) 原色日本両生爬虫類図説、保育社
 西村三郎 (1992) 原色図説日本海産動物図説 [1]
 西村三郎 (1995) 原色図説日本海産動物図説 [2]
 阿部 永 (1995) 日本の鳥類図説、東海大学出版会
 奥谷善司 (2000) 日本近海産鳥類図説、東海大学出版会

A. 軟体動物

軟体動物は多板綱4種、腹足綱55種、二枚貝綱33種の計92種が出土している。このうち食用にはされないと考えられる陸産・海産の微小巻貝を除くと、それぞれ4種、30種、27種である。これらは、ほとんどが海産種であり、食用となったものと考えられる。全体として出土数の多い種は、ムラサキインコ30,708 (55.82%)、クボガイ8,187 (14.88%)で、この2種で全体の70%以上を占める。これにイガイ3,202 (5.82%)、アサリ2,126 (3.86%)、タマキビ1,963 (3.57%)の3種を加えると80%以上を占めることになる。このほか個体数が1,000を越える種としては、バツラマイマイ2,591 (4.71%)、ユキノカサガイ科の一種1,434 (2.61%)があるが、この2種はいずれも微小な個体であり、食用とはなりえない。したがって、種類数は多いが、食用となる種を考えた場合その組成は単純なものとなる。以下、各軟体動物について触れる。

1. 多板綱 (第5表)

ウスヒザラガイ科の一種

28・29・30・31・48・52層から出土している。出土数は頭板2、中間板14で最小個体数は6と少ない。三陸沿岸ではエゾヤスリヒザラガイなど10種が生息している。

ヒゲヒザラガイ科の一種

25・33・115層から出土している。出土数は頭板2、中間板7で最小個体数は3個体と多板綱中最も少ない。三陸沿岸ではエゾババガセなど6種が生息している。

クサズリガイ科の一種

25・29・30・45・50・52・109・113・115層から出土している。出土数は頭板5、中間板38で最小個体数12である。三陸沿岸ではクサズリガイ・ヒザラガイが生息しており、本資料は殻板の特徴などからヒザラガイと思われる。

ケハダヒザラガイ科の一種

多板綱中最も出土数が多く、26・33・41・53・107層を除くすべての層から出土している。出土数は頭板2、中間板92、尾板1で最小個体数は25である出土している。三陸沿岸ではケハダヒザラガイなど3種が生息している。

多板綱で最も個体数の多い種は、ケハダヒザラガイ科の一種で、最小個体数25個体を数える。ケハダヒザラガイ科の一種を除く3種は頭板、中間板が出土しており、尾板の出土は見られない。種の特定までは至らなかったが、いずれの種も中沢浜貝塚周辺の岩礁部の潮間帯から潮下帯に見られる種と思われる。これらは、殻板を外し肉帯を食用にしたものと思われ、岩礁に付着している種がほとんどであることから、他の貝類とともに意識的に採集された可能性が高い。しかし、本貝塚の主体貝であるムラサキインコの殻上に付着している場合や二枚貝床中にも見られる場合があり、ムラサキインコを岩礁部からブロックで外した際に無意識的に採集されている可能性も考えられる。

2. 腹足綱 (第3表)

ベッコウガサ

48層より1点出土しているのみである。三陸沿岸一帯では、潮上帯から潮間帯中部の岩礁に生息し、潮上帯に最も多い。

ユキノカサガイ科の一種

107層を除くすべての層から出土している。最小個体数は1,434と多く、食用とはならない陸産巻貝のバツラマイマイを除くと、貝類全体では第6位の出土数である。しかし、長径1cm以下の幼貝がほとんどであり、食用としては不適である。このようなユキノカサガイ科の幼貝は、ムラサキインコの殻上や二枚貝床中に多く見られることから、ムラサキインコのブロック中に含まれたものが無意識的に遺跡内に持ち込まれたものと思われる。

ユキノカサガイ

35・41・42・52・53・107層を除くすべての層から出土している。最小個体数は67個体である。比較的大型の個体も見られる。三陸沿岸一帯では潮間帯下部から水深20mまでの岩礁に生息し、潮間帯下部に最も多い。

コガモガイ

25・28・29・42・48・109・115層から出土している。最小個体数は13個体と少ない。いずれも小型の個体である。三陸沿岸一帯では、潮間帯の岩礁やムラサキインコの殻上に生息する。ムラサキインコの殻上に附着している個体は小型のものが多くことから、ムラサキインコに殻上に附着したまま遺跡内に持ち込まれたものと思われる。

カモガイ

26・31・33～35・45・107・113層を除くすべての層から出土している。最小個体数は67である。ユキノカサガイ同様比較的大型の個体が見られる。三陸沿岸一帯では潮上帯から潮間帯中部の岩礁に生息し、潮上帯に最も多く見られる。

エゾアワビ

45・107・109層を除くすべての層から出土している。最小個体数は290個体である。破碎が著しい個体が多く、全体的には殻長3センチ以下の幼貝がほとんどである。当地方におけるエゾアワビの養殖個体の殻長を見ると、1年目で3cm、2年目で5cmほどになる。今回出土した個体の多くは約1年目に相当するものと思われる。エゾアワビの食物は、コンブなどの褐藻植物であり、三陸地方には低潮線付近から漸深帯にかけてホソメコンブなどが見られる。したがって、今回のエゾアワビの幼貝のまとまった出土は、褐藻植物に附着した状態で遺跡内に持ち込まれた可能性が高く、褐藻植物の採集を間接的にはあるが推測させるものである。三陸沿岸一帯では、潮間帯上部から水深20mまでの岩礁に生息し、潮間帯下部に最も多く見られる。なお、クローアワビもほぼ同様の生息域であり、岩手県内では山田湾での記録がある。

サルアワビ

42層から殻長5 cmほどの小型の個体が1点出土しているのみである。三陸沿岸一帯では、潮間帯下部から水深20mの岩礁に生息し、潮間帯下部に最も多い。

ニシキウズガイ科の一種

52層を除くすべての層から出土している。最小個体数は692個体である。破砕が著しく殻頂部のみが残る個体が多く、クボガイ、コシダカガンガラ、イシダタミなどが含まれている。

クボガイ

すべての層からまとまって出土しており、最小個体数は8,187個体と腹足綱では最も出土数が多く、貝類全体ではムラサキインコに次ぐ。クボガイは当地方において一般的に「ツブ」と呼ばれ、岩礁部に見られる巻貝としては最も食されている種である。5月の大潮の時期などは、現在でも採集され塩茹でにして食されている。広田湾内の岩礁部に広く分布しているが、現在食されている時期は、春先から6月頃までで、「麦の穂が出たらツブは食わない」と伝わっている。これは、産卵期の貝類を食すと、軽い中毒症状を訴えることから伝わっているものである。したがって、産卵期が過ぎると食用可能となる。また、岩に付着する海藻や藻などを食べるため、肉食性であるレイシガイやイボニシなどのような独特の辛味がなく、大変美味である。三陸沿岸一帯では潮間帯上部から潮間帯下部までの岩礁地に生息し、潮間帯中部に最も多い。

コシダカガンガラ

34・45・53・107・109層を除くすべての層から出土している。最小個体数は68個体と少なく、最も出土数の115層でも18個体である。クボガイ同様広田湾内の岩礁部に広く分布している。コシダカガンガラは、現在行われている「ツブ採り」を見ても、クボガイに混じって採集されることが多く、個体数は多くはない。したがって、本種もクボガイの採集時に一緒にされているものと思われる。三陸沿岸一帯では潮間帯中部から水深5 mまでの岩礁地に生息し、潮間帯下部に最も多い。

イシダタミ

53層を除くすべての層から出土している。最小個体数は339個体である。本種も広田湾内の岩礁部に広く見られる種である。現在はあまり食されることはない。三陸沿岸一帯では、潮間帯上部から潮間帯下部までの岩礁や転石上に生息し、潮間帯上部に最も多い。

クロツケガイ

25・28・29・30・31・36・45・49・115層から出土している。最小個体数は14個体と少ない。三陸沿岸一帯では、潮間帯上部から潮間帯下部までの岩礁や転石上に生息し、潮間帯上部に最も多い。

エソチグサ

25・28・29・30・31・33・41・48・50・52・115層から出土している。最小個体数は27個体と少ない。三陸沿岸一帯では潮間帯の海藻上に生息する。ムラサキインコなどの二枚貝床中に見られる場合もある。小型の巻貝であり、食用には不適である。

エビスガイ

29・49層から出土している。最小個体数は3個体である。三陸沿岸一帯では潮間帯中部から水深150mまでの岩礫底に生息し、潮間帯下部に最も多い。

ニシキエビス

29・35・45層から出土している。最小個体数は3個体である。三陸沿岸一帯では潮間帯中部から水深50mまでの岩礫底に生息し、潮間帯下部に最も多い。

キサゴ

49層から2点出土しているのみである。三陸沿岸一帯では潮間帯中部から水深10m前後までの砂底に生息し、水深10m前後に最も多い。

スガイ

33・35・41・42・45・52・53・107・109層を除く、すべての層から出土している。最小個体数は73個体である。広田湾では潮間帯中部から潮間帯下部の岩礫に生息し、潮間帯中部に最も多い。

サンショウガイ

31・36・41・42・45・49・52・53・107・113層を除く、すべての層から出土している。最小個体数は20個体である。三陸沿岸一帯では潮間帯から水深60mまでの砂礫底に生息する。小型の巻貝であり、食用には不適である。

ヤマザンショウ

26・28・33・41・107・109・113層を除く、すべての層から出土している。最小個体数は47個体である。三陸沿岸一帯では、潮間帯の転石や海藻上に生息する。ムラサキインコなどの二枚貝床に見られる場合もある。小型の巻貝で食用には不適である。

コムラサキバイ

28・32・48層から出土している。最小個体数は4個体である。広田湾では潮間帯から水深50mまでの岩礫に生息する。ムラサキインコなどの二枚貝床に見られる場合もある。微小な巻貝であり、食用には不適である。

ニシキアマオブネ

115層から1点出土しているのみである。アマオブネガイ科は岩手県沿岸には分布していない。本種の同定にあたっては、軟体動物学研究所所長小菅貞男氏のご教示を得た。小菅氏によると、ニシキアマオブネの分布は、房総半島以南とのことであり搬入品の可能性が高い。加工などの痕跡は認められない。岩手県内でのアマオブネガイ科は、二戸市大向上平遺跡からの縄文時代後期初頭の埋設土器から硬玉製大珠2点とともにアマオブネガイの貝玉73点以上が出土しているのみである。

ウミニナ

28・29・30・31・115層から出土している。最小個体数は22個体である。岩手県では三陸南部

北半の内湾、潮間帯上部から潮間帯下部の泥地の干潟に生息し、潮間帯中部に最も多い。

ホソウミナ

29層から2点が出土しているのみである。岩手県では三陸南部北半の内湾、潮間帯上部から潮間帯下部の泥地の干潟に生息し、潮間帯上部～中部に最も多い。

モロハタマキビ

29・115層から出土している。最小個体数は3個体である。三陸沿岸一帯では、潮間帯の海藻上に生息する。微小な巻貝であり、食用には不適である。

チャイロタマキビ

25・28・29・32・48・115層から出土している。最小個体数は14個体である。三陸沿岸一帯では、潮間帯から水深50mまでの海藻上に生息する。微小な巻貝であり、食用には不適である。受熱により、灰色化した個体もわずかであるが見られている。ムラサキインコなどの二枚貝床に見られる場合もある。

コウダカチャイロタマキビ

32・34・48・50層から出土している。最小個体数は4個体と少ない。三陸沿岸一帯では、潮間帯から水深50mまでの海藻上に生息する。また、ムラサキインコなどの二枚貝床に見られる場合もある。微小な巻貝であり、食用には不適である。

アラレタマキビ

25・29・32・45・115層から出土している。最小個体数は6個体と少ない。三陸沿岸一帯では、高潮帯の岩礁に生息する。微小な巻貝であり、食用には不適である。

タマキビ

53層を除く、すべての層から出土している。最小個体数は1,963個体で、食用とはならない陸産巻貝のバツラマイマイを除くと貝類全体では、第5位の出土数である。三陸沿岸一帯では潮間帯上部から潮間帯下部の岩礁や転石帯に生息し、潮間帯上部に最も多い。そのため、海水に身体を入れることなく採集が可能な種である。比較的大型の個体が多く出土している。

クロタマキビ

33・53・107層を除く、すべての層から出土している。最小個体数は436個体である。三陸沿岸一帯では潮間帯上部から潮間帯下部の岩礁に生息し、潮間帯上部に最も多い。

オオヘビガイ

26・29・31・35・53・115層から出土している。最小個体数は8個体と少ない。三陸南部北半の潮間帯中部から水深10mまでの岩礁に生息し、潮間帯中部に最も多い。食用には不適のようにも思われるが、その肉は岩礁帯で採集される貝類の中でも非常に美味な種であるとされている。マガキの群棲するカキ礁中や、マガキが多く付着している岩礁の間などに多く、付着物から剥がす

のは容易ではない。

ツメタガイ

36・45・48・49・115層から出土している。最小個体数は8個体と少ない。三陸沿岸一帯では潮間帯中部から水深100mまでの細砂底に生息し、水深10m前後に最も多い。

エゾタマガイ

32・34・52層から出土している。最小個体数は3個体と少ない。三陸沿岸一帯では、水深20～90mまでの砂泥底に生息し、水深30～50mに最も多い。

アヤボラ

25・29・32層から出土している。最小個体数は3個体と少ない。いずれも幼貝である。三陸沿岸一帯では、漸深帯上部から水深400mまでの砂泥底に生息し、水深100～200mに最も多い。

ホソアラレキリオレ

45層から1点出土している。潮間帯から水深80mまでの礫間に生息する。非常に小型の巻貝であり、食用にはならない。

ヒメネジガイ

34層から1点出土している。三陸南部北半では、潮間帯の岩礁やイソギンチャクに付着して生息する。非常に小型の巻貝で食用にはならない。

ヒレガイ

26・28・29・30・33・107層を除く、すべての層から出土している。最小個体数は64個体である。三陸沿岸一帯では潮間帯中部から水深100mまでの岩礁に生息し、水深10～30mに最も多い。当地方に生息する本種を含むアツキガイ科（オオウヨウラクガイ・チヂミボラ・レイシガイ・イボニシなど）は肉食性の巻貝で、やや辛味があり、「カラツブ」と呼ばれ、クボガイらとともに食されることが多い。

オオウヨウラクガイ

33・34・35・53・107・109層を除く、すべての層から出土している。最小個体数は52個体である。三陸沿岸一帯では潮間帯中部から水深20mまでの岩礁に生息し、潮間帯下部に最も多い。

チヂミボラ

107層を除く、すべての層から出土している。最小個体数は678個体と比較的まとまって出土している。三陸沿岸一帯では潮間帯上部から水深20mまでの岩礁に生息し、潮間帯上部に最も多い。産卵期の近い6月頃には、岩の表面全体を覆うように群をつくり、クボガイよりも多く見られる場合もあり、比較的容易に採集できる種である。螺肋が強く、エゾチヂミボラに似るタイプの個体もあるが、比較的波の荒い外海に面した岩礁には、螺肋の発達する個体もあり、チヂミボラの個体変異と思われる。

レイシガイ

すべての層から出土している。最小個体数は584個体である。三陸沿岸一帯では、潮間帯上部から潮間帯下部までの岩礁に生息し、潮間帯中部に最も多い。干潮時に採集されることが多い。肉食のため、味はやや落ちる。肉はやや辛味があり、当地方では「カラツブ」と呼ばれる巻貝の一種に含まれる。

イボニシ

107層を除く、すべての層から出土している。最小個体数は436個体である。三陸沿岸一帯では、潮間帯上部から潮間帯下部までの岩礁に生息し、潮間帯中部に最も多い。レイシガイ同様肉食の貝で、味はやや落ちる。当地方では、「カラツブ」と呼ばれる巻貝の一種である。

フトコロガイ科の一種

30層から1点出土している。非常に小型の個体であり、種同定には至らなかった。本科は三陸沿岸一帯ではムギガイ・ノミナなど潮間帯の岩礁の海藻上に生息する種もある。

コウダカマツムシ

25・28・29・30・31・48・50・52・109・115層から出土している。最小個体数は27個体と少ない。三陸沿岸一帯では、潮間帯から水深20mまでの砂礫間に生息する。小型の巻貝であり、食用には不適である。

ヒメムシロ

30・31・115層から出土している。最小個体数は5個体と少ない。三陸南部北半では、潮間帯から水深20mまでの岩礫底に生息する。

クロスジムシロ

25・26・28・29・31・52・115層から出土している。最小個体数は15個体と少ない。広田湾では、潮間帯の砂泥底や岩礫底に生息する。縦筋の強く暗色のものをアオモリムシロと呼ぶが同種である。出土した個体の中には色は抜けているが、縦筋の強い個体が見られた。

ヒメエゾボラ

29層から1点出土している。小型の個体であり、幼貝と思われる。三陸沿岸一帯では、潮間帯下部から水深20mまでの岩礫底に生息し、水深10m前後に最も多い。

ミガキボラ

29・35・45層から出土している。最小個体数は3個体と少ない。いずれも小型の個体である。三陸沿岸一帯では、潮間帯下部から水深60mまでの岩礁に生息し、水深10m前後に最も多い。

エゾイソナ

30・34・36層から出土している。最小個体数は3個体と少ない。三陸南部北半では、潮下部から水深270mまでの岩礁、礫地に生息する。

トウガタガイ科の一種

25・29・30・34・45・50・115層から出土している。最小個体数は14個体である。非常に小型の巻貝で、食用にはならない。出土した個体も小型の個体であり、種同定には至らなかった。三陸沿岸一帯では、本科は71種が生息しており、砂底、砂泥底に生息する種が多い。

3. 腹足綱・陸産巻貝（第3表）

陸産巻貝で同定できたのは、6種である。出土数はバツラマイマイが最も多く、キセルガイ科の一種がこれに次ぐ、この2種で陸産巻貝の99%以上を占める。いずれも朽木や落葉下に生息する種で、周辺環境が落葉の堆積する環境であり、樹木が茂り落葉の多い場所であることを示唆している。

ヤマボタル

48・50・52・107・115層から出土している。最小個体数は12個体である。林中の下草の中などに生息する。

キセルガイ科の一種

26・53層を除く、すべての層から出土している。最小個体数は241個体である。岩手県内ではヒカリギセル・ナミギセルなど7種が生息している。いずれも樹間や落葉下に生息する種が多い。

ホソオカチョウジガイ

41層から1点のみ出土している。現在では庭園田圃の草や石の下などの開地的環境に生息する。

オカチョウジガイ

25・36・109層から出土している。最小個体数は3個体と少ない。生息域はホソオカチョウジガイと同様である。

バツラマイマイ

すべての層から出土している。陸産巻貝中最も出土数が多く、最小個体数は2,591個体である。樹幹とくに朽木に多く生息する。

オオコハクガイ

25層から2点が出土しているのみである。バツラマイマイと一緒に生息する。

ベッコウマイマイ科の一種

115層から1点が出土しているのみである。岩手県内ではムツオオキビ・ウラジロベッコウなど5種が生息している。灌木林の落葉下などに生息する。

4. 二枚貝綱 (第4表)

コベルトフネガイ

113層から左殻1点が出土しているのみである。小型の個体である。三陸沿岸一帯では潮間帯中部から水深50mまでの岩礫や岩の隙間に足糸で付着し、潮間帯下部に最も多い。

シコロエガイ

25・29・32・41・45・48・109・115層から出土している。出土数は左殻6点、右殻8点で、最小個体数は10個体である。三陸沿岸一帯では、潮間帯中部から水深100mまでの岩礫に足糸で付着し、潮間帯中部に最も多い。

タマキガイ

34・115層から出土している。出土数は左殻3点で、最小個体数は3個体である。三陸沿岸一帯では、水深3～30mまでの砂底に生息し、水深10m前後に最も多い。

イガイ

すべての層からまとまって出土している。破砕が著しく殻頂部のみ残存する。出土数は左殻3,042点、右殻3,061点で、最小個体数は3,202個体を数え、二枚貝綱ではムラサキインコに次ぐ。三陸沿岸一帯では、潮間帯上部から水深20mまでの岩礫に足糸で付着し、水深5m前後に最も多い。イガイ科のエゾイガイは、岩手県では主に宮古湾以北に生息しており、三陸沿岸では非常に稀である。また、たびたびイガイとエゾイガイとの識別点として、エゾイガイの殻頂部が鷲鼻状に曲がるという点が挙げられるが、イガイでも個体が群生している場合には、鷲鼻状に曲がる個体もあり、同定には注意を要する。したがって、識別点としては、エゾイガイの縁には細かい刻みが見られ、イガイには見られない点が挙げられる。しかし、貝塚出土資料は磨滅などにより、その刻みの有無の確認が非常に困難である。50層より受熱により1部黒色を呈する右殻1点が出土している。

ムラサキインコ

すべての層からまとまって出土しており、中沢浜貝塚出土貝類中最も出土数が多い。破砕が著しく殻頂部のみが残存する。出土数は左殻30,493点、右殻29,547点で、最小個体数は、30,581個体である。三陸沿岸一帯では、潮間帯上部から潮間帯下部の岩礫に足糸で付着し、潮間帯上部に最も多い。ムラサキインコは、小型のイガイ科の二枚貝であるが、イガイ同様美味である。

ムラサキインコは、岩礫性潮間帯群集の優占種で、二枚貝床を形成している。この二枚貝床には、殻長1cm以下のムラサキインコの幼貝やユキノカサガイ科の幼貝、微小巻貝などが多く生息しており、これらが多く出土していることなどから考えて、付着している岩とムラサキインコとの隙間に骨筥のような道具を刺し込み、ブロックで岩からはずす採集方法がとられたものと考えられる。

また、二枚貝床にはヤマザンショウ・コウダカチャイロタマキビなどの海藻付着群集に分類されている貝類も生息している場合がある(死貝で入っている場合もある)。したがって、二枚貝床を形成するイガイ科の貝類などが主体である貝塚では、これらの貝類の出土から海藻利用を考える場合には検討を要するものと思われる。

29層より受熱により灰白色を呈する左殻1点が出土している。

アズマニシキ

115層より左殻1点のみが出土している。三陸沿岸一帯では、漸深帯上部～60mの岩礫に足糸で付着し、水深10m前後に最も多い。

ホタテガイ

48・52層から出土している。出土数は左殻1点、右殻1点で、最小個体数は2個体である。三陸沿岸一帯では、水深10～50mの砂礫底に生息し、水深10m前後に最も多い。

マガキ

28層を除くすべての層から出土している。出土数は左殻127点、右殻186点で、最小個体数は204個体である。三陸沿岸一帯では、低塩度地帯の潮間帯上部から潮間帯下部の岩礁・岩礫に群棲し、潮間帯上部に最も多い。マガキは左殻で岩に付着し、カキ礁を形成する。現在の当地方の岩礁部におけるマガキの採集方法を見ると、右殻の一部を金槌などで打ち欠き、そこから細長いカキ剥き用の小刀状の道具を突き入れ、貝柱を切断して右殻を剥がし、中身だけを採集する方法が取られている。また、岩礁に付着しているマガキを貝殻ごと外すことは一見困難なようにも思われるが、マガキは、積み重なるように付着する性質を持っており、一部の貝殻を外すことによって、ブロック状に採集することが容易にできる。

カワシンジュガイ

25層から左殻1点が出土しているのみである。中沢浜貝塚からは、これまでの調査では陸産巻貝を除くと、海産種のみが出土している。今回の調査では初めて淡水産貝類であるカワシンジュガイが出土した。これまで市内の遺跡からはカワシンジュガイの出土例はない。現在、市内の河川でのカワシンジュガイの生息については不明であるが、気仙川上流部の住田町小松洞穴からは6点が出土しており、かつては気仙川にも生息していたことが窺える。広田半島におけるカワシンジュガイの生息については、不明である。

ウメノハナガイ

28・49・115層から出土している。出土数は左殻10点、右殻4点で、最小個体数は10個体である。三陸沿岸一帯では、潮間帯から水深30mまでの細砂泥底に生息する。殻長7mm、殻高6mmほどの小型の二枚貝であり、食用には不適である。

イセシラガイ

115層から右殻1点が出土しているのみである。潮間帯から水深20mまでの砂底・泥底に生息するが、当地方ではあまり数の多くない種である。

チリハギガイ

28・30・52層から出土している。出土数は左殻3点、右殻4点で、最小個体数は6個体である。チリハギガイは、ムラサキインコなどの足糸間に付着している。その数は、1個体のムラサキインコに10個体以上付着している場合もある。したがって、遺跡内に持ち込まれたムラサキインコの個体数より多いと考えられるが出土数は少ない。今回の出土数は、ムラサキインコ30,708個体

に対して6個体と極端に少ない。これは、他の貝類と異なり、イガイ科は食する際に、足糸を取り除く処理を行うためと考えられる。

キクザル

36層から右殻1点が出土しているのみである。左殻で岩などに付着する。潮間帯から水深100mまでの岩礁や地物に付着する。

エゾイシカゲガイ

113層から右殻1点が出土しているのみである。三陸沿岸一帯では水深10~200mまでの砂泥底に生息し、水深35m前後に最も多い。

ウバガイ

115層から右殻1点が出土しているのみである。三陸沿岸では潮間帯下部から水深30mまでの細砂底に生息し、水深10m前後に最も多い。

ミルクイ

34・48・50・115層から出土している。出土数は左殻5点、右殻3点で、最小個体数は7個体である。三陸沿岸では潮間帯下部から水深20mまでの礫泥底に生息し、水深10m前後に最も多い。

クチバガイ

115層から右殻1点が出土しているのみである。三陸南部北半では潮間帯中部から潮間帯下部の砂礫底に生息し、潮間帯中部に最も多い。

ニッコウガイ科の一種

25・50・52層から出土している。出土数は左殻2点、右殻2点で、最小個体数は3個体である。本科は岩手県内では21種が生息している。種によって若干生息域が異なり、貝塚から出土する主な種の生息域は、ほとんどが潮間帯であるが、底質によって分類するとヒメシラトリ・ゴイサギガイが泥底、サビシラトリが砂泥底、ケショウシラトリが細砂泥底、シラトリモドキが小石まじりの砂底である。生息する水深は、概ねヒメシラトリ→シラトリモドキ→ゴイサギガイ→サビシラトリ→ケショウシラトリの順に浅い場所から深い場所へと棲み分けが見られる。

ヒメシラトリ

25・29・41・45・48・49・50・52・109・113・115層から出土している。出土数は左殻18点、右殻17点、最小個体数は22個体である。三陸沿岸一帯では潮間帯下部から水深50mまでの泥底に生息し、水深10m前後に最も多い。

シラトリモドキ

25・29・48・49・52・109・115層から出土している。出土数は左殻11点、右殻7点、最小個体数は14個体である。三陸沿岸では潮間帯中部から潮間帯下部の小石まじりの砂底に生息し、潮間帯中部に最も多い。

イソシジミ

25・29・41・48・109・113・115層から出土している。出土数は左殻25点、右殻33点で、最小個体数は37個体である。広田湾では潮間帯下部から水深10mまでの砂泥底に生息し、水深5～6mに最も多い。河口周辺での生息が多く、刺網などに入ることがあるが、味があまりよくないため現在は、食用とされることはあまりない。

ヤマトシジミ

45層から右殻1点が出土しているのみである。河口の汽水域の砂底に生息する。中沢浜貝塚の南側を流れる「カズリ川」の河口部に生息していたものと考えられる。

エゾヌメアサリ

25層から左殻1点が出土している。小型の個体である。三陸沿岸一帯では、漸深帯上部から水深50mまでの砂泥底に生息し、水深10m前後に最も多い。

オニアサリ

34・115層から出土している。出土数は右殻3点で、最小個体数は3個体である。三陸沿岸一帯では、潮間帯中部から水深20mまでの砂礫・砂底に生息し、潮間帯中部に最も多い。

ヌメアサリ

50層から左殻1点が出土しているのみである。三陸沿岸一帯では、潮間帯中部から潮間帯下部の砂泥底に生息し、潮間帯中部に最も多い。

アサリ

すべての層から出土している。出土数は左殻2,053点、右殻1,962点で、最小個体数は2,126個体である。三陸沿岸一帯では、潮間帯上部から水深20mまでの砂礫・泥底に生息し、潮間帯中部に最も多い。

コタマガイ

26・34・48・50・109層から出土している。出土数は左殻4点、右殻2点で、最小個体数は5個体である。三陸沿岸一帯では水深3～60mまでの砂底に生息し、水深10m前後に最も多い。

マツカザガイ

25・28・33・115層から出土している。出土数は左殻4点、右殻2点で、最小個体数は5個体である。三陸南部北半では、潮間帯の砂泥岩に穿孔生活をする。

ウチムラサキ

41・42・48・52・115層から出土している。出土数は左殻4点、右殻4点で、最小個体数は5個体である。三陸沿岸一帯では、潮間帯下部から水深40mまでの礫泥・砂泥底に生息し、水深10m前後に最も多い。

第4表 二枚員編制位別出土数表

職名 職別	シロ工				クキ				カキ				カキイ				カキイ													
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R										
2500円未満	1	1	344	398	1366	1369	1	1	11	1	1	1	118	116	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
2600円未満			41	33	226	2303																								
2600円			298	271	781	824																								
2600円以上			73	86	599	603																								
2800円未満			57	90	238	248																								
2800円			2	2	10	10																								
2800円以上			122	136	583	756																								
3000円未満			78	71	1912	1728																								
3000円			62	50	621	638																								
3000円以上			68	31	1611	1661																								
3100円未満			28	18	1008	1008																								
3100円			23	12	456	485																								
3200円未満			142	159	1676	1669																								
3200円			31	32	3697	1936																								
3200円以上			301	312	698	700																								
3400円未満			29	60	56	52																								
3400円			38	50	272	245																								
3400円以上			95	94	246	256																								
3500円未満			31	19	267	283																								
3500円			48	78	1786	1671																								
3500円以上			2	3	15	16																								
4100円未満					78	69																								
4200円			6	3	37	31																								
4200円以上			25	40	159	168																								
4500円			12	10	458	200																								
4800円			156	176	728	588																								
4800円以上			31	28	1938	1938																								
4900円			4	9	483	444																								
5000円			67	69	299	276																								
5000円以上			18	24	613	578																								
5200円			62	58	492	471																								
5300円			13	8	46	51																								
5300円以上			1	3	37	45																								
10700円					10700	5000																								
10800円			3	4	3	11																								
10900円			1	2	68	65																								
11300円			21	27	129	109																								
11300円以上			7	2	201	205																								
11500円			156	156	156	156																								
合計			4	3	2434	2679	19467	19619	1	1	127	185	1	1	127	185	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
二枚員編制数			1	4	698	191	20208	18628	1	2	304	110	1	1	7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	

ハマグリ

48層から左殻3点が出土しているのみである。潮間帯下部から水深20mまでの砂泥底に生息し、水深10m前後に多いが、現在は稀である。

オオノガイ

25・26・29・34・35・36・41・48・49・50・52・109・115層から出土している。出土数は左殻16点、右殻15点で、最小個体数は24個体である。三陸沿岸一帯では、潮間帯下部から水深10mまでの砂泥底に生息し、水深10m前後に最も多い。

クチベニデ

25・28・48層から出土している。出土数は左殻1点、右殻3点で、最小個体数は4個体である。三陸沿岸一帯では、水深18～149mまでの砂礫・砂底に生息する。

キヌマトイガイ

28・30・32・50層から出土している。出土数は左殻1点、右殻3点で、最小個体数は4個体である。広田湾では潮間帯から水深20mまでの海藻の根、養殖カキ、岩などに付着している。

B. 環形動物

環形動物は、多毛綱2種が出土している。いずれも食用とはならず、ムラサキインコの二枚貝床中に見られる種である。したがって、ムラサキインコを採集し、遺跡内に搬入する際、ブロックのまま搬入し、そのブロック中に含まれていたものと考えられる。

1. 多毛綱 (第5表)

カンザシゴカイ科の一種

45層より棲管片1点が出土している。潮間帯の岩礁やムラサキインコなどの岩礁性の貝類などに付着している。ムラサキインコの二枚貝床中にも棲管片が見られることから、ムラサキインコのブロックに含まれていたものが、遺跡内にブロックと共に搬入されたものと思われる。出土数は1点のみであり、ムラサキインコの足糸などを外す処理の際に多くは取り除かれている可能性が高い。

ウズマキゴカイ

25・29・30・113層より棲管が出土している。最小個体数は17個体である。棲管は、直径1.5～3mmほどで、右旋性で背後に3条の隆起が通るウズマキゴカイの特徴が見られる。ウズマキゴカイは、海藻や転石、タイドプールの内壁などのほか、ムラサキインコなどの二枚貝床を形成する岩礁性貝類の表面などにも付着する。したがって、ムラサキインコの表面に付着していたものが、ブロックと共に遺跡内に搬入されたものと思われる。

C. 節足動物

節足動物は、フジツボ類・カニ類など甲殻綱6種が出土している。フジツボ類の出土が最も多く、量的にはチシマフジツボ、アカフジツボ、クロフジツボの順に多い。

1. 甲殻綱 (第5表)

カメノテ

25・28・30・33・48・49・50・52・113・115層から出土している。出土数は、左楯板11点、右楯板7点、峰板1点で、最小個体数は14個体である。中沢浜貝塚周辺の岩礁部の潮間帯にも群棲するが、個体数はあまり多くない。岩礁の裂目に群棲するため、非常に採集しにくい。また、裂目の状況によって柄部の長さにかかなりの差が見られ、短い個体で1 cm、長い個体で5 cmほどである。この長さにより、柄部内の肉量に差が見られる。肉は美味である。

クロフジツボ

すべての層から出土しているが、個体数的には多くない。殻径4 cm・殻高3 cmほどの広田湾の岩礁部で見られるフジツボの中では大型の種である。中沢浜貝塚周辺の岩礁部でも見られる種であるが、あまり多くはない。

チシマフジツボ

すべての層から出土しており、最も出土数の多い種である。チシマフジツボは広田湾の岩礁部では小型のイワフジツボと並んで最も生息数が多い。出土した個体は小型のものが多く、岩礁やムラサキインコの殻上に付着している個体もあり、ムラサキインコのプロックと共に遺跡内に搬入されたものと思われる。

アカフジツボ

すべての層から出土している。個多数的にはチシマフジツボの約半数程度である。アカフジツボは、通常船底、浮標、延縄などに付着し、養殖用の浮標に多数付着しているのを目にする。また、広田湾の岩礁部では目にするのではなく、その採集場所は不明である。

29層より受熱により灰白色を呈する殻板1点が出土している。

オオアカフジツボ

25層より殻板が1点出土しているのみである。殻板の下部に下向する棘が密生している。オオアカフジツボの分布は、太平洋岸で房総半島以南とされており、三陸沿岸には分布しない。しかし、稀に黒潮の勢力が強い場合があり、その際には通常分布しない魚貝類が報告される場合がある。実際、本年(平成12年)も黒潮の影響が強く、房総半島以南に分布するカコボラなどが確認されている。このような状況においてオオアカフジツボの幼生が黒潮と共に北上し、三陸沿岸に定着する可能性は十分に考えられる。

イワガニ科の一種

28層より右不動指片1点、49層より左可動指片1点が出土している。比較的小型の種類のもので、広田湾内の岩礁部で普通に見られるイソガニの可能性が高い。

D. 触手動物

触手動物は腕足綱1種が出土しているのみである。

1. 胸足綱 (第5表)

タテスジホオズキガイ

35層より殻長4mm程度の両殻がそろった小型の個体が1点出土している。タテスジホオズキガイは水深100m付近に多い種であるが、本資料は非常に小型であり、ムラサキインコの二枚貝床中に入り込んでいた個体(死んだ個体の可能性が大きい)がムラサキインコのブロックと共に運び込まれたものと思われる。

E. 棘皮動物

棘皮動物はウニ綱のみが出土している。オオバファンウニ科として扱ったが、殻板からエゾバファンウニ・キタムラサキウニの2種が確認されている。しかし、個体数算定のため顎骨などのいわゆる「アリストテレスの提灯」部分のみを抽出したため、種同定が困難であった。(出土数表にはオオバファンウニ科としたが、種名表には殻板から同定した2種を含めた)

1. ウニ綱 (第5表)

オオバファンウニ科の一種

107層を除くすべての層から出土している。出土数は左顎骨405点、右顎骨404点、左上生骨7点、右顎骨10点、中間骨12点で、最小個体数101個体である。最も出土数の多い顎骨で見ると5mmの箇に残った大型の個体は15%であるが、5mm未満の比較的小型の個体が85%を占める。また、殻板の量から推測するとキタムラサキウニが大部分を占め、エゾバファンウニが少量含まれる。

F. 脊椎動物

脊椎動物は、軟骨魚綱7種・硬骨魚綱23種・両生綱1種・爬虫綱2種・鳥綱4種・哺乳綱10種が出土している。

魚類ではブリ属の一種が最も多く、アイナメ属の一種、フサカサゴ科の一種がこれに次ぐ。このほかマダイ・サバ属・ウミタナゴ科の一種が比較的まとまって出土している。マグロ属の一種は椎骨がわずかに見られるが、個体数は多くない。また、過去の中沢浜貝塚の発掘調査で比較的多く出土していたカツオは、椎骨がわずかに出土しているのみで、これまでの出土傾向とは異なり、非常に出土数が少ない。

両生綱はこれまで確認されていなかったが、本調査ではじめてヒキガエルの出土を見た。爬虫綱はカメ目の一種・ヘビ科の一種がわずかに見られる。鳥綱は4種が確認されたが、出土数は非常に少ない。哺乳綱はイノシシ・ニホンジカが多い。小型哺乳類の出土もネズミ類が個体数的には比較的まとまって出土しているが、その他の種類は非常に少ない。

1. 軟骨魚綱 (第6表)

ネズミザメ

31層より上顎歯1点が出土しているのみである。主咬頭の両側に側咬頭が見られる。三陸地方では、早春に定置網に入る場合がある。計測値は以下のとおりである。計測方法は、上野輝彌

(1975) 魚類 鹿間時夫編『新版古生物学Ⅲ』に従った。

内側面歯冠長	8.3mm	咬頭頂～歯根前部先端間距離	12.3mm
歯根高	1.0mm	咬頭頂～歯根後部先端間距離	10.7mm

アオザメ

41・42層より歯が各1点出土している。最小個体数は2個体である。いずれも歯根部を欠く。三陸地方では定置網に入る。

ホシザメ属の一種

50・115層より椎骨が各1点出土している。最小個体数は2個体である。長めのプロポーションを呈する椎骨である。115層出土のものは椎体長11.0mm、椎体径12.0mmである。50層出土のものも破片ではあるが、ほぼ同大である。現在、三陸沿岸ではホシザメが記録されている。

ヨシキリザメ属の一種

49層より上顎歯1点が出土しているのみである。ヨシキリザメは、夏から秋にかけて三陸沿岸にも来遊し、定置網に入る。計測値は以下のとおりである。

内側面歯冠長	4.8mm	咬頭頂～歯根前部先端間距離	8.4mm
歯根高	2.5mm	咬頭頂～歯根後部先端間距離	7.4mm

ツノザメ科の一種

26・29・34・45・48・50・115層より椎骨が出土している。最小個体数は8個体である。椎体は長めのプロポーションを呈する。分析した層からの鰭棘の出土は見られなかったが、アブラツノザメの可能性が高い。

カスザメ属の一種

42・45層より歯が出土している。最小個体数は2個体である。小型の歯であり、計測値は以下のとおりである。現在、三陸沿岸ではカスザメが記録されている。

42層	歯冠高4.9mm	歯根幅5.2mm
45層	歯冠高3.8mm	歯根幅5.9mm

エイ目の一種

25・32・45・48・50・52・109・113・115層より椎骨、49・52層より歯板が出土している。最小個体数は13個体である。ほとんどが椎体径5mm以下の小型の椎骨である。現在三陸沿岸ではアカエイ科のアカエイ・ホシエイ、トビエイ科のトビエイなど3科4種が記録されている。

軟骨魚綱

28・34・45・48・109・113・115層より椎骨が出土している。最小個体数は8個体である。同定が非常に難しいが、椎体が長めのプロポーションのもの、比較的大型で椎体側面が平滑なものなどいくつかのグループが見られる。

2. 硬骨魚綱 (第6～10表)

アナゴ科の一種

25層より尾椎が1点出土している。1mm篩に残った小型の尾椎で、マアナゴに近似するが種同定までは至らなかった。

マアナゴ

48・50・52・53・115層より出土している。出土部位は歯骨・腹椎・尾椎のみである。最小個体数は6個体である。

マイワシ

25・29・30・31・36・45・48・50・53・109・113・115層より出土している。出土部位は角骨・角舌骨・第一椎骨・第二椎骨・腹椎・尾椎であるが、椎骨の出土が多い。最小個体数は12個体である。109層から受熱により灰白色を呈する尾椎1点が出土している。

ウグイ属の一種

115層より尾椎1点が出土している。椎体後面横径は3.0mmで、最小個体数は1個体である。

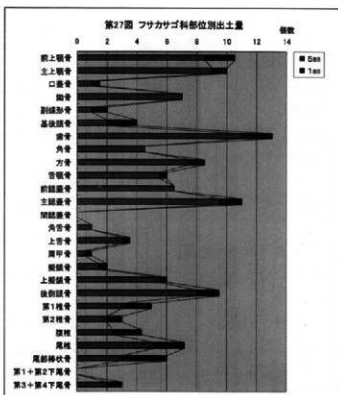
サケ属の一種

29層より腹椎2点(いずれも椎体後面横径9.2mm)、48・115層より椎骨片が各1点出土している。受熱による色調変化は認められない。最小個体数は3個体である。

フサカサゴ科の一種 (第27～29図)

107層を除くすべての層から出土しており、ほぼ全身の部位が出土している。最小個体数は47個体でアイナメ属、ブリ属、サバ属、ウミタナゴ科の一種に次いで個体数が多い。各部位骨の出土量を第27図に示した。この図は左右のある部位骨は(左+右)÷2、腹椎は腹椎数÷換算腹椎数(第1・第2椎骨を除いた数)、尾椎は尾椎数÷換算尾椎数(尾部棒状骨を除いた数)、鋤骨・副蝶形骨・基後頭骨などの1個体に1部位の骨はそのままの数をグラフ化したものである。以下、出土数の多い魚種(アイナメ属・ブリ属・マダイ・ウミタナゴ科・サバ属)についても同様の方法でグラフ化している。

各部位骨の出土数から見ると、多くが5mm目の篩上の資料であり、歯骨・前上顎骨・主上顎骨・主鰓蓋骨など頭部を構成する頭蓋



骨及び内臓骨が多く、椎骨の出土数より多い。椎骨は頭蓋骨及び内臓骨の出土数と比較して、やや1mm目の篩上の資料が多い傾向が見られる。

歯骨高〔最小値-〔平均値±標準偏差〕-最大値、mm〕は、2.7-〔5.45±1.58〕-8.8であり、腹椎・尾椎の計測値を第28・29図に示したが、腹椎で椎体後面横径3.1~3.5mmの個体が多く、尾椎で3.1~3.5、5.6~6.0mmの個体が多い。歯骨高-体長、椎体後面横径-体長の関係は種によっても異なるが、これらの計測値から推定すると、体長の範囲は10cm前後の個体から30cmをやや越える個体までと考えられ、平均では20cm前後の個体が多い。

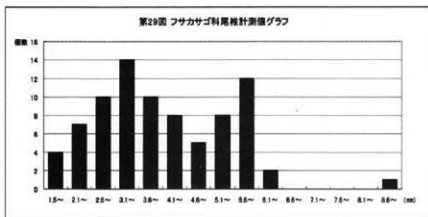
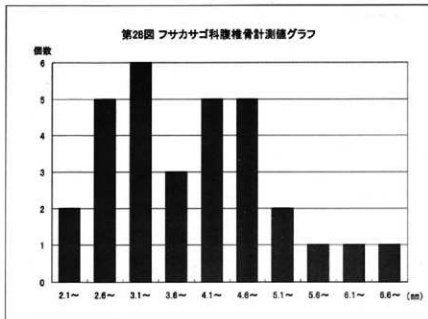
出土したフサカサゴ科の一種は、前上顎骨・歯骨・椎骨の形状などからメバルに近似するタイプ、クロソイに近似するタイプ、この2タイプと異なるタイプなど複数の種が含まれる。

三陸産魚類目録によると現在フサカサゴ科は25種が記録されている。沿岸の釣漁でよく釣られている種としては、メバル・クロソイ・ムラソイなどがある。種によって漁期などはことなるようであるが、ソイ類は当地方において「穴釣り」と呼ばれる方法で釣られることが多い。穴釣りは、竹などの竿の先端に糸（あまり長くない）と錘、餌（サンマの切り身などを用いる。水中で光るため。）をついた釣針をつけ、岩礁部の岩と岩の間（穴）をさぐる漁法である。時間帯としては夕方から夜間に行われる（夜釣り）のことが多い。

アイナメ属（第30~32図）

すべての層より出土しており、ほぼ全身の部位が出土している。最小個体数は64個体で、最も個体数が多い。出土部位は第30図に示した。内臓骨では前上顎骨・主上顎骨が多いが、中軸を構成する肋骨・副鰓形骨・第1椎骨・第2椎骨・尾椎などが多く、頭部を構成する部位骨より椎骨の方が多く出土している。また、椎骨などは1mm目の篩上に残った資料が多く出土している。

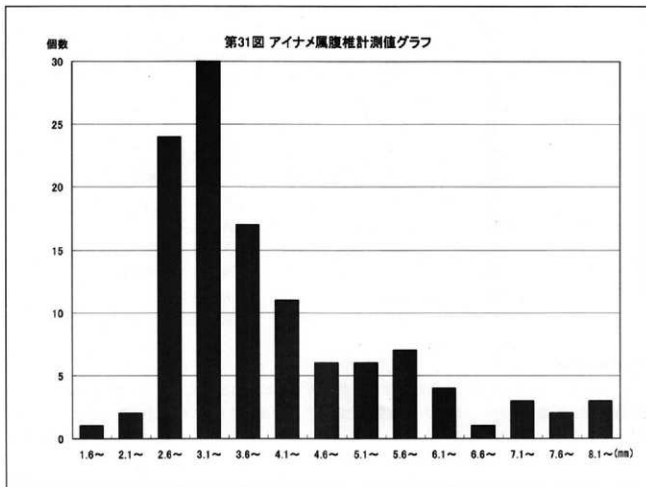
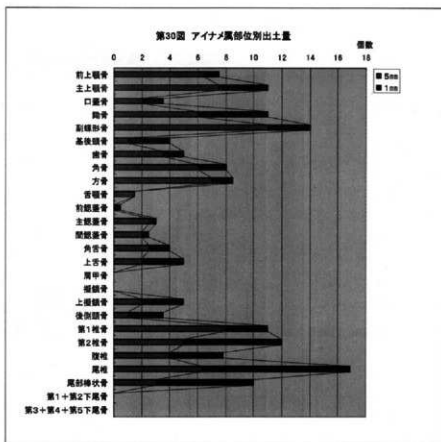
椎骨の計測値は第31・32図に示したが、腹椎で椎体後面横径3.1~3.5、2.6~3.0mmの個体が多く、尾椎では2.6~3.0、2.1~2.5mmの個体が多い。これらの計測値から推定すると体長の範囲は10cm前



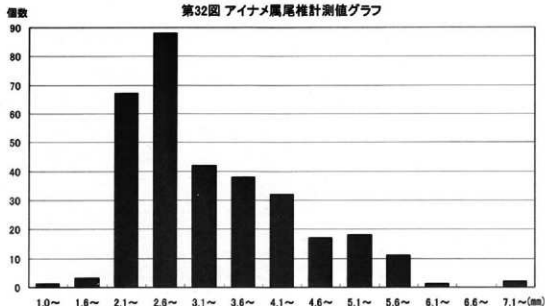
後の個体から40cm前後の個体まで、最も出土数の多い個体は20~30cm前後の個体である。

現在三陸沿岸で確認されている種としては、アイナメ・クジメがあるが、岩礁部で釣られているものを見る限りでは、アイナメの方が多。アイナメは沿岸または湾内の岩礁息に生息する根魚で、季節により深浅移動をするが回遊性はなく、1歳魚で体長約10cm、2歳魚で約20cm、4歳魚で約30cmになる。三陸地方で最も普通に釣られている種である。

受熱による色調変化の見られるものが22点出土してお



第32図 アイナメ黒尾椎計測値グラフ



り、115層出土の黒色化した尾椎3点を除いてすべてが1mm目の篩上に残った小型の個体のものである。色調変化の見られるものは以下のとおりである。

出土層位	部位	篩	色調及び数量
25層	左後側頭骨	1mm目	灰白色 1
25層	腹椎	1mm目	灰白色 2
25層	尾椎	1mm目	灰白色 1
45層	尾椎	1mm目	灰白色 1
48層	腹椎	1mm目	灰白色 1
49層	第2椎骨	1mm目	灰白色 1
50層	尾椎	1mm目	灰白色 1・黒色 1
52層	腹椎	1mm目	灰白色 1
109層	尾椎	1mm目	灰白色 2
113層	腹椎	1mm目	灰白色 1・黒色 1
113層	尾椎	1mm目	灰白色 3・黒色 1
115層	尾椎	1mm目	灰白色 1
115層	尾椎	5mm目	黒色 3

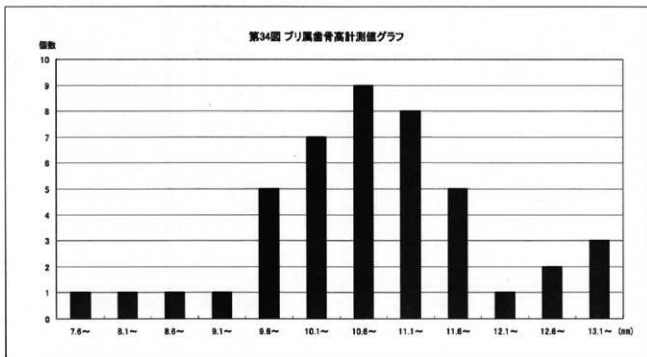
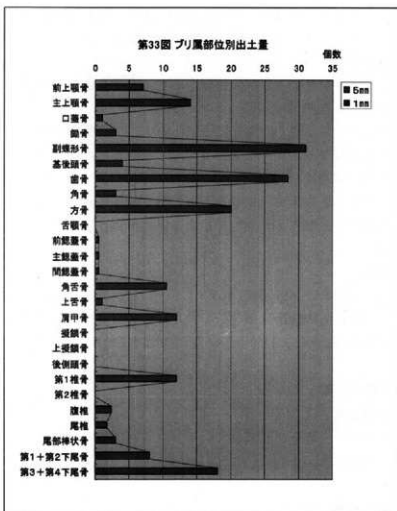
スズキ属の一種

25・30・34・42・109層から鋤骨、歯骨、前鰓蓋骨などが出土しているが、量的には少ない。最小個体数は5個体である。現在、三陸沿岸ではスズキが確認されている。109層から出土した左歯骨の歯骨高は5.4mm、25・30層から出土した第1椎骨の最大幅は4.8mm、3.9mmで小型の個体である。

ブリ属の一種 (第33・34図)

26層を除くすべての層から出土しており、ほぼ全身の部位が出土している。最小個体数は61個体でサバ属と同数であり、アイナメ属に次いで個体数が多い。部位別の出土量は第33図に示した。すべて5mm目の跡上の資料である。出土した部位にはかなりばらつきが見られ、出土量の多い順に副蝶形骨・歯骨・方骨・第3+第4下尾骨・主上顎骨などである。椎骨の出土は少ない。

歯骨高の計測値は第34図に示したが、7.7- [10.89±1.15] -13.1で、推定体長60cm前後から1mを超える大型の個体が多い。ブリの呼称は地方によって異なるが、「広田漁業史」(広田漁業史編集委員会編：1976)によると体長約10~18cm前後、体重約375g(100匁)前後の1歳未満のものを「ワカナ(又はワカナゴ)」、体長約24~30cm



前後、体重約750g~1.875kg(200~500匁)前後の1歳魚を「ハマチ(又はイナダ)」、体長約30~39cm前後、体重約1.875~3.750kg(500匁~1貫)前後の2歳魚を「メジロ(又はワラサ)」と

呼び、体長約45cm前後、体重3.750kg以上をブリ（成魚）とするが、この大きさから体長約60cm前後までのものを「コブリ」、体長60cm、体重7.500kg以上のものを「ブリ」と呼ぶ。年齢的には3歳魚がコブリ、4歳魚がブリと考えられている。したがって、出土したものは、ほとんどが4歳魚以上の「ブリ」クラスの個体であり、少数3歳魚である「コブリ」クラスの個体が含まれる。

現在、三陸沿岸で記録されているブリ属にはブリ、ヒラマサ、カンパチの3種があるが、ヒラマサはブリより暖かい海を好み、カンパチは回遊経路がブリに似るが、やや暖かい海を好む。また、この2種はブリのような大群はつくりないとされる。

ブリの漁期は普通初秋から冬期にかけてで、南下する際に外洋の沿岸で漁獲されるが、1歳魚のハマチ、2歳魚のメジロなどは内湾で漁獲される。

48層から受熱により黒色を呈する腹椎1点が出土している。

マジ

25・26・34・48・53・109・113・115層より主上顎骨・腹椎・尾椎・稜鱗がわずかに出土している。最小個体数は9個体である。椎体後面横径は1.7～3.3mmほどで推定体長20cm以下の小型の個体である。

タイ科の一種

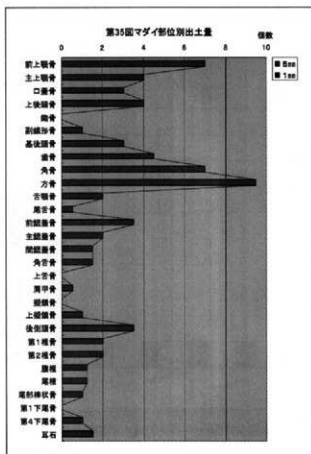
25層より主上顎骨・歯骨・尾椎が各1点出土している。最小個体数は1個体である。マダイに近似する。三陸産魚類目録ではマダイ・チダイ・クロダイ・コブレンコ（偶因分布）の4種が記録されている。

マダイ（第35図）

28・41・42・107層を除くすべての層よりほぼ全身の部位が出土している。最小個体数は30個体である。部位別の出土量は第35図に示した。内臓骨の出土が多く、椎骨の出土は少ない。また、特徴的な前頭骨の出土は見られなかった。

歯骨高は7.3 - [11.7±2.58] - 15.3で、腹椎の椎体後面横径は5.0～17.9mmまで幅があり、10.6～11.5mmのものが最も多い。また、第1椎骨の最大幅が26.8mmの大型のものもあり、推定体長は30cm以下から約1mまでの範囲で、現生標本の比較から50～60cmほどの個体が多いものと思われる。

マダイの産卵期は春で、幼魚は内湾の浅所で生活するが、成長するにつれて深場へ移動する。三陸沿岸では初夏に体長40～50cmほどの成魚が回遊してくる。

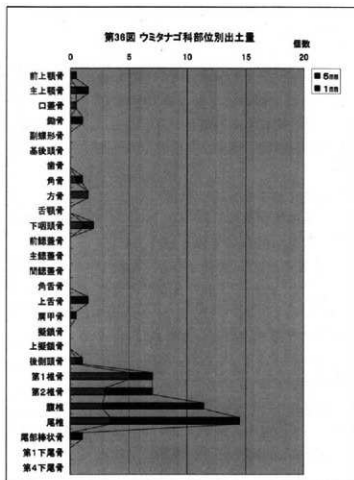


ウミタナゴ科の一種 (第36~38図)

35・107層を除くすべての層から出土している。最小個体数は48個体で、アイナメ属、ブリ属、サバ属に次いで個体数が多い。部位別の出土量は第36図に示した。内臓骨の出土は少なく、椎骨の出土かなり多く、1mm目の篩上の資料が多い。椎骨の計測値を第37・38図に示したが、腹椎で椎体後面横径が2.6~3.0mmの個体が多く、尾椎で3.1~3.5mmの個体が多い。推定体長は20~30cm前後の個体が最も多い。

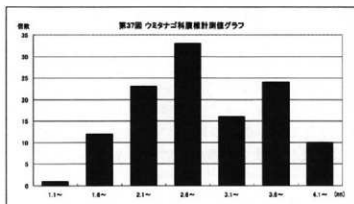
三陸沿岸には現在ウミタナゴ・オキタナゴの2種が生息しており、岩礁域や藻場を好む。オキタナゴは春から秋にかけて定置網などで漁獲され、ウミタナゴは釣り、定置網で漁獲される。

25・48・50層より受熱による色調変化の見られる尾椎が各1点出土している。25・48層出土のものは灰白色、50層出土のものは黒色を呈する。



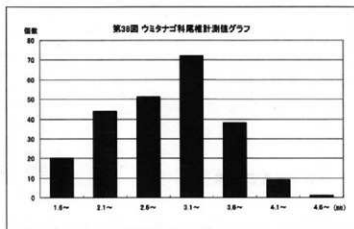
ペラ科の一種

31・45・49層より尾椎・下因頭骨がわずかに出土している。最小個体数は3個体である。現在、三陸沿岸ではキュウセン・コブダイなど6種が記録されている。6種の中で岩礁部で釣られることが多い種はキュウセンで、三陸地方には夏から秋に出現する。



ニシキギンボ科の一種

53層より腹椎1点、115層より左方骨1点が出土しているのみである。最小個体数は2個体である。三陸沿岸では「カダナギ」と呼称され、釣りの外道として釣られ、現在12種が確認されている。潮間帯から水深5mほどの藻場などを好むが、潮だまりでもよく見られる種である。当地方では食用とはされないが、地方によっては食される。



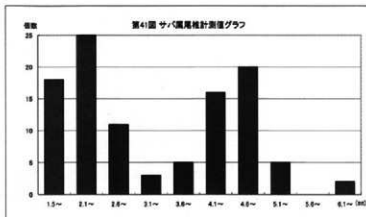
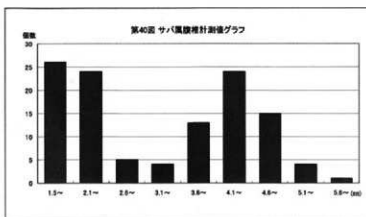
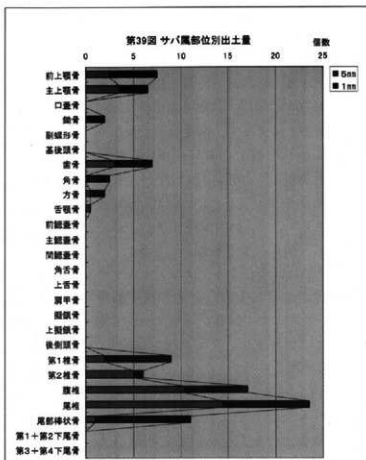
サバ属の一種 (第39~41図)

33層を除くすべての層から出土している。最小個体数は61個体でブリ属と同数であり、アイナメ属に次いで個体数が多い。部位別の出土量は第39図に示した。顎を構成する内臓骨が若干出土しているが、腹椎・尾椎など椎骨の出土が多い。

椎骨の計測値を第40・41図に示した。腹椎で椎体後面横径1.5~2.0、2.1~2.5mmのものが全体の40%強を占め、4.1~4.5mmのものが20%強を占める。尾椎では1.5~2.0、2.1~2.5mmのものが全体の40%強を占め、3.5~4.0、4.1~4.5mmのものが30%強を占める。歯骨高は1.7~[3.65±0.61]~4.2である。現在、三陸沿岸ではマサバとゴマサバの2種が確認されており、いずれも沿岸表層域を大群をなして回遊する種で、ゴマサバはマサバより高温水域を好み、漁期はマサバの秋に対し、ゴマサバは夏とされる（この時期には味の落ちるマサバより美味）。魚体の大きさは、マサバで0歳魚が21~24cm、1歳魚が25~28cm、2歳魚が29~33cm、3歳魚以上が34cm以上であり、出土したものは推定体長が20cm前後の個体と30cm前後の個体と考えられ、0歳魚及び2歳魚が多いものと推定される。来遊量は年によってやや異なり、魚体の組成も1歳魚が主体であったり、2歳魚が主体であったりしますが、0歳魚及び3歳魚以上の個体はあまり多くない傾向がある。25層から受熱により灰白色を呈する尾椎1点、31・41層より灰白色を呈する腹椎が各1点出土している。

ソウダガツオ属の一種

25・26・29・45・48・52・115層より主鰓蓋骨・腹椎・尾椎・尾部棒状骨+下尾骨が出土している。最小個体数は7個体である。現



在、三陸沿岸ではヒラソウダとマルソウダが確認されており、水温が上昇する夏から秋に来遊する。ヒラソウダは生食可能であるが、マルソウダは生食すると時として中毒を起こす。

カツオ

26層より腹椎1点、尾椎3点、115層より尾椎1点が出土しているのみである。最小個体数は2個体と非常に少ない。カツオはこれまでの中沢浜貝塚の調査によると、出土数が多く個体数もトップクラスに位置付けられ、漁撈対象の重要種であるが、今回の調査では椎骨がわずかに出土したのみである。三陸沿岸には夏から秋にかけて来遊し、年によって来遊量には変動があるが、今回の出土量は来遊量の変動に起因するものとは考えられないほどの少なさである。その要因としては、カツオの来遊時期を外れている、来遊時期に大型のブリ属の来遊が重なり、漁撈活動が小型のカツオよりブリ属へ移行した、摂食・調理段階で骨を他の場所へ廃棄した、骨ごと加工（なまり節のような）されたなどが考えられる。

マグロ属の一種

25・26・29・34・36・45・48・50・52・115層より腹椎・尾椎・尾部棒状骨+下尾骨が出土している。最小個体数は10個体であるが、出土量は少ない。現在、三陸沿岸ではクロマグロ・キハダ・メバチ・ビンナガの4種が確認されている。いずれも表層域を回遊する種で、クロマグロが沿岸性、ほか3種は沖合性とされる。また、クロマグロはマグロ類中最も冷水に対応できる種で、その対応能力は大型の個体ほど強く、三陸沿岸には初夏から秋に接岸する。体長は1歳魚で60cm、2歳魚で90cm、3歳魚で115cmほどになる。出土した椎骨の後面横径は16.5mm～54.5mmまでの幅があり、平均値は34.4mmである。推定体長は1m以下の小型個体は少なく、1～2m前後の個体が多い。中には3mを越す大型の個体も含まれる。したがって、漁獲された個体は3歳魚以上のものが多いいものと思われる。

ヒラメ

25・34・48・115層より腹椎・尾椎が出土している。最小個体数は4個体である。椎骨後面横径は4.7～12.5mmまでの幅があり、推定体長は20～50cm前後の個体であるが、まれに80cm前後の大型も含まれる。産卵期の春には水深20mまで接岸し、秋に深場へ、春に浅場へという季節移動を繰り返して成長する。

カレイ科の一種

28・29・33・53・107層を除くすべての層から主上顎骨・方骨・第1椎骨・腹椎・尾椎などが出土している。最小個体数は26個体である。椎骨後面横径は2.9～6.5mmで、4.6～5.5mmまでのものが多く、推定体長は25～30cm前後の個体が大半を占めると思われる。現在、三陸沿岸ではマガレイ・アカガレイ・マツカワなど17種が確認されている。

109層から受熱により灰白色を呈する小型の尾椎が1点出土している。

カワハギ科の一種

26・45層より背棘鱗各1点、115層より尾椎1点が出土している。最小個体数は3個体である。三陸沿岸ではカワハギ・ウマヅラハギなど4種が確認されている。

第 6 表 魚骨部位別出土数表

種名	フリノ												マアシ				ダイヤ				計		
	鱗部		鱗		鱗		鱗		鱗		鱗		鱗		鱗		鱗		鱗			鱗	
部位	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	
2500.5mm	2	2	1	1											2	2	1	1					
2600.5mm																	1	2					
2600.5mm															1	2							
2800.5mm	4	2			1	1																	
3000.5mm			1		1																		
3100.5mm	2	1	1		1																		
3200.5mm	2	2															3						
3300.5mm	2																						
3400.5mm	4	2																					
3500.5mm			1																				
3600.5mm	2	1																					
4100.5mm			1		1																		
4200.5mm	1									2													
4500.5mm																							
4500.5mm																							
4800.5mm	3	1	2	1	6	4																	
4800.5mm	2																						
5000.5mm	4	1			2	1																	
5200.5mm	2	4																					
5200.5mm																							
5500.5mm	1																						
5700.5mm	1																						
5800.5mm	1																						
6000.5mm	6	1	1	6	4																		
合計 5mm	31	4	38	19	42	35	19	1	1	9	12	1	12	12	23	30	3	15	1	5	5		
最小体長																							36

第10表 糸帯帯位別出土数表

種名 部位	サブ区		ソウダガツオ区		カウ生		マグロ区		ヒラメ		カレイ科				カワハギ科	
	尾線単位	尾線状況	L	R	尾線単位	尾線状況	尾線単位	尾線状況	尾線単位	尾線状況	方	上	第一	第二	尾	尾
25尾5mm	17			2	1			1	2							3
26尾5mm	11									1						
28尾5mm	5				2	1		1								1
1mm	3															
28尾5mm	2															
29尾5mm																
29尾5mm	10	2				1										
30尾5mm	4													1	3	
31尾5mm	12															
31尾5mm	12															9
32尾5mm	1															1
32尾5mm	11															1
33尾5mm																
34尾5mm	20															1
34尾5mm	7															1
35尾5mm	2															1
36尾5mm	1															
36尾5mm	28	1												2		
41尾5mm	9															1
42尾5mm	3															1
42尾5mm	18	2														2
43尾5mm	18	2														2
43尾5mm	19	1														1
43尾5mm	22															2
44尾5mm	21	3														3
49尾5mm	10															9
50尾5mm	1															
50尾5mm	1															
50尾5mm	1															
52尾5mm	10															2
52尾5mm	6															1
53尾5mm	1															
53尾5mm	1															
107尾6mm	1															
107尾6mm	1															
109尾6mm	7															2
113尾6mm	3															1
113尾6mm	6															
115尾6mm	26															3
115尾6mm	40															7
115尾6mm	230	1		1	3	7		1	4	9	12	1	3	5	1	11
1mm	165	10		1	2	1										5
尾線単位数			7				2	10		4						3
合計																
尾線単位数																

種名 部位	尾線単位	ヒキ方エ		ヘビ目科		カヌイ科		カメ科		カワハギ科		カレイ科				
		上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下			
25尾5mm	1															
26尾5mm	1															
28尾5mm	1															
29尾5mm	1															
30尾5mm	1															
31尾5mm	1															
32尾5mm	1															
33尾5mm	1															
34尾5mm	1															
35尾5mm	1															
36尾5mm	1															
36尾5mm	1															
41尾5mm	1															
42尾5mm	1															
42尾5mm	1															
43尾5mm	1															
43尾5mm	1															
43尾5mm	1															
49尾5mm	1															
50尾5mm	1															
52尾5mm	1															
52尾5mm	1															
53尾5mm	1															
107尾6mm	1															
107尾6mm	1															
109尾6mm	1															
113尾6mm	1															
113尾6mm	1															
115尾6mm	1															
115尾6mm	1															
合計	5mm	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
尾線単位数																

3. 両生綱 (第11表)

ヒキガエル (アズマヒキガエル)

48層より右上腕骨近位端1点、椎骨1点が出土しているのみである。上腕骨の近位端幅7.4mm、椎骨の椎体後面横径3.7mm、椎体長5.0mmである。

4. 爬虫綱 (第11表)

カメ目の一種

25層より腹甲と思われる破片1点が出土しているのみである。大きさ、厚さなどから陸ガメのものと思われる。

ヘビ科の一種

25・29・45・49・50・52・53・109・115層より椎骨が出土している。最小個体数は12個体である。出土した椎骨は腹突起の有無によって2つのタイプに分けられる。椎骨全体に腹突起があるものにはユウダ亜科がある。これに対してユウダ亜科を除くヘビ科及びクサリヘビ科の椎骨は、前方の椎骨には腹突起が見られるが、ユウダ亜科のものより板状を呈する。したがって、出土した椎骨の腹突起の形状からユウダ亜科とユウダ亜科を除くヘビ科及びクサリヘビ科の最低2種以上が含まれるものと思われる。

5. 鳥綱 (第11表)

鳥綱は4種が同定されたが、出土数は非常に少ない。

カラス科の一種

115層より近位端を残す右肩甲骨1点が出土している。近位端幅現存値7.9mm、骨幹部最大厚2.4mm。現在、本市ではカケス・オナガ・ハシブトガラス・ハシボソガラスの4種が確認されているが、中沢浜貝塚の位置する広田町ではオナガの記録はない。

キジ科の一種

50層より近位端を残す右中手骨1点が出土している。近位端最大幅10.7mm、最大厚6.0mm。現在、広田半島ではキジ・ヤマドリが確認されている。

ガンカモ科の一種

52層より遠位端を残す右脛骨1点が出土している。計測値は以下のとおりである。計測にあたっては小野慶一(1980)に従った。

Tic 7.7mm Tid 7.2mm Tie 12.8mm Tii 12.3mm

大きさからガン類のものと思われ、現生標本の比較ではマガンより小型の種である。該当種としてはシジュウカラガン・コクガンなどが挙げられる。本市におけるガン類の記録は、マガン・ヒシクイ(亜種ではオオヒシクイ)・コクガンの3種がある。マガン・ヒシクイはまれに古川沼周辺、広田半島の水田に渡来することがあるが、秋や春の記録で個体数も10羽前後と少なく、渡りの途

中に立ち寄ったものである。コクガンはまれに渡来し、広田湾や大野湾で越冬した記録もあるが個体数は1～3羽と少ない。

ミズナギドリ科の一種

31層より頸椎1点が出土している。市内においてはオオミズナギドリ・ハシボソミズナギドリの2種が確認されているほか、フルマカモメ・ハイロミズナギドリが保護・死体回収されている。

6. 哺乳綱 (第12・13表)

10種が同定されたが、出土量は少ない。これまでの調査によると中沢浜貝塚出土動物遺存体の特徴の一つとして、哺乳類が量的に少ないことが挙げられる。これは広田半島という遺跡自体の立地条件によるところが大きい。したがって、生業形態の中心は狩猟より漁撈にあったことは、魚貝類の出土量から見ても容易に推察される。なお、計測方法はDriesch (1976) に従った。

モグラ科の一種

113層より右下顎骨1点が出土している。自然混入か。

ノウサギ

29層より軸椎1点、30層より右下顎切歯1点が出土している。最小個体数は2個体である。

ネズミ科の一種

25・34・35・42・45・48・50・109・113・115層より上顎切歯・上腕骨・尺骨・大腿骨などが出土している。歯の形状などからネズミ亜科・ハタネズミ亜科の2種が含まれる。亜科の段階まで同定できなかったものはネズミ科として扱った。最小個体数はネズミ科の一種が9個体(うち幼獣4個体)、ネズミ亜科の一種が2個体、ハタネズミ亜科の一種が7個体(うち幼獣1個体)。

タヌキ

115層より第2・第5中節骨1点が出土している。計測値は以下のとおりである。

GL 11.7mm SD 2.9mm Bp 4.5mm Dp 4.2mm Bd 3.9mm

カワウソ?

50層よりカワウソに近似する右腕骨1点が出土している。完存資料である。計測値は以下のとおりである。

GL 58.1mm SD 5.7mm Bp 10.0mm BFd 9.0mm Bd 12.2mm

アシカ亜目の一種

29層より遊離歯1点が出土している。中沢浜貝塚から出土しているアシカ亜目にはアシカ・トド・オットセイの3種がある。オットセイはまれに越冬後北上する個体が春などに観察される。

イノシシ

25・34・41・45・48・49・52・109・115層より四肢を構成する部位骨を中心に出土している。

最小個体数は12個体（うち若獣4個体）である。出土状況はいずれもばらばらに散乱した状態で、距骨・足根骨・基節骨などの指骨などを除くと、すべてが割れた状態である。

頭蓋骨は全体の形状をとどめるものはなく、部分的な破片がわずかに見られるのみである。歯の出土も少なく、遊離した犬歯・切歯が若干見られるが、臼歯にいたっては下顎骨の破片資料に残るものが左右各1点見られるのみである。

四肢骨は橈骨が最も出土数が多いが4点（近位端を残す破片1点・遠位端を残す破片3点）である。そのほかの資料も破片資料が多く、割れ口はスパイラル状を呈することから、解体後に骨髄の抽出が行われた可能性を示唆している。同定資料として扱わなかった破片資料は細片が多く、大型の破片は非常に少ない。解体痕と思われるカットマークの見られる資料は109層出土の右中心足根骨1点のみで、内側面全体に横位に走る2条の切痕が見られる。距骨を切り離すため縦靭帯を切る際についたものと思われる。このほかニホンジカの中手・中足骨や鹿角などに見られるような骨角器製作に関わると考えられる擦り切り痕などは全く見られず、骨角器の素材としては不適であった可能性が高い。受熱による色調変化が見られる資料は2点のみで、34層出土の左第3手根骨・48層出土の左橈骨遠位端がそれぞれ灰白色を呈する。

出土資料が少なく、また、破片資料が多いため年齢・体高などを推測することはできなかったが、保存状態の良好な資料から得られた計測値などを以下に示す。

層位	部位	計測値（*は現存値・単位mm）
25層	左橈骨近位端残	Bp32.6*
25層	左橈骨遠位端残	Bd38.0 BfD34.1 骨端未癒合（外れ）
25層	右大腿骨近位骨端	DC30.3
25層	左大腿骨遠位端残	Bd54.8 骨端未癒合（外れ）
25層	左距骨完存	Bd27.5 GL48.4 GLm43.3 Dm28.0 DI25.0
25層	第3・第4末節骨	GB9.6 BF8.3 LF11.1 DLS24.7 GL24.4 MBS8.2 Ld21.0 若獣
34層	左下顎骨片	[M2・M3] M2の咬耗指数Ⅲ・萌出段階V M2：長さ21.2／前幅－／後幅－ M3：長さ41.1／前幅19.0／中幅17.0／後幅13.8
34層	右下顎骨片	[P3・P4・M1] M1の咬耗指数Ⅱ P3：長さ13.6／中幅7.6 P4：長さ17.4／中幅10.6 M1：長さ19.6／前幅19.0／後幅12.4
34層	左橈骨遠位骨端	Bd36.7 BfD32.9* 骨端未癒合（骨端のみ）
34層	左脛骨近位骨端	Bp53.5* 骨端未癒合（骨端のみ）
45層	第3・第4末節骨	GB15.1 BF13.1 LF17.1 DLS34.6 GL33.6 MBS11.9 Ld29.3
52層	左距骨	Bd29.9 GL50.2 GLm44.5 Dm28.6 DI26.6
52層	第3・第4基節骨	Bp17.9 Dp18.3（近位端残）
109層	第3・第4基節骨	GL23.7 Bp13.2 Bd10.6 SD10.1 骨端未癒合（外れ）
115層	左尺骨中間部片	DPA46.7 SDO40.2 BPC38.8
115層	右膝蓋骨	GB25.3 GL44.7
115層	第3・第4基節骨	GL41.2 Bp20.2 Dp21.3 BfPp19.1 Bd17.7 SD16.0

第1後臼歯と第2後臼歯の咬耗指数は小池・林（1984）に従った。

ニホンジカ

28・30～33・35・49・53・107層を除くすべての層から出土している。最小個体数は18個体（うち若獣5個体）であるが、出土量は少ない。出土状況などはイノシシと同様で、ばらばらに散乱した状態で、手根骨・足根骨などを除くと、すべて割れた状態である。

頭蓋骨は全体の形状を留めておらず、上顎骨片などが若干見られるのみである。鹿角は細かい破片が多く見られた。人為的な痕跡の見られるものは2点出土しており、29層出土のものが角幹部と角尖部をそれぞれ切り離す際についたと思われる打割痕、48層出土のもの（落角）が角座部まで及ぶ擦切痕が見られた。また、解体の際についたと思われるカットマークの見られるものは、115層出土の右下顎骨（関節突起を残す破片）1点で、下顎枝の外側に横位に走る長さ3mm・幅1mmほどの切痕が5条見られた。

四肢骨は大腿骨が左右合わせて4点出土しているが、特に目立った部位はない。骨角器の原材料として利用価値の高い中手・中足骨は、出土数が少ない。また、同定不可として扱った破片の多くは、割れ口がスパイラス状を呈しており、骨髓の抽出の可能性を示唆している。受熱による色調変化が見られたものは1点で、52層出土の鹿角片が茶色を呈する。

このほか、50層より出土した右橈側手根骨には、イヌによるものと思われる咬痕が顕著に見られたが、その他の四肢骨片などには見られなかった。

出土資料が少なく、また、破片資料が多いため年齢・体高などを推測することはできなかったが、保存状態の良好な資料から得られた計測値などを以下に示す。

層位	部 位	計測値（*は現存値・単位mm）
25層	右肩甲骨近位端残	BG31.7* LG35.6 GLP36.1 DHA213.1
25層	左上腕骨遠位端残	BT37.3 Bd44.9
25層	左尺骨中間部片	DPA44.9
25層	右橈骨遠位端残	Bd36.1 BFd34.4
25層	左脛骨遠位端残	Bd39.7 Dd32.5
25層	右膝蓋骨完存	GB33.0 GL45.2
29層	右大腿骨中間部片	SD25.6
34層	左肩甲骨近位端残	BG29.1 LG33.9 GLP45.1
36層	左肩甲骨近位端残	BG29.5 LG33.4 GLP43.4
48層	左尺骨中間部片	DPA40.1
50層	右上顎骨片	[P2・P3] P2: L13.5 B12.3・P3: L12.5 B12.3
113層	右中足骨遠位端残	Bd32.7* 若獣
115層	左膝蓋骨	GB18.6 GL37.5*

第13表 哺乳園階位別出土数表

種名 階位	二 年 生 の 子 方											
	種乳舎 階位	種乳舎 階位	種乳舎 階位	種乳舎 階位	種乳舎 階位	種乳舎 階位	種乳舎 階位	種乳舎 階位	種乳舎 階位	種乳舎 階位	種乳舎 階位	種乳舎 階位
2500 5 mm												
2600 5 mm												
2800 5 mm												
2900 5 mm												
3000 5 mm												
3100 5 mm												
3200 5 mm												
3300 5 mm												
3400 5 mm												
3500 5 mm												
3600 5 mm												
4100 5 mm												
4200 5 mm												
4300 5 mm												
4400 5 mm												
4500 5 mm												
4600 5 mm												
4700 5 mm												
4800 5 mm												
4900 5 mm												
5000 5 mm												
5200 5 mm												
5300 5 mm												
5400 5 mm												
5500 5 mm												
5600 5 mm												
5700 5 mm												
5800 5 mm												
5900 5 mm												
6000 5 mm												
6100 5 mm												
6200 5 mm												
6300 5 mm												
6400 5 mm												
6500 5 mm												
6600 5 mm												
6700 5 mm												
6800 5 mm												
6900 5 mm												
7000 5 mm												
7100 5 mm												
7200 5 mm												
7300 5 mm												
7400 5 mm												
7500 5 mm												
7600 5 mm												
7700 5 mm												
7800 5 mm												
7900 5 mm												
8000 5 mm												
8100 5 mm												
8200 5 mm												
8300 5 mm												
8400 5 mm												
8500 5 mm												
8600 5 mm												
8700 5 mm												
8800 5 mm												
8900 5 mm												
9000 5 mm												
合計 5 mm												
1 mm												
種小群体数 150												

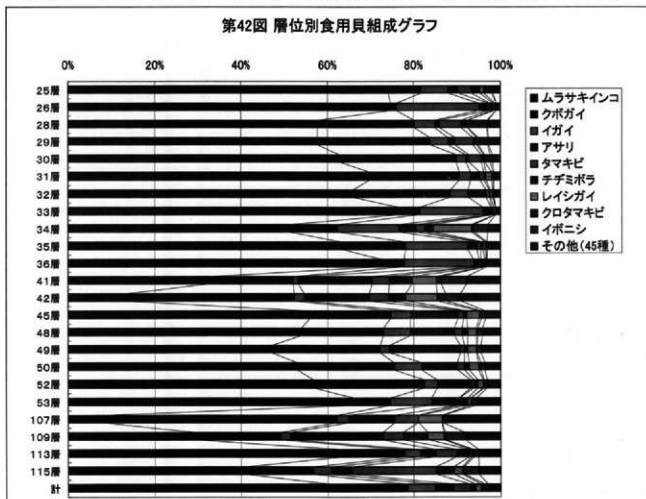
注：空白欄は未調査、中：中間部（伴物部）、濁：混位混在調査、点：点付、波：波付、○：数字は若い個体

(4) 出土動物遺存体から見た生業活動

今回の調査で出土した動物遺存体は、量的に魚貝類が多く、哺乳類は少なかった。したがって、採貝活動及び漁撈活動が生業の中心的な位置にあったと考えられる。出土した貝類・魚類のカロリーなどの推定は行っていないが、食料資源として考えた場合、貝より魚から得られるカロリーの方が多いため、中沢浜貝塚人にとって魚類は重要なタンパク源であったことは間違いない。これは、97-1号人骨（縄文時代中期）における同位体食性分析の結果において海産魚類の重要性が指摘されているとおりである。ここでは、今回は分析した縄文時代中期末の純貝層から得られたデータをもとに、中沢浜貝塚における縄文時代中期末の生業活動の中心であった採貝活動及び漁撈活動について考察する。

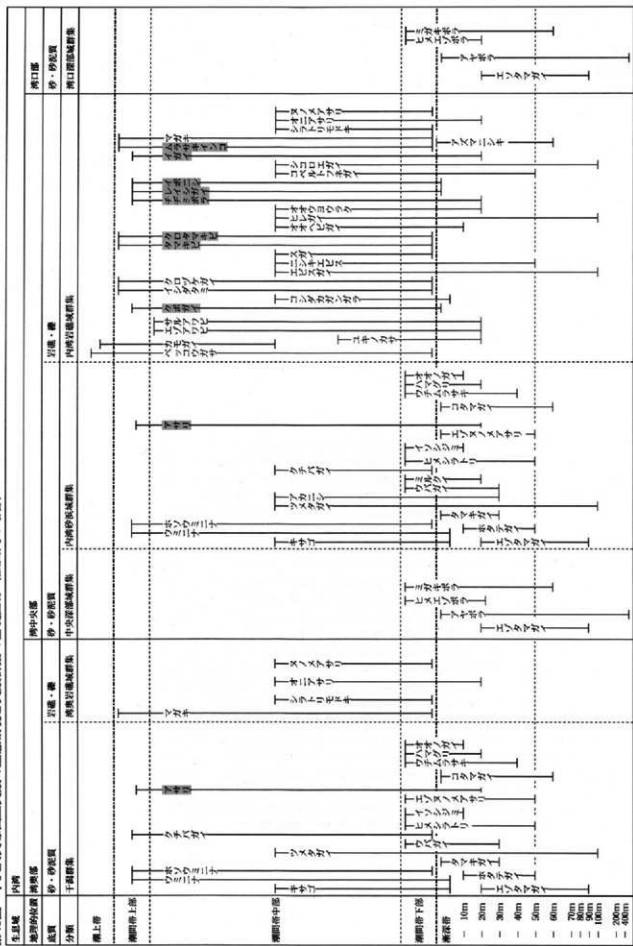
A 採貝活動について

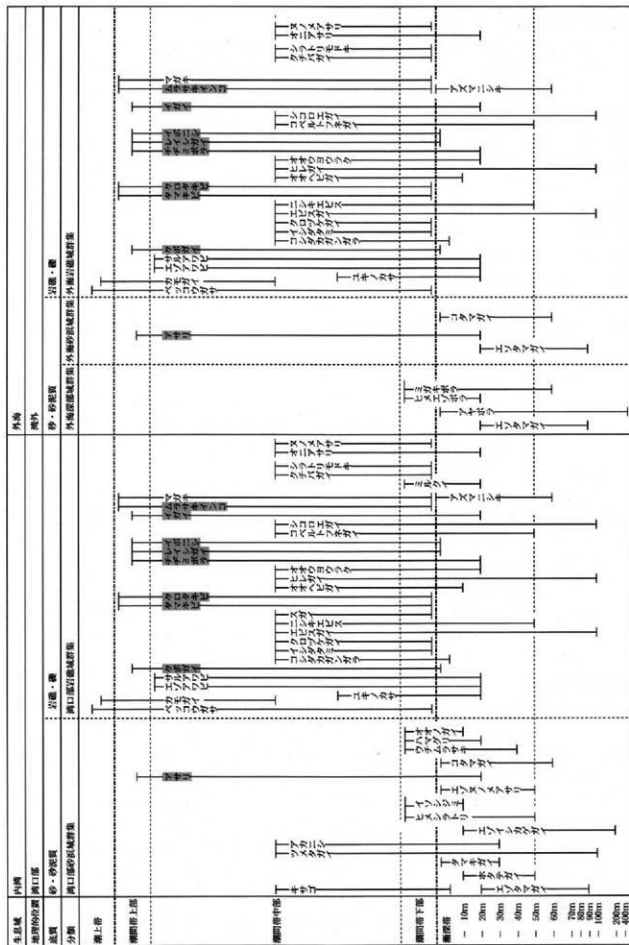
今回の調査で同定された貝類は91種である。これらのうち微小巻貝、陸産巻貝（いずれも微小な種）などを除く、食用可能な種は54種である。出土数の多いムラサキインコ・クボガイなどの9種と、その他の45種を一括したもので、層別別の組成をグラフ化したものが第42図である。



各層ともムラサキインコの出土が多く、全体ではその約6割を占める。次いで、クボガイ・イガイの出土が多く、この3種で全体の8割強を占める。このほか、出土数の多い種は、アサリを除くすべてが、岩礁部に生息する種であり、生息域での比率を見ても、その9割強が岩礁部の種で占められる。したがって、採貝活動は岩礁部を中心に行われていたことが理解できる。

第43図 中野瓦貝層出土貝類の生息環境と貝類群集の基礎区分（広田湾の場合）





本図作成にあたり謝り欄に引かれた各層の厚さは、本図作成にあたり謝り欄に引かれた各層の厚さの概算を示した。

i. 出土貝類の生息域

中沢浜貝塚における採貝活動を考察するため、出土した貝類の中で、前述のように食用可能な種のみを抽出し、生息環境ごとにおおまかに区分を行ったのが、第43図である。これは、海と貝のミュージアム名誉館長戸羽親雄氏のご指導を得て、現在広田湾周辺に生息している貝類を内湾・外湾に区分し、内湾を湾奥部、湾中央部、湾口部、湾外の地理的位置によって分け、それぞれを砂・砂泥質、岩礁・礫の底質に区分したものである。垂直分布の区分は波部・小菅（1967）を参考とし、以下のように定義した。

潮上帯・・・満潮時においても海水の影響を受けない飛沫帯域

潮間帯上部・・・干潮時に完全に干上がる区域

潮間帯中部・・・干潮時にやや海水の影響を受ける区域

潮間帯下部・・・干潮時に完全に膝付近まで海水に水没する区域

新深帯・・・潮の干満に影響を受けず、常に水面下にある区域

広田湾内における現在の貝類の分布を見ると、底質によって地理的位置を越えて生息する共通の種が多く、底質による棲み分けが貝類には見られる。採貝活動は、この底質により異なる方法がいくつか存在したといえる。

中沢浜貝塚の場合、出土数の多い貝では砂・砂泥質に生息する種はアサリ、岩礁・礫域に生息する種はクボガイ・タマキビ・クロタマキビ・チヂミボラ・レイシガイ・イガイ・ムラサキインコであり、砂・砂泥質域における「潮干狩り」的採貝活動と、岩礁・礫域における「ツブ拾い」的採貝活動があるが、岩礁・礫域における「ツブ拾い」的採貝活動がムラサキインコ・クボガイ・イガイなどの出土数から見てもその中心であったといえる。

また、図に示した貝の種類で、網掛けのあるものが出土数の多い種であるが、これらはその他の貝と比較して、潮間帯の上部から下部まで広く生息している種が多い。これは、その他の貝が干潮時でなければ採集できないことに対して、満潮時でもある程度の採集が可能であるという、採集可能な種を対象とした効率的な採貝活動の形態を示唆している。しかし、採集の季節性を考慮すると、冬期は潮間帯の比較的上部まで分布していたタマキビなども、より環境の安定している海水中に移動するため採集は困難であり、ムラサキインコのみが辛うじて採集可能な種となる。したがって、ムラサキインコは産卵期を除いて、通年採集可能な重要な食料資源といえる。

ii. 採集方法と道具

次に貝類の採集方法についてであるが、食用可能な貝を種ごとに生息中心域・現在の採集法及び必要となる道具などを推定したものが第14表である。

砂泥底に生息する種であるアサリは、ジョレン、ホタテガイのような貝殻、ヘラ状のものなどを利用し、底を掘るような方法が取られたと考えられる。出土数が少ない種であるウバガイ・ウチムラサキなどは、時化後に砂浜に打ち上げられたものを採集した可能性も考えられる。ウバガイなどは、台風や低気圧の通過後に、波打ち際に打ち上げられることがあり、膝あたりまで水に入るだけで、大量に採集されることもある。しかし、このようにして打ち上げられた貝は、砂が貝の中に入り込んでいるため、通常の砂を出させる方法（海水に一定期間入れておく）だけでは、砂の除去は困難であり、剥き身にした状態で丁寧に水洗し、砂を取り除かなければならない。

クボガイ・チヂミボラ・レイシガイなどの岩礁に生息する巻貝は、特に道具は必要とせず、素手によって採集されていたものと思われる。

第14表 中沢浜貝塚出土食用貝類の採集方法

種名	底質	生息中心域	採集方法	必要な道具
アヤボラ エゾタマガイ ヒメエゾボラ ミガキボラ アカニシ	砂・砂泥質 砂・砂泥質 砂・砂泥質 砂・砂泥質 砂・砂泥質	水深100~200m 水深30~50m 水深10m前後 水深10m前後 水深5~10m	時化後の打上採集・籠・網 時化後の打上採集・籠・網 時化後の打上採集・籠・網 時化後の打上採集・籠・網 時化後の打上採集・籠・網	ツブ籠・タコ籠・刺網 ツブ籠・タコ籠・刺網 ツブ籠・タコ籠・刺網 ツブ籠・タコ籠・刺網 ツブ籠・タコ籠・刺網
エゾイシカゲガイ エゾヌメアサリ	砂・砂泥質 砂・砂泥質	水深35m前後 水深10m前後	時化後の打上採集・網 時化後の打上採集・網	刺網 刺網
ウバガイ コタマガイ ウチムラサキ	砂・砂泥質 砂・砂泥質 砂・砂泥質	水深10m前後 水深10m前後 水深10m前後	時化後の打上採集・潜水・見突 時化後の打上採集・潜水・見突 時化後の打上採集・潜水・見突	ヤス（三本の組み合わせ） ヤス（三本の組み合わせ） ヤス（三本の組み合わせ）
ツメタガイ ハマグリ オオノガイ ホタテガイ	砂・砂泥質 砂・砂泥質 砂・砂泥質 砂・砂泥質	水深10m前後 水深10m前後 水深10m前後 水深10m前後	時化後の打上採集・潜水 時化後の打上採集・潜水 時化後の打上採集・潜水 時化後の打上採集・潜水?	特になし 特になし 特になし 特になし
キサゴ	砂・砂泥質	水深10m前後	時化後の打上採集・底引き	ドレッジ
タマキガイ ヒメシラトリ ミルクイ	砂・砂泥質 砂・砂泥質 砂・砂泥質	水深10m前後 水深10m前後 水深10m	時化後の打上採集 時化後の打上採集 時化後の打上採集	特になし 特になし 特になし
イソシジミ	砂・砂泥質	水深5~6m	潮干狩り・網	へら状のもの・刺網
クチバガイ アサリ	砂・砂泥質 砂・砂泥質	潮間帯上部 潮間帯中部	潮干狩り 潮干狩り	へら状のもの（貝殻・木など） へら状のもの・ジョレン
ウミミナ ホソウミミナ	砂・砂泥質 砂・砂泥質	潮間帯中部 潮間帯上部~中部	拾い集め 拾い集め	特になし 特になし
シラトリモドキ オニアサリ ヌメアサリ	岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫	潮間帯中部 潮間帯中部 潮間帯中部	潮干狩り 潮干狩り 潮干狩り	へら状のもの・ジョレン へら状のもの・ジョレン へら状のもの・ジョレン
マガキ	岩礁・礫	潮間帯上部	道具による採集	へら状のもの
イガイ ムラサキインコ ベッコウガサ カモガイ ユキノカサ エゾアワビ オオヘビガイ	岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫	水深5m前後 潮間帯上部 潮間帯上部 潮間帯上部 潮間帯下部 潮間帯下部 潮間帯中部	道具による採集・（素手） 道具による採集・（素手） 道具による採集・（素手） 道具による採集・（素手） 道具による採集・（素手） 道具による採集・（素手） 道具による採集・（素手）	へら状のもの へら状のもの へら状のもの へら状のもの へら状のもの へら状のもの へら状のもの
イシダタミ クロツケガイ タマキビ クロタマキビ チヂミボラ クボガイ スガイ レイシガイ イボニシ シコロエガイ サルアワビ コシダカガングラ エビスガイ ニシキエビス オオヨウラク コベルトフネガイ アズマニシキ ヒレガイ	岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫 岩礁・礫	潮間帯上部 潮間帯上部 潮間帯上部 潮間帯上部 潮間帯上部 潮間帯中部 潮間帯中部 潮間帯中部 潮間帯中部 潮間帯中部 潮間帯下部 潮間帯下部 潮間帯下部 潮間帯下部 潮間帯下部 水深10m前後 水深10~30m	素手による採集 素手による採集 素手による採集 素手による採集 素手による採集 素手による採集 素手による採集 素手による採集 素手による採集 素手による採集 素手による採集 素手による採集 素手による採集 素手による採集 素手による採集 素手による採集 素手による採集・網	特になし 特になし 特になし 特になし 特になし 特になし 特になし 特になし 特になし 特になし 特になし 特になし 特になし 特になし 特になし 特になし 特になし 刺網

水深は満潮時の最高潮位からの数値である。

岩礁部の巻貝は、素手により採集される種が多いが、ムラサキインコ・イガイ・マガキなどの二枚貝床を形成する種や、エゾアワビのような岩礁に強く附着している種は、素手による採集も可能であるが、角筥・骨筥を使用したものと考えられる。エゾアワビを素手で採集する場合、外的な刺激のない状態で貝殻を掴み、同時に回転を加えることで採集が可能である。しかし、採集に失敗した場合には、貝殻が外れることはあっても、肉は岩に附着した状態のままとなる。したがって、外的な刺激を受けた状態のエゾアワビを採集する場合は、貝殻の肥厚した部分を何らかの道具（ヘラ状のものや、棒状のもの）などで突き、岩から剥がす必要がある。

マガキはカキ床中の一箇所をはずすことで、連続して附着している個体をはずすことが可能である。この際、ヘラ状の道具が必要である。

最も出土数の多いムラサキインコは、1個体づつ素手によって採集することが可能であるが、1個体で100~200本にも及ぶ足糸で岩礁などに附着しているため、この足糸を切るためにはかなりの労力を必要とし、効率的な採集とは言い難い。また、仮にこのような採集方法がとられたと仮定すると、採集には選択性が働くことが考えられ、比較的同じ大きさの個体が多く出土するものと思われる。しかし、出土したムラサキインコは、殻高3cmを越えるような大型の個体から、殻高1cmにも満たない幼貝まで見られる。また、ユキノカサガイ科の幼貝など大量に出土している。筆者らの調査によると、ムラサキインコをブロックで採集した場合、ムラサキインコの幼貝・ユキノカサガイ科の幼貝・ヤマザンショウなどの微小巻貝などが多く含まれており、ムラサキインコの二枚貝床中には、これらが多く生息していることが確認されている。したがって、中沢浜貝塚においても、ムラサキインコは前述のようなデータからブロックで採集しているものと考えられる。採集にあたっては、前述のとおり多数の足糸を切るため、角筥・骨筥などのヘラ状の道具が用いられたと考えられ、中沢浜貝塚をはじめ、ムラサキインコを主体とする門前貝塚からは多量の筥状骨角器が出土していることからその用途は推察される。また、岩手県内の各貝塚の出土貝類の組成を見ても、岩礁性二枚貝を多く出土する貝塚からは、筥状骨角器が比較的多く出土する傾向が指摘できる。

Ⅱ. ムラサキインコの処理

次にムラサキインコの処理方法であるが、受熱による色調変化の見られた個体がわずかに1点のみと極端に少ないことから、煮沸して食したのと考えられる。煮沸するための前処理として2つの方法が考えられる。ブロックのまま煮沸する方法と、足糸などの付着物を外した後煮沸する方法である。この煮沸方法の推定には、足糸間に生息する殻高2mm前後の小型の二枚貝であるチリハギガイが重要である。チリハギガイは、1個体のムラサキインコの足糸間にかかなりの数が生息している。筆者らの調査では、10cm×10cmのムラサキインコのブロック中（ムラサキインコは成貝、幼貝合わせて約400個体含まれる）にムラサキインコの個体数の約75倍の約30,000個体ものチリハギガイが確認されている。したがって、単純に考えてもムラサキインコの個体数よりチリハギガイの個体数が多くなるものと思われる。しかし、今回出土したチリハギガイは全体でも最小個体数6個体と、ムラサキインコの最小個体数30,581個体と比較して非常に少ない。この原因は、煮沸の前処理段階・摂食段階・埋存の過程での消失、サンプリング・エラーによる消失が考えられるが、後者は殻高が2mm程度であるため1mm目の篩で抽出可能であるため、蓋然性は低く、前者の可能性が高い。筆者らが行ったムラサキインコの煮沸実験では、ブロックのまま煮沸した場合、チリハギガイやその他の細かい破砕貝などが、鍋内の水の沸騰によって貝が開いた状態のムラサキインコ内に入り込んでしまい、そのまま食するとチリハギガイなどの異物が含まれ、非常に食べずら

く、また、肉身に入り込んだチリハギガイなどを取り除くためには、細かいため非常に面倒となる。したがって、煮沸した個体をそのまま食することを考慮すると、煮沸前のブロックを外した後、チリハギガイなどの付着している足糸を除去する必要がある。出土したチリハギガイの個体数が少ないことは、このような煮沸するための前処理としての足糸の除去作業が行われていた可能性を示唆している。

iv. ムラサキインコ主体の要因

次に、基本的な疑問として、食用可能な二枚貝としては小型の種であるムラサキインコがなぜ全体の約6割を占めるほど多量に採集されているかについてであるが、いくつかの要因が考えられる。①岩礁部の潮間帯に生息する貝類の中では上部から下部の広い範囲で帯状分布の見られる優位種である。②群生し、採集において潮の干満の影響を他の貝類ほど受けない潮間帯の上部まで分布しているため1年を通して安定的な採集が可能である。③1個体当たりの肉量は少ないものの、同じ肉重量であればアサリ・マガキなどと比較して得られるエネルギー量が高く、美味であり、十分食料となり得る。④成長が非常に早く、毎年かなりの数の幼貝が二枚貝床中に加え、他の貝と比較して非常に生産性が高い。⑤狭い範囲に多くの個体が群生しており、採集匠の影響が非常に低い(出土数全体の約30,000個体から採集した面積を試算すると約1㎡程度となる)。

このようなことから、ムラサキインコは中沢浜貝塚人にとって、食用貝類としては岩礁部の潮間帯という採貝活動域において、最も採集量の安定性が高く、食料資源としても最も生産性の高い重要な貝であったといえる。

B 漁撈活動について

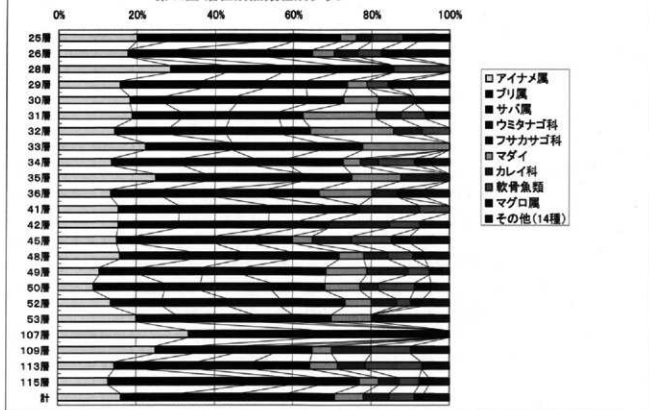
i. 出土魚類の組成

今回の発掘調査では、軟骨魚綱7種、硬骨魚綱23種、合計30種の魚類が同定された。出土した魚類の最小個体数比を層位別に示したのが第44図である。これを見ると全体ではアイナメ属が16.1%と最も多く、ブリ属・サバ属が15.3%でこれに次ぐ。ウミタナゴ科(12.1%)・フサカサゴ科(11.8%)も約10%以上で多い。マダイ(7.5%)・カレイ科(6.5%)・軟骨魚類(6.5%)も5%以上とやや多い。マグロ属は2.5%とあまり多くない。その他出土個体数の少ないマイワシ・マアジ・ペラ科・カツオなど14種の魚類を一括したものが6.5%で、常に出現頻度では上位種であるカツオは、今回はほとんど出土しておらず、これに含まれる。このカツオの出土数が少ないことが、今回の出土魚類組成の特徴として挙げられる。

次に主要魚種の推定体長を見ると、アイナメ属は20~30前後、ブリ属は60cm~1m前後、サバ属・ウミタナゴ科が20~30cm前後、フサカサゴ科は20cm前後、マダイは50~60cm前後、カレイ科は20~30cm前後、マグロ属は1~2m前後の個体がそれぞれ多い。これら主要魚種の中で、1mm目の篩上で抽出された小型の椎骨が多く見られた種は、アイナメ属・ウミタナゴ科・サバ属であり、特にアイナメ属・ウミタナゴ科は5mm目の篩を通過した小型の椎骨の方が多く出土しており、比較的小型の個体も多かったものと思われる。この他は中型あるいは大型に分類される個体が多い。

以上のことから今回出土した魚類は30種と多彩であったが、各層ともアイナメ属・ブリ属・サバ属・ウミタナゴ科・フサカサゴ科など主要魚種の構成比において層位による変化が小さく、特定の魚種に極端に偏る傾向は見られなかった。また、これまでの中沢浜貝塚出土魚類の傾向と比較して、ブリ属の出土数が多く、カツオの出土数が少ないことが特徴として挙げられる。

第44図 層別別魚類組成グラフ



ii. 出土魚類の生態

三陸沿岸の魚類相の特徴としては、定住性魚類が約270種が確認されているが、この数は全出現種の約50%であり出現比が低い。黒潮の接近時にはカツオ・ハガツオなどの温水性魚類が出現し、親潮の接近時にはマダラ・ホッケなどが出現することなど、季節による魚類、特に回遊性魚類の交替が顕著であること。温帯域には豊富なイソギンボ科・ベラ科などの定住性魚類がほとんど欠如しているのに対し、ニシキギンボ科・フサカサゴ科・アイナメ属などの温帯以北に出現する沿岸性魚類が卓越すること、など挙げられる(井田:1994)。

第15表は出土魚類の生態について示したものである。前述のとおり、温水系・冷水系阿水系の回遊性魚類が混在し、定住性魚類の比率が少ないといった特徴が見られる。出土した魚類は、選択的に漁獲されている可能性が高く、当時の海洋環境を直接的に示すわけではないが、出土した傾向を見る限りでは、現在の三陸沿岸の魚類相の特徴と同様の特徴が見られる。

主要魚種について見ると、回遊性魚類は沖合性のネズミザメなどの一部のサメ類を除くと、プリ属・サバ属はいずれも沿岸性の強い種であり、表層域を主たる活動域としている。その他は定住性で浅海域を活動の中心としている。特にアイナメ属・ウミタナゴ科・フサカサゴ科は季節的な深淺移動は見られるものの藻場などでの定住性が高い。

今回出土した魚類の生態から見ると、三陸沿岸において季節的に出現する回遊性を持ったプリ属・サバ属・マグロ属などを対象とした漁撈活動の存在と共に、季節移動が小規模であるか、あるいはほとんど認められないアイナメ属・ウミタナゴ科・フサカサゴ科・カレイ科などの定住性魚類を対象とした漁撈活動の存在が考えられる。主要魚種の組成比では回遊性魚類約30%に対して定住性魚類約50%であり、後者の定住性魚類を対象とした漁撈活動がより中心的であったといえる。

第15表 中沢浜貝塚出土魚類の生態

出土魚種	該当する三陸産 主な現生種	性質	生活空間	回遊・ 定住性	分水 布域	その他
ネズミザメ	ネズミザメ	沖合性	表層性	回遊性	冷水系	
アオザメ	アオザメ	沿岸性	表層性	回遊性	暖水系	
ホシザメ属	ホシザメ	沿岸性	底棲性	回遊性	温水系	
ヨシキリザメ属	ヨシキリザメ	沖合性	表層性	回遊性	暖水系	
ツノザメ科	アブラツノザメ	沖合性	底棲性	回遊性	冷水系	
カスザメ属	カスザメ	沿岸性	底棲性	回遊性	温水系	
エイ目	アカエイ ホシエイ	沿岸性 沿岸性	表層性 表層性	回遊性 回遊性	温水系 温水系	
アナゴ科	ギンアナゴ ほか4種	沿岸性	底棲性	定住性	温水系	
マアナゴ	マアナゴ	沿岸性	底棲性	定住性	温水系	
マイワシ	マイワシ	沿岸性	表層性	回遊性	温水系	
ウグイ属	ウグイ	遼河性	淡水性	回遊性	温水系	
サケ属	サケほか	遼河性	表層性	回遊性	冷水系	
フサカサゴ科	メバル クロソイ ムラソイ ほか22種	沿岸性 沿岸性	浅海性 浅海性	定住性 定住性		藻場 岩礁
アイナメ属	アイナメ クナメ	沿岸性 沿岸性	浅海性 浅海性	定住性 定住性	温水系 温水系	藻場 藻場
スズキ属	スズキ	沿岸性	浅海性	定住性	温水系	
ブリ属	ブリ ヒラマ サチ カンパチ	沿岸性 沿岸性	浅海性 浅海性	回遊性 回遊性	温水系 温水系	
マアジ	マアジ	沿岸性	浅海性	回遊性	温水系	
タイ科	チダイ クロダイ	沿岸性 沿岸性	浅海性 浅海性	定住性 定住性	温水系 温水系	
マダイ	マダイ	沿岸性	浅海性	定住性	温水系	
ウミタナゴ科	ウミタナゴ オキタナゴ	沿岸性 沿岸性	浅海性 浅海性	定住性 定住性	温水系 温水系	藻場
ベラ科	キュウセン	沿岸性	浅海性	定住性	温水系	
ニシキギンボ科	カズナギ ほか11種	沿岸性	浅海性	定住性	温水系	藻場
サバ属	マサバ ゴマサバ	沿岸性 沿岸性	表層性 表層性	回遊性 回遊性	温水系 温水系	
ソウダガツオ属	マルソウダ ヒラソウダ	沿岸性 沿岸性	表層性 表層性	回遊性 回遊性	温水系 温水系	
カツオ	カツオ	沖合性	表層性	回遊性	温水系	
マグロ属	クロマグロ キハマグロ メバチ	沿岸性 沖合性 沖合性	表層性 表層性 表層性	回遊性 回遊性 回遊性	温水系 温水系 温水系	
ヒラメ	ヒラメ	沿岸性	浅海性	定住性	温水系	
カレイ科	マコガレイ アカガレイ ほか17種	沿岸性	浅海性 浅海性	定住性 定住性	温水系 冷水系	

本表作成にあたり東京大学海洋研究所大館海洋研究センター新井巖臣氏のご教示を得た。

Ⅱ. 漁撈の季節性

広田湾に生息する魚類は、通年湾内で生活する定住性魚類と、季節により来遊する回遊性魚類がある。全出現種数に対する定住性魚類の比率が低く、季節による海水温変化に伴う回遊性魚類の交替が顕著であることが三陸沿岸の魚類相の特徴であることは前述のとおりである。

出土した主要魚種中、定住性魚類はアイナメ属・ウミタナゴ科・フサカサゴ科・カレイ科などがある。これらの種は季節的移動の小さい種であり、産卵、水温変化などの諸要因による深淺移動のため漁獲量に変化はあるもののアイナメ属・フサカサゴ科などは一年を通して漁獲可能である。

当地方での現在の漁期を見ると、アイナメ属は6月～9月頃、ウミタナゴ科は4月～8月頃、フサカサゴ科4月～7月頃、カレイ科はほぼ通年となっている。マダイは初夏に体長40～50cmほどの成魚が来遊する。

回遊性魚類では、ブリ属・サバ属・マグロ属などがある。これらの来遊は季節による表面水温変化に対応したものである。三陸沿岸の漁場では北から南下する低水温、低塩分で栄養に富んだ親潮水塊、南から北上する高水温、高塩分で栄養の乏しい黒潮水塊、日本海から流出する津軽暖流水塊の三水塊が交錯している。そのため、表面水温変化は冬期に5～7℃程度まで低下し、夏期には20～23℃まで上昇する。このような水塊が春から夏にかけて北上し、秋から冬にかけて南下しているため、三陸沖は寒流、暖流の両水塊の多種類の魚類の来遊があり、日本を代表する好漁場を形成している。

回遊性の主要魚種である前述の3種は、ブリ属・サバ属は黒潮と親潮の中間に生息し、マグロ属が親潮水塊に生息している。東北日本の太平洋域の表面水温の季節変化を見ると(井田：1990)、15℃の等温線は3月(春)には房総半島付近にあり、6月(初夏)に宮城県石巻付近まで北上し、9月(秋)には北海道根室付近まで北上する。その後、12月(冬)には房総半島付近まで南下する。

ブリ属・サバ属・マグロ属などの暖水系魚類は、親潮に生息する寒流系魚類が北上した後に出現するが、成長段階によって好適水温は異なり、一般に当歳魚はより高水温を好み、成長に伴い大型魚ほど低水温に対する耐性は強くなる。したがって、マグロ属の同じクロマグロでも初夏の沿岸水温12℃ほどの低水温でも出現するのが大型の個体であり、次第に中型の個体が出現し、小型の個体が出現するのは沿岸水温20℃以上になる9月以後となる。同様にサバ属のマサバも大型の個体が初夏に出現し、中・小型の個体はやや遅れて出現する。また、初冬に親潮が南下し始め水温が低下すると、これらの暖水系魚類は、小型魚(当歳魚)ほど早く南下し、中・大型の個体はより遅れて水温が10℃前後にまで低下してから南下する(井田：1990)。

したがって、回遊性の主要魚種の漁期は、水温の上昇と共に個体数の増加する秋となるが、出土した魚骨に大型の個体も含まれており、このような個体が来遊する初夏から秋にかけてがその漁期であったと推察される。

出土した主要魚の種類・出土数を見ると、春～秋に漁獲されるものが多い傾向がある。冬でも漁獲可能なアイナメ属、フサカサゴ科などの出土数が多く、より沿岸性の強い「根魚」を対象とした漁撈が通年行われていた可能性も考えられるが、冬期における漁撈活動を示す魚種の出土がないため、冬期の漁撈活動は活発ではなかったものと思われる。

引用・参考文献

- 井田齊 (1990)「第五章 第一節 海洋生物」『三陸町史 第一巻自然・考古編』三陸町史刊行委員会井田齊 (1994)「第三章 海産動物」『陸前高田市史第一巻自然編』陸前高田市
- 岩崎敬二 (1999)『貝のパラダイス—歳の貝たちの行動と生態—』東海大学出版会
- 岩手県 (2001)『岩手県野生生物目録』
- 小池裕子・林良博 (1984)「遺跡出土ニホンイノシシの齡査定について」『古文化財の自然科学的な研究』古文化財編集委員会編 同朋舎出版
- 佐藤正彦・熊谷賢・高橋和弥 (1999)『中沢浜貝塚1997—遺構・土器・土製品・石器編—』陸前高田市教育委員会
- 波部忠重・小菅貞男 (1967)『標準原色図鑑3 貝』保育社
- 西本豊弘・松井章 (1999)『考古学と動物学』同成社
- 広田漁業史編集委員会 (1976)『広田漁業史』
- 陸前高田市 (1994)『陸前高田市史第一巻自然編』
- Driesch A (1976)『A guide to the measurement of animal bones from archaeological site』Peabody Museum Bulletin I.

写真4

1～2. クサズリガイ科 [1. 頭板, 2. 中間板]; 3. ケハダヒザラガイ科頭板; 4. ユキノカサガイ; 5. エゾアワビ; 6. クボガイ; 7. コシダカガンガラ; 8. イシダタミ; 9. スガイ; 10. ヤマザンショウ; 11. ニシキアマオブネ; 12. ウミニナ; 13. ホソウミニナ; 14. コウダカチャイロタマキビ; 15. タマキビ; 16. クロタマキビ; 17. オオヘビガイ; 18. ツメタガイ; 19. エゾタマガイ; 20. ヒレガイ; 21. オオウヨウラク; 22. チヂミボラ; 23. レイシガイ; 24. イボニシ; 25. コウダカマツムシ; 26. クロスジムシロ; 27. エゾイソニナ; 28. キセルガイ科; 29. パツラマイマイ; 30. シコロエガイ; 31. ムラサキインコ; 32. ホタテガイ; 33. マガキ; 34. ミルクイ; 35. ヒメシラトリ

写真5

36. シラトリモドキ; 37. イソシジミ; 38. アサリ; 39. コタマガイ; 40. ウチムラサキ; 41. ハマグリ; 42. オオノガイ; 43. クチベニデ; 44～45. カメノテ [44. 峰板, 45. 楯板]; 46. クロフジツボ; 47. チシマフジツボ; 48. アカフジツボ; 49. オオアカフジツボ; 50～51. イワガニ科 [50. 不動指, 51. 可動指]; 52～55. オオバフンウニ科 [52. エゾバフンウニ殻板, 53. キタムラサキウニ殻板, 54. 顎骨, 55. 上生骨]; 56～64. 軟骨魚綱 [56～57. 椎骨, 58. ネズミザメ上顎歯, 59. アオザメ歯, 60. ホシザメ属椎骨, 61. ヨシキリザメ属上顎歯, 62. ツノザメ科 (アブラツノザメ?) 椎骨, 63. カスザメ属歯, 64. エイ目 (トビエイ科?) 歯板]; 65. マアナゴ尾椎; 66～68. マイワシ [66. 角骨L, 67. 第1椎骨, 68. 第2椎骨]; 69. サケ属腹椎; 70～83. フサカサゴ科 [70. 前上顎骨L, 71. 主上顎骨L, 72. 鰓骨, 73. 歯骨L, 74. 方骨L, 75. 舌顎骨R, 76. 前鰓蓋骨R, 77. 主鰓蓋骨L, 78. 上舌骨R, 79. 上擬鎖骨L, 80. 後側頭骨R, 81. 腹椎, 82. 尾椎, 83. 尾部棒状骨]; 84～99. アイナメ属 [84. 前上顎骨R, 85. 主上顎骨L, 86. 口蓋骨L, 87. 鰓骨, 88. 副鰓形骨, 89. 基後頭骨, 90. 歯骨L, 91. 角

骨R、92. 方骨L、93. 主鰓蓋骨R、94. 角舌骨R、95. 上舌骨L、96. 上擬鎖骨L、97. 第1椎骨、98. 腹椎、99. 尾椎]；100~105. プリ属 [100. 前上顎骨L、101. 主上顎骨L、102. 基後頭骨、103. 副蝶形骨、104. 齒骨R、105. 角骨R]

写真6

106~111. プリ属 [106. 方骨L、107. 角舌骨R、108. 肩甲骨R、109. 第1椎骨、110. 腹椎、111. 第3+第4下尾骨]；112~113. マアジ [112. 尾椎、113. 後鱗]；114~130. マダイ [114. 前上顎骨R、115. 主上顎骨R、116. 口蓋骨L、117. 上後頭骨、118. 基後頭骨、119. 角骨R、120. 齒骨R、121. 方骨R、122. 舌顎骨L、123. 前鰓蓋骨R、124. 主鰓蓋骨L、125. 肩甲骨L、126. 上擬鎖骨L、127. 後側頭骨R、128. 第1椎骨、129. 尾椎、130. 耳石R]；131~138. ウミタナゴ科 [131. 主上顎骨L、132. 口蓋骨L、133. 方骨R、134. 後側頭骨L、135. 第1椎骨、136. 腹椎、137. 尾椎、138. 下咽頭骨]；139~140. ベラ科 [139. 尾椎、140. 下咽頭骨]；141~142. ニシキギンボ科 [141. 方骨L、142. 腹椎]；143~149. サバ属 [143. 前上顎骨R、144. 主上顎骨L、145. 齒骨R、146. 第1椎骨、147. 腹椎、148. 尾椎、149. 尾部棒状骨]；150~152. ソウダガツオ属 [150. 主鰓蓋骨R、151. 腹椎、152. 尾椎]；153. カツオ尾椎；154~156. マグロ属 [154. 腹椎、155. 尾椎、156. 尾部棒状骨+下尾骨]；157. ヒラメ尾椎；158~160. カレイ科 [158. 主上顎骨L、159. 方骨L、160. 尾椎]；161~162. カワハギ科 [161. 第1背棘、162. 尾椎]

写真7

163~164. ヒキガエル [163. 上腕骨R、164. 椎骨]；165. ヘビ科椎骨；166. カラス科肩甲骨L；167. ガンカモ科脛骨R；168. ミズナギドリ科顎椎；169. モグラ科下顎骨R；170~171. ノウサギ [170. 軸椎、171. 下顎切歯]；172~174. ネズミ科 [172. 上腕骨R、173. 尺骨R、174. 寛骨R]；175. タヌキ第2・第5中節骨；176. カワウソ? 橈骨R；177. アシカ垂目遊離歯；178~187. イノシシ [178. 橈骨L、179. 尺骨L、180. 大腿骨L、181. 膝蓋骨R、182. 距骨L、183. 第3・第4基節骨、184. 第3・第4中節骨、185. 第3・第4末節骨、186. 上顎犬歯R、187. 下顎骨片L]；188~196. ニホンジカ [188. 肩甲骨R、189. 上腕骨L、190. 橈骨R、191. 尺骨L、192. 膝蓋骨R、193. 脛骨L、194. 中足骨R、195. 鹿角第2角叉部R、196. 下顎骨関節突起R]



写真 1

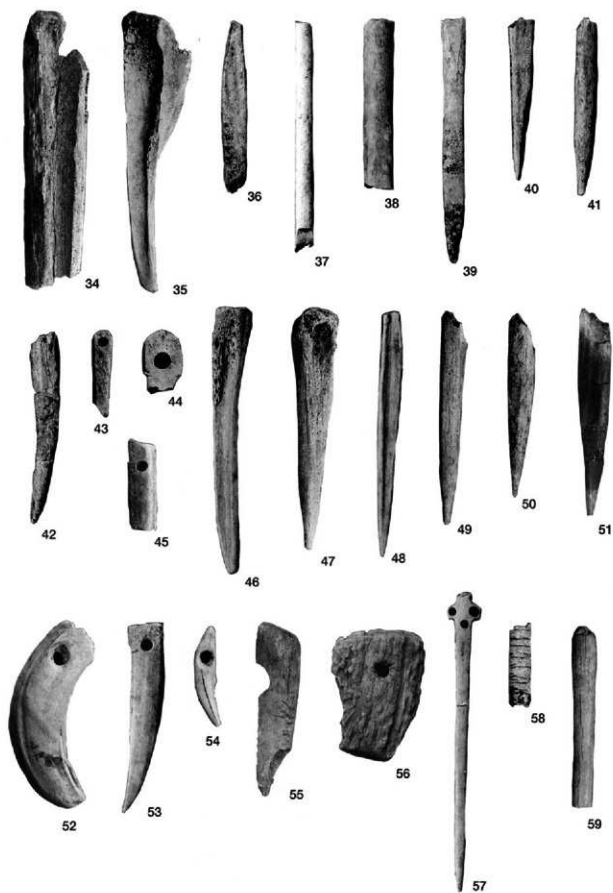


写真 2

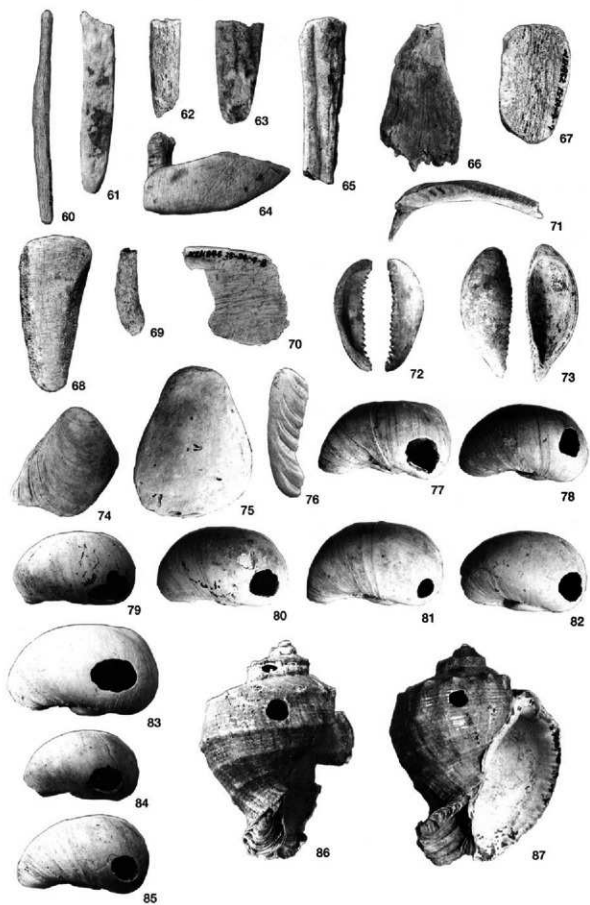


写真 3

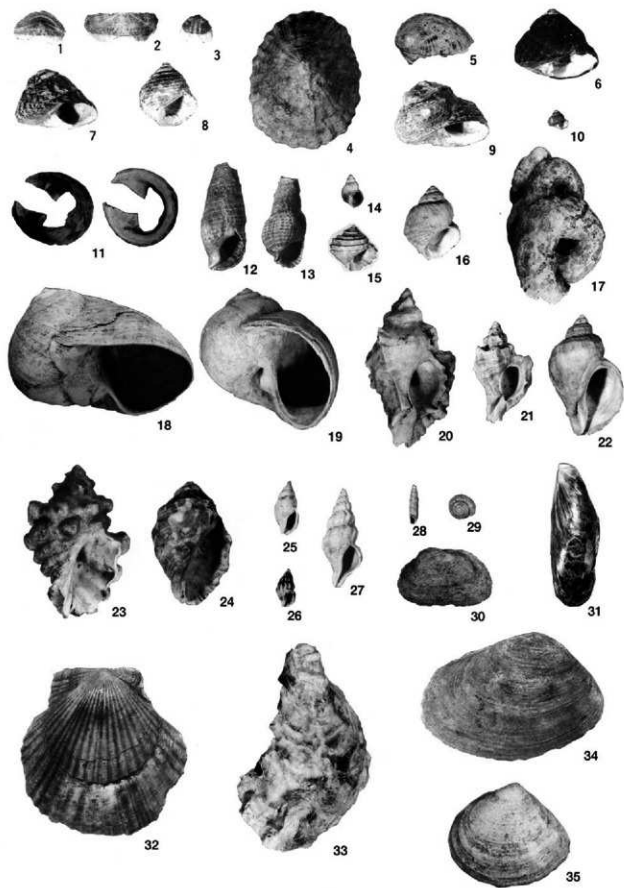


写真 4

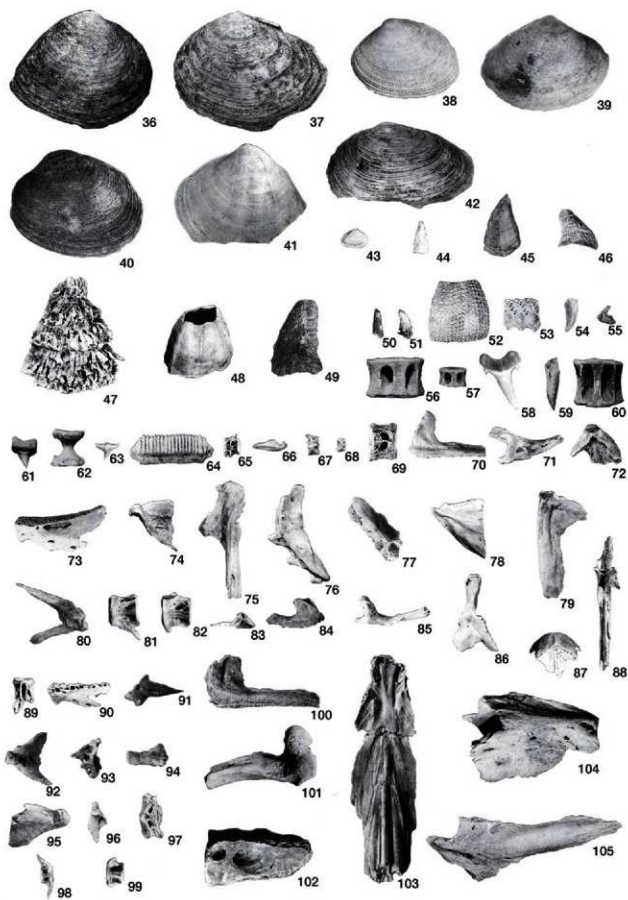


写真 5

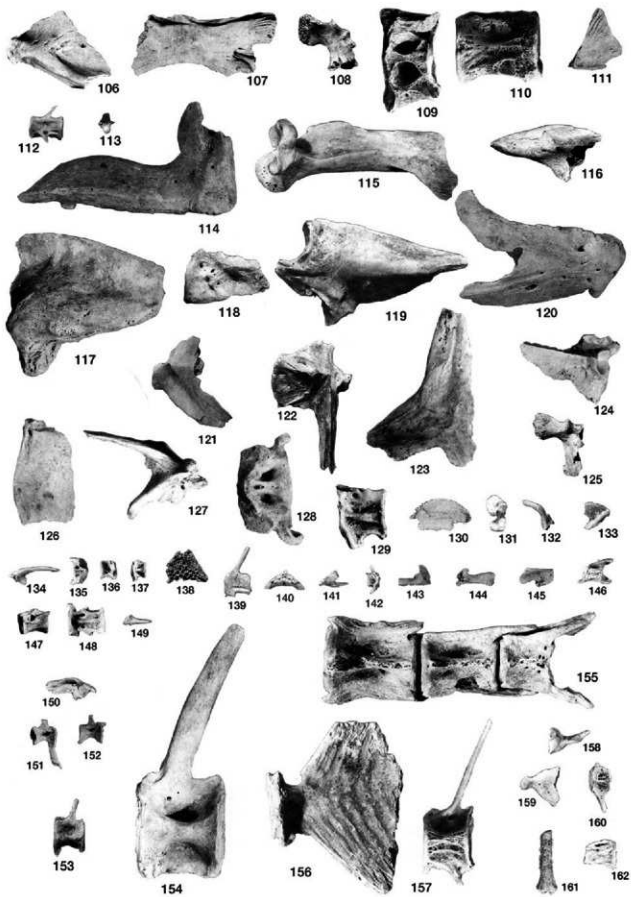


写真 6

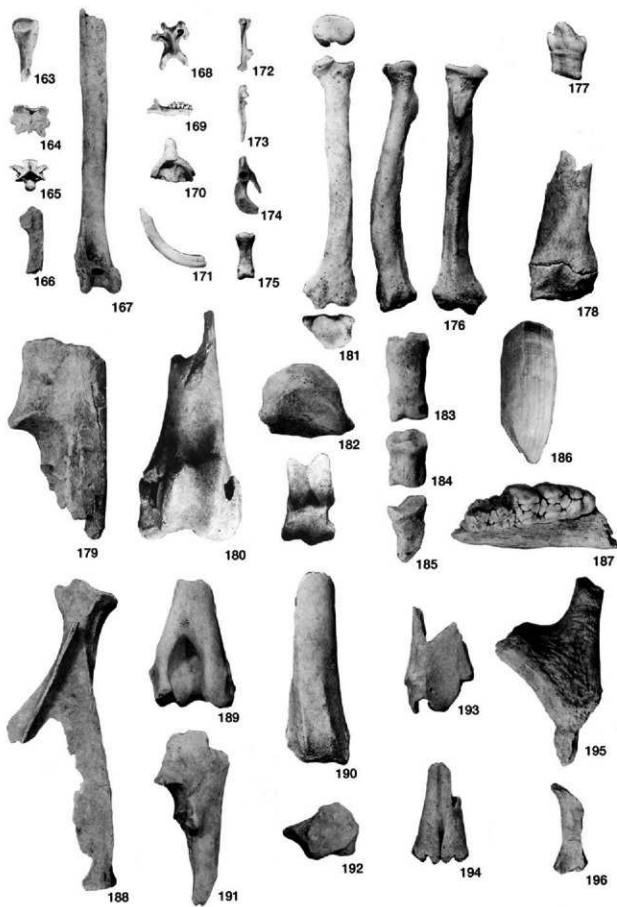


写真 7

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかざわはまかいづか1997 こっかくしぜんいぶつへん							
書名	中沢浜貝塚1997-骨角器・自然遺物編一							
副書名	陸前高田市内遺跡発掘調査報告書3							
巻次								
シリーズ名	陸前高田市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第23集							
編著者名	佐藤正彦 熊谷賢							
編集機関	陸前高田市教育委員会 (担当: 陸前高田市教育委員会事務局社会教育課)							
所在地	〒029-2205 岩手県陸前高田市高田町字館の沖110 TEL 0192(54)2111							
発行年月日	西暦 2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかざわはまかいづか 中沢浜貝塚	いわてけんりくぜんなかだし 岩手県陸前高田市 ひろたちちょうなかざわ 広田町字中沢 182-4ほか		NF88- 1298	38度 57分 06秒	41度 41分 49秒	1997.7.15 ～ 1997.9.25	53.3m ²	現状変更 (住宅改築 に伴う緊急 発掘)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物		特記事項	
中沢浜貝塚	貝塚	縄文時代	貝塚		縄文土器 (早~後期) 石器 骨角器 自然遺物 (動物遺存体) 人骨			

瀬沢貝塚発掘調査報告書

— 平成10年度発掘調査分 —

I 調査に至る経過及び調査過程

平成10年度における発掘調査箇所は、遺跡内における東側地区の、瀬沢バス停東側の荒地地で、遺跡の所在を示す標柱の設置箇所周辺である。

調査の目的は、「宅地への誘導路及び駐車場の造成」に伴う緊急発掘であり、陸前高田市教育委員会社会教育課が調査を担当した。

平成10年2月4日、同事業の実施にあたり事業主体者である佐藤耕悦氏から、文化財保護法第57条の2第1項の規定に基づく発掘の届出が当教育委員会になされた。これを受けて当教育委員会では、工事予定地内の現地踏査等を行い、事前の調査(本調査)が必要との判断から、現地調査書を添え、平成10年2月4日岩手県教育委員会事務局文化課に進達した。

平成10年2月13日、岩手県教育委員会教育長より事前の調査(本調査)の指示があり発掘届出者へ通知した。その後、平成10年7月3日付け陸高教社第94号で、文化財保護法第98条の2第1項の規定により発掘調査の届出を文化庁にし、平成10年7月16日から平成10年9月10日まで発掘調査を実施した。

調査面積は325㎡である。

II 遺跡の立地と環境・研究史

1 遺跡の位置と周辺の環境(第1～3図)

瀬沢貝塚は、岩手県陸前高田市小友町字瀬沢地内に所在し、市の中心部から南東方向へ直線にして約5km、岩手県交通広田半島線矢の浦経由の瀬沢バス停付近に位置する。

本遺跡の所在する小友町は、市域の東南に位置する。南は本市広田町に接しその一部は広田湾に面する。西は米崎町、北は大船渡市に接し、東は太平洋に面している。地勢を概観すると、小友町は、二つの山塊と低地帯とからなる。低地帯は、町のほぼ中央部に位置し、広田半島を区切るように、北西から南東方向に広がり、町をほぼ南北に二分している。低地帯は、現在水田や畑地に利用されているが、葦等の植物遺存体が多量に埋没しており、縄文時代には海が湾入し、広田半島は島であったと考えられている。低地帯の規模は、幅500m、長さ3km、標高7m以下である。

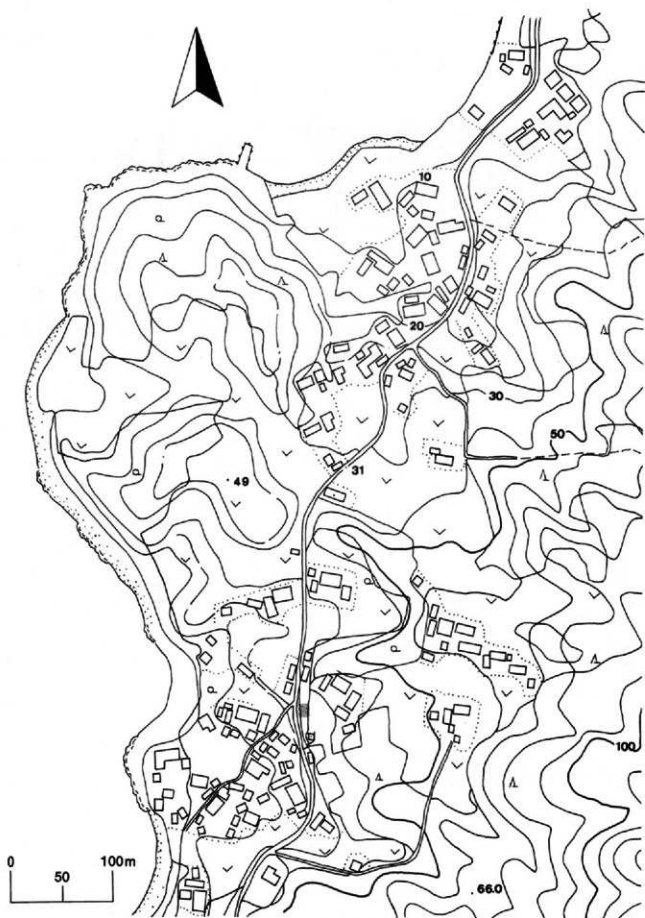
低地帯の北側には、山塊の一つである箱根山(446.8m)がそびえ、大船渡市との境界をなし、山の南側斜面は標高200m以下では比較的広範で緩やかな斜面が形成されており、岩井沢・西の坊・上の坊・松山・三日市などの集落がある。また、山頂からは南東方向に長さ4.5kmほどの傾斜の緩やかな丘陵が海岸まで延び、前面は海蝕され、複雑な海蝕地形を形成し、国の天然記念物「蛇ヶ崎」となっている。

低地帯の南側には、もう一つの山塊である仁田山(254m)がそびえ、山頂部で広田町との境界をなしている。この仁田山の山麓は、標高100m以上では急峻な斜面となっているが、100m以下では傾斜もゆるみ、50m付近に瀬沢・矢の浦・沢辺・新田などの集落が形成されている。

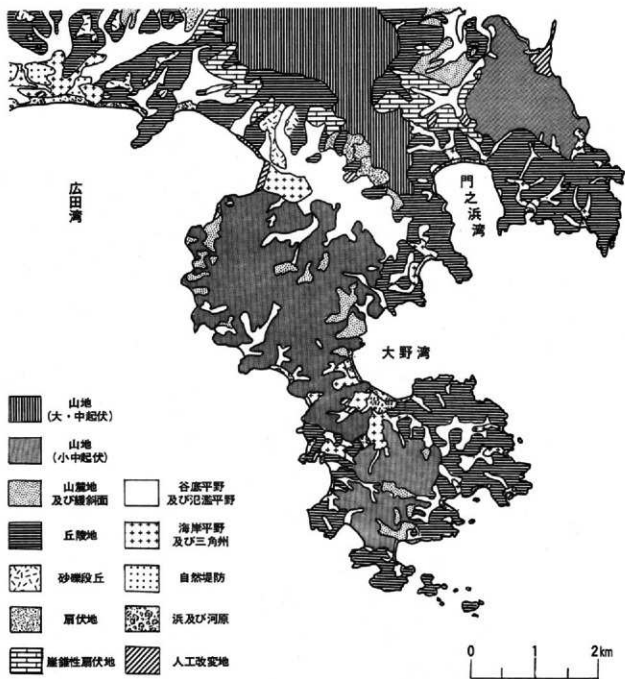
小友町における遺跡の分布上の特色としては、仁田山山麓に多くの遺跡が密集していることがあげられる。狭い範囲の中で、30ヶ所以上の遺跡が周知され、このように狭い範囲の中に遺跡が集中する地域は、本市では他に例がない。また、遺跡の時期を見ると、山の西側斜面は縄文時代の遺跡が主体であるのに対し、東側斜面においては、奈良・平安時代頃と推定される遺跡が集中しているの



第1図 瀬戸員埠位置図



第2圖 瀧沢岡地形図



第3図 地形分類概念図

が特色で、前面に広がる低地帯において水田耕作が、この時期から行われていた可能性を示している。

瀬沢貝塚は、仁田山の西側斜面に広がる標高10～40mの丘陵の先端部にあり、前面には広田湾が広がる。遺跡の時期は、縄文時代前期から晩期、弥生時代にかけてである。

2 層の堆積 (第4図)

調査地区C2グリッドとD2グリッドにかけての東壁とD2グリッド南壁の土層について観察を行った。13層に分類される。層の概要については以下のとおりである。

- 1層 表土ないし耕作土。極暗褐色を呈し、柔らかい。粘性は強く指でこすりあわせると棒状になる。厚さは5～15cm程である。大型の礫を含む。
- 2層 D2グリッドにおいて検出した。黒褐色(7.5YR2/2)を呈し、柔らかい。粘性は強く指でこすりあわせると棒状になる。厚さは最大で8cm程である。大型の礫を含む。
- 3層 D2グリッドにおいて検出した。黒褐色(7.5YR3/1)を呈し、柔らかい。粘性は強い。厚さは最大4cm程と薄い。
- 4層 D2グリッドにおいて検出した。黒褐色(10YR2/2)を呈し、柔らかい。粘性は強い。径3cm以下の礫、フレーク、微量の炭化物を含む。厚さは、最大8cm程である。
- 5層 C2グリッドにおいて検出した。黒褐色(7.5YR2/2)を呈し、やや柔らかい。粘性は弱く、サラサラしている。厚さは最大5cm程。
- 6層 D2グリッドにおいて検出した。黒褐色(10YR2/2)を呈し、やや柔らかい。粘性はやや強い。微量の炭化物、土器片、大型礫を含む。厚さは最大10cm程である。
- 7層 黒褐色(7.5YR3/2)を呈し、固い。粘性は弱くサラサラしている。土器片・大型礫を含む。厚さは最大8cm程である。
- 8層 黒褐色(7.5YR2/2)を呈し、やや固い。粘性は強い。微量の炭化物、土器片を含む。厚さは最大8cm程。
- 9層 黒色(10YR2/1)を呈し、固い。粘性は強い。粘性は強い。土器片・風化した花崗岩を含む。厚さは最大15cm程である。
- 10層 黒褐色(5YR3/1)を呈し、やや固い。粘性は強い。微量の炭化物、土器片、大型礫を含む。厚さは最大10cm程である。
- 11層 黒褐色(7.5YR3/2)を呈し、柔らかい。粘性は強い。微量の炭化物、大型礫を含む。厚さは最大9cm程である。12層 黒褐色(10YR2/2)を呈する。柔らかい。粘性は強い。炭化物・焼土なし。多量の遺物を含む。粘性は強い。ピット埋土である。
- 13層 黒褐色(10YR3/1)を呈する。柔らかい。粘性は強い。炭化物・焼土なし。3cm以下の礫を含む。粘性は強い。

3 周辺の遺跡 (第5図)

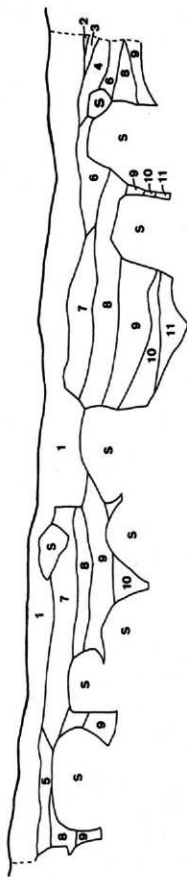
三陸沿岸には、多数の遺跡が所在している。大船渡周辺には、国指定史跡の蛸の浦貝塚・大洞貝塚・下船渡貝塚などの著名な遺跡が集中しているが、陸前高田市内においてもこれまで250を越す遺跡が確認されており、特に瀬沢貝塚の目の前に広がる広田湾周辺には、国指定史跡「中沢浜貝塚」(72)や大陽台貝塚(66)、瀬沢貝塚(52)、門前貝塚(34)、二日市貝塚(図幅外)、牧田貝塚(図幅外)といった数多くの貝塚を見ることができる。

現在確認されている遺跡の時代ごとの分布状況であるが、縄文時代早期の遺跡としては、市内に

瀬沢貝塚基本層序

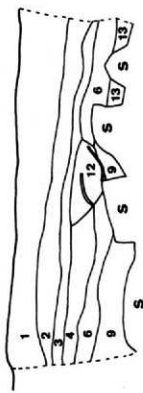
31.7m

C2 D2東壁セク



31.6m

D2南壁



第4図 層の堆積状況

おいては3遺跡が知られるのみで、小友町にある貝殻文系土器を主体とする上の坊遺跡(32)、広田町にある平安期まで続く中沢浜貝塚(72)、図幅外ではあるが矢作町の梅木遺跡が知られる。

縄文時代前期の遺跡は、小友地区では仁田山(標高254m)北斜面の海拔50m以下の地点に雲南遺跡(44)・小屋敷遺跡(45)、西側斜面には瀬沢貝塚があるが、瀬沢貝塚は前期前葉の限られた時期のみである。広田地区では仁田山の南斜面の海岸部に大陽貝塚(65)と大陽台貝塚(66)があり、東側には縄文時代晩期まで続く袖野Ⅰ遺跡(59)がある。このうち雲南遺跡・大陽台貝塚は大規模な遺跡であり、本市の縄文時代前期を代表する屈指の遺跡である。広田半島先端では、この頃大森山(標高147.2m)の南側に金室貝塚(80)、集遺跡(81)もみられるようになった。

縄文時代中期になると、遺跡の数は前期と比べると非常に多くなり、図幅内では19遺跡が知られる。米崎地区で確認できる遺跡は縄文時代中期以降のもので、中期のものとしては箱根山から伸びる丘陵上の広田湾岸に位置する堂の前貝塚(26)と、氷上山(標高874.7m)と箱根山(446.8m)との間の低地帯の北東部に位置する川内遺跡(24)の2遺跡が知られ、中期以降の米崎地区の遺跡の分布は、この箱根山麓と氷上山麓の二地区とに集中する特色を見せながら広がって行くこととなる。このころの小友地区の遺跡分布状況は、広田湾に面した仁田山の西側斜面沿いに、前期よりもより広範囲の分布をみせるようになり、鳥島遺跡(48)や矢の浦Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡等がその例といえる。また低地帯を挟んで箱根山側にある門前貝塚もこの頃の遺跡である。広田地区でも中沢浜貝塚周辺に中沢遺跡(71)や内田遺跡(73)などが広がり、これまで遺跡が確認されなかった大森山東側にも蒲田遺跡(76)といった遺跡があらわれはじめるようになった。

縄文時代後期になると各地区いずれもより遺跡数は増大し、広田地区では大祝遺跡(77)・黒崎遺跡(78)・岩倉遺跡(79)・久保貝塚(74)・泊遺跡(70)等が、小友地区では、先の海岸沿いにさらに南方へ瀬沢貝塚(52)や瀬沢Ⅱ遺跡(54)が見られるようになった。米崎地区では、佐野Ⅲ遺跡(22)・高畑Ⅱ遺跡(23)・梨野遺跡(25)に見られるように氷上山麓周辺にその範囲を広めていった。高田地区でも、この時期氷上山麓を中心に遺跡が広がる傾向を見ることが出来る。

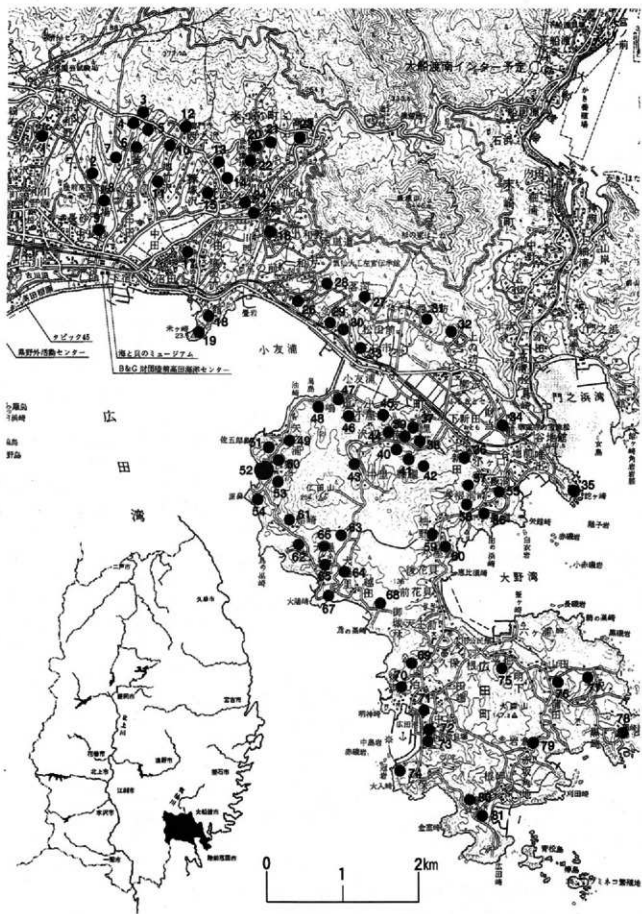
縄文時代晩期から弥生時代にかけては、あまり遺跡は発見されておらず、晩期は広田地区では中沢浜貝塚(72)・久保貝塚(74)・袖野Ⅰ遺跡(59)、小友地区では矢の浦Ⅲ遺跡(50)・瀬沢貝塚(52)・瀬沢Ⅱ遺跡(54)、米崎地区では川内遺跡(24)・梨野遺跡(25)・佐野Ⅲ遺跡(22)が知られるのみで、弥生期にいたっては、中沢浜貝塚(72)・小長洞遺跡(56)・梨野遺跡(25)・山崎遺跡(図幅外)・釘の子遺跡(図幅外)の5遺跡のみである。

以上、縄文時代から弥生時代にいたる遺跡の分布の概要を述べたが、市内の遺跡研究はこれまで縄文期の貝塚中心であり、縄文以外の遺跡の調査例は、平安時代の川内遺跡(24)・貝畑貝塚(1)・友沼遺跡(図幅外)が知られるのみで、旧石器時代の遺跡にいたっては全く知られていない。

4 瀬沢貝塚の研究史

陸前高田市における遺跡を、初めて文献で紹介したのは、本市小友町出身の鳥羽源藏である。明治29年、鳥羽は東京人類学会雑誌129号において「陸前国気仙郡ノ石器時代遺跡」を発表し、沢辺(現雲南遺跡)・門前の2遺跡を紹介した。沢辺においては、土器の散布状況や、土器の胎土・色調・文様などについて触れ、門前については貝類や骨片が出土したことを報告している。鳥羽は、文末において「専門家ノ来テ実地調査ヲ待ツ」と結び、これを受けるようにして、明治32年7月、八木英三郎による門前貝塚・瀬沢貝塚の考古学的な調査が実施された。

八木による瀬沢貝塚の調査では、貝層は薄く一尺に達せず、分布の範囲が狭いことが報じられて



第5図 周辺の遺跡

いる。出土遺物については、文書及び図版で詳しく報じられており、特に燕尾形離頭銛頭・組み合わせ式ヤスなど優れた骨角器が報告されている。また、日本で最初のウサギの骨の出土も報告されている。

次いで明治40年1月に野中完一によって発掘調査が実施され人骨1体を得ている。

瀬沢貝塚の発掘調査で特に重要なものは、大正6年に実施された松本彦七郎による調査であろう。その貝塚調査の動機について、「貝塚の猪及鹿に各二型あり」（動物学雑誌第339号）で「問題の鹿が現生の内地鹿よりも進んだ進化段階にある事は略確実である。唯それが内地鹿型より進化してこの段階に到達したものか、又は別に大陸より侵入した真の赤鹿の一種であるかは今後の問題である。予は遠からずこの問題を解決せむ事を期する」「予は今春該貝塚の实地探査を以て是等猪及鹿の本体を突止めんと欲する」と述べ、イノシシ・シカの調査が目的であることを述べている。この調査によって松本は、「予の新石器時代観」（動物学雑誌第342号）、「宮古島里浜及気仙郡瀬沢貝塚の土器 附 特に土器紋様論」（現代の科学第7巻第5号・6号）、「宮古島里浜及気仙郡瀬沢貝塚の石器」（現代の科学第9巻第2号）等の一連の論文を発表している。

「予の新石器時代観」においては、新石器時代が長期間に及ぶこと、遺跡の層は介床・獣床・土器床に区分され、層を細分し具体的に説明しており、当地区における科学的な層位学的研究法の嚆矢とされるべきものであろう。

「宮古島里浜及気仙郡瀬沢貝塚の土器 附 特に土器紋様論」「宮古島里浜及気仙郡瀬沢貝塚の石器」においては、里浜貝塚（宮城県）出土の土器・石器を、瀬沢貝塚出土のものと比較し、特に土器については科学的な縄文時代研究の基礎的論文として、今日でも高く評価されている。

昭和初期から、昭和20年代まで、気仙地区における貝塚調査は下火となる。行政的な措置によって発掘に制限が加えられたこともあるが、戦争による影響は大であった。この時代における調査は気仙管内で数例があるのみで、瀬沢貝塚での発掘例はない。

昭和20年代後半、戦争も終わり、戦後復興の中で再び気仙地区の貝塚調査が行われるようになった。昭和30年代から昭和40年代にかけては早稲田大学・慶応大学を中心とした科学的・総合的な発掘調査が実施されるようになり、昭和46年には慶応大学によって瀬沢貝塚の発掘調査が実施されている。また、昭和33年には陸前高田市出身の東登によって中沢浜貝塚・瀬沢貝塚等から出土した骨角器をもとに「気仙縄文式時代の骨角製漁撈器具考」が著され、優れた釣針・銛が紹介されている。

昭和50年代になると発掘の性格が、学術的な調査から、大規模開発に伴う事前の緊急発掘へと変化する。瀬沢地区においても開発の波は避けられず、昭和50年には開田に伴う緊急発掘が実施され、本報告も同様である。

瀬沢貝塚は、これまで数多くの発掘調査が実施され、学史的にも重要な遺跡である。この遺跡が消滅することなく、開発と調整しながら遺跡の保存を図ることが、今後の重要な課題である。

Ⅲ 調査と整理の方法

1 調査方法

(1) すべて手掘りにより掘り下げた。

- (2) 基軸線の設定は、任意の基準杭を原点として、それと他の基準杭の2点間を結んだ直線と、原点に直交する直線を基軸線とした。基準杭を結んだ基軸線は磁北より13度西偏している。グリットの設定は、3 m幅の区画ごとに東西方向を西から順にB～Eのアルファベットで示し、同様に南北方向を南から順に1～3のアラビア数字で示した。グリットの名称は各区画内における北西方向の交点の杭によりB1、C1、D1のように表した。
- (3) 遺物の取り上げは原則として、遺構内出土のものは、遺跡番号(UZ)、出土年月日、遺構名、グリット名、出土層位を記録し取り上げた。グリット名は、各グリットの北西に位置する杭の番号を用いた。

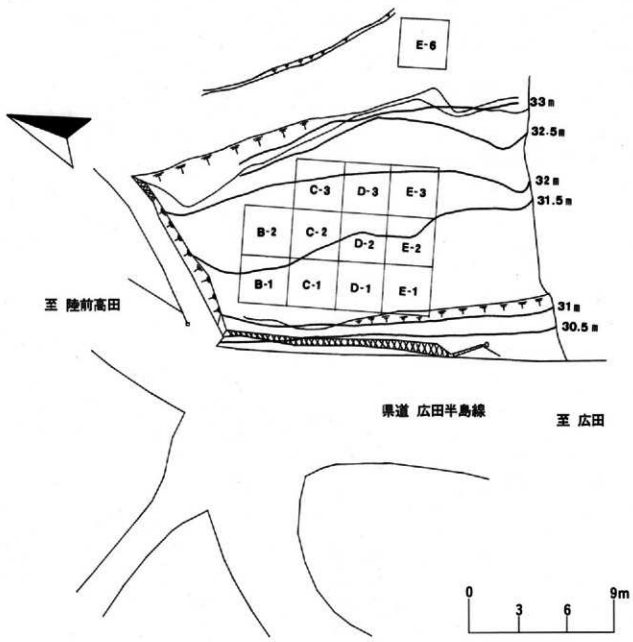
出土遺物のうち、攪乱層出土のもの、土器細片を除く遺物は原則として、遺物番号を付け平面図や遺物カードに出土レベル、位置、層位を付して取り上げた。また、貝や骨などを含む土や焼土の一部は分析のためビニール袋に入れ、持ち帰った。
- (4) 遺構の番号は、発掘時においてグリットごとに通し番号による遺構名を冠したが、整理の段階で、部分的に変更している。
- (5) 平面実測は、グリット軸に合わせた1 mメッシュを基本とし1/10の縮尺を用いた。
- (6) 写真記録は、35mmモノクロとカラーズライド1台、6×7cmモノクロ1台を用い、各種埋土堆積状況や断面、遺物の出土状況、完掘状況などについて行った。

2 室内整理

野外調査で得られた実測図、写真、遺物の各種資料は、室内整理の段階で次のとおり処理、整理し、報告書作成の基礎とするとともに資料化を行った。

- (1) 土器・土製品
発掘調査後、室内に持ち帰り整理を行った。57×39×13.5cmのコンテナで約55箱程度の出土量がある。水洗後、各遺物に注記を行い、各出土地点、層位ごとに仕分けを行い復元を行った。その後、拓本、実測、写真撮影の順で整理を行った。脆い遺物は、酢酸ビニルエマルジョン系ボンドを用いて補強した。
- (2) 石器
発掘調査後、水洗、フレイク類からの石器の抜き取り、台帳登録を行い、実測、計測、写真撮影を行った。石器は、約50点の出土量であり、データはすべてコンピューターに入力し、管理した。

石材の鑑定は、外部の専門家をお願いした。
- (3) 図面
図面は、遺構に関しては遺構カード、土器・土製品・石器に関してはそれぞれの遺物カードを作成した。遺構は縮小して、遺物は実大で実測、トレースを行い図化した。各実測図は遺構ごとに分類し、原図点検の上、報告書作成に必要なものについては第2原図を作成し、トレース、コピーをし、それを用いた。
- (4) 写真
写真はネガと密着焼き付けのものをアルバムに貼付して整理し、カラーズライドはスライドファイルに撮影順に収納した。



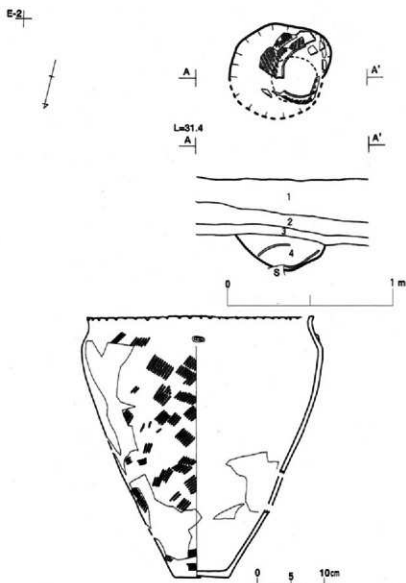
第6図 グリッド設定図

IV 発見された遺構

瀬沢貝塚での調査区は、花崗岩質の転石あるいは風化によって楕円形に変形した花崗岩の岩盤が発掘区全面で見られた。そのため、土の堆積は少なく、発見された遺構は、埋設土器1基のみであった。

埋設土器は、E 2グリットの5層上面において検出した。土器は、5層・6層を掘り込む土坑を設け、その中に埋納されていた。土坑の形状は、開口部では楕円形をなし、底部ではほぼ円形である。規模は、開口部の長軸65cm・短軸57cm、底径は約30cm、深さは55cmである。壁は緩やかに傾斜している。

埋設された土器は、粗製の深鉢である。口縁は小波状口縁をなし、口縁部の断面形は、肩部で最大幅を測り、頸部で縮まり若干外反している。文様は、口縁部は無文であり、肩部の一箇所にみに二個一対の貼瘤を有している。肩部から体部下端にかけては、単筋斜縄文が施文されている。大きさは、口径33.5cm、底径8.0cm、高さ39.5cmである。



第7図 埋設土器

V 遺構外出土遺物

1998年の瀬貝塚の発掘調査では、遺構外から土器・土製品・石器・石製品が出土している。ここでは、土器・土製品・石器・石製品の順にその概要について触れる。

1 土器

土器は、図化した資料41点、土器片が53cm×35cm×13cmのコンテナで約45箱が出土している。出土した土器の時期は、縄文時代前期・中期・後期・晩期があり、これらは各層から出土しており、層的に土器群を把握したわけではない。以下、縄文時代前期のものを第Ⅰ群、中期のものを第Ⅱ群、後期のものを第Ⅲ群、晩期のものを第Ⅳ群、弥生時代のものを第Ⅴ群、形式不明のものを第Ⅵ群として分類する。

第Ⅰ群

縄文時代前期前葉のものである。植物繊維を胎土に含み、大木1式に相当するものである。原体の施文方法により細分が可能である。

第1類

羽状縄文を有するものを一括した。結束の有無により細分が可能である。

A. (第16図44～49)

結束をもつ羽状縄文を有するものである。6点を図示したが、出土数は少ない。44・45は平縁深鉢の口縁部片、46～49は深鉢の体部片である。胎土には44・45・48・49では微量の、46・47では少量の植物繊維を含む。原体は前々段多条である。44・45は、口縁は外傾し、口唇部直下まで縄文が施文されている。

B. (第16図50～第17図65)

結束をもたない羽状縄文を有するものである。第1類と比べ数は多く16点を図示した。50は平縁の深鉢の口縁部片で、他は深鉢の体部片である。64は厚さ5mm程と薄い。胎土には、58では多量、51・52・54・59・61は中量、60・63は少量、50・53・55～57・62・65では微量の植物繊維を含んでおり、64では見られない。原体は、すべてLRlとRLrの前々段多条である。50は口唇部直下まで原体が施文され、61は幅の狭い羽状縄文を有している。

第2類 (第17図66～第18図85)

ループ文を有するものである。数は少なく20点のみの出土である。

66～76は深鉢の口縁部片である。口縁は、66～68・70～75は平縁をなし、76では山形突起を有し、69では口唇部に4単位の突出部をもち、この突出部の表面には縦位の貼付文が施文されている。口唇部の上端は76では平坦に調整されているが、他は丸みを帯びる。口縁部の断面形は、66・68・69・71・75は外反、67・72・73・74・76は外傾、70は内湾である。ループ文は、口唇下に施文される幅の狭い縄文帯の下に施文されるもの(70～76)と、口唇部直下からループ文が施文されるもの(66～69)とがある。ループ文は67では三段、69では四段、68では五段、66では六

段有している。ループ文下には、67では単節斜縄文が、66では前々段多条の縄文が、69ではRLr・LR1の前々段多条の結束の無い羽状縄文が交互に施文され菱形の縄文を描き、68ではLRの単節斜縄文(縦回転)が施文され、さらにその下面にはLRの単節斜縄文が縦位・横位に施文され菱形の縄文となっている。胎土には植物繊維の混入が見られ、66・68では多量に見られる。また70・75では粗砂の混入が多く見られる。68では補修孔を有している。

77～85は深鉢の体部片である。いずれも細片であるが79は一段、77は二段、他は三段のループ文が見られる。ループ文は単節縄文によるものが多く見られるが84は複節の縄文を用いている。ループ文下には77～79・82・83では単節の斜縄文が、85では複節の斜縄文が、84では単節斜縄文による結束の無い羽状縄文が施文されている。胎土には植物繊維の混入が見られるが、81・85では多量に見られる。77では粗砂が多い。

第3類 (第8図1・第18図86～第22図142)

斜縄文を施文するものである。原体により細分が可能である。

第8図1は口縁部で最大幅を測る平縁深鉢の口縁部から体部下半にかけてのもので、底部は欠損する。口縁部の断面形は内湾で、口唇部の上端は若干であるが平坦に調整される。地文は、口唇部直下から体部下半にかけて単節斜縄文(RL)が施文されている。

86～97は深鉢の体部片で、単節斜縄文(LR)を施文する。

98～113は深鉢の体部片で、単節斜縄文(RL)を施文する。109は原体末端部の縛り痕を有している。

114～119は、深鉢の体部片で、前々段多条(RLr)の原体を施文するものである。

120～123は、燃りの異なる二本から三本の原体を用いるものである。121は平縁深鉢の口縁部から体部上半にかけて、123は口縁部から体部中央にかけてのもので、口縁の断面形は、121は外傾、123は外反で、121では口唇部内面は斜めに調整され、123は口唇部の上端は平坦に調整されている。原体の施文は口唇部直下から行われ、原体は121ではLR・RLの単節斜縄文、123はLR・RLの単節斜縄文とLR1の前々段多条の原体が用いられている。120・122は深鉢の体部片である。ともに燃りの異なる原体が使用され、原体は前々段多条(LR1)と単節斜縄文(RL)である。

124～127は、深鉢の体部片で、燃りの異なる二本の前々段多条の原体を用いるものである。126は底部付近のもので、底部近くは縷杉状の文様となっている。

128～132は、深鉢の体部片で、燃りの異なる二本の原体を回転させ菱形状文を施文するものである。128・132は前々段多条、129～131は単節斜縄文と前々段多条の原体を用いている。

133は、深鉢の体部片で合捺の原体を用いている。

134～137は、深鉢の体部片で、直前段反捺(L<RL)の原体を用いる。

138～141は、深鉢の体部片で、複節斜縄文(RLR)を用いている。

142は、深鉢の体部片で、原体不明のものである。

第II群

本群は縄文時代中期に属すると思われるものである。形式的には、大木8b式・大木9式・大木10式に相当する。

第1類 (第8図2・3、第22図143～145)

大木8b式に属すると思われるものである。出土点数は少ない。5点を図示した。

2・3は、深鉢の口縁部から体部下半にかけてのもので、3は口唇部が欠損している。器形は、体部中央で締まり口縁部が大きく開き、口縁部で最大幅を測る。口縁部の断面形は、2では外傾である。文様は、口縁部に無文帯を有し、2では二条の隆線と一条の沈線によって、3では刺突の施された沈線によって体部文様帯と区画されている。体部には隆沈線によって、渦巻き文と区画文が描かれている。

143・144は波状口縁をなす深鉢の口縁部片である。口縁の断面形は内湾で、144では波頂部にS字状の隆線を組み合わせた突起を有している。文様は、143では口縁部には口縁の形状に沿った一条の沈線と二条の隆線が施文され、体部には二条単位の隆沈線が施文されている。144は口縁部に無文帯を有し、横位隆線によって体部文様帯と区画されている。145は深鉢の体部片である。隆沈線によって渦巻き状の文様が描かれている。

第2類 (第22図146～第23図147)

大木9式に属すると思われるものである。出土点数は少ない。146は平縁深鉢、147は波状口縁をなす深鉢の口縁部片である。口縁部の断面形は、146は内湾、147は外反である。文様は、口縁部は無文で、口縁部から体部に無文帯が垂下し、縦位の区画文を描いている。

第3類 (第23図148～150)

大木10式に属すると思われるものである。出土点数は少ない。148・149は深鉢の口縁部片である。口縁は148では波状口縁、149は平縁である。口縁部の断面形は、148は内湾、149は頸部で締まり外反している。文様は、口縁部は無文で、体部には沈線と磨消縄文により曲線文が描かれている。150は深鉢の口縁部片である。沈線と磨消縄文によって沈線が施文される。

第Ⅲ群

本群は縄文時代後期に属するものである。出土数は多い。

第1類

縄文時代後期前葉のものである。

A. (第23図151)

刺突文列を有するものである。出土数は少ない。151は平縁深鉢の口縁部片で、口縁部の断面形は内湾である。口縁に沿って一条の横位の刺突文列を有している。

B. (第23図152～154)

隆線によって文様を施文するものである。152は小波状口縁をなす深鉢の口縁部片である。口縁の断面形は内湾である。文様は、波頂部下に縦位の隆線が貼付され、隆線には竹管による鉛直方向と斜め方向からの刺突文が施文されている。口縁部と体部は横位隆線によって区画され、波頂部からの隆線が交わっている。体部には隆線による曲線文が描かれる。153は深鉢の口縁部から体部上半にかけてのもので口唇部は欠損する。口縁部の断面形は内湾で、二重口縁をなす。文様は、口縁部は無文で、体部には隆線による区画文が描かれ、区画文内には刺突文が充填されている。154は深鉢の体部片である。隆線による区画文を有し、区画文内には刺突文を有している。

C. (第8図4、第23図155～157)

隆線、あるいは連鎖状浮線と沈線によって文様を施文するものである。

4は、深鉢の体部片である。沈線と磨消縄文によって文様が施文され、部分的に沈線上に連鎖状浮線を有している。

155は波状口縁をなす深鉢の口縁部片で、波頂部には盲孔のある小突起を有している。口縁部の断面形は外傾である。文様は、小突起から体部に縦位に垂下する隆線と沈線が施文され、隆線には下方からの刺突を有している。156は深鉢の口縁部から体部上半にかけてのもので、口唇部は欠損する。口縁部と体部は横位の連鎖状浮線によって区画されている。口縁部は無文で貫通孔を有する。体部には沈線による文様が施文される。157は深鉢の体部片である。縦位の隆線と沈線による区画文を有しており、区画文内には列点文を有している。

D. (第8図5・6、第23図158～第24図168)

体部に倒卵形の文様を有するものである。

5・6は、深鉢の口縁部から底部にかけてのもので、ともに全体の半分程が残存する。口縁は平縁をなし、口唇部に山形の隆起を有している。口縁部の断面形は、頸部で若干締まり外反している。文様は、口縁部は無文で、山形の隆起下には、5では1個の、6では縦位に3個の盲孔を有し、隆起下から体部に倒卵形の文様が垂下している。

158～162・166～168は深鉢の口縁部片、163～165は深鉢の突起である。口縁部は、158・160～162・166～168は波状口縁、159は山形口縁である。口縁部の断面形は、158は外反、159・162は外傾、167・168は頸部で締まって外反、他は内湾である。口縁部と体部は、161では刺突文を有する隆線、167・168は隆線、158～160・162は沈線によって区画されている。口縁部文様帯は幅の狭いものが多く見られ、160では盲孔、167では隆線・貫通孔・盲孔を、168は隆線・盲孔が施文されている。

E. (第24図169・170)

平行する数条の沈線によって、直線文・弧状文・渦巻き文を施文するものである。169は口縁部から体部上半にかけてのものである。口縁は平縁をなし、口縁部の断面形は外反である。口縁部には幅の広い無文帯を有している。170は頸部から体部上半にかけてのものである。頸部には横位沈線が施文され、体部には弧状沈線が施文されている。

F. (第9図7・8、第24図171～第26図193)

数条の平行沈線と磨消縄文による幅の狭い帯状文を、直線状あるいは曲線状に展開し、長方形・楕円形状・弧状等の区画文を意匠するものである。

171～193は口縁部資料である。171～182・189～191は、沈線と磨消縄文によって施文されるものである。口縁は、171・172・174・176～178・181・190は波状口縁、173・175・179は平縁、182・189・191は山形口縁をなしている。口縁部の断面形は、171～174・176～178・180～182・189～191では頸部で締まり外反、175は外傾、179は外反である。191では山形口縁の頂部付近の表裏に、横位沈線が二条巡っている。

183～188・192・193は、刻み・刺突文・列点文を有するものである。口縁は、183・184・186・188は波状口縁、185は平縁、187・192・193は山形口縁をなす。口縁部の断面形は、183・

185・187・192は頸部で締まり外反、193は外傾、186・188は外反、184は若干であるが頸部で締まり外反している。文様は、184～188では曲線文の交点に刺突文が、192は列点文が、193は区画文内に刺突文が充填され、183では弧状の刺突文が施文される。188の波頂部は、表裏に横位沈線が巡るものと、口唇部に刻みが施されるものがある。

7は、器種不明のものである。口縁は平縁をなし、口縁部の断面形は外傾である。文様は、口縁部に沈線と磨消縄文により区画文が描かれている。8は、ミニチュア土器である。口縁は平縁をなし、口縁部の断面形は内湾である。

第2類 (第9図8～14、第26図194～第28図221)

縄文時代後期中葉のものである。

A. (第26図194～200)

口頸部に、横位の長楕円文 (194・195・197・200)、あるいは横位の平行沈線と縦位の波状沈線 (196・198・199) を有するものである。194～200は深鉢の口縁部片である。口縁は、194は波状口縁をなし、195～198は平縁、199・200は突起を有している。口縁部の断面形は、194～196・198～200は内湾、197は内湾気味に立ち上がり口唇部下で「く」の字上に外側に折れている。文様は、194～198では、口縁部に幅の狭い無文帯を有しており、199は突起下と口唇部にボタン状の貼付文を有し、200では口縁部に地文が施文されている。

B. (第9図8～12、第26図201～第27図214)

沈線と磨消縄文によって、幅の広い曲線文・方形区画文・三角形の文様・直線文等を有するものである。

9は深鉢の口縁部から体部下半にかけてのもの、10は深鉢の体部中央から底部にかけてのものである。9は、口縁部は山形口縁をなし、口縁部の断面形は頸部で締まり外傾する。文様は、口縁部には、口縁の形状に沿って、二条の沈線が巡る。体部には沈線と磨消縄文によって文様が施文され、体部中央から上位には菱形の文様と弧状の文様が、中央から下半にかけて横位の区画文を有している。10は、沈線と磨消縄文によって曲線文が描かれる。

11は壺の肩部から底部にかけてのもの、12は壺の口縁部から体部上半のものである。11は、小型の壺で、文様は、沈線と磨消縄文によって、区画文が描かれている。12は、口縁部は平縁をなし、口縁部の断面形は外反である。文様は、口縁に平行して一条の沈線がめぐり、口唇部と沈線の間は縄文が施文されているが、沈線下は無文である。体部には、沈線と磨消縄文によって曲線文が施文されている。

201～206・211～214は深鉢の口縁部片、210は体部片、207～209は壺の肩部片・体部片である。口縁は、201・205は山形口縁、202～204・206・211は平縁をなす。口縁部の断面形は、201・203・204・206・211～214は頸部で締まり外反あるいは外傾し、202・205は内湾している。

C. (第9図13、第28図215～221)

沈線と、沈線に沿って施文される列点文、磨消縄文によって文様を意匠するものである。

13は、口縁部の突起である。突起は中空で、横位の貫通穴を4基有している。

215・216は深鉢の口縁部片、217は深鉢の口縁部突起、219～221は深鉢の体部片である。口縁

は、215は平縁、216は波状口縁をなし、口縁部の断面形は内湾である。文様は、口唇部直下まで施文されている。

D. (第9図14)

平行する数条の沈線と、沈線間に施された斜めの沈線を文様の特徴とするものである。1点のみ出土した。14は、壺の口縁部から体部上半にかけてのものである。口縁は、平縁をなし、口縁部の断面は内湾である。文様は、口縁部には口縁に沿って一条の横位の隆線が施文され、口唇部から弧状の隆線が2箇所横位の隆線に連結し、他は無文である。体部には、体部中央に横位沈線が二条巡り、沈線間に斜め沈線が施文されている。この横位沈線には、上位から数条からなる弧状の沈線が連結している。

第3類 (第28図222～224)

縄文時代後期後葉のものである。出土数は少ない。222は鉢の口縁部片である。口縁は平縁をなし山形突起を有し、口縁部の断面形は内湾である。文様は、口唇に沿って瘤状の突起が貼付され、頸部には横位の平行沈線と刻みが施されている。223は鉢の体部片である。瘤状の貼付文を有している。224は深鉢の口縁部突起で、口縁は外傾する。文様は、横位沈線に弧状の沈線が充填されている。

第IV群 (第9図15～第15図38、第28図227～第36図339)

本群は縄文時代晩期に属するものである。出土数は多い。形式的には、大洞B・BC・C1・C2・A・A'が相当する。

第1類 (第28図225～226)

大洞B式に相当するものである。225は鉢の口縁部片である。口縁は平縁をなし、断面形は、頸部で締め外反している。文様は、口縁部には横位沈線を有し、体部上半には磨消縄文と沈線によって区画文が施文されている。226は注口土器の口縁部片である。口縁は平縁をなし、断面形は内湾である。文様は、口縁部に玉抱き三叉文を有している。

第2類 (第9図15、第28図227～234)

大洞BC式に相当するものである。

15は浅鉢である。口縁は平縁をなし、口縁部の断面形は内湾である。文様は、口縁部には横位の沈線が二条施文されている。体部には、沈線と磨消縄文により、複雑な文様展開のk字文・C字文等が施文される。底部上には無文部を有し、体部文様部と二条の沈線によって区画されている。

227～230は鉢、231は深鉢の口縁部片である。口縁は227・231では小突起を有し、228～230は小波状口縁をなしている。口縁の断面形は、228は外傾で、他は内湾である。文様は、いずれも羊歯状文を有しており、228～230は体部地文部と一条あるいは二条の沈線によって区画されている。232～234は注口土器の口縁部片であるが、234では口唇が欠損している。口縁は232・233では平縁をなし、断面形は内傾である。

第3類

大洞C1式に相当するものである。本発掘では、極めて出土数が多く、器種も鉢・注口土器・壺

等多彩である。以下、器種ごとの説明をする。

〔鉢・浅鉢〕

A. (第9図16・第10図17、第28図235～第32図292)

鉢・浅鉢を一括した。細片が多く器形の不明のものが多い。文様は、沈線と磨消縄文による雲形状・大屈骨文・X字文等の曲線的な文様を有するものや、磨消された器面が深く彫られているもの、沈線と刻みによるもの等がある。

16・17は鉢である。16は完存で、17は口縁の一部と底部が欠損する。口縁は平縁をなし、口縁部の断面形は16が内湾、17が外傾である。17では、口唇に、沈線によって縁取られた突起と刺突文列を有している。口縁部文様帯は、16では二条の横位沈線と刻みを有し、17では二条の横位沈線を有している。体部には、ともに深い沈線と磨消縄文によって曲線文が描かれる。体部と底部は、16では二条の沈線によって区画されており、17では体部下半に三条の沈線を有している。16では底部にも一条の沈線を有している。

240・248・251・253・254・257・258・260は鉢と思われるものである。口縁は平縁をなし、口縁部の断面形は、240・248・251・254・258・260は頸部で締まり外反、253・257は内湾である。240・248・251は口唇が肥厚し、口唇に裝飾部と小突起を有している。口縁部は無文で、肩部に横位沈線と突起・刻みを有し、体部には曲線文が施文される。257・258・260は、口縁部に横位沈線と突起あるいは刻みを有するもので、体部には地文が施文されている。254は、口縁部無文帯を有し、肩部に沈線と刻みが施され、体部には地文が施文される。253は、口唇に刻みを有し、口縁部には横位沈線と刻み・小突起をもち、体部上半には曲線文、下半には地文が施されている。

274・278・288は浅鉢である。口縁は平縁をなし、口縁部の断面形は、274・278は外傾、288は内湾である。文様は、口縁部と底部直上に横位の沈線が巡り、沈線間に274・278では曲線文が、288では地文が施文されている。274は口唇に一条の沈線を有し、278は口唇が肥厚し裝飾が施されている。

235～239・241～247・249・250・253・255・256・259・261～273・275～277・279～287・289～292は、鉢あるいは浅鉢の口縁部から体部にかけての破片、252は体部片である。口縁はすべて平縁をなし、口縁部の断面形は、263・267～270・272・273・275・277・279・283・287・290は外傾、あとは内湾である。237・238・241・243～245・249・263・265・267～270・272・273・275・277・279・282～283・286・287・290・292は、口唇部が肥厚し、うち265・282では口唇に沈線が、他には口唇に裝飾が施されている。文様は、口縁部には一～三条の沈線が施文され、266のように半歯状文を残すもの、口唇から口縁部に一条の沈線が展開し、その上位に刻みが施されるもの(276・280・291)、口唇部に刻みが施されるもの(247・253・262・284・285)、口唇部に小突起を有するもの(236・239・246)、口唇部に弧状の沈線を有するもの(255・259)、口縁部に突起を有するもの(281)がある。体部には沈線と磨消縄文によって曲線が施されるものが多く見られるが、地文のみのものもある。267では、体部下半に横位沈線が二条、291では一条巡り、体部文様帯と地文部とを区画している。282では胎土に多量の金雲母を有している。

B. (第10図18～第11図22、第32図293～第33図298)

鉢で、口縁部に幅の狭い文様帯を有し、体部には地文が施文されるものである。

18・19は口縁部から体部下半にかけて、20・21は口縁部から体部中央付近にかけて、22は口縁

部から底部にかけて残存する。18～21は体部上半で最大幅を測り、22は口縁部で最大幅を測る。口縁は、18・21は平縁をなし突起を有している。19・20・22は波状口縁を有するもので、22では波状部に弧状の沈線を有している。断面形は、18～21では内湾気味に体部が立ち上がり頸部で締まり外反する。22では口縁部は内湾している。文様は、18では口縁部文様帯には三条の横位沈線・刺突文列・突起を有している。体部文様帯には、上半では沈線と磨消縄文による曲線文を有し、下半には縄文が施文され、上半と下半は三条の沈線により区画されている。19は、口縁部文様帯には四条の横位沈線と刻みが施され、体部には地文が施文されている。20は、口縁部は無文で、体部には沈線と磨消縄文によって曲線文を有し、口縁部無文帯と体部文様帯は三条の沈線によって区画される。三条の沈線上には部分的に突起が貼付されている。21は、口縁部は無文で、体部上半には横位沈線・刻み・突起による文様帯を有し、口縁部無文帯と体部地文部を区画している。22は、口縁部には三条の横位沈線が、体部には地文、底部と体部の境にも二条の沈線を有している。

293～297は口縁部資料である。口縁は、293～296・298は波状口縁をなし、297では小波状を呈する突起を有している。口縁部の断面形は、293～296は内湾で、297・298は頸部で締まり外反している。文様は、幅の狭い口縁部文様帯を有しており、体部には地文が施文される。口縁部文様帯には、293・295では沈線と刻みが施され、294・296～298では、横位沈線を有している。

〔注口土器〕(第13図28・29、第33図299～301)

28は、口縁から底部にかけてのもので、全体の1/5程が欠損する。朱彩されている。口縁は平縁をなし、口唇には彫刻の施された二個一対の突起がつく。口縁部は無文で、肩部と体部には曲線的な磨消縄文が施文され、肩部と体部は四条の沈線によって区画されている。

29は、口縁から体部上半にかけてのもので、極く一部が残存する。朱彩されている。口縁は平縁をなし、口唇には刻みと彫刻の施された二個一対の突起を有し、同様の突起は屈折部にもみられる。肩部は幅狭く作り出され刻みを有する。体部には曲線状の磨消縄文が施文されている。

注口土器で、口縁部文様帯および体部文様帯に、曲線的な磨消縄文を有するものである。299は口縁部から体部上半にかけてのものである。口縁部の断面形は内傾し口唇直下で外側に「く」の字状に折れ曲がっている。口縁の上位は沈線によって小波状を呈し、口唇の下位には刻み目を有している。肩部には二個一対の突起が巡り、口縁部文様帯と体部文様帯を区画する。300は肩部資料で、上位には刻み目を有している。301は口縁部から肩部にかけてのものがある。口縁部の断面は、内傾し口唇直下で外側に「く」の字状に折れ曲がっている。口唇には小突起と沈線が、肩部には二個一対の突起を有している。

〔壺〕(第33図302～305)

302・303は口縁部資料である。口縁は平縁をなし、口縁部の断面形は内傾で、口唇直下で「く」の字状に外側に折れ曲がる。口唇には、一条の沈線と、302では部分的に隆線による曲線文が、303では二個一対の突起を有しており、口縁部は無文である。304は体部片、305は肩部から体部上半の資料である。体部には曲線状の磨消縄文が描かれる。305では口縁部無文帯と体部文様帯が、横位沈線と刻み目によって区画されている。

〔台付鉢〕(第11図23)

23は口縁部から体部の一部にかけて欠損する。断面形は内湾し、口唇は「く」の字状に内側に

折れ曲がる。文様は、口唇には沈線と刺突が施され、口縁部には三条の横位沈線が、体部には沈線と磨消縄文による区画文が、脚部との境には二条の横位沈線が、脚部には縦位の沈線と刺突文列が施されている。

〔皿〕(第11図24～第12図27)

24は口径32.5cm・27は口径43.5cmと大型の皿、25・26は中型の皿である。口縁は平縁をなし、24・25では二個一対の突起を有している。断面形は、24・25は内湾、26・27は外傾しており、ともに口唇が肥厚し、内面には段を有している。文様は、口唇部には、24では単位の短い弧状の沈線が施され、口縁に平行する単位の長い沈線によって縁取られており、25では斜め方向からの刺突文が、26・27では深い沈線によって浮文が施されている。口縁と体部、体部と底部の境には横位沈線が施され、体部には沈線と磨消縄文によって区画文が施文されている。

第4類

大洞C2式に相当するものである。第3類と比較して出土数は少ないが、器種ごとの説明をする。

〔鉢・浅鉢〕(第14図30～32・第33図306～第34図320)

30は小型の浅鉢である。口縁は平縁をなし、断面形は内湾している。文様は、口縁部には三条の横位沈線が、体部には磨消縄文と沈線による区画文が、体部と底部の境には一条の沈線が施されている。

31は鉢である。口縁は波状口縁をなし、断面形は内湾し口唇部で肥厚している。底部には段を有しており、段の内側は一条の沈線によって縁取られている。文様は、口唇部には深い弧状沈線が施され、浮文状に彫刻されている。口縁部と体部、体部と底部の境には二条の横位沈線が巡り区画される。体部には沈線と磨消縄文によって区画文が描かれる。

32は鉢の口縁部から体部下半にかけてのものである。口縁は平縁をなし、断面形は体部上半で最大幅を測り、頸部で締まり外傾している。文様は、口唇には刻みが施され、口縁部には三条の横位沈線、体部には斜縄文が施されるが、体部文様は摩滅が著しい。

306～320は、鉢・浅鉢の破片である。307～320は口縁部片で、307～316は平縁、317～319は小波状口縁、320は平縁であるが部分的に突起を有している。口縁部の断面形は、308～310・314は内湾、306・307・316は頸部で締まり、306・307は外反、316は直立状に立ち上がっている。312・313・315は外傾、316は体部上半で最大幅を測り頸部で若干締まり、319は外傾であるが口唇部下で若干締まっている。文様は、316では口唇には突起と刻みを有し、口縁部は無文で、口縁部無文帯と体部文様部は三条の沈線によって区画され、体部には沈線と磨消縄文によって曲線文が描かれている。317・318は口縁部に幅の狭い文様帯を有するものである。317は三条の横位沈線と刻み、318は5条の幅の狭い沈線が施文されている。319は地文のみ有している。320は口唇に刻みと沈線・二個一対の突起を有しており、口縁部は無文で、体部には沈線と磨消縄文によって曲線文が描かれている。口縁部無文帯と体部文様部は四条の沈線によって区画されている。

〔台付浅鉢〕(第14図33)

33は台付鉢である。口縁は波状口縁をなし、口縁部の断面形は、体部上半で最大幅を測り、頸部で締まり外反している。文様は、口縁部に二個一対の突起と三条の横位沈線を有し、体部には地

文が施文されている。

【注口土器】(第14図34、第34図321・322)

34は口縁部から屈折部にかけてのものである。口縁は平縁をなし、口縁部の断面形は口唇下で締まり外傾している。口唇には弧状の沈線と点列を有しているが摩滅が著しい。口縁部には磨消縄文によって「X」字の文様を有し、磨消縄文の上下は三条単位の横位沈線によって区画されている。口縁部と体部の境の「く」の字状の屈折部には、二個一対の貼付文と刻みを有している。体部には沈線と磨消縄文による曲線文を有している。

321・322は体部片で、「く」の字状の屈折部に二個一対の貼付文を有し、下半には沈線と磨消縄文によって曲線文が描かれている。

【壺】(第35図323～327)

323は壺の口縁部から肩部にかけてのものである。口縁は平縁をなし、断面形は口唇下で「く」の字状に外側に折れ曲がっている。文様は、口縁部は無文で、口縁部と肩部文様帯の境には、三条の横位沈線・刺突文列・二個一対の貼付文を有している。324・325は口縁部の一部と肩部上半、326・327は肩部上半のものである。口縁部は無文で、肩部には沈線と磨消縄文による曲線文を有している。

第5類 (第15図35～38、第35図328～336)

大洞A式に相当するものである。出土数は少ない。

35・36は鉢である。口唇部は欠損する。口縁部には横位の沈線が巡り、体部は35では無文で、36では地文が施文されている。37は台付浅鉢である。口縁は平縁をなし、山形の突起を有している。口縁部の断面形は内湾である。文様は、口縁部と脚部に横位沈線を有し、体部には三角形状の文様が施文されている。口縁部内面にも一条の沈線が施文されている。

38は壺の口縁部から肩部にかけてのものである。口縁は平縁をなし、口唇下には隆線を有している。口縁部は無文で、肩部との境には、刻みの施された隆線が巡っている。

328～331は、鉢・浅鉢の破片である。口縁は平縁をなし、328・329は口唇に突起を有し、330では口唇に突起と沈線を有している。口縁部の断面形は内湾であるが、329では口唇部で若干外反している。文様は、328では工字文が、329では口縁部は無文で体部には工字文が、330では浮文状の工字文が、331では矢羽状の文様が施文されている。328～330は内面にも一条の沈線を有している。

332は壺の口縁部片である。口縁は平縁をなし、口唇直下には二条の横位沈線が巡り、下位の沈線上には二個一対の貼付文を有している。口縁部は無文である。333は壺の肩部から体部にかけての破片である。肩部には工字文を有し、体部は無文である。334～336は肩部片である。334・335は浮文状の工字文を有し、336は部分的に工字文に刻みが施されている。

第6類 (第35図337～第36図339)

大洞A'式に相当するものである。出土数は極めて少ない。

337～339は、鉢・浅鉢の破片である。口縁は平縁をなし、337では小突起を、338では山形突起を有している。口縁部の断面形は、337は内湾、338は頸部で締まり外反、339は外傾である。文

様は、何れも体部に變形工字文を有しており、337・338では区画された口縁部無文帯を有している。内面に、337では一条の横位沈線、338では一条の横位沈線と、口縁の形状に沿って巡る沈線を一条有している。

第Ⅴ群 (第36図340・341)

本群は、弥生時代のものである。出土点数は非常に少ない。

340は台付浅鉢の脚部片である。三条の横位沈線が巡る。341は鉢の体部から底部にかけての破片である。体部の上位には幅の狭い沈線による變形工字文が施文され、底部付近は無文である。

第Ⅵ群 (第15図39～43)

形式不明のものを一括した。

39・40は鉢である。口縁は平縁をなし、口縁の断面形は外反である。体部に地文が施文されている。

41・42は浅鉢である。口縁は平縁をなし、口縁の断面形は、41は外傾、42は内湾である。体部は無文である。

43は深鉢である。口縁部は欠損する。体部には地文が施文されている。

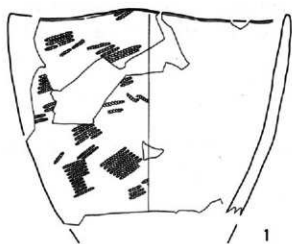
2 土製品 (第36図342～350)

出土した土製品は、土偶4点・耳飾り1点・器種不明のもの4点である。

342～345は土偶である。342は肩部から胸部にかけて残存し、右側乳房は欠落している。肩部と乳房の間に刺突文を有している。343は肩部片、344は脚部片で、それぞれ無文である。345は左側の脚から足先にかけてのものである。足先には刻みが施され、指が表現されている。無文である。

346は耳飾りである。全体の1/2程が残存する。中心に円状に沈線が巡り、沈線の内側は円形に窪んでいる。側縁にも一条の沈線を有している。

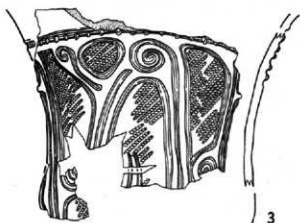
347～350は器種不明のものである。すべて無文である。347は中央に大きな穿孔を有している。348は算盤玉状に膨れ、貫通しない孔を4つ有している。349は先端部が尖り、350は棒状のものである。



1



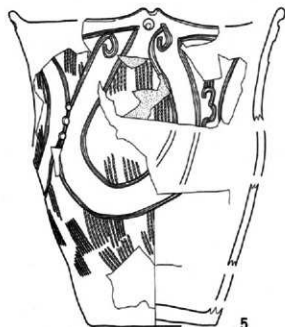
2



3



4



5



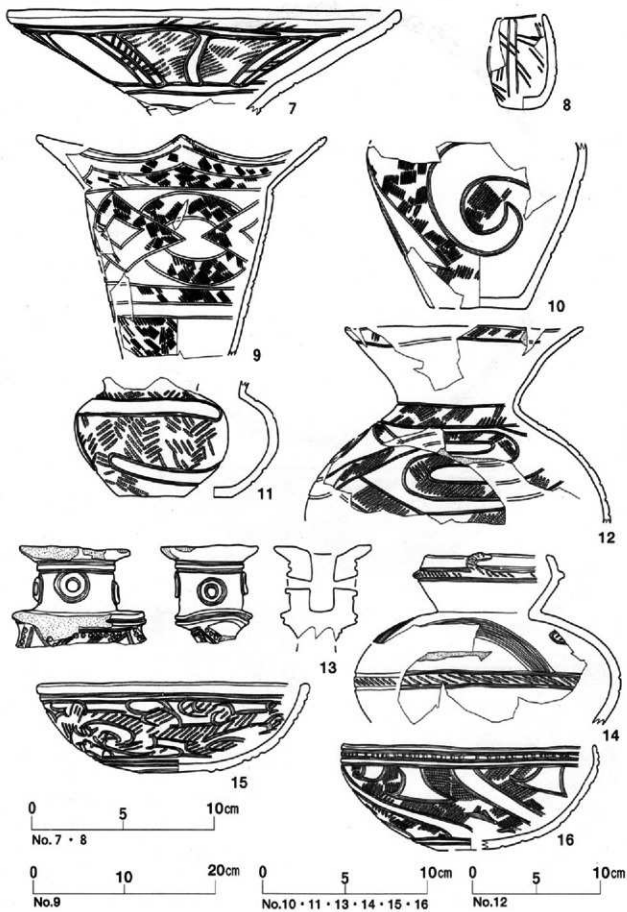
6

0 5 10cm
No. 1 • 3 • 4 • 5

0 5 10cm
No. 2

0 10 20cm
No. 6

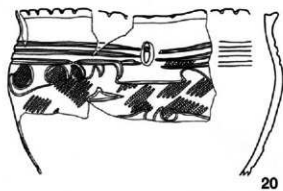
第8圖 遺構外出土器



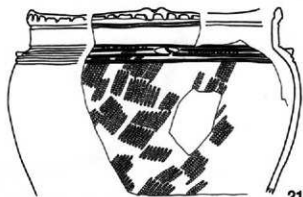
第9图 遺構外出土土器



第10図 遺構外出土土器



20



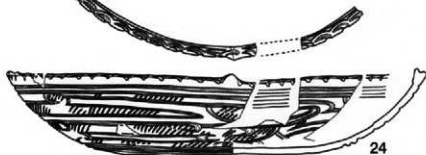
21



22



23



24

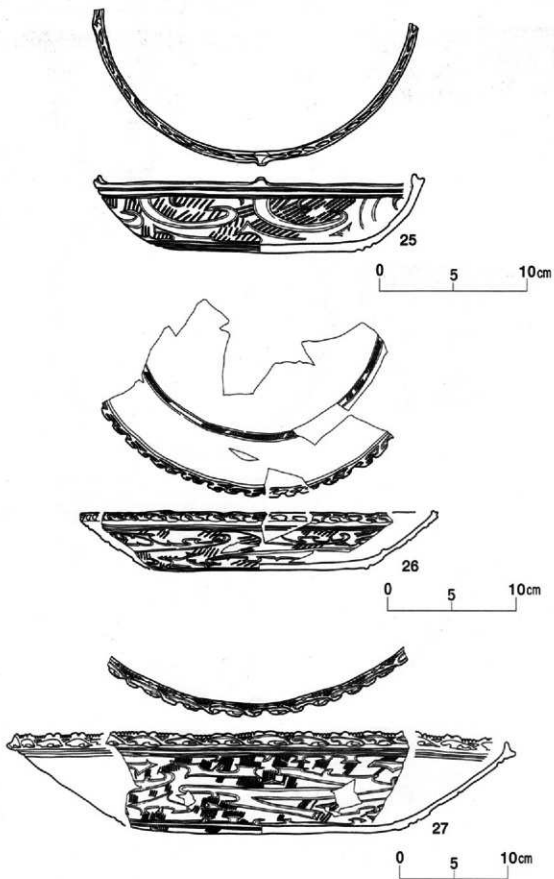
0 5 10cm

No.20 · 22 · 23

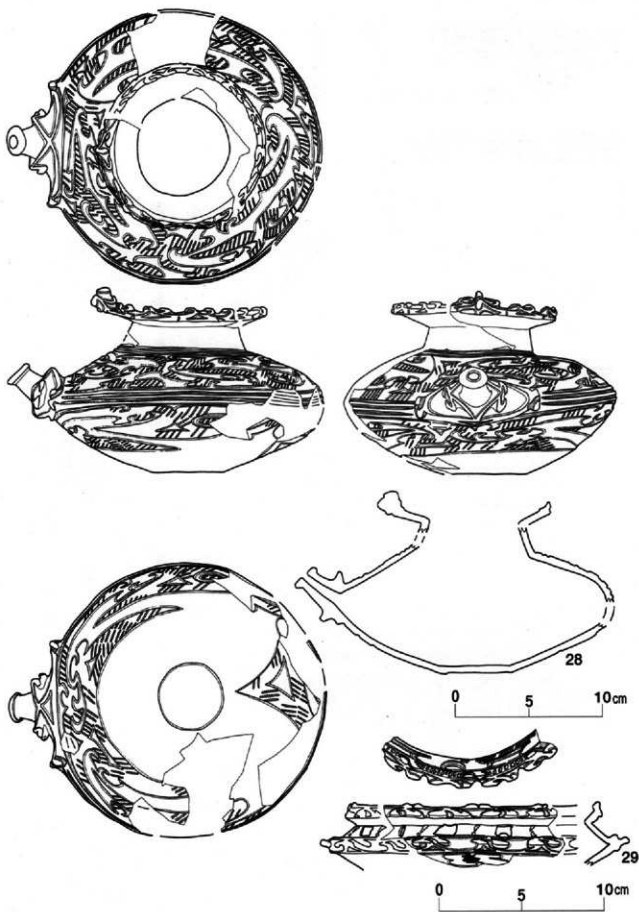
0 5 10cm

No.21 · 24

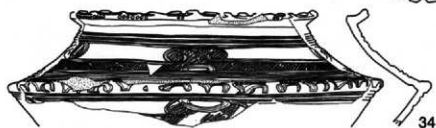
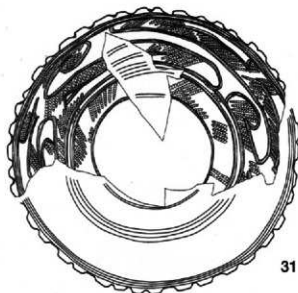
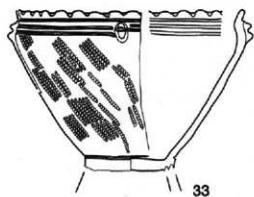
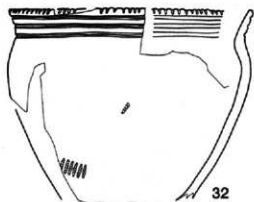
第11圖 遺構外出土土器



第12図 遺構外出土土器



第13図 遺構外出土土器



0 5 10cm

No.30

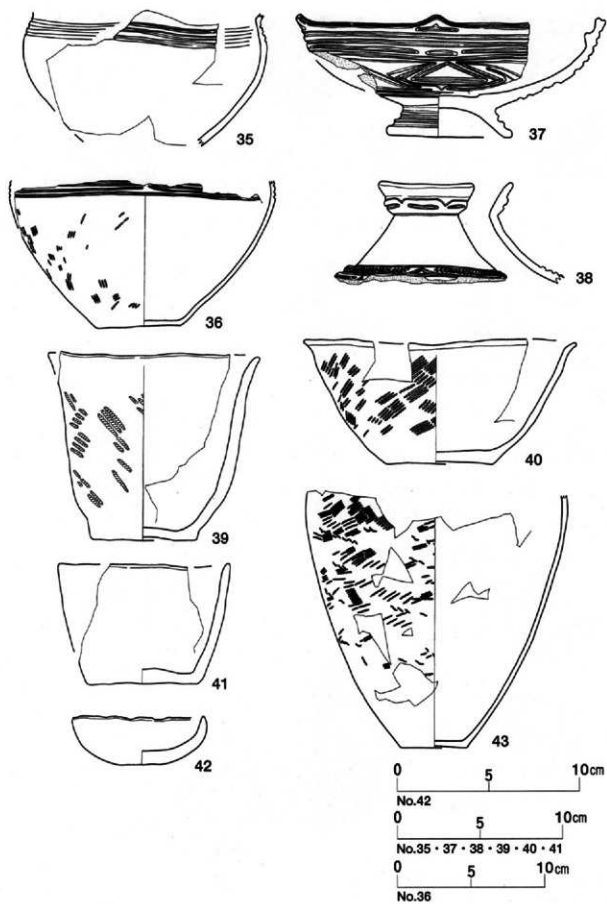
0 5 10cm

No.32・33

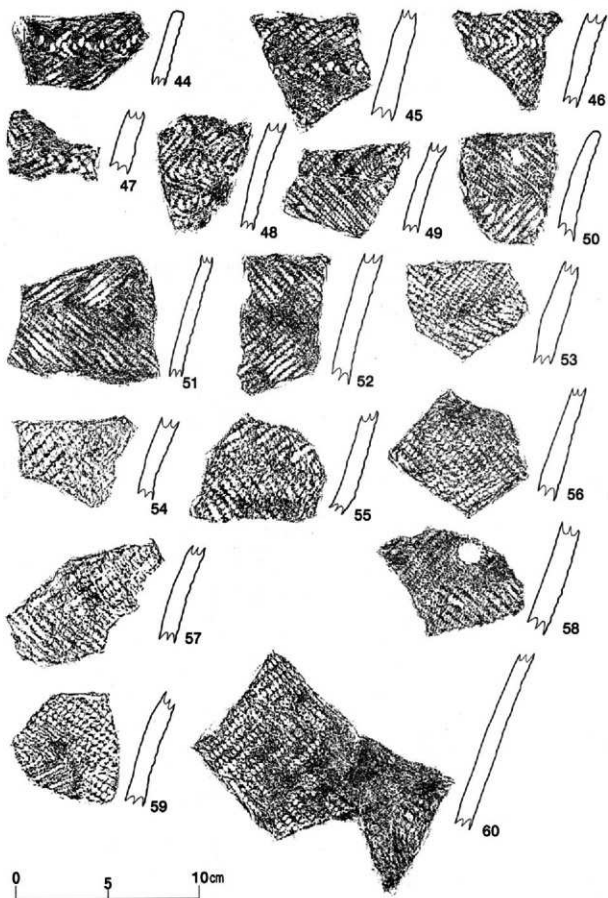
0 5 10cm

No.31・34

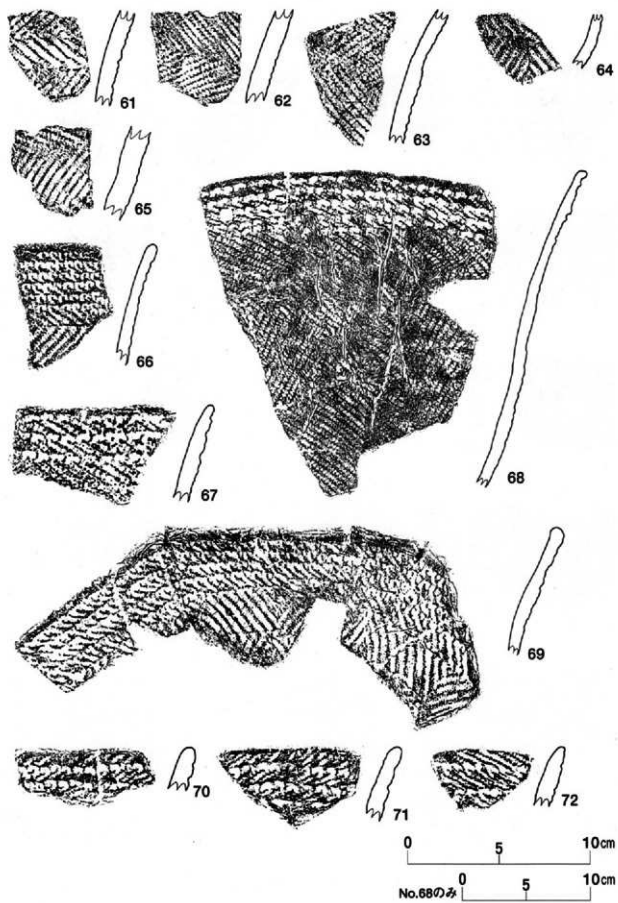
第14図 遺構外出土土器



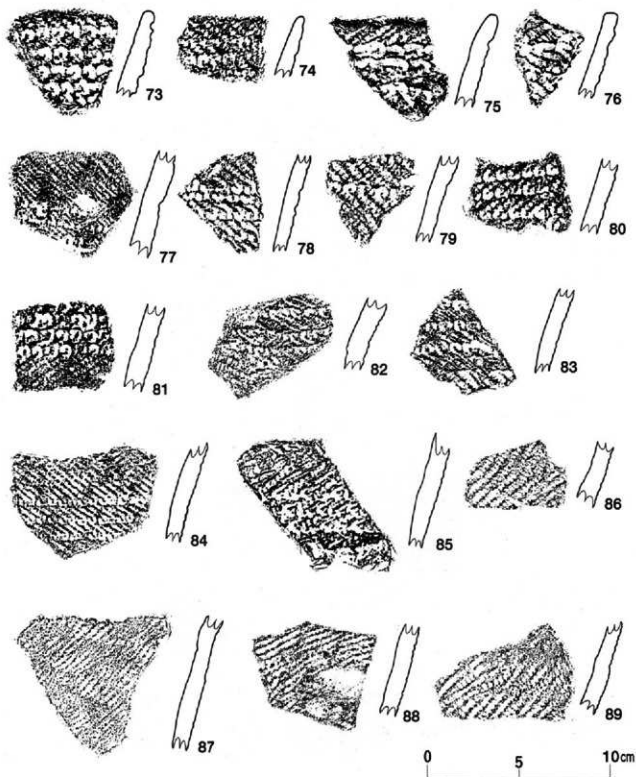
第15図 遺構外出土土器



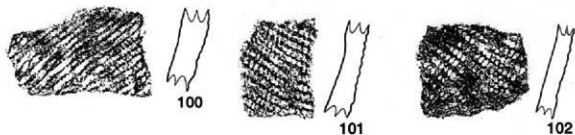
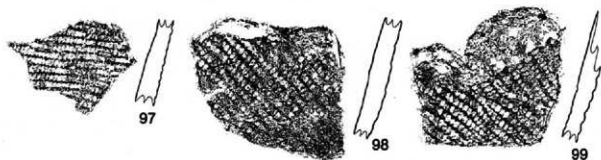
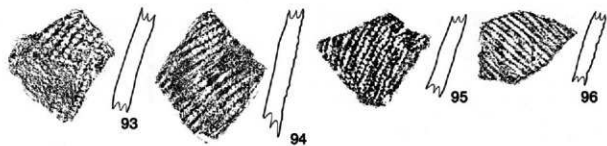
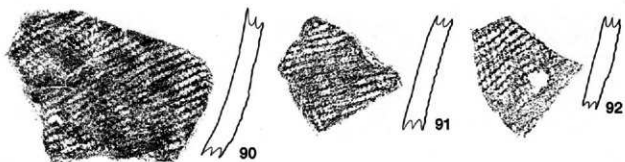
第16圖 遺構外出土土器



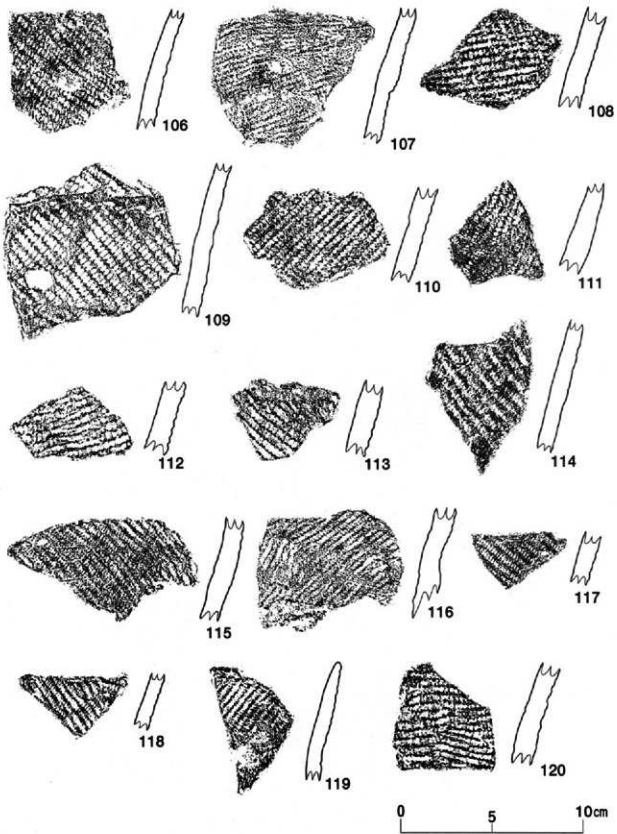
第17図 遺構外出土土器



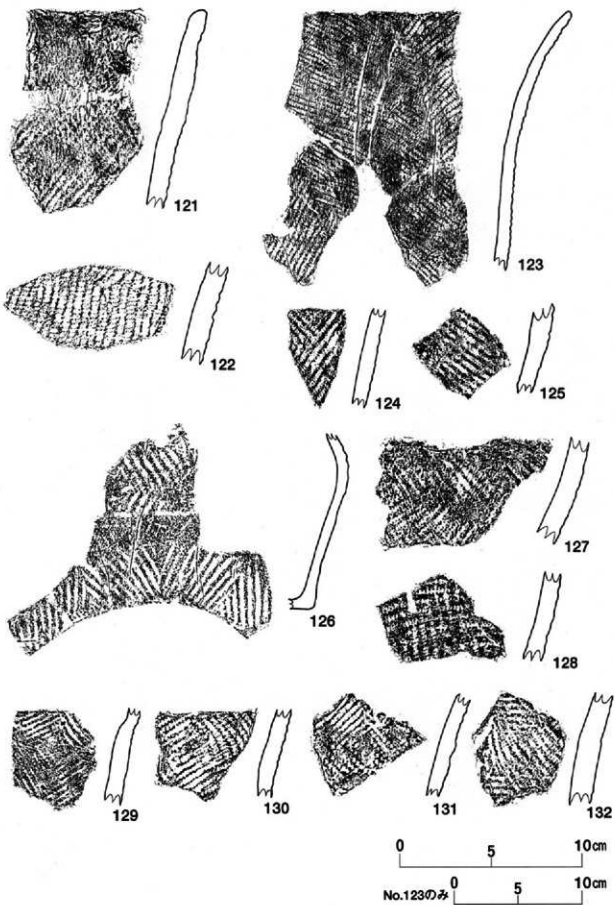
第18圖 遺構外出土土器



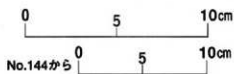
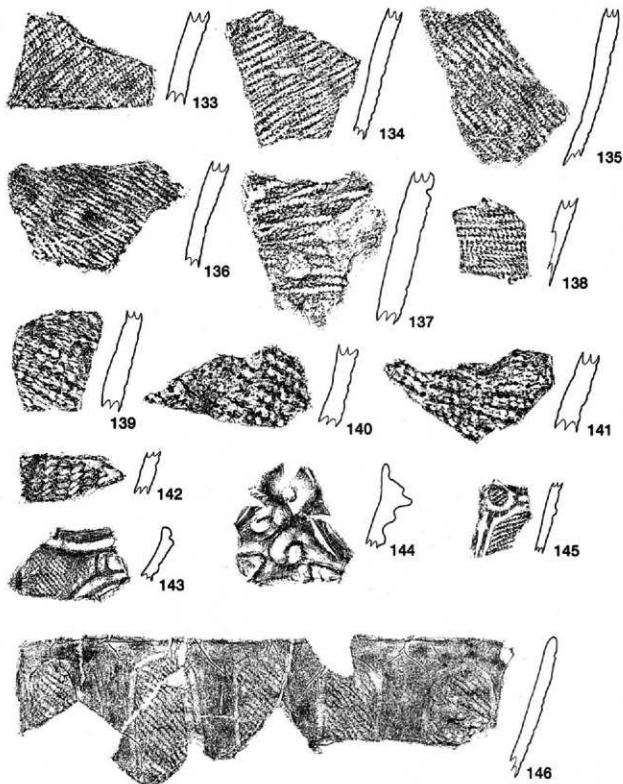
第19圖 遺構外出土土器



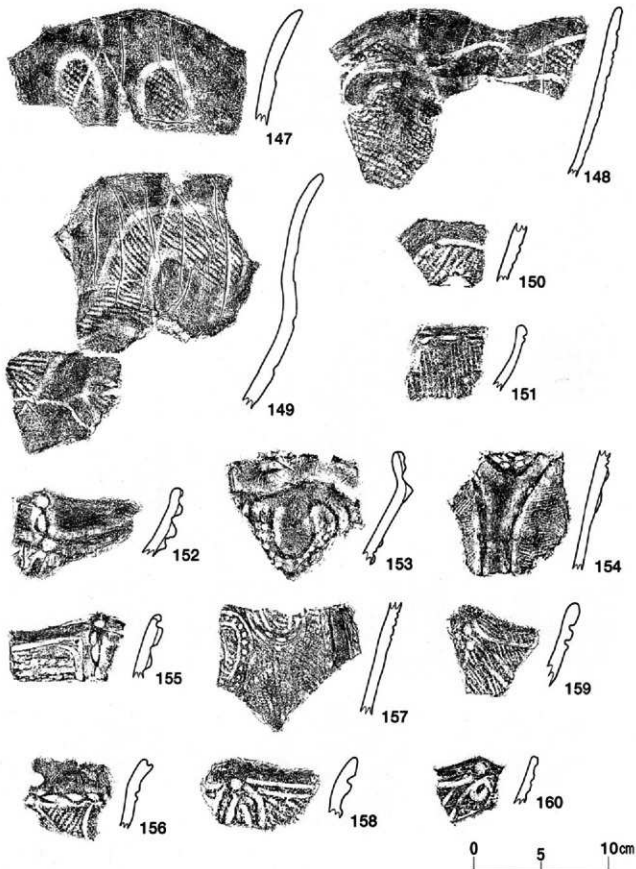
第20図 遺構外出土土器



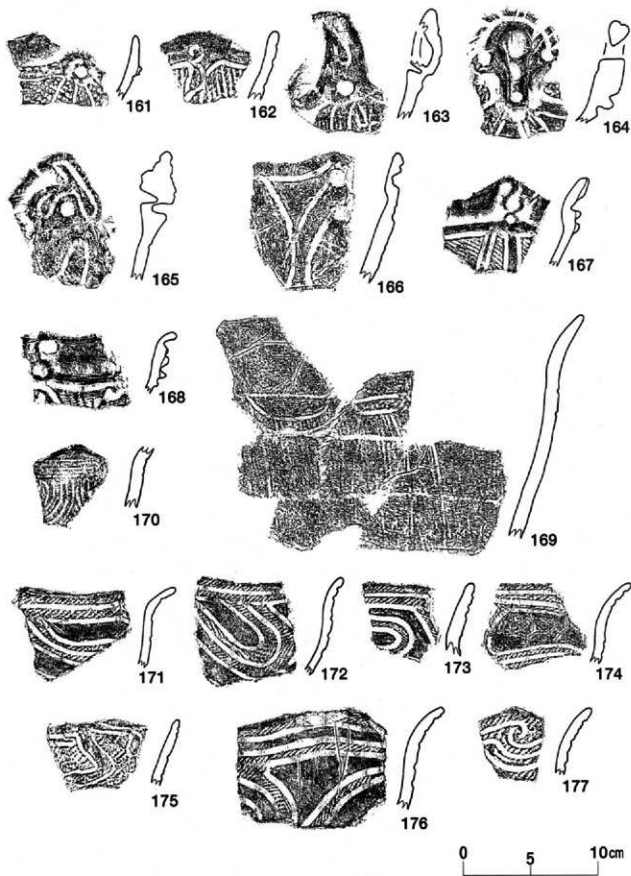
第21図 遺構外出土土器



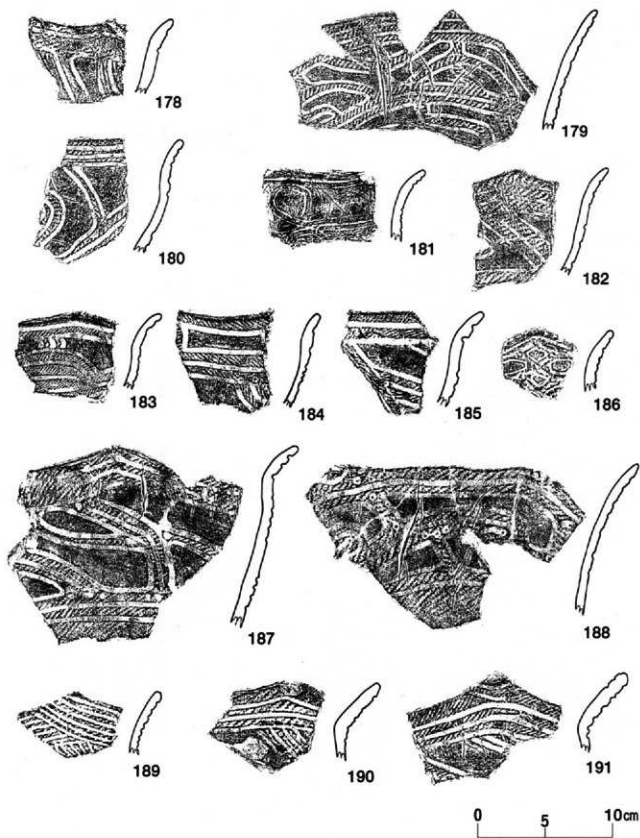
第22図 遺構外出土土器



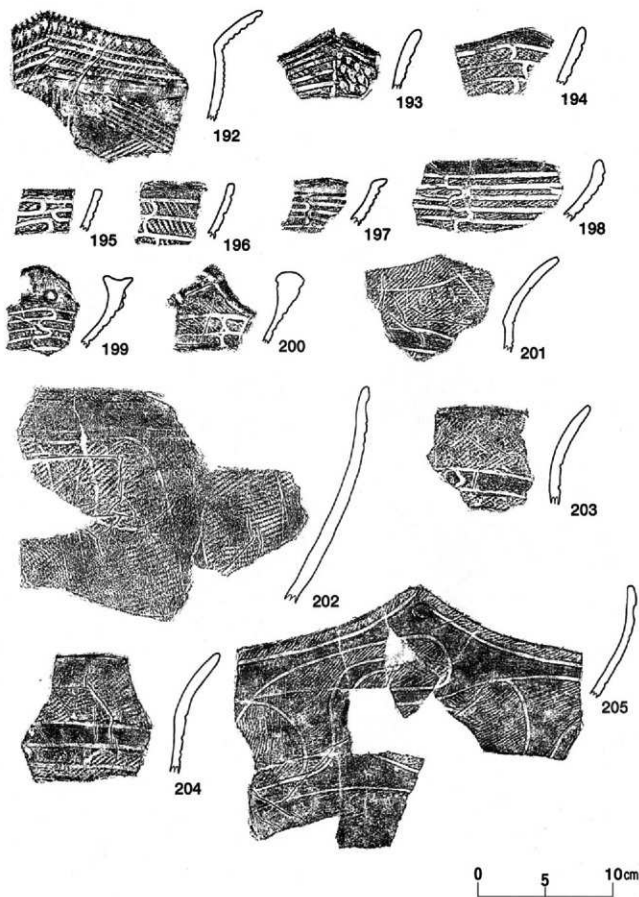
第23圖 遺構外出土土器



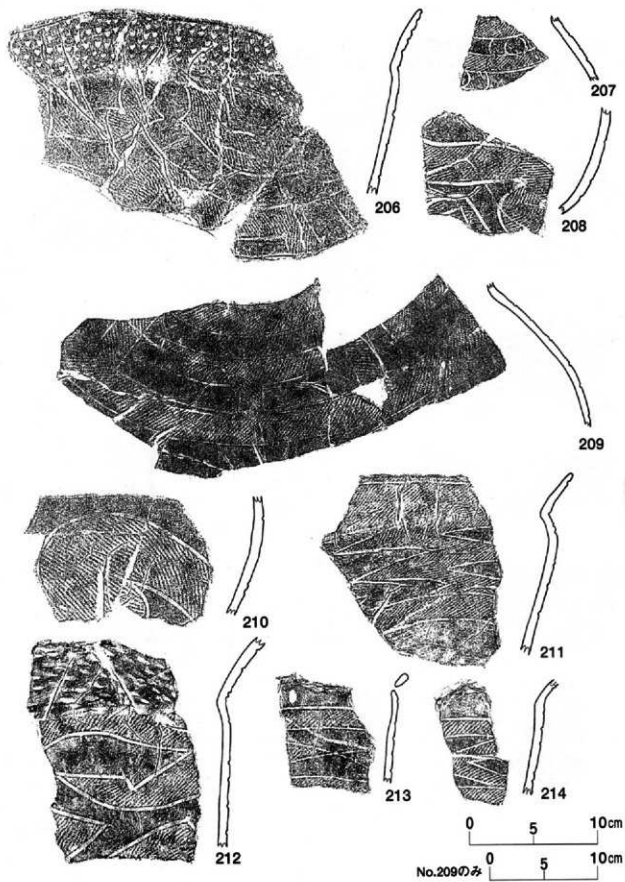
第24図 遺構外出土土器



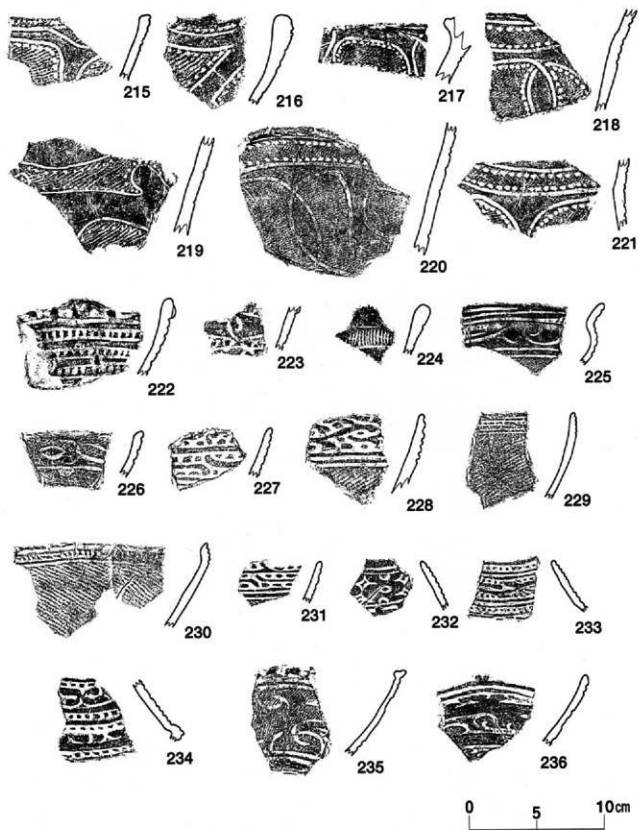
第25圖 遺構外出土土器



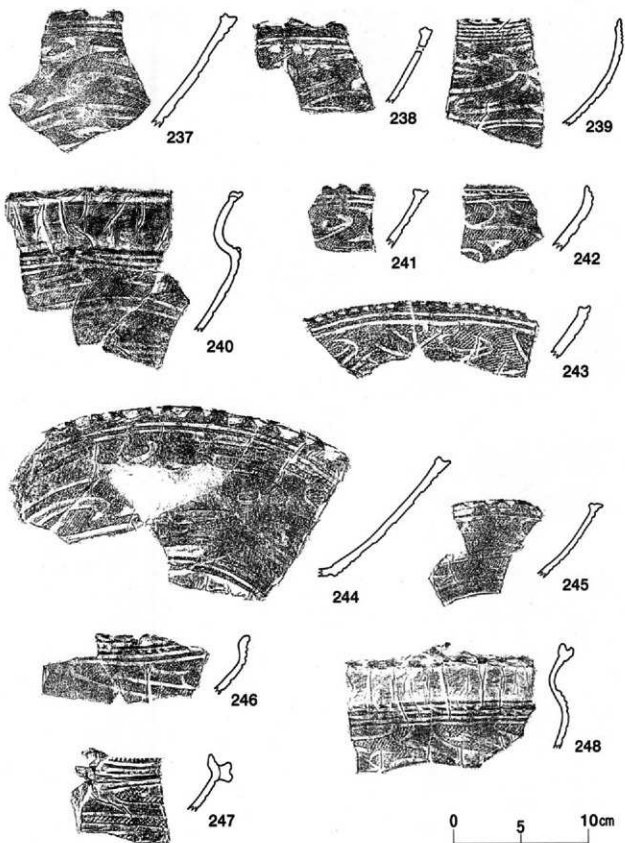
第26図 遺構外出土土器



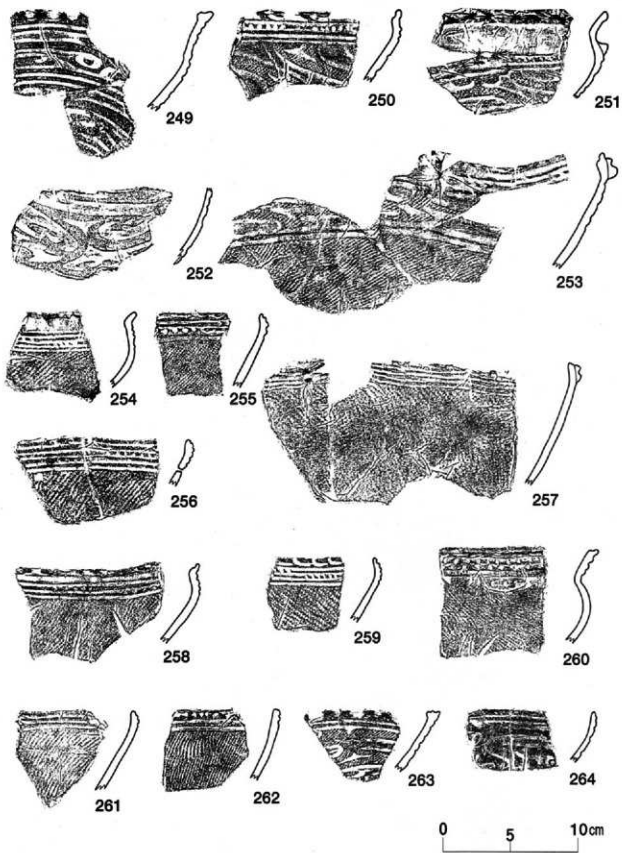
第27図 遺構外出土土器



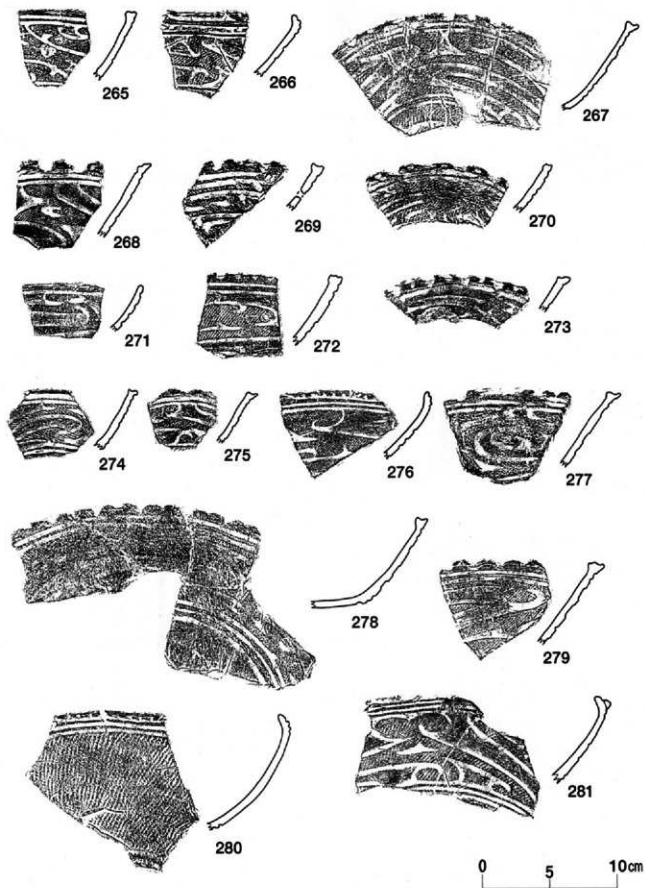
第28圖 遺構外出土土器



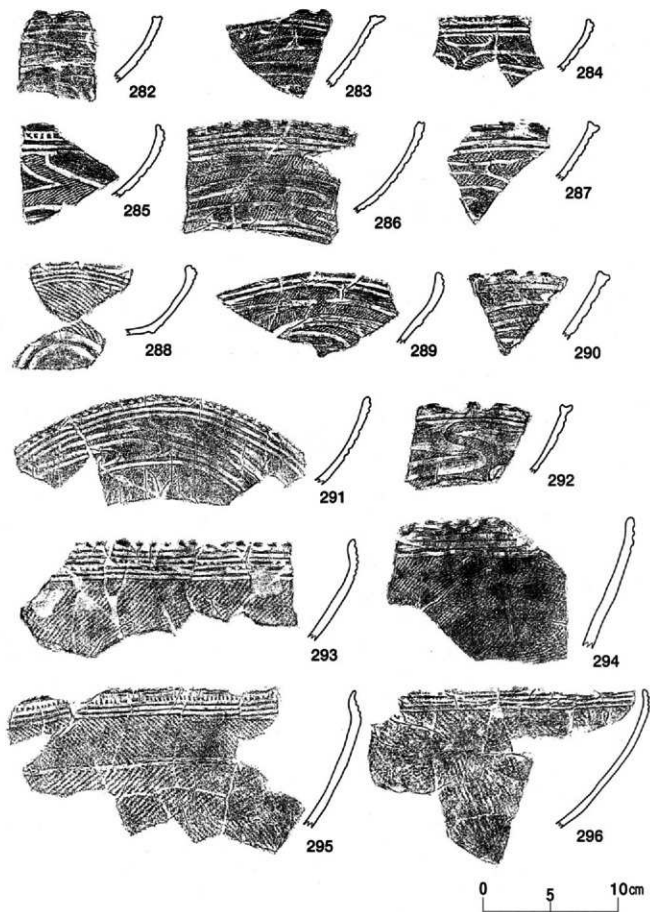
第29図 遺構外出土土器



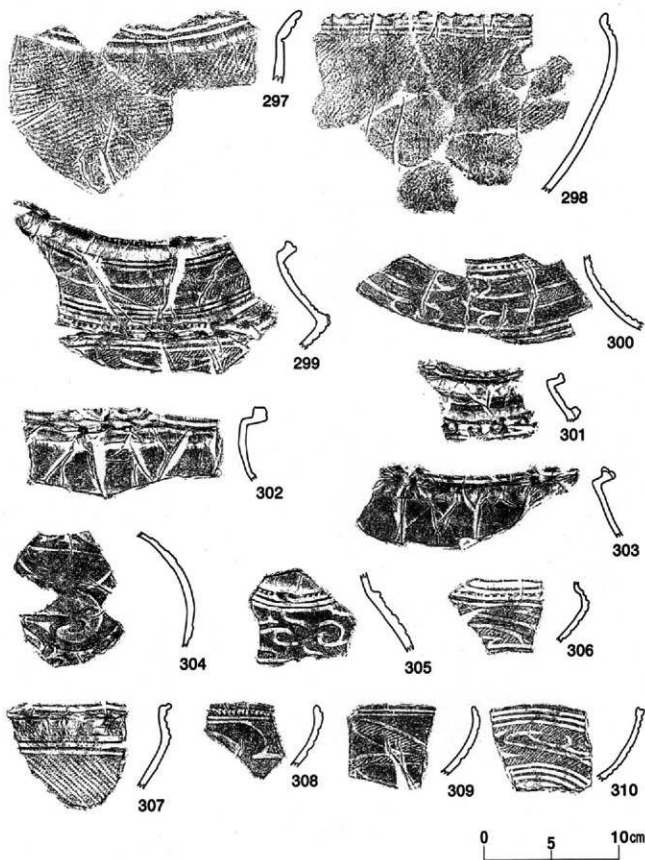
第30圖 遺構外出土土器



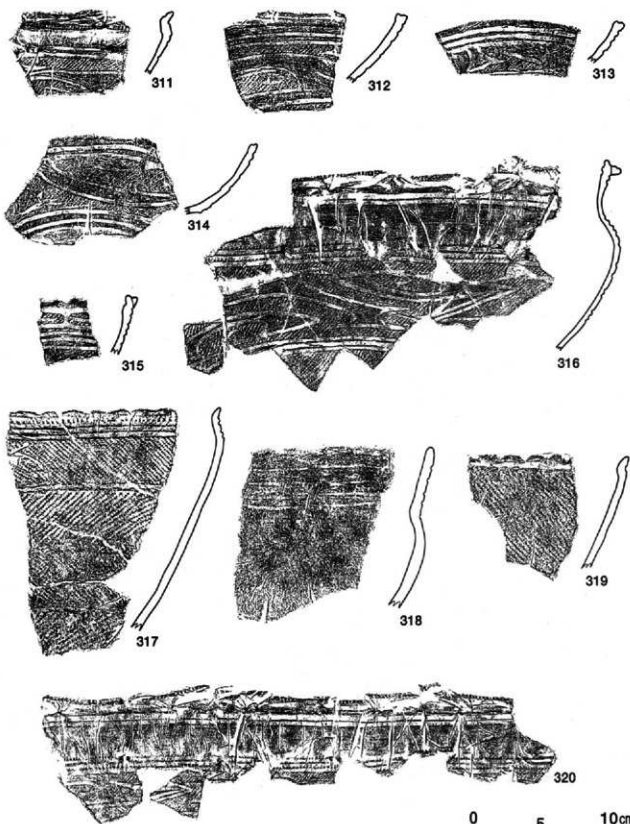
第31图 遺構外出土土器



第32図 遺構外出土土器



第33圖 遺構外出土土器

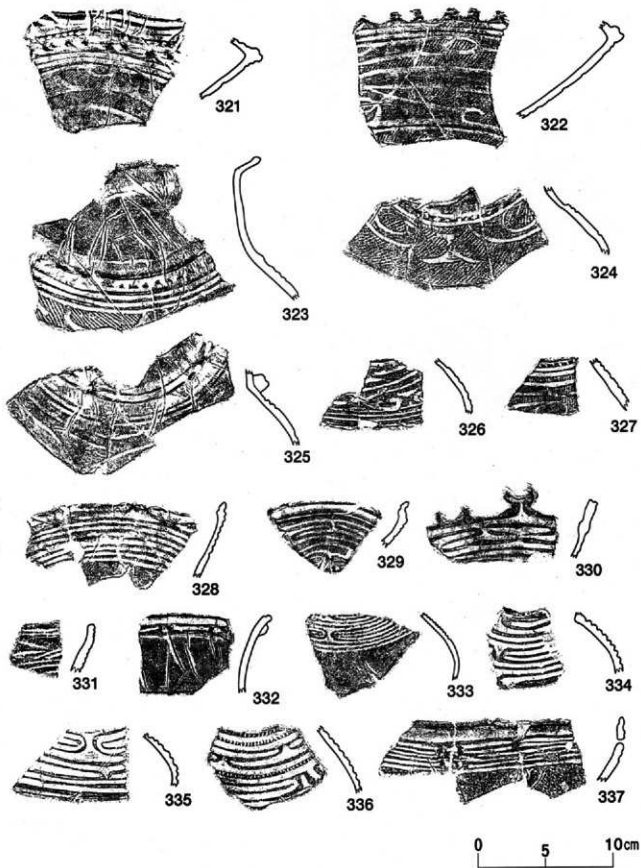


0 5 10cm

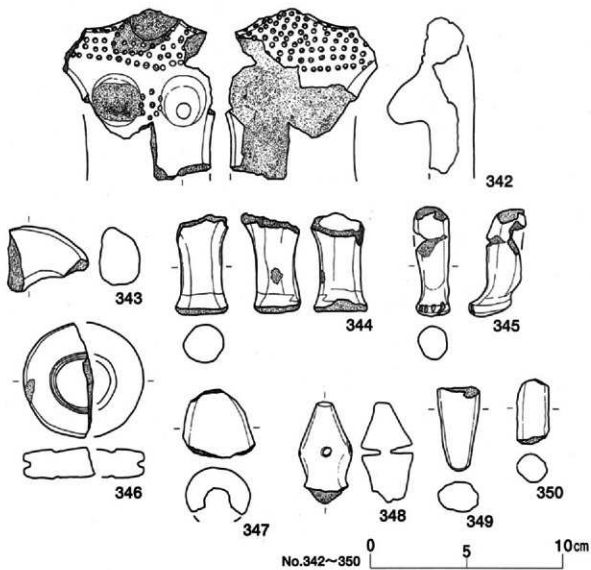
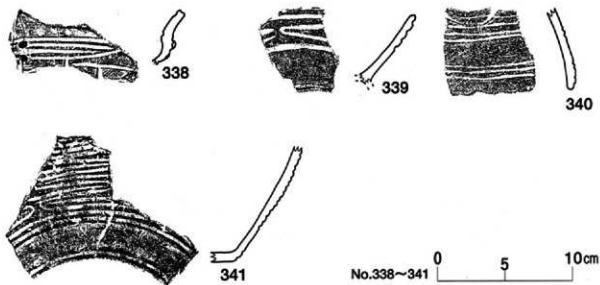
No.316のみ 0 5 10cm

No.320のみ 0 5 10cm

第34図 遺構外出土器



第35圖 遺構外出土土器



第36圖 遺構外出土土器・土製品

第1表 遺構外出土土器・土製品一覧表

図版	写真図版	グリッド	層	種類	分類
第8回-1	写真図版3-1	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第8回-2	写真図版3-2	E-4	3	深鉢	第I群第1種
第8回-3	写真図版3-3	E-4	3	深鉢	第II群第1種
第8回-4	写真図版3-4	D-4	2	深鉢	第III群第1種C
第8回-5	写真図版3-5	E-2	2	深鉢	第III群第1種D
第8回-6	写真図版3-6	D-3	1	深鉢	第III群第1種D
第8回-7	写真図版3-7	D-5	2	不明	第III群第1種F
第8回-8	写真図版3-8	E-2	3	ヒコバ?	第III群第1種F
第8回-9	写真図版3-9	E-3	2,3,4	深鉢	第III群第2種B
第8回-10	写真図版3-10	E-5	不明	深鉢	第III群第2種B
第8回-11	写真図版3-11	E-5	3	深鉢	第III群第2種B
第8回-12	写真図版3-12	E-5	2,3	深鉢	第III群第2種B
第8回-13	写真図版3-13	E-5	4	深鉢	第III群第2種C
第8回-14	写真図版3-14	E-5	2,3	深鉢	第III群第2種D
第8回-15	写真図版3-15	E-3	2	深鉢	第IV群第3種A
第8回-16	写真図版3-16	E-3	3	深鉢	第IV群第3種A
第8回-17	写真図版3-17	E-2	不明	深鉢	第IV群第3種A
第10回-18	写真図版4-18	E-4	2	鉢	第IV群第3種B
第10回-19	写真図版4-19	E-5	3	鉢	第IV群第3種B
第10回-20	写真図版4-20	D-2, D-3, D-4	1, 2	鉢	第IV群第3種B
第11回-21	写真図版4-21	D-2	10	鉢	第IV群第3種B
第11回-22	写真図版4-22	D-3	3	鉢	第IV群第3種B
第11回-23	写真図版4-23	E-2	不明	鉢	第IV群第3種B
第11回-24	写真図版4-24	D-3	3	皿	第IV群第3種B
第12回-25	写真図版4-25	D-2	不明	皿	第IV群第3種B
第12回-26	写真図版4-26	E-2	3	皿	第IV群第3種B
第13回-27	写真図版4-27	D-2	不明	皿	第IV群第3種B
第13回-28	写真図版4-28	E-3	不明	注口土器	第IV群第3種B
第13回-29	写真図版4-29	E-4	2	注口土器	第IV群第3種B
第14回-30	写真図版4-30	E-5	1,3	深鉢	第IV群第4種
第14回-31	写真図版4-31	E-2	1C,3	鉢	第IV群第4種
第14回-32	写真図版4-32	D-2	10	鉢	第IV群第4種
第14回-33	写真図版4-33	D-2	6	付付深鉢	第IV群第4種
第14回-34	写真図版4-34	E-3	3	付付土器	第IV群第4種
第15回-35	写真図版5-35	E-2	1C	深鉢	第IV群第5種
第15回-36	写真図版5-36	D-2	2	鉢	第IV群第5種
第15回-37	写真図版5-37	D-2	1	付付深鉢	第IV群第5種
第15回-38	写真図版5-38	E-2	2	鉢	第IV群第5種
第15回-39	写真図版5-39	D-3	3	鉢	第VI群
第15回-40	写真図版5-40	D-2	6	不明	第VI群
第15回-41	写真図版5-41	D-2	不明	深鉢	第VI群
第15回-42	写真図版5-42	D-2	2	深鉢	第VI群
第15回-43	写真図版5-43	B-2	2	深鉢	第VI群
第16回-44	写真図版6-44	B-3	1	深鉢	第I群第1種A
第16回-45	写真図版6-45	B-3	3	深鉢	第I群第1種A
第16回-46	写真図版6-46	E-2	10	深鉢	第I群第1種A
第16回-47	写真図版6-47	E-3	不明	深鉢	第I群第1種A
第16回-48	写真図版6-48	B-3	3	深鉢	第I群第1種A
第16回-49	写真図版6-49	E-2	3	深鉢	第I群第1種A
第16回-50	写真図版6-50	D-3	3	深鉢	第I群第1種B
第16回-51	写真図版6-51	C-3	3	深鉢	第I群第1種B
第16回-52	写真図版6-52	E-2	不明	深鉢	第I群第1種B
第16回-53	写真図版6-53	D-4	3	深鉢	第I群第1種B
第16回-54	写真図版6-54	E-3	1	深鉢	第I群第1種B
第16回-55	写真図版6-55	C-3	3	深鉢	第I群第1種B
第16回-56	写真図版6-56	E-3	不明	深鉢	第I群第1種B
第16回-57	写真図版6-57	B-4	1	深鉢	第I群第1種B
第16回-58	写真図版6-58	E-2	2	深鉢	第I群第1種B
第16回-59	写真図版6-59	E-4	1	深鉢	第I群第1種B
第16回-60	写真図版6-60	B-3	1	深鉢	第I群第1種B
第17回-61	写真図版7-61	D-2	3	深鉢	第I群第1種B
第17回-62	写真図版7-62	D-3	3	深鉢	第I群第1種B
第17回-63	写真図版7-63	E-2	2	深鉢	第I群第1種B
第17回-64	写真図版7-64	D-2	2	深鉢	第I群第1種B
第17回-65	写真図版7-65	E-2	1	深鉢	第I群第1種B
第17回-66	写真図版7-66	不明	2	深鉢	第I群第2種
第17回-67	写真図版7-67	不明	不明	深鉢	第I群第2種
第17回-68	写真図版7-68	不明	不明	深鉢	第I群第2種
第17回-69	写真図版7-69	D-2	6	深鉢	第I群第2種
第17回-70	写真図版7-70	D-2	不明	深鉢	第I群第2種
第17回-71	写真図版7-71	D-3	2	深鉢	第I群第2種
第17回-72	写真図版7-72	C-3	3	深鉢	第I群第2種

図版	写真図版	グリッド	層	種類	分類
第18回-73	写真図版7-73	C-4	2	深鉢	第I群第2種
第18回-74	写真図版7-74	B-2	3	深鉢	第I群第2種
第18回-75	写真図版7-75	D-2	2	深鉢	第I群第2種
第18回-76	写真図版7-76	D-4	3	深鉢	第I群第2種
第18回-77	写真図版7-77	D-4	1	深鉢	第I群第2種
第18回-78	写真図版7-78	D-2	2	不明	第I群第2種
第18回-79	写真図版7-79	D-2	不明	深鉢	第I群第2種
第18回-80	写真図版7-80	D-2	2	深鉢	第I群第2種
第18回-81	写真図版7-81	C-3	不明	不明	第I群第2種
第18回-82	写真図版7-82	E-2	4	深鉢	第I群第2種
第18回-83	写真図版7-83	B-3	1	深鉢	第I群第2種
第18回-84	写真図版7-84	E-2	2	深鉢	第I群第2種
第18回-85	写真図版7-85	D-2	2	深鉢	第I群第2種
第18回-86	写真図版7-86	B-3	3	深鉢	第I群第3種
第18回-87	写真図版7-87	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第18回-88	写真図版7-88	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第18回-89	写真図版7-89	D-2	3	深鉢	第I群第3種
第19回-90	写真図版7-90	D-3	3	深鉢	第I群第3種
第19回-91	写真図版7-91	不明	不明	不明	第I群第3種
第19回-92	写真図版7-92	不明	不明	不明	第I群第3種
第19回-93	写真図版7-93	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第19回-94	写真図版7-94	D-3	2	深鉢	第I群第3種
第19回-95	写真図版7-95	B-3	1	深鉢	第I群第3種
第19回-96	写真図版7-96	C-3	3	深鉢	第I群第3種
第19回-97	写真図版7-97	不明	不明	不明	第I群第3種
第19回-98	写真図版7-98	E-2	2	深鉢	第I群第3種
第19回-99	写真図版7-99	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第19回-100	写真図版7-100	D-2	1	深鉢	第I群第3種
第19回-101	写真図版7-101	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第19回-102	写真図版7-102	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第19回-103	写真図版7-103	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第19回-104	写真図版7-104	D-4	4	深鉢	第I群第3種
第19回-105	写真図版7-105	B-3	1	深鉢	第I群第3種
第20回-106	写真図版7-106	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第20回-107	写真図版7-107	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第20回-108	写真図版7-108	D-2	1	深鉢	第I群第3種
第20回-109	写真図版7-109	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第20回-110	写真図版7-110	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第20回-111	写真図版7-111	D-2	1	深鉢	第I群第3種
第20回-112	写真図版7-112	D-2	1	深鉢	第I群第3種
第20回-113	写真図版7-113	D-3	3	深鉢	第I群第3種
第20回-114	写真図版7-114	D-4	2	深鉢	第I群第3種
第20回-115	写真図版7-115	D-2	3	深鉢	第I群第3種
第20回-116	写真図版7-116	C-3	3	深鉢	第I群第3種
第20回-117	写真図版7-117	D-3	1	深鉢	第I群第3種
第20回-118	写真図版7-118	不明	不明	不明	第I群第3種
第20回-119	写真図版7-119	不明	不明	不明	第I群第3種
第20回-120	写真図版7-120	D-4	2	深鉢	第I群第3種
第21回-121	写真図版9-121	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第21回-122	写真図版9-122	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第21回-123	写真図版9-123	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第21回-124	写真図版9-124	D-3	1	深鉢	第I群第3種
第21回-125	写真図版9-125	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第21回-126	写真図版9-126	D-2	不明	深鉢	第I群第3種
第21回-127	写真図版9-127	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第21回-128	写真図版9-128	C-4	2	深鉢	第I群第3種
第21回-129	写真図版9-129	E-2	1	深鉢	第I群第3種
第21回-130	写真図版9-130	不明	不明	不明	第I群第3種
第21回-131	写真図版9-131	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第21回-132	写真図版9-132	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第22回-133	写真図版9-133	D-3	3	深鉢	第I群第3種
第22回-134	写真図版9-134	D-4	2	深鉢	第I群第3種
第22回-135	写真図版9-135	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第22回-136	写真図版9-136	D-2	3	深鉢	第I群第3種
第22回-137	写真図版9-137	D-2	2	深鉢	第I群第3種
第22回-138	写真図版9-138	C-3	3	深鉢	第I群第3種
第22回-139	写真図版9-139	D-3	3	深鉢	第I群第3種
第22回-140	写真図版9-140	不明	不明	不明	第I群第3種
第22回-141	写真図版9-141	D-4	3	深鉢	第I群第3種
第22回-142	写真図版9-142	不明	不明	不明	第I群第3種
第22回-143	写真図版9-143	E-4	3	深鉢	第I群第1種
第22回-144	写真図版10-144	E-4	3	深鉢	第I群第1種
第22回-145	写真図版10-145	D-2	2	深鉢	第I群第1種
第22回-146	写真図版10-146	E-4	3	深鉢	第I群第1種
第22回-147	写真図版10-147	B-2	2	深鉢	第I群第2種
第23回-148	写真図版10-148	D-2	8	深鉢	第II群第3種
第23回-149	写真図版10-149	D-2	6	深鉢	第II群第3種
第23回-150	写真図版10-150	E-2	1	深鉢	第II群第3種
第23回-151	写真図版10-151	D-3	3	深鉢	第III群第1種A
第23回-152	写真図版10-152	D-4	2	深鉢	第III群第1種B
第23回-153	写真図版10-153	D-4	2	深鉢	第III群第1種B
第23回-154	写真図版10-154	D-5	4	深鉢	第III群第1種B
第23回-155	写真図版10-155	D-5	3	深鉢	第III群第1種C
第23回-156	写真図版10-156	E-4	3	深鉢	第III群第1種C

原簿	写真図版	グリット	層	番号	分類
第22-157	写真図版10-157	2	4	複製	第Ⅲ群第11D
第22-158	写真図版10-158	3	1	複製	第Ⅲ群第11D
第22-159	写真図版10-159	5	3	複製	第Ⅲ群第11D
第22-180	写真図版10-180	4	3	複製	第Ⅲ群第11D
第24-161	写真図版10-161	2	3	複製	第Ⅲ群第11D
第24-162	写真図版10-162	3	3	複製	第Ⅲ群第11D
第24-163	写真図版10-163	4	3	複製	第Ⅲ群第11D
第24-164	写真図版10-164	5	3	複製	第Ⅲ群第11D
第24-165	写真図版10-165	4	1	複製	第Ⅲ群第11D
第24-166	写真図版10-166	5	3	複製	第Ⅲ群第11D
第24-167	写真図版10-167	3	3	複製	第Ⅲ群第11D
第24-168	写真図版10-168	5	3	複製	第Ⅲ群第11D
第24-169	写真図版11-169	2	2	複製	第Ⅲ群第1編B
第24-170	写真図版11-170	2	3	複製	第Ⅲ群第1編E
第24-171	写真図版11-171	2	3	複製	第Ⅲ群第1編F
第24-172	写真図版11-172	6	3	複製	第Ⅲ群第1編F
第24-173	写真図版11-173	2	1	複製	第Ⅲ群第1編F
第24-174	写真図版11-174	4	2	複製	第Ⅲ群第1編F
第24-175	写真図版11-175	5	4	複製	第Ⅲ群第1編F
第24-176	写真図版11-176	3	3	複製	第Ⅲ群第1編F
第24-177	写真図版11-177	4	3	複製	第Ⅲ群第1編F
第24-178	写真図版11-178	2	3	複製	第Ⅲ群第1編F
第25-179	写真図版11-179	4	1	複製	第Ⅲ群第1編F
第25-180	写真図版11-180	6	2	複製	第Ⅲ群第1編F
第25-181	写真図版11-181	2	2	複製	第Ⅲ群第1編F
第25-182	写真図版11-182	4	3	複製	第Ⅲ群第1編F
第25-183	写真図版11-183	3	3	複製	第Ⅲ群第1編F
第25-184	写真図版11-184	6	3	複製	第Ⅲ群第1編F
第25-185	写真図版11-185	2	3	複製	第Ⅲ群第1編F
第25-186	写真図版11-186	2	2	複製	第Ⅲ群第1編F
第25-187	写真図版11-187	3	3	複製	第Ⅲ群第1編F
第25-188	写真図版11-188	4	1	複製	第Ⅲ群第1編F
第25-189	写真図版11-189	4	3	複製	第Ⅲ群第1編F
第25-190	写真図版11-190	3	3	複製	第Ⅲ群第1編F
第25-191	写真図版11-191	3	1	複製	第Ⅲ群第1編F
第26-192	写真図版11-192	2	2	複製	第Ⅲ群第1編F
第26-193	写真図版11-193	4	2	複製	第Ⅲ群第1編F
第26-194	写真図版12-194	7	3	複製	第Ⅲ群第2編A
第26-195	写真図版12-195	4	3	複製	第Ⅲ群第2編A
第26-196	写真図版12-196	4	3	複製	第Ⅲ群第2編A
第26-197	写真図版12-197	7	3	複製	第Ⅲ群第2編A
第26-198	写真図版12-198	6	2	複製	第Ⅲ群第2編A
第26-199	写真図版12-199	4	1	複製	第Ⅲ群第2編A
第26-200	写真図版12-200	6	3	複製	第Ⅲ群第2編A
第26-201	写真図版12-201	5	2	複製	第Ⅲ群第2編A
第26-202	写真図版12-202	5	2	複製	第Ⅲ群第2編A
第26-203	写真図版12-203	4	3	複製	第Ⅲ群第2編B
第26-204	写真図版12-204	5	3	複製	第Ⅲ群第2編B
第26-205	写真図版12-205	5	2	複製	第Ⅲ群第2編B
第26-206	写真図版12-206	7	3	複製	第Ⅲ群第2編B
第26-207	写真図版12-207	5	2	複製	第Ⅲ群第2編B
第26-208	写真図版12-208	6	2,3	複製	第Ⅲ群第2編B
第27-209	写真図版12-209	4	2,3	複製	第Ⅲ群第2編B
第27-210	写真図版12-210	7	3	複製	第Ⅲ群第2編B
第27-211	写真図版12-211	5	2	複製	第Ⅲ群第2編B
第27-212	写真図版12-212	4	4	複製	第Ⅲ群第2編B
第27-213	写真図版12-213	3	3	複製	第Ⅲ群第2編B
第27-214	写真図版12-214	4	2	複製	第Ⅲ群第2編B
第27-215	写真図版12-215	4	4	複製	第Ⅲ群第2編B
第27-216	写真図版12-216	4	3	複製	第Ⅲ群第2編B
第27-217	写真図版12-217	5	4	複製	第Ⅲ群第2編B
第28-218	写真図版13-218	5	1	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-219	写真図版13-219	5	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-220	写真図版13-220	3	1	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-221	写真図版13-221	5	1	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-222	写真図版13-222	3	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-223	写真図版13-223	4	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-224	写真図版13-224	1,2	8	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-225	写真図版13-225	3	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-226	写真図版13-226	3	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-227	写真図版13-227	2	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-228	写真図版13-228	1,2	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-229	写真図版13-229	4	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-230	写真図版13-230	4	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-231	写真図版13-231	5	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-232	写真図版13-232	4	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-233	写真図版13-233	2	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-234	写真図版13-234	3	3	複製	第Ⅳ群第3編A

原簿	写真図版	グリット	層	番号	分類
第28-235	写真図版13-235	2	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-236	写真図版13-236	2	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-237	写真図版13-237	5	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-238	写真図版13-238	3	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-239	写真図版13-239	2	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-240	写真図版13-240	2	10	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-241	写真図版13-241	4	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-242	写真図版13-242	4	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第28-243	写真図版13-243	2	10	複製	第Ⅳ群第3編A
第29-244	写真図版14-244	4	1	複製	第Ⅳ群第3編A
第29-245	写真図版14-245	5	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第29-246	写真図版14-246	2	10	複製	第Ⅳ群第3編A
第29-247	写真図版14-247	2	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第29-248	写真図版14-248	6	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第29-249	写真図版14-249	3	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第29-250	写真図版14-250	3	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第29-251	写真図版14-251	2	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第29-252	写真図版14-252	3	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第29-253	写真図版14-253	3	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第29-254	写真図版14-254	2	4	複製	第Ⅳ群第3編A
第29-255	写真図版14-255	5	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第29-256	写真図版14-256	3	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第30-257	写真図版14-257	7	7	複製	第Ⅳ群第3編A
第30-258	写真図版14-258	2	10	複製	第Ⅳ群第3編A
第30-259	写真図版14-259	2	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第30-260	写真図版14-260	1,2	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第30-261	写真図版14-261	2	4	複製	第Ⅳ群第3編A
第30-262	写真図版14-262	2	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第30-263	写真図版14-263	3	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第30-264	写真図版14-264	3	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-265	写真図版14-265	1,2	6	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-266	写真図版14-266	4	1	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-267	写真図版14-267	2,2	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-268	写真図版15-268	3	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-269	写真図版15-269	1,2	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-270	写真図版15-270	4	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-271	写真図版15-271	2	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-272	写真図版15-272	2	10	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-273	写真図版15-273	4	1	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-274	写真図版15-274	4	1	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-275	写真図版15-275	3	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-276	写真図版15-276	2	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-277	写真図版15-277	3	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-278	写真図版15-278	3	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-279	写真図版15-279	5	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-280	写真図版15-280	4	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-281	写真図版15-281	2	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-282	写真図版15-282	2	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第31-283	写真図版15-283	3	1	複製	第Ⅳ群第3編A
第32-284	写真図版15-284	2	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第32-285	写真図版15-285	3	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第32-286	写真図版15-286	2	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第32-287	写真図版15-287	1,2	5	複製	第Ⅳ群第3編A
第32-288	写真図版15-288	0	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第32-289	写真図版16-289	0	4	複製	第Ⅳ群第3編A
第32-290	写真図版16-290	1,2	6	複製	第Ⅳ群第3編A
第32-291	写真図版16-291	2	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第32-292	写真図版16-292	3	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第32-293	写真図版16-293	4	2	複製	第Ⅳ群第3編A
第32-294	写真図版16-294	4	1	複製	第Ⅳ群第3編A
第32-295	写真図版16-295	1,2	3	複製	第Ⅳ群第3編A
第32-296	写真図版16-296	0	1,2	複製	第Ⅳ群第3編A
第33-297	写真図版16-297	0	2	複製	第Ⅳ群第3編B
第33-298	写真図版16-298	1,2	6	複製	第Ⅳ群第3編B
第33-299	写真図版16-299	3	3	複製	第Ⅳ群第3編B
第33-300	写真図版16-300	3	3	複製	第Ⅳ群第3編B
第33-301	写真図版16-301	3	3	複製	第Ⅳ群第3編B
第33-302	写真図版16-302	3	3	複製	第Ⅳ群第3編B
第33-303	写真図版16-303	5	3	複製	第Ⅳ群第3編B
第33-304	写真図版16-304	2	2	複製	第Ⅳ群第3編B
第33-305	写真図版16-305	3	3	複製	第Ⅳ群第3編B
第33-306	写真図版16-306	4	1	複製	第Ⅳ群第3編B
第33-307	写真図版16-307	1,2	5	複製	第Ⅳ群第3編B
第33-308	写真図版16-308	5	3	複製	第Ⅳ群第3編B
第33-309	写真図版16-309	2	1	複製	第Ⅳ群第3編B

図版	写真図版	グリット	用紙	縮尺	分類
第33図-310	写真図版17-310	E-2 F-2	不明 3	斜・透射	第IV群第4類
第34図-311	写真図版17-311	D-2	2	斜・透射	第IV群第4類
第34図-312	写真図版17-312	F-2	3	斜・透射	第IV群第4類
第34図-313	写真図版17-313	E-2	不明	斜・透射	第IV群第4類
第34図-314	写真図版17-314	B-2	3	斜・透射	第IV群第4類
第34図-315	写真図版17-315	D-1,2	5	斜・透射	第IV群第4類
第34図-318	写真図版17-318	B-2	3	斜・透射	第IV群第4類
第34図-317	写真図版17-317	D-3 E-2	3 10	斜・透射	第IV群第4類
第34図-318	写真図版17-318	D-2	1	斜・透射	第IV群第4類
第34図-319	写真図版17-319	D-2	6	斜・透射	第IV群第4類
第34図-320	写真図版17-320	B-2	3	斜・透射	第IV群第4類
第35図-321	写真図版17-321	E-2	10	注口土質	第IV群第4類
第35図-322	写真図版17-322	E-2	3	注口土質	第IV群第4類
第35図-323	写真図版17-323	E-4	2,3	炭	第IV群第4類
第35図-324	写真図版17-324	E-2	10	炭	第IV群第4類
第35図-325	写真図版17-325	D-3 E-3	3 2	炭	第IV群第4類
第35図-326	写真図版17-326	E-2	2	炭	第IV群第4類
第35図-327	写真図版17-327	E-2	3	炭	第IV群第4類
第35図-328	写真図版18-328	C-2 D-2	1 6	斜・透射	第IV群第5類
第35図-329	写真図版18-329	C-2	1	斜・透射	第IV群第5類
第35図-330	写真図版18-330	D-1,2	5	斜・透射	第IV群第5類
第35図-331	写真図版18-331	D-3	2	斜・透射	第IV群第5類
第35図-332	写真図版18-332	C-3	2	炭	第IV群第5類
第35図-333	写真図版18-333	D-3	1	炭	第IV群第5類
第35図-334	写真図版18-334	C-2	2	炭	第IV群第5類
第35図-335	写真図版18-335	不明	炭	炭	第IV群第5類
第35図-336	写真図版18-336	C-4	2	炭	第IV群第5類
第35図-337	写真図版18-337	D-3	3	斜・透射	第IV群第6類
第35図-338	写真図版18-338	C-4	2	斜・透射	第IV群第6類
第38図-339	写真図版18-339	C-1	1	斜・透射	第IV群第6類
第38図-340	写真図版18-340	E-5	4	台付透射	第V群
第38図-341	写真図版18-341	D-2	2	斜	第V群
第38図-342	写真図版18-342	E-7	3	土質	
第38図-343	写真図版18-343	C-4	1	土質	
第38図-344	写真図版18-344	不明	不明	土質	
第38図-345	写真図版18-345	E-2	10	土質	
第38図-346	写真図版18-346	C-2	1	炭質	
第38図-347	写真図版18-347	E-6	4	炭質	不明
第38図-348	写真図版18-348	E-1	2,3	炭質	不明
第38図-349	写真図版18-349	E-2	10	炭質	不明
第38図-350	写真図版18-350	E-2	2	炭質	不明

3 石器・石製品

石器は、石鏃89点・尖頭器21点・石錐12点・石匙7点・不定形石器54点・使用痕石器1点・磨製石斧15点・磨石2点・石皿1点・蔽石1点・ウキ1点・石棒8点・装身具1点・石製品2点・石製円盤1点・礫石器5点の、計221点が出土している。以下、器種ごとに説明を行う。

(1)石鏃

石鏃は、89点出土している。石質は、珪質頁岩40点(44.94%)・チャート25点(28.08%)・細粒砂岩10点(11.23%)・凝灰岩6点(6.74%)・粘板岩4点(4.49%)で、他は不明である。基部の有無、基部の形状、側縁の形状によって細分が可能である。

第I群(第37図1~20、写真図版1~51)

有形の石鏃である。51点が出土し、無基の石鏃と比べると出土数は多い。

第1類(第37図1・2、写真図版1~3)

基部が平基をなすもの。3点出土した。鏃身が正三角形をなし側縁が外弧をなすもの(1)と、鏃身が二等辺三角形をなし側縁が直線的なもの(2)がある。

第2類(第37図3・4、写真図版4~6)

基部が凹基をなすもの。3点出土した。鏃身が正三角形をなし側縁が外弧をなすもの(写真5)と、鏃身が二等辺三角形をなし側縁が外弧をなすもの(4)がある。

第3類(第37図5~15、写真7~44)

基部が尖基をなすもの。38点出土した。鏃身が正三角形・側縁が直線的なもの(5~7、写真7~12)、鏃身が正三角形・側縁が直線的なもの(8、写真13)、鏃身が二等辺三角形・側縁が外弧をなすもの(9~12、写真16~36)、鏃身が二等辺三角形・側縁が直線的なもの(13~14、写真37~42)、鏃身が二等辺三角形・側縁が内弧をなすもの(写真43)、鏃身が二等辺三角形・側縁が基部付近で膨らむもの(15、写真44)がある。7と写真36は、基部が大きく作り出されている。

第4類(第37図16・17、写真45~47)

基部が円基をなすもの。3点出土した。鏃身は二等辺三角形をなし、側縁が外弧をなすもの(16、写真45~46)、側縁が基部付近で膨らむもの(17、写真47)がある。17は、基部が大きく作り出されている。

第5類(第37図18~20、写真48~51)

基部と茎部の境が不明瞭のものである。5点出土した。鏃身は二等辺三角形をなし、側縁は外弧をなす。

第Ⅱ群 (第37図21～30、写真52～75)

無形の石鏃である。24点出土した。基部の形状により細分可能である。

第1類 (写真53～56)

基部が平基をなすものである。4点出土した。鏃身は二等辺三角形をなし、側縁が外弧をなすもの(写真53)、内弧をなすもの(写真54～56)がある。

第2類 (第37図21～27、写真59～71)

基部が凹基のもの。15点出土した。鏃身が正三角形・側縁が直線的なもの(写真57)、鏃身が正三角形・側縁が直線的なもの(21、写真58)、鏃身が二等辺三角形・側縁が外弧をなすもの(22～24、写真59～63)、鏃身が二等辺三角形・側縁が直線的なもの(25～27、写真64～70)、鏃身が二等辺三角形・側縁が内弧をなすもの(写真71)がある。

第3類 (第37図28、写真72・73)

基部が尖基をなすもの。2点出土した。鏃身は二等辺三角形をなし、側縁は写真72では外弧、28・写真73では直線的である。

第4類 (第37図29、写真74)

基部付近で膨らむものである。1点出土した。鏃身は二等辺三角形をなし、側縁は外弧をなす。

第5類 (第37図30、写真75)

身部中央で膨らむものである。鏃身は二等辺三角形をなし、側縁は直線的である。

第Ⅲ群 (第37図31～35、写真76～83)

柳葉型の石鏃である。8点出土した。両端が尖るもの(31～34、写真76～79)と、基部が丸みを帯びるもの(35、写真80～83)がある。

第Ⅳ群 (第37図36～38、写真84～86)

異形の石鏃である。36は身部中央で最大幅を測り、若干基部よりで抉れ、基部まで両側縁が平行をなしている。37・38は中央付近で最大幅を測り、基部よりで側縁は抉れ、基部で側縁は大きく開いている。基部には抉れを有する。37ではピッチの付着が認められる。

第Ⅴ群 (第37図39、写真87～89)

未製品・欠損品を一括した。3点出土している。

(2)尖頭器 (第37図40～50、写真90～109)

21点出土した。石質は、チャートが3点、細粒砂岩が3点、珪質頁岩が4点である。

基部の形状は、40・写真90～92は不明、41～43・写真93～96は平基をなし、44～48・写真97～105は尖基、49～51・写真106～110は基部と茎部の境が不明瞭である。

鏃身は、41・44・写真106は正三角形をなし、他は二等辺三角形である。

側縁は、47は直線的、48は内弧をなし、他は外弧を成している。

(3)石錐 (第37図52～第38図61、写真111～122)

12点出土した。石質は、チャートが3点、細粒砂岩が4点、珪質頁岩が3点、粘板岩が1点である。53～60・写真112～119は、頭部と身部が明瞭に区分されるものである。

写真120は頭部をもたないもの、61・写真121は頭部と身部の境が不明瞭なものである。

(4)石匙 (第38図62～67、写真123～129)

7点出土した。石質は、チャートが1点、細粒砂岩が2点、珪質頁岩が3点である。

形状は、62～64・写真124～126は横長、65～67・写真123・127～129は縦長である。

64では一面に風化面を有し、他は両面に一次剝離痕を残している。刃部は、写真123・67では一辺が片刃・一辺が両刃、63では一辺が片刃・二辺が両刃、65では三辺が片刃、66は二辺が両刃で、64では両刃の丸みを帯びた刃部を有している。写真123ではつまみ部が、62では刃部が欠損している。

(5)不定形石器 (第38図68～第39図103、写真130～184)

55点出土した。石質は、チャートが4点、細粒砂岩が18点、珪質頁岩が31点、凝灰岩1点である。

68～84・写真130～161は一辺に刃を有するものである。68～78・写真130～148は片刃、79～84・写真149～161は両刃である。刃の形状は、68～72・79～83・写真130～138・写真150～154は直線的、73～76・84・写真139～146・写真155～161は曲線的、77・78・写真147～148は挟れている。

85～98・写真162～171は二辺に刃を有するものである。85～92・写真162～169は片刃、93・94・写真170～172は両刃、95～98・写真173～179は一辺が片刃・一辺が両刃である。刃の形状は、85・写真162・写真170は丸みを帯び、86～89・93～97・写真171～177・写真163～165は直線的、90・91・98・写真167～168・178～179は一辺が丸み、一辺が直線的である。92・98・写真169・写真178～179は一辺が挟れ、一辺が丸みを帯びている。

99～101・写真180～182は三辺に刃を有するものである。99・100・写真180・写真181は二辺が片刃、一辺が両刃、101・写真182は二辺が両刃、一辺が片刃である。刃の形状は、99・写真180は刃部が丸みを帯びている。

102・写真183は全周に刃を有するものである。刃は両刃をなし丸みを帯びている。

103・写真184は使用痕石器である。マイクロフレーキングを有している。

(6)磨製石斧 (第39図104～第40図109、写真185～194)

15点出土した。石質は、ドレライト6点・細粒砂岩3点・凝灰岩1点・凝灰質砂岩1点・スコリア質玄武岩1点である。

104～105・写真185～187は小型の磨製石斧である。

(7)磨石 (第40図111・112、写真200～201)

2点出土した。石質は、凝灰岩1点・細粒砂岩1点である。ともに入念に研磨されている。

(8)石皿 (第40図113、写真202)

1点出土した。石質は、中粒砂岩である。脚は無く、全体の1/3程が残存する。全体が研磨されており、底面はほぼ平坦に整形されている。

(9)敲石 (第40図114、写真203)

1点出土した。石質は、凝灰岩である。敲打による打痕を有し剥落が著しい。

(10)浮き (第40図115、写真204)

1点出土した。石質は軽石である。全体に丁寧に研磨されており、側縁に径8mm程の両面穿孔による貫通孔を有している。

(11)石棒 (第41図116～119、写真205～212)

8点出土した。石質は、粘板岩2点・玄武岩1点・細粒砂岩1点・点紋粘板岩3点・凝灰岩1点である。写真205・写真206は欠損品で、部分的に丁寧に研磨された面を有している。写真207は自然礫の一部に敲打痕を残す。116は頭部から体部にかけて残存する。頭部は丸みを帯びている。117は先端部及び頭部が欠損し、118・119は先端部片で先端は尖る。いずれも丁寧に研磨されている。写真210は断面形が三角形をなす体部片である。全体的に研磨されているが一部に敲打痕を残している。

(12)石製円盤 (第41図123、写真216)

123は粘板岩製のものである。周縁を打ち欠き、円形に整形しているが研磨はされていない。

(13)礫石器 (第40図124・125、写真217～221)

5点出土した。石質は、ドレライト2点・安山岩? 1点・細粒砂岩2点である。写真217・218は片面のみに刃部を有している。写真219・図124は円形のもので、一部に自然面を残すが、表裏とも周縁に刃部を有している。125は楕円形のものである。側縁の一辺に両刃の刃部を有している。

(14)装身具 (第40図120、写真213)

1点出土した。石質は凝灰岩である。形状は円形をなし、中央に両面穿孔による径3mm程の貫通孔を有している。大きさは、径3.5cm・厚さ1.9cm・重さ21gである。

(15)石製品 (第40図121・122、写真214・215)

2点出土した。121は凝灰岩で、半分は欠損するが、算盤玉状をなすと思われる。中央には、径2mm程の貫通孔を有し、側縁には刻みによる装飾が施される。摩滅が著しい。122は細粒砂岩で、自然礫に両面穿孔による径2mm程の貫通孔を有している。

4 まとめ

(1)発見された遺構は、埋設土器1基のみであった。

(2)遺構外より出土した土器は、縄文時代前期・中期・後期・晩期、弥生時代のものがあり、数量的

には、前期・晩期のものが多く出土した。

(3)前期の遺物は、大木1式に相当するものである。

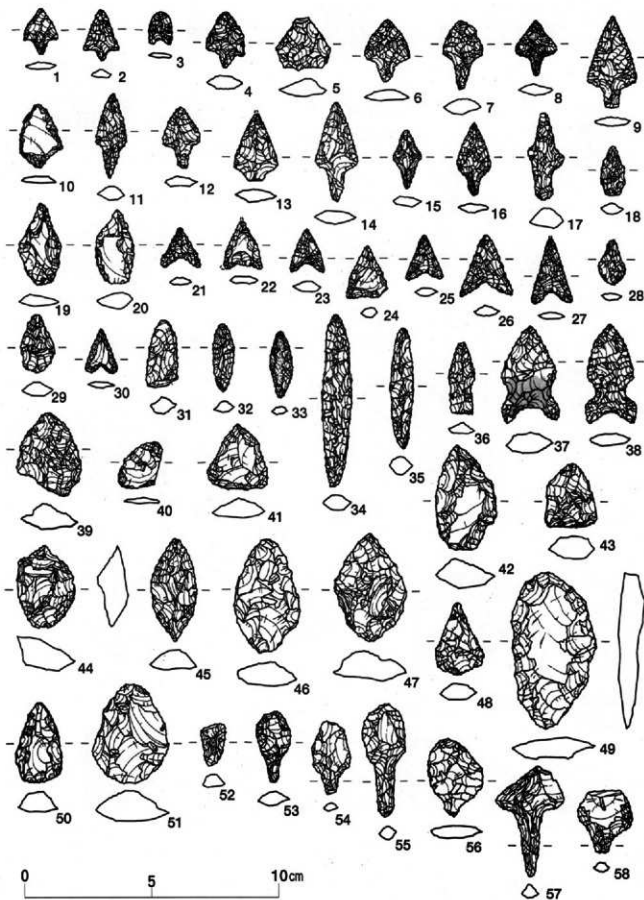
(4)中期の遺物は、大木8b式・大木9式・大木10式に相当するものが出土したが、数は少ない。

(5)後期の遺物は、後期前葉～後葉のものが出土したが、数は少ない。

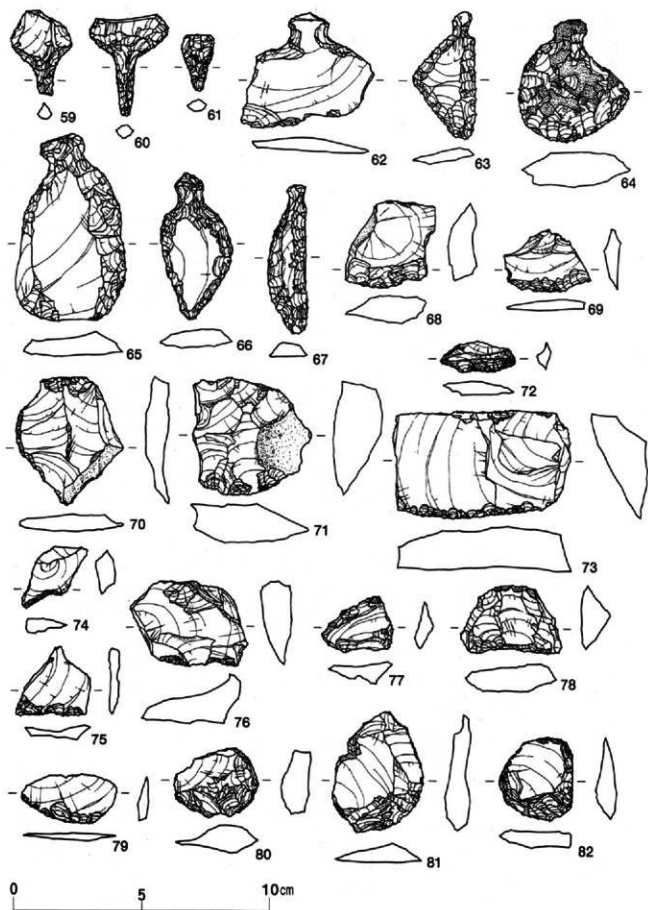
(6)晩期の遺物は、大洞B・BC・C1・C2・A・A'が出土し、大洞C1のものが多く出土した。

(7)弥生の遺物は、前期のものと思われるものが出土しているが、数は少ない。

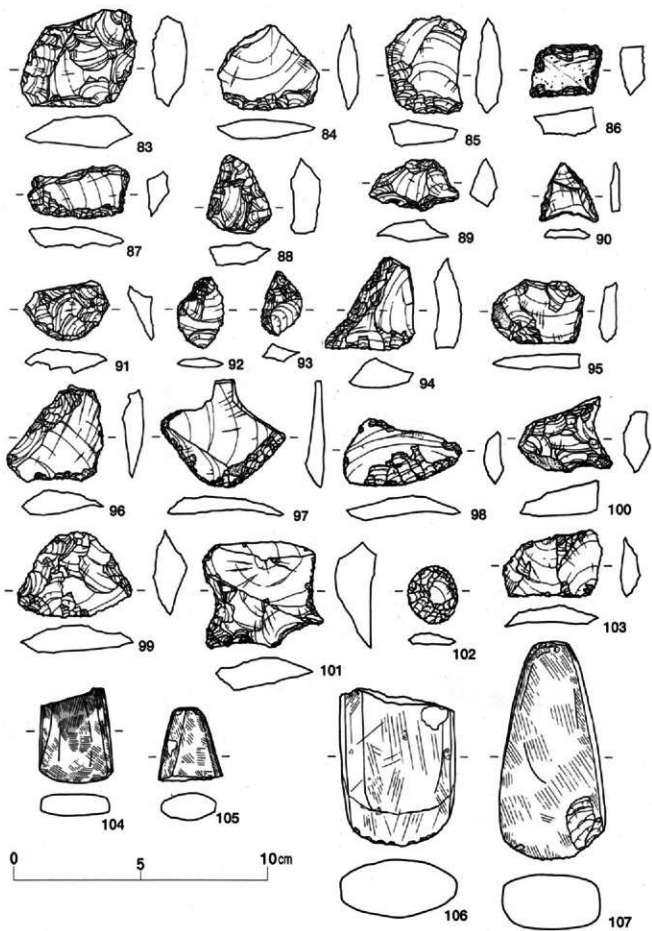
(8)石器は、石鏃89点・尖頭器21点・石錐12点・石匙7点・不定形石器54点・使用痕石器1点・磨製石斧15点・磨石2点・石皿1点・敲石1点・ウキ1点・石棒8点・装身具1点・石製品2点・石製円盤1点・礫石器5点の、計221点が出土した。



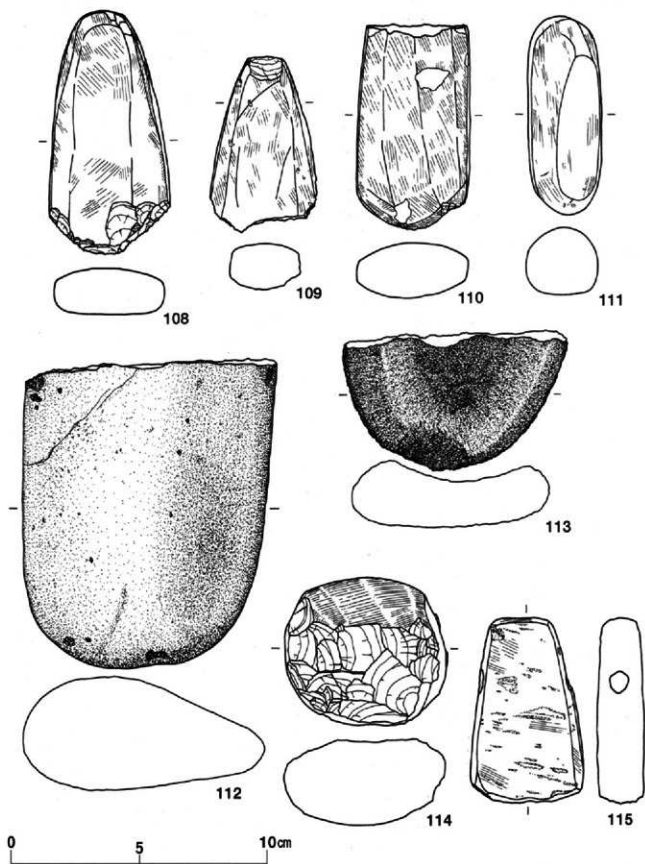
第37圖 遺構外出土石器



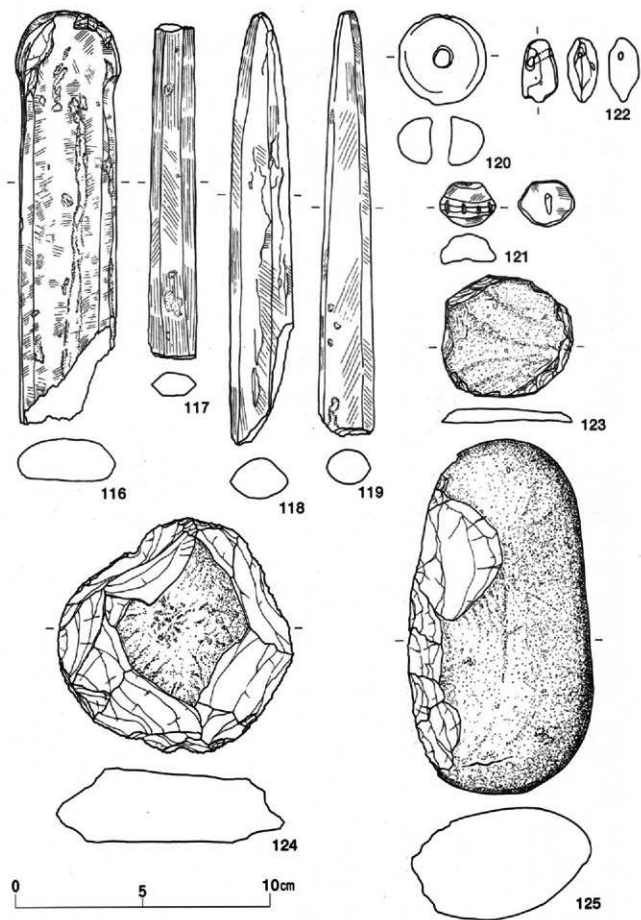
第38圖 遺構外出土石器



第39圖 遺構外出土石器



第40圖 遺構外出土石器



第41圖 遺構外出土石器

第2表 遺構外出土石器一覽表

遺 址	遺 点	層	器 種	分 類	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	登録番号
図説37-1, 写真図版-1	D-2	2	石 器	11111	磨石石?	1.77	1.39	0.24	0.3	10468
写真図版-2	C1-C2	5	石 器	11200	瑇瑁貫透	1.84	1.52	0.48	2.1	10511
図説37-2, 写真図版-3	D-3	3	石 器	11221	瑇瑁貫透	2.02	1.39	0.32	0.6	10443
図説37-3, 写真図版-4	D-2	2	石 器	12010	チャート	1.25	0.83	0.18	0.2	10508
写真図版-5	D-2	8	石 器	12121	チャート	1.60	1.24	0.40	0.4	10496
図説37-4, 写真図版-6	D1-D2	8	石 器	12211	チャート	2.22	1.31	0.50	1.4	10462
写真図版-7	C1-C2	5	石 器	13000	珩瑁貫透	2.19	1.47	0.52	1.0	10497
図説37-5, 写真図版-8	E-3	2	石 器	13000	チャート	1.14	2.11	0.75	2.8	10510
写真図版-9	E-3	2	石 器	13110	瑇瑁貫透	1.92	1.66	0.44	1.1	10455
図説37-6, 写真図版-10	E-2	10	石 器	13111	チャート	2.43	1.72	0.46	1.5	10474
写真図版-11	E-5	2	石 器	13111	細粒砂岩	2.72	1.85	0.40	1.9	10481
図説37-7, 写真図版-12	E-4	1	石 器	13114	瑇瑁貫透	2.67	1.52	0.59	1.6	10492
図説37-8, 写真図版-13	E-3	1	石 器	13121	チャート	2.21	1.63	0.40	0.9	10486
写真図版-14	E-5	3	石 器	13200	珩瑁貫透	2.24	1.84	0.42	1.7	10466
写真図版-15	D-3	3	石 器	13200	瑇瑁貫透	1.83	1.84	0.48	1.8	10458
写真図版-16	E-2	3	石 器	13210	瑇瑁貫透	2.88	1.37	0.43	1.7	10441
写真図版-17	E-3	3	石 器	13210	チャート	2.14	1.81	0.48	1.6	10444
写真図版-18	E-3	2	石 器	13210	瑇瑁貫透	2.39	1.52	0.49	1.5	10448
写真図版-19	E-4	1	石 器	13210	珩瑁貫透	3.09	1.55	0.50	1.7	10484
写真図版-20	D-3	4	石 器	13210	チャート	1.78	1.36	0.74	1.2	10470
図説37-9, 写真図版-21	D-3	3	石 器	13210	チャート	3.53	1.82	0.80	2.5	10472
写真図版-22	D-3	10	石 器	13210	瑇瑁貫透	3.04	1.41	0.51	1.9	10480
写真図版-23	E-3	2	石 器	13210	瑇瑁貫透	3.12	1.84	0.56	2.1	10481
写真図版-24	E-2	10	石 器	13210	瑇瑁貫透	2.18	1.37	0.54	1.4	10494
図説37-10, 写真図版-25	E-3	2	石 器	13210	珩瑁貫透	2.55	1.78	0.47	1.7	10573
写真図版-26	D-3	3	石 器	13211	チャート	2.49	1.60	0.66	2.0	10439
写真図版-27	O-2	2	石 器	13211	チャート	3.38	1.33	0.40	1.5	10452
図説37-11, 写真図版-28	E-2	3	石 器	13211	細粒砂岩	3.34	1.21	0.71	2.0	10457
写真図版-29	E-4	1	石 器	13211	チャート	2.27	1.53	0.27	0.5	10458
写真図版-30	E-4	3	石 器	13211	細粒砂岩	3.78	1.99	0.72	3.8	10462
写真図版-31	E-4	2	石 器	13211	瑇瑁貫透	3.31	1.86	0.61	2.0	10468
写真図版-32	D-3	3	石 器	13211	瑇瑁貫透	3.33	1.68	0.74	2.5	10478
写真図版-33	E2-F2	2	石 器	13211	瑇瑁貫透	2.51	1.24	0.41	1.0	10486
写真図版-34	E-2	3	石 器	13211	細粒砂岩	3.03	1.57	0.57	2.3	10506
図説37-12, 写真図版-35	D1-D2	7	石 器	13211	瑇瑁貫透	2.45	1.43	0.45	1.1	10589
写真図版-36	B-3	1	石 器	13214	珩瑁貫透	2.62	1.19	0.64	1.0	10465
写真図版-37	E-2	2	石 器	13220	チャート	2.56	1.78	0.42	1.1	10453
写真図版-38	D-3	3	石 器	13220	凝灰岩	3.35	1.04	0.38	0.7	10454
図説37-13, 写真図版-39	D-2	2	石 器	13220	チャート?	2.66	1.86	0.52	2.0	10486
図説37-14, 写真図版-40	E-4	1	石 器	13221	チャート	3.88	1.81	0.51	2.3	10450
写真図版-41	E-5	3	石 器	13221	珩瑁貫透	2.55	1.24	0.34	0.6	10473
写真図版-42	O-3	3	石 器	13221	チャート	3.79	1.50	0.43	1.9	10592
写真図版-43	O1-C2	6	石 器	13221	チャート	1.89	1.26	0.53	0.9	10501
図説37-15, 写真図版-44	D1-D2	2	石 器	13241	瑇瑁貫透	2.26	1.35	0.49	0.8	10485
写真図版-45	E-4	3	石 器	14210	瑇瑁貫透	2.74	1.47	0.48	1.9	10500
図説37-16, 写真図版-46	E-2	10	石 器	14211	瑇瑁貫透	2.98	1.35	0.23	1.0	10509
図説37-17, 写真図版-47	E-2	10	石 器	14244	細粒砂岩	3.39	1.40	0.65	2.1	10505
図説37-18, 写真図版-48	E2-E3	2	石 器	15210	チャート	1.84	0.83	0.58	1.1	10503
写真図版-49	D-2	1	石 器	15211	チャート	2.63	0.81	0.44	0.8	10497
図説37-19, 写真図版-50	F-2	2	石 器	15211	細粒砂岩	3.15	1.81	0.56	2.0	10514
図説37-20, 写真図版-51	E-4	2	石 器(朱漆)	15211	瑇瑁貫透	2.66	1.50	0.63	2.2	10522
写真図版-52	E-5	2	石 器	20229	タウシク石?	1.52	2.25	0.43	1.5	10483
写真図版-53	D-4	2	石 器	21219	チャート	2.44	1.52	0.52	1.2	11110
写真図版-54	D-2	2	石 器	21229	細粒砂岩	2.12	1.49	0.37	1.0	10481
写真図版-55	O1-C2	1	石 器	21229	細粒砂岩	1.75	1.28	0.29	0.5	10477
写真図版-56	E-4	2	石 器	21229	凝灰岩	1.98	1.42	0.35	0.8	10488
写真図版-57	D-3	3	石 器	22111	瑇瑁貫透	1.70	1.46	0.23	0.4	10449
図説37-21, 写真図版-58	D-4-5	3	石 器	22122	チャート	1.84	1.83	0.28	0.4	10589
写真図版-59	B-1	2	石 器	22122	凝灰岩	2.07	1.49	0.38	0.9	10487
写真図版-60	D-2	2	石 器	22211	珩瑁貫透	1.73	1.85	0.44	0.4	10479
図説37-22, 写真図版-61	E-2	19	石 器	22211	瑇瑁貫透	2.08	1.55	0.23	0.7	10482
図説37-23, 写真図版-62	D-4	1	石 器	22212	チャート	1.65	1.31	0.38	0.6	10485
図説37-24, 写真図版-63	O-2	2	石 器	22219	凝灰岩	2.02	1.55	0.43	1.0	10591
写真図版-64	E-4	2	石 器	22221	凝灰岩	1.94	1.65	0.37	0.7	10447
写真図版-65	B-2	1	石 器	22221	瑇瑁貫透	2.58	1.68	0.38	1.0	10485
写真図版-66	E2-E3	2	石 器	22222	瑇瑁貫透	2.30	1.87	0.38	0.9	10438
写真図版-67	E2-F2	2	石 器	22222	チャート	2.23	1.11	0.32	0.5	10481
図説37-25, 写真図版-68	B-2	2	石 器	22222	瑇瑁貫透	1.68	1.41	0.28	0.4	10471
図説37-26, 写真図版-69	E-4	2	石 器	22222	瑇瑁貫透	2.32	2.02	0.47	1.3	10496
図説37-27, 写真図版-70	B-3	1	石 器	22222	瑇瑁貫透	2.54	1.57	0.33	0.9	10590
写真図版-71	D-5	1	石 器	22239	瑇瑁貫透	2.05	1.68	0.32	0.8	10478
写真図版-72	E-5	4	石 器	23219	瑇瑁貫透	2.16	1.47	0.31	0.9	10487
図説37-28, 写真図版-73	E-2	3	石 器	23229	瑇瑁貫透	1.62	1.62	0.28	0.4	10507
図説37-29, 写真図版-74	E-2	3	石 器	24219	瑇瑁貫透	2.24	1.29	0.59	1.5	10502
図説37-30, 写真図版-75	O-4	3	石 器	30222	瑇瑁貫透	1.72	1.53	0.38	0.4	10481
図説37-31, 写真図版-76	D-2	2	石 器	30969	細粒砂岩	2.57	1.22	0.84	2.1	10520
図説37-32, 写真図版-77	E-4	1	石 器	31989	瑇瑁貫透?	2.80	0.77	0.44	0.8	10518
図説37-33, 写真図版-78	O-2	1	石 器	31989	瑇瑁貫透	2.58	0.85	0.40	0.8	10519
図説37-34, 写真図版-79	D-4	1	石 器	31989	瑇瑁貫透	6.71	1.14	0.67	4.9	10521
写真図版-80	O-3	1	石 器	33999	凝灰岩	2.81	1.10	0.58	1.5	10440
写真図版-81	E2-E3	2	石 器	33999	瑇瑁貫透	2.39	0.89	0.44	0.7	10483
図説37-35, 写真図版-82	E-4	1	石 器	33999	瑇瑁貫透	4.71	0.82	0.70	2.8	10518
写真図版-83	E-4	2	石 器	33999	瑇瑁貫透	2.43	0.96	0.58	1.4	10517
図説37-36, 写真図版-84	E-4	1	石 器	41989	瑇瑁貫透	2.82	1.10	0.57	1.8	10486

図説37-37, 写真図版-85	D-2	1	石版	42989	細粒砂岩	3.75	2.31	0.80	6.1	10484
図説37-38, 写真図版-86	E-3	1	石版	42999	建築頁岩	3.85	2.03	0.51	3.3	10483
写真図版-87	D-4	3	石版	50219	チャート	1.87	1.48	0.38	0.8	10480
写真図版-88	F-3	1	石版	50220	建築頁岩	2.42	1.82	0.37	1.3	10812
図説37-39, 写真図版-89	D-2	1	石版	52999	チャート	3.31	2.48	0.93	6.3	10578
図説37-40, 写真図版-90	O-1	1	突眼部	60219	建築頁岩	2.06	1.81	0.33	1.0	10604
写真図版-91	E-2	3	突眼部	60219	チャート	4.17	3.95	1.17	11.9	10598
写真図版-92	F-3	1	突眼部	60219	建築頁岩	2.80	2.14	1.07	8.7	11125
図説37-41, 写真図版-93	D-2	2	突眼部	61119	建築頁岩	2.61	2.40	0.73	4.8	10575
図説37-42, 写真図版-94	E-2	1C	突眼部	61219	建築頁岩	4.08	2.37	1.22	8.8	10682
図説37-43, 写真図版-95	E-5	2	突眼部	61219	チャート	2.46	2.01	0.90	4.0	10683
写真図版-96	E-4	1	突眼部	61219	細粒砂岩	3.11	2.57	0.80	6.0	10687
図説37-44, 写真図版-97	E-4	1	突眼部	63119	建築頁岩	3.28	2.38	1.27	7.1	10635
写真図版-98	D-4	1	突眼部	63209	チャート	2.22	1.93	0.61	2.5	10543
図説37-45, 写真図版-99	D-3	3	突眼部	63219	細粒砂岩	4.02	1.83	0.78	8.0	10579
図説37-46, 写真図版-100	D1-C2	8	突眼部	63219	細粒砂岩	4.42	2.55	1.37	11.8	10580
写真図版-101	E-3	1	突眼部	63219	チャート	2.67	2.03	0.60	2.6	10684
写真図版-102	E-6	3	突眼部	63219	チャート	3.64	3.75	1.19	11.0	10685
図説37-47, 写真図版-103	D-2	6	突眼部	63219	建築頁岩	4.21	2.78	1.08	11.4	10686
図説37-48, 写真図版-104	B-2	2	突眼部	63229	細粒砂岩	2.82	1.88	0.73	2.8	10677
写真図版-105	E-2	1C	突眼部	63239	細粒砂岩	5.01	1.89	1.00	8.8	10678
写真図版-106	E-3	1	突眼部	64119	建築頁岩	3.58	3.01	1.58	14.0	11122
図説37-49, 写真図版-107	E-3	2	突眼部	64219	建築頁岩	3.32	0.82	0.42	1.75	10670
図説37-50, 写真図版-108	E-2	1C	突眼部	64219	建築頁岩	3.13	1.85	0.88	4.7	10681
写真図版-109	E-5	2	突眼部	64219	チャート	5.07	3.05	1.58	21.9	10689
図説37-51, 写真図版-110	D-3	3	突眼部	64219	チャート	3.86	2.95	1.30	12.0	10690
図説37-52, 写真図版-111	D-3	2	石版	71099	建築頁岩	1.64	0.95	0.64	0.9	10624
図説37-53, 写真図版-112	D-3	4	石版	71129	チャート	2.74	1.41	0.51	1.5	10613
図説37-54, 写真図版-113	E-3	1	石版	71159	建築頁岩	2.83	1.44	0.55	1.4	10623
図説37-55, 写真図版-114	D-3	2	石版	71159	チャート?	4.03	3.92	0.82	10.8	10625
図説37-56, 写真図版-115	D-3	3	石版	71159	粘板岩	3.02	2.10	0.55	3.3	10626
図説37-57, 写真図版-116	D-3	3	石版	71159	細粒砂岩	4.35	2.88	0.72	3.6	10627
図説37-58, 写真図版-117	O-2	1	石版	71159	建築頁岩	2.40	2.12	0.79	3.6	10628
図説38-59, 写真図版-118	D-3	2	石版	71189	細粒砂岩	3.41	2.38	1.09	5.5	10629
図説38-60, 写真図版-119	D-3	1	石版	71199	チャート	3.90	3.13	1.02	7.1	10694
写真図版-120	E-4	2	石版	72199	細粒砂岩	3.78	0.87	0.74	1.8	10615
図説38-61, 写真図版-121	O-2	2	石版	71399	チャート?	2.24	1.23	0.55	1.5	10630
写真図版-122	D-2	2	石版	71999	建築頁岩	2.03	0.94	0.60	1.0	10448
写真図版-123	D-2	1B	石版	72199	細粒砂岩	6.44	3.79	0.80	14.8	10561
図説38-62, 写真図版-124	E-7	3	石版	72199	細粒砂岩	5.32	4.18	0.79	14.6	10693
図説38-63, 写真図版-125	E-2	2	石版	72199	建築頁岩	5.06	2.47	0.45	3.0	10594
図説38-64, 写真図版-126	E-5	2	石版	72199	チャート	4.84	4.22	1.34	22.2	10595
図説38-65, 写真図版-127	E-6	3	石版	72233	建築頁岩	7.30	4.25	1.01	28.9	10596
図説38-66, 写真図版-128	O-4	1	石版	72299	チャート?	5.70	2.87	0.78	10.7	10691
図説38-67, 写真図版-129	O-4	2	石版	72299	建築頁岩	5.82	1.55	0.84	5.8	10692
写真図版-130	D-2	2	不定形石層	73111	建築頁岩	1.86	0.68	0.23	2.5	10533
図説38-68, 写真図版-131	E-4	2	不定形石層	73111	細粒砂岩	4.83	3.50	0.97	14.7	10550
図説38-69, 写真図版-132	D-3	2	不定形石層	73111	細粒砂岩	2.92	2.49	0.54	3.7	10553
図説38-70, 写真図版-133	B-3	1	不定形石層	73111	建築頁岩	5.02	4.24	0.89	16.5	10558
図説38-71, 写真図版-134	E-4	1	不定形石層	73111	凝灰岩	5.14	4.70	1.89	17.0	10568
写真図版-135	O-2	2	不定形石層	73111	細粒砂岩	3.58	1.81	0.80	5.0	11111
写真図版-136	E-3	3	不定形石層	73111	建築頁岩	1.15	0.74	0.60	3.8	11113
写真図版-137	O-4	2	不定形石層	73111	建築頁岩	5.42	3.68	0.79	17.4	11118
図説38-72, 写真図版-138	D-2	1	不定形石層	73112	建築頁岩	1.02	0.91	0.33	1.8	11120
写真図版-139	D-3	1	不定形石層	73112	建築頁岩	2.88	2.88	0.80	5.4	10536
写真図版-140	E-4	2	不定形石層	73112	細粒砂岩	5.05	2.87	0.98	14.4	10597
写真図版-141	E-3	2	不定形石層	73112	建築頁岩	5.95	4.22	2.70	39.8	10587
図説38-73, 写真図版-142	E-6	3	不定形石層	73112	建築頁岩	6.83	4.54	1.73	72.5	10572
図説38-74, 写真図版-143	D-2	1	不定形石層	73112	建築頁岩	3.27	1.63	0.71	3.0	10574
図説38-75, 写真図版-144	E-4	3	不定形石層	73112	建築頁岩	3.19	2.32	0.98	4.1	11116
図説38-76, 写真図版-145	D-3	1	不定形石層	73112	細粒砂岩	2.82	2.82	0.84	21.8	11124
写真図版-146	O-8	1	不定形石層	73112	細粒砂岩	2.70	2.40	0.57	3.4	12553
図説38-77, 写真図版-147	E-5	3	不定形石層	73113	建築頁岩	2.73	2.11	0.83	3.4	10537
図説38-78, 写真図版-148	D-2	2	不定形石層	73113	細粒砂岩	2.22	2.69	0.96	11.0	11117
写真図版-149	E-3	2	不定形石層	73121	チャート	2.09	0.97	0.87	1.3	10532
図説38-79, 写真図版-150	D-2	2	不定形石層	73121	建築頁岩	3.82	1.90	0.46	2.3	10534
図説38-80, 写真図版-151	E-2	1C	不定形石層	73121	細粒砂岩	3.20	2.73	1.21	8.7	10538
図説38-81, 写真図版-152	O1-C2	8	不定形石層	73121	建築頁岩	3.46	3.24	0.87	13.8	10540
図説38-82, 写真図版-153	D-3	1	不定形石層	73121	建築頁岩	3.20	3.04	1.08	8.5	10586
図説38-83, 写真図版-154	E-4	1	不定形石層	73121	建築頁岩	5.26	3.83	1.26	22.8	10585
写真図版-155	E-2	1C	不定形石層	73122	チャート	2.10	2.02	0.87	3.7	10538
写真図版-156	E-4	2	不定形石層	73122	細粒砂岩	2.97	2.33	0.84	4.8	10540
図説38-84, 写真図版-157	B-2	2	不定形石層	73122	建築頁岩	3.86	3.49	0.88	11.2	10681
写真図版-158	E-2	1C	不定形石層	73122	細粒砂岩	5.80	3.41	1.07	13.8	10559
写真図版-159	B-2	2	不定形石層	73122	細粒砂岩	4.90	2.79	1.49	10.8	10564
写真図版-160	D1-C2	8	不定形石層	73122	建築頁岩	1.97	1.78	0.73	8.7	11115
写真図版-161	E-3	1C	不定形石層	73122	建築頁岩	1.94	3.22	0.71	8.0	11119
図説38-85, 写真図版-162	O-4	2	不定形石層	73211	建築頁岩	3.18	3.84	1.09	14.3	11123
図説38-86, 写真図版-163	D-2	7	不定形石層	73212	建築頁岩	2.50	2.01	1.03	7.7	10631
図説38-87, 写真図版-164	E-4	2	不定形石層	73212	建築頁岩	3.85	2.12	0.78	7.2	10648
図説38-88, 写真図版-165	O-4	1	不定形石層	73212	建築頁岩	3.15	2.38	1.05	7.3	10658
図説38-89, 写真図版-166	D-2	2	不定形石層	73212	建築頁岩	3.42	1.94	0.84	6.2	11114
図説38-90, 写真図版-167	O-2	2	不定形石層	73214	チャート	2.31	2.28	0.39	2.1	10674
図説38-91, 写真図版-168	E-3	3	不定形石層	73214	建築頁岩	2.18	3.11	1.14	5.1	11121
図説38-92, 写真図版-169	E-4	3	不定形石層	73215	チャート	2.78	1.77	0.38	1.7	10597
写真図版-170	E-4	1	不定形石層	73221	建築頁岩	2.52	1.72	0.54	2.2	10545

図版39-8, 写真図版-171	E-2	1C	不定形石膏	72222	チャート?	2.45	1.80	0.83	1.7	10542
図版39-9, 写真図版-172	B-2	1	不定形石膏	72222	チャート?	2.69	2.69	1.11	11.4	10562
図版39-9a, 写真図版-173	O-2	2	不定形石膏	72232	珪質頁岩	3.45	2.49	0.73	8.1	10541
写真図版-174	E-4	2	不定形石膏	72232	細粒砂岩	3.18	1.87	1.08	5.7	10546
図版39-9b, 写真図版-175	E-4	3	不定形石膏	72232	珪質頁岩	4.43	3.15	1.00	9.6	10552
図版39-9f, 写真図版-176	E-5	2	不定形石膏	72232	珪質頁岩	4.21	4.92	0.78	10.8	10588
写真図版-177	D-2	2	不定形石膏	72232	細粒砂岩	2.81	2.41	2.58	6.5	11112
写真図版-178	E-4	2	不定形石膏	72234	細粒砂岩	3.02	2.85	0.79	7.5	10544
図版39-9c, 写真図版-179	E-2	1	不定形石膏	72234	珪質頁岩	3.24	2.57	0.73	7.9	10543
図版39-9d, 写真図版-180	E-3	3	不定形石膏	72321	珪質頁岩	4.02	3.46	1.36	13.6	10554
図版39-100, 写真図版-181	F-2	1	不定形石膏	73333	細粒砂岩	3.58	2.94	1.17	11.3	10555
図版39-101, 写真図版-182	E-2	3	不定形石膏	73349	珪質頁岩	4.60	4.16	1.60	25.2	10563
図版39-102, 写真図版-183	E-2	2	不定形石膏	73421	細粒砂岩	2.19	1.83	0.48	2.2	10588
図版39-103, 写真図版-184	E-5	2	復用硬石膏	73799	珪質頁岩	3.72	2.67	0.98	6.5	10547
図版39-104, 写真図版-185	D-5	3	磨製石膏	75199	細粒砂岩	3.69	2.86	0.97	17.2	10500
写真図版-185	D-5	1	磨製石膏	75199	炭維管?	3.81	1.86	0.84	10.1	10001
図版39-105, 写真図版-187	D-3	3	磨製石膏	75199	ホルンフェルス?	2.85	2.51	1.15	12.2	10002
写真図版-188	E-2	1C	磨製石膏	75299	細粒砂岩	4.72	4.03	2.48	62.2	10003
写真図版-189	E-2	2	磨製石膏	75299	ドレライト	5.83	3.90	2.18	64.0	10004
写真図版-190	D-5	3	磨製石膏	75299	凝灰岩	6.41	4.12	2.67	85.0	10005
図版39-106, 写真図版-191	E-5	2	磨製石膏	75299	ドレライト	8.00	4.53	2.72	114.0	10006
図版39-107, 写真図版-192	E-5	3	磨製石膏	75299	ドレライト	8.53	4.17	2.15	119.0	10007
図版40-108, 写真図版-193	F-2	2	磨製石膏	75299	細粒砂岩	8.22	4.86	1.95	131.0	10008
図版40-109, 写真図版-194	E-5	3	磨製石膏	75299	凝灰岩砂岩	7.00	4.26	2.04	85.0	10009
写真図版-195	E-5	3	磨製石膏	75299	ドレライト	6.96	4.96	2.40	141.0	10010
写真図版-196	E-4	2	磨製石膏	75299	チャート?	10.44	4.85	2.70	195.0	10011
写真図版-197	D-4	2	磨製石膏	75299	スコリア質玄武岩	11.47	5.06	2.78	195.0	10012
図版40-110, 写真図版-198	E-5	2	磨製石膏	75299	ドレライト	8.13	4.39	2.44	147.0	10013
写真図版-199	E-5	2	磨製石膏	75299	ドレライト	10.30	4.31	2.43	186.0	10014
図版40-111, 写真図版-200	D-3	4	磨石	76999	凝灰岩	7.85	2.90	2.54	106.0	10027
図版40-112, 写真図版-201	D-5	3	磨石	76999	細粒砂岩	11.76	9.83	4.32	694.0	10028
図版40-113, 写真図版-202	E-5	3	石皿	77099	中粒砂岩	5.11	8.95	2.57	127.0	10028
図版40-114, 写真図版-203	E-5	3	磨石	78999	凝灰岩	6.44	5.86	3.61	207.0	10025
図版40-115, 写真図版-204	E-J	3	石製品(押巻)	80999	軽石	7.25	4.42	1.91	24.5	11109
写真図版-205	D-2	2	石棒	81009	粘板岩	4.34	3.32	1.57	28.2	10015
写真図版-206	D-2	3	石棒	81009	玄武岩	4.96	3.28	1.23	28.0	11127
写真図版-207	D-2	2	石棒	81029	細粒砂岩	3.93	3.27	3.38	58.2	11129
図版41-116, 写真図版-208	B-2	1	石棒	81100	凝灰岩	16.25	4.20	1.73	198.0	10016
図版41-117, 写真図版-209	D1-D2	7	石棒	81100	点状粘板岩	12.12	1.58	1.19	54.0	10019
写真図版-210	D-2	1	石棒	81100	凝灰岩	4.51	1.80	1.74	18.9	11128
図版41-118, 写真図版-211	E-5	2	石棒	81118	点状粘板岩	16.80	2.21	1.80	108.0	10020
図版41-119, 写真図版-212	D-2	2	石棒	81119	点状粘板岩	16.70	2.21	1.84	86.0	10018
図版41-120, 写真図版-213	E-5	1	鍍身具	82999	凝灰岩	3.53	3.48	1.91	21.0	10029
図版41-121, 写真図版-214	D-2	10	石製品	82999	凝灰岩	1.78	2.18	1.11	3.0	11107
図版41-122, 写真図版-215	D1-C2	3	石製品	82999	細粒砂岩	2.92	1.53	1.17	3.7	11108
図版41-123, 写真図版-216	C-3	3	石製円盤	83999	粘板岩	5.24	5.02	0.74	25.4	10099
写真図版-217	E-6	2	磨石器	84899	ドレライト	3.90	4.01	1.64	38.8	10020
写真図版-218	B-2	2	磨石器	84899	安山岩?	5.51	7.07	2.38	108.0	10021
写真図版-219	E-4	2	磨石器	84899	細粒砂岩	11.82	6.86	2.96	452.0	10022
図版41-124, 写真図版-220	O-4	1	磨石器	84899	細粒砂岩	9.24	8.05	2.70	297.0	10023
図版41-125, 写真図版-221	E-5	3	磨石器	84899	ドレライト	13.90	7.18	4.15	699.0	10024



発掘区近景（西より）



発掘状況（東より）



層の堆積状況



完掘状況（東より）

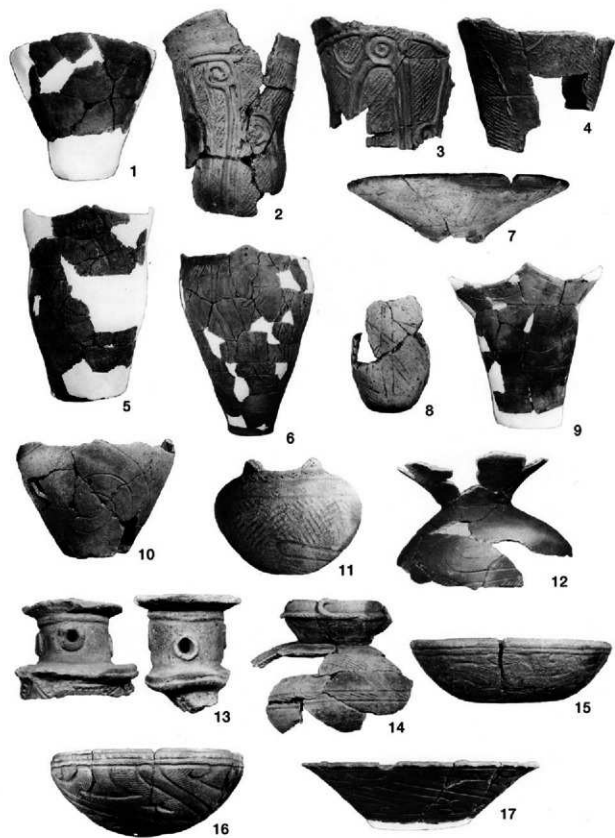


土器出土状況

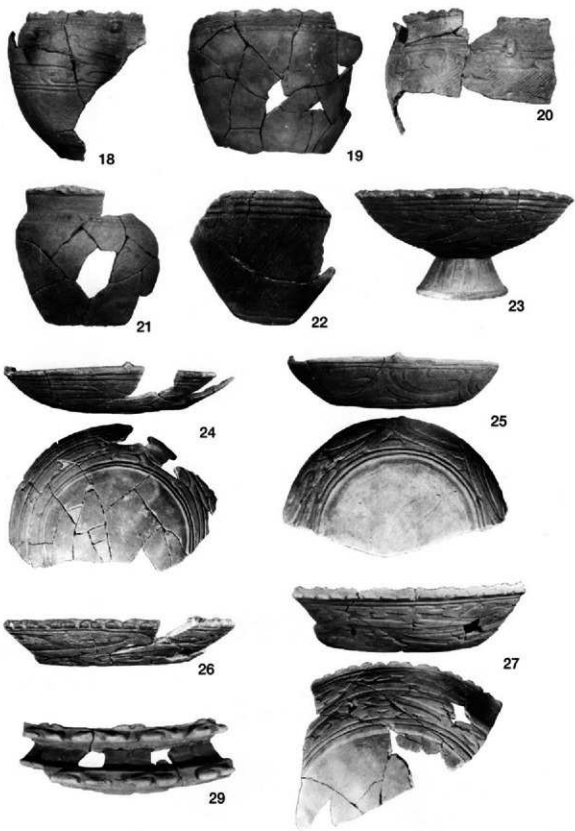


土器埋設状況及び埋設土器

写真図版 2



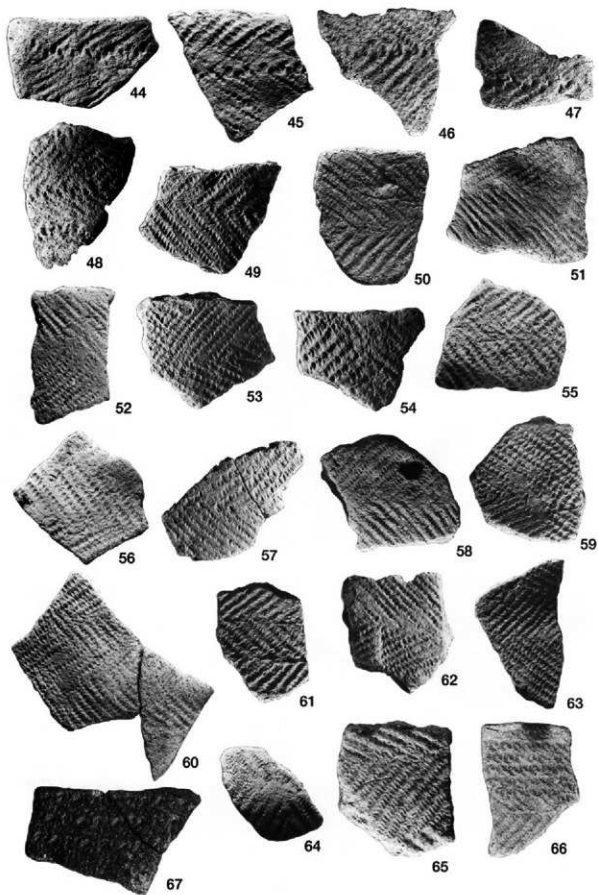
写真図版 3



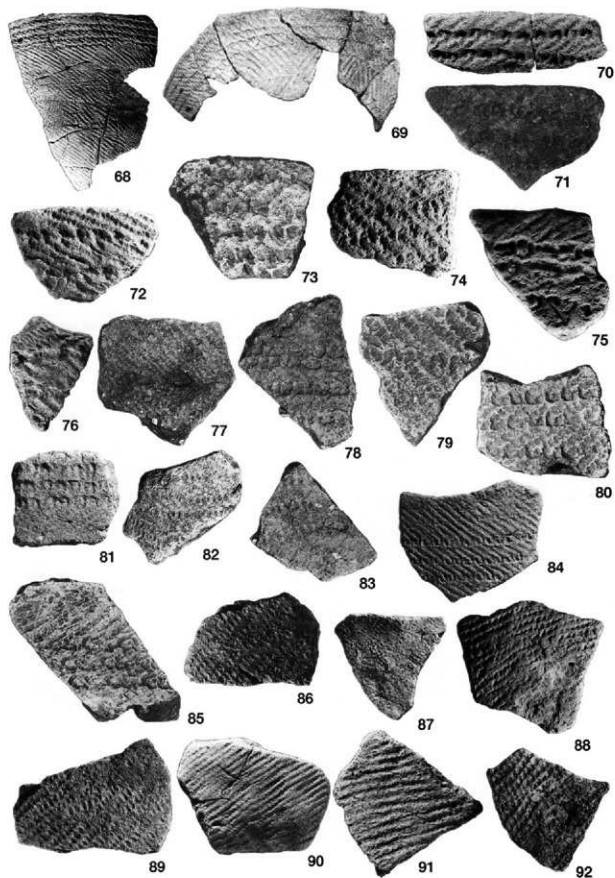
写真图版 4



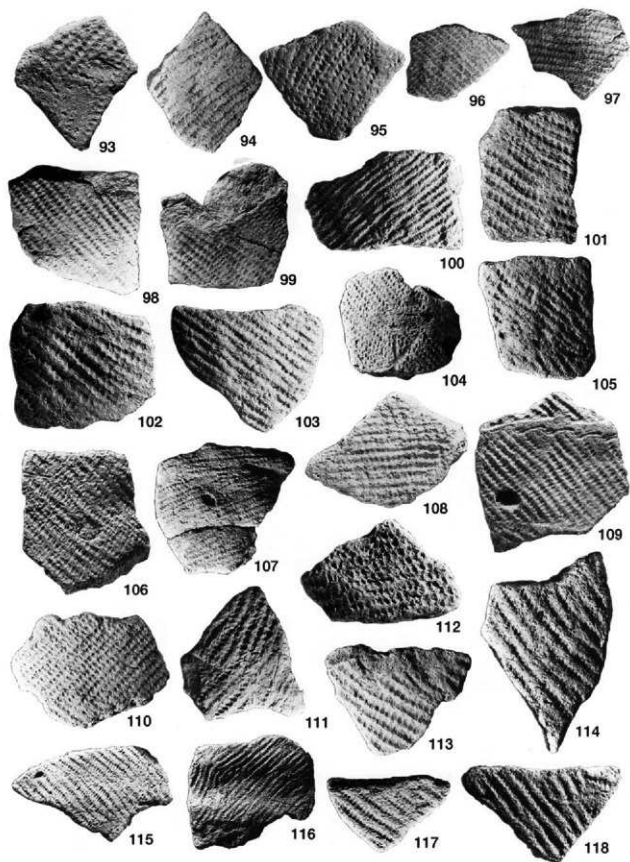
写真图版 5



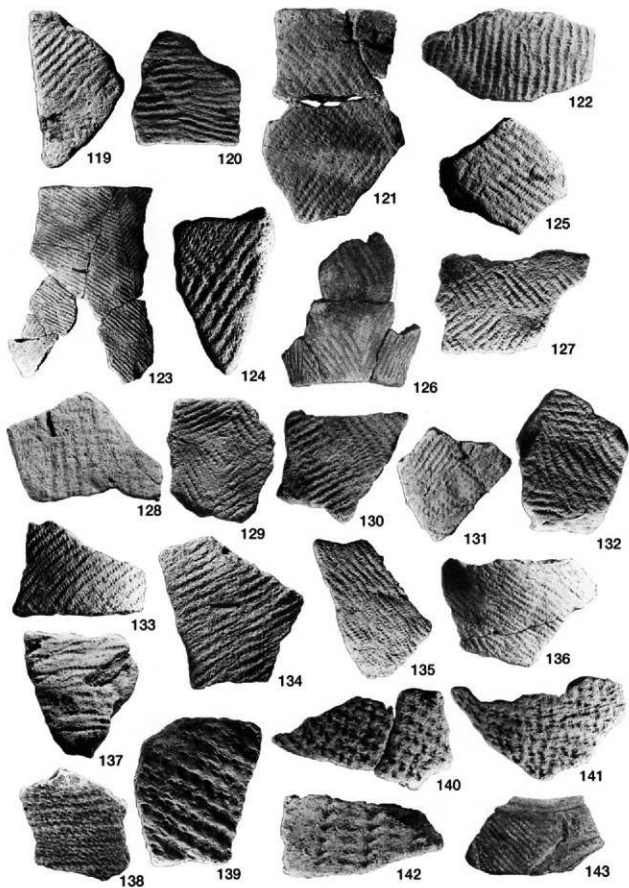
写真图版 6



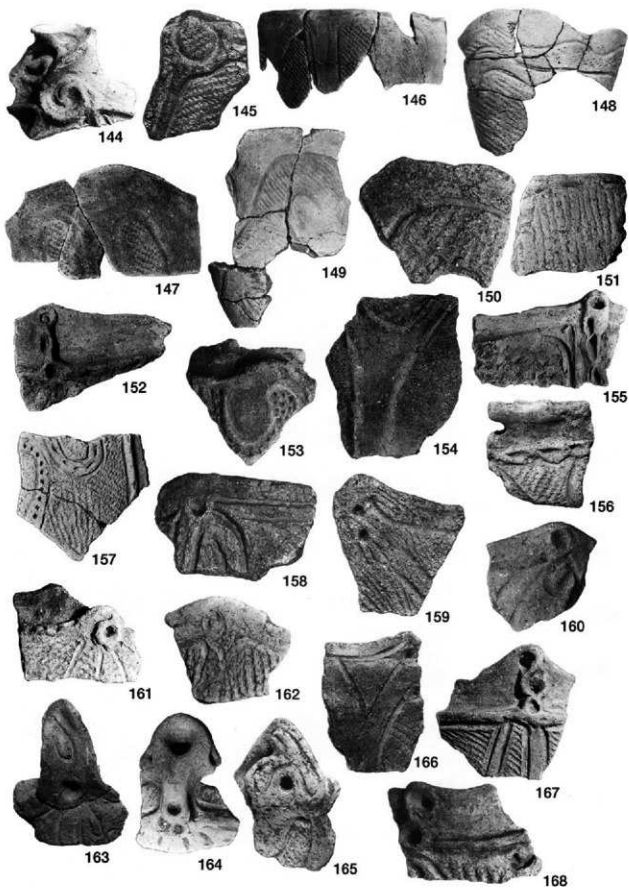
写真図版 7



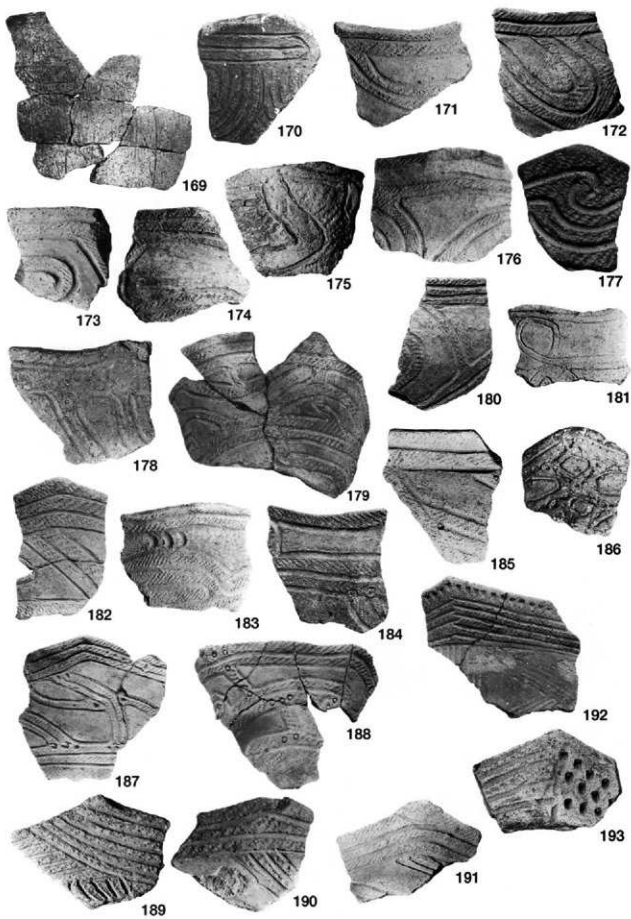
写真図版 8



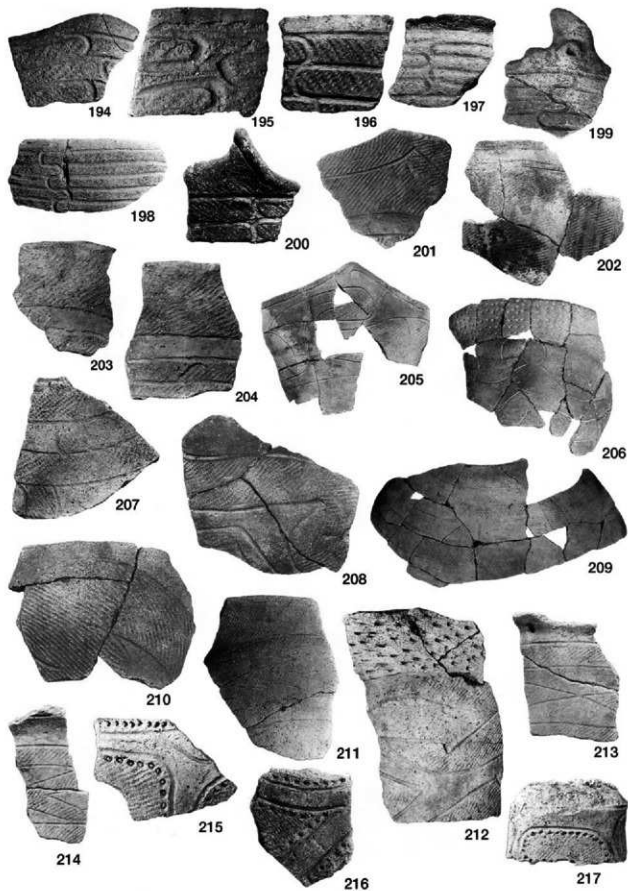
写真图版 9



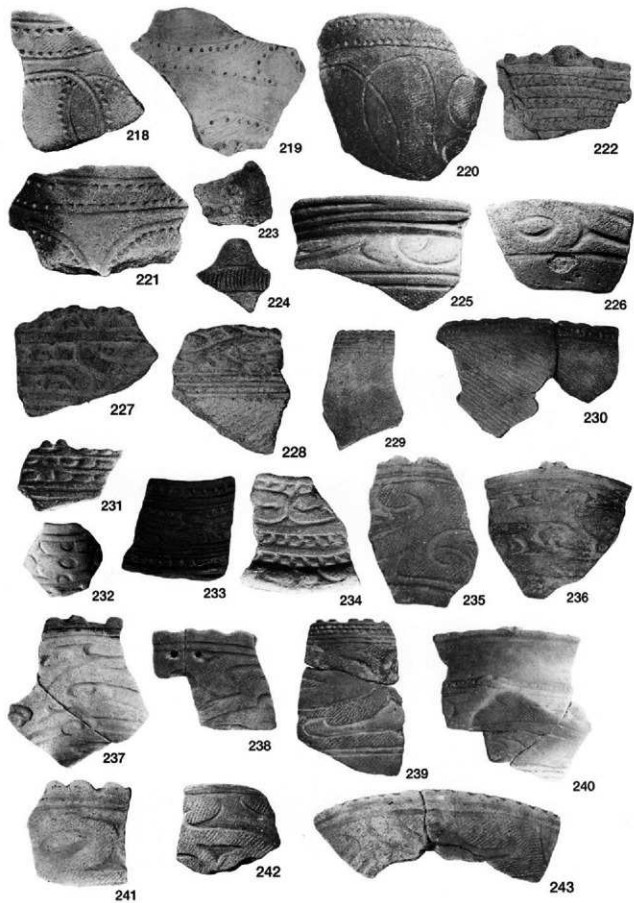
写真図版 10



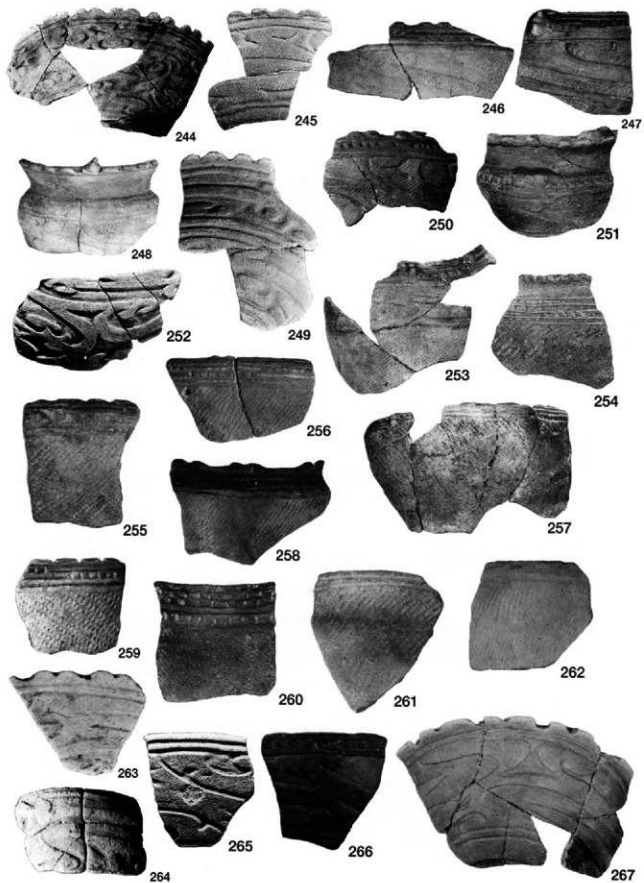
写真图版 11



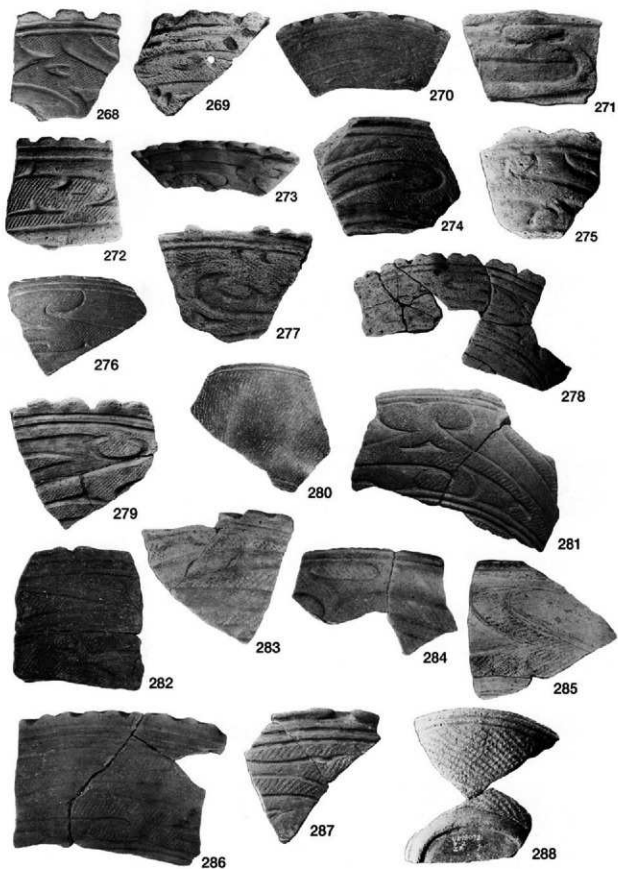
写真图版 12



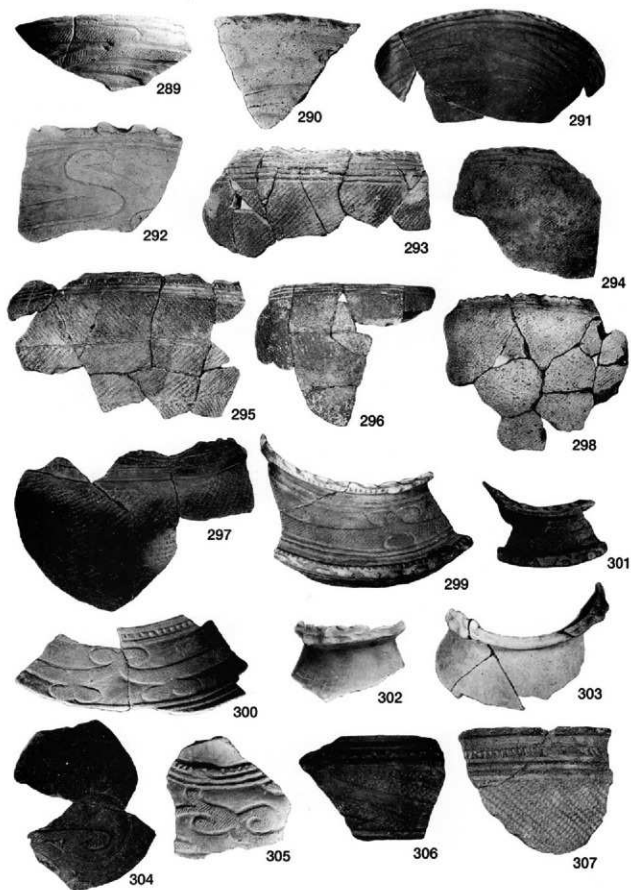
写真图版 13



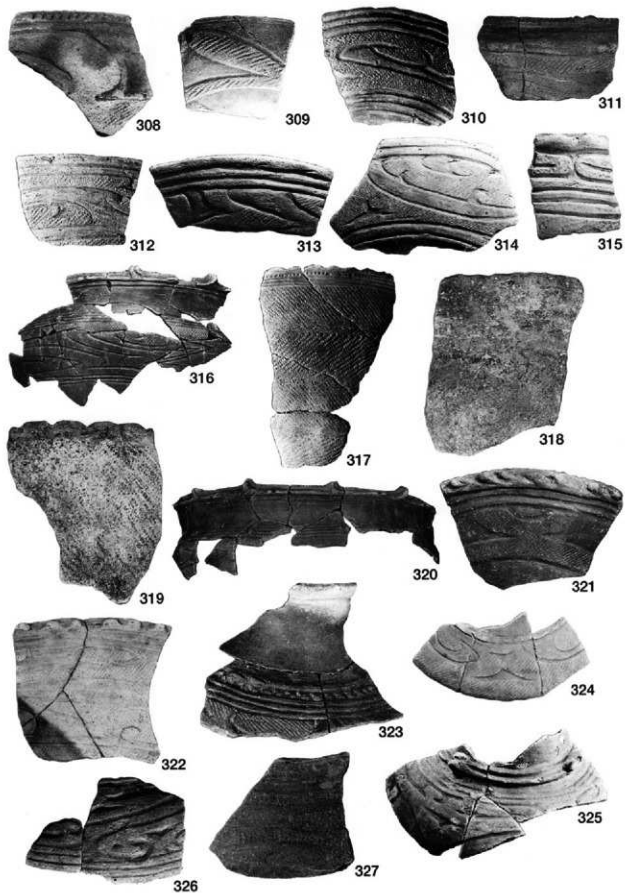
写真图版 14



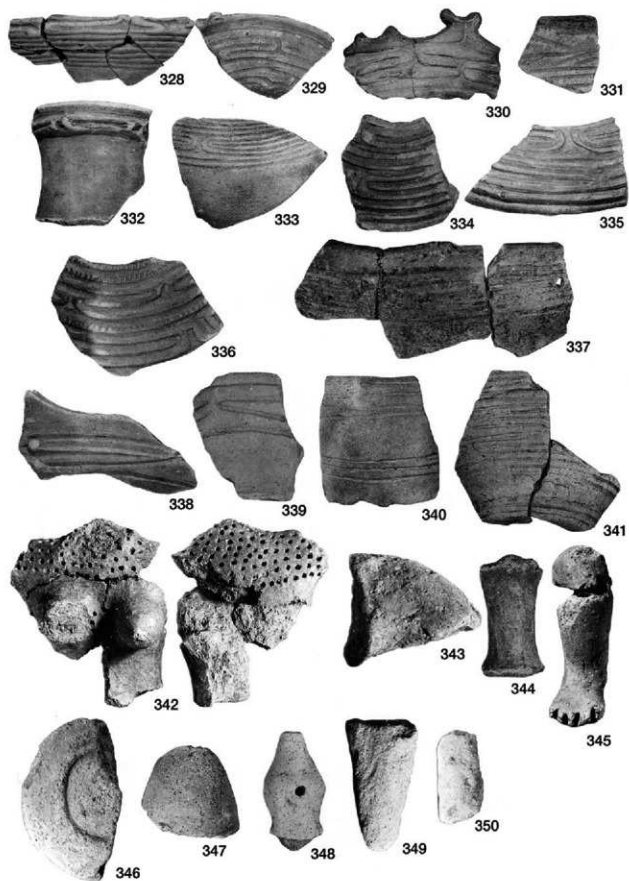
写真图版 15



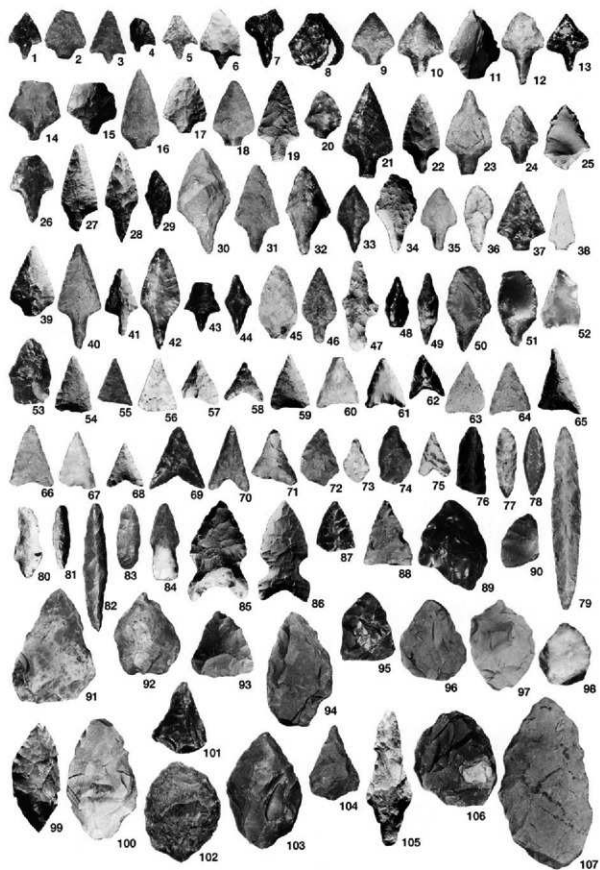
写真图版 16



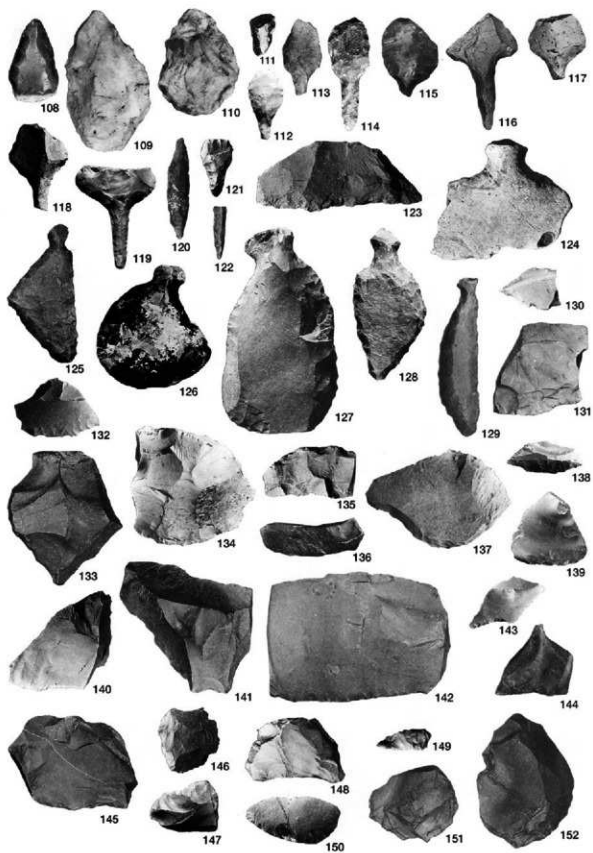
写真图版 17



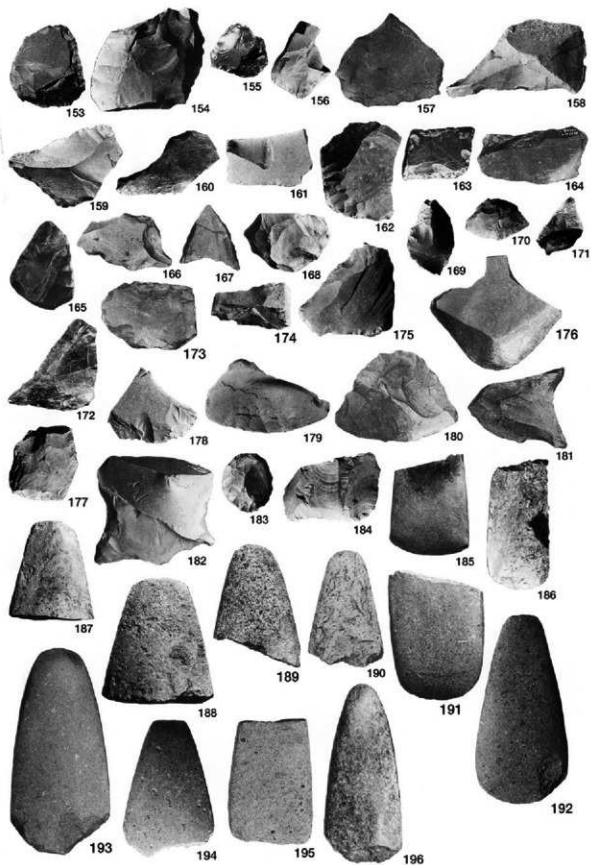
写真图版 18



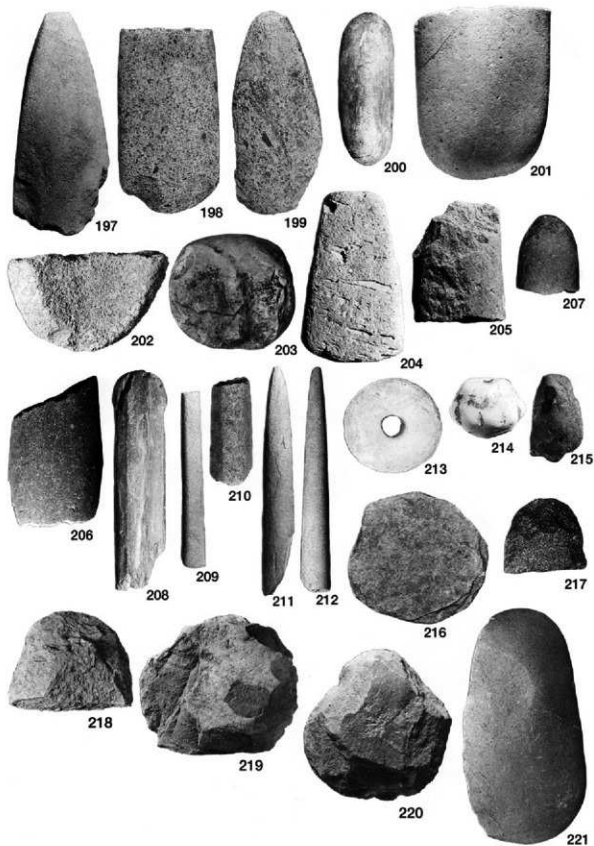
写真图版 19



写真图版20



写真図版21



写真图版22

報 告 書 抄 録

ふりがな	うそぎわかいづか1998							
書名	瀬沢貝塚1998							
副書名	陸前高田市内遺跡発掘調査報告書3							
巻次								
シリーズ名	陸前高田市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第23集							
編著者名	佐藤正彦 熊谷賢							
編集機関	陸前高田市教育委員会 (担当：陸前高田市教育委員会事務局社会教育課)							
所在地	〒029-2205 岩手県陸前高田市高田町字館の沖110 TEL 0192 (54) 2111							
発行年月日	西暦 2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うそぎわかいづか 瀬沢貝塚	いわてけんりくぜんたかたし 岩手県陸前高田市 おともちゆうあざりそぎわ 小友町字瀬沢		NF78 - 1067	38度 58分 54秒	141度 40分 24秒	1998. 7. 16 ～ 1998. 9. 10	325 m ²	土地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物		特記事項	
瀬沢	貝塚	縄文時代	貝塚		縄文土器 (早～後期) 石器 骨角器 自然遺物 (動物遺存体) 人骨			

陸前高田市文化財調査報告書第23集
(陸前高田市内遺跡発掘調査報告書3)

中沢浜貝塚 97'

— 骨角器・自然遺物編 —

瀬沢貝塚 98'

発行日 2001年3月31日

編集・発行 陸前高田市教育委員会
岩手県陸前高田市高田町館の沖110
TEL 0192(54)2111

印刷 (有)高田活版
岩手県陸前高田市高田町字馬場前114
TEL 0192(55)2694